

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙



4

4

昭和十一年四月

1934
H. 12/10/10

新しい風俗文化雑誌

FUZOKUZOSI



VOL.2·NO.4

株式 日本特集出版社
会社

FUZOKUZOSI



風俗草紙

昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行
風俗草紙 第一号 昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行
特別価格 昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行

昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行
風俗草紙 第一号 昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行
特別価格 昭和二十九年三月二十五日印刷 昭和二十九年四月一日発行 毎月一回発行





不運な貴婦人

絢爛たる舞踏会から地下室の密室へ——貴婦人を乗せた馭者が淫鬼に早替りしたのだ「ヒヒヒッ、なんと柔かいからだをしてること……熱いか？ 痛いか？ 苦しいかネ？ もっと苦しむがいいさ……」

中川彩子画



荒磯の処女

本誌特写々真

憎
悪
の
贅



荒 海 に 縛 る 本誌特写真

激浪に呻く

早春の房総の海は荒く、岩を洗う波は縛られた処女を仮借なく苛む。遠く紺碧のうねりに浮ぶ鳥影のあたりに、餌を探し求める海鳥が無気味な鳴き声をあげて群れ飛ぶ。それは波に噛まれ、呻く、処女への不吉な挽歌のように、遠くなり近くなつて妖しく聞える。幾つめかの波が、

身を晒し もたえる、処女のからだを越す。思はず、口から漏れる苦痛は、絶え間なく打ち寄せる波の音に消されて、儚くうせる。白い肌は波頭に責められ、紫色に変色している。呻きながら藻掻いた腰のくねりも、わなわなと顫えた赤い唇も、いまはもうぐつたりと動かない。







恥辱の処女



あぶのーまる
びくちゆあ

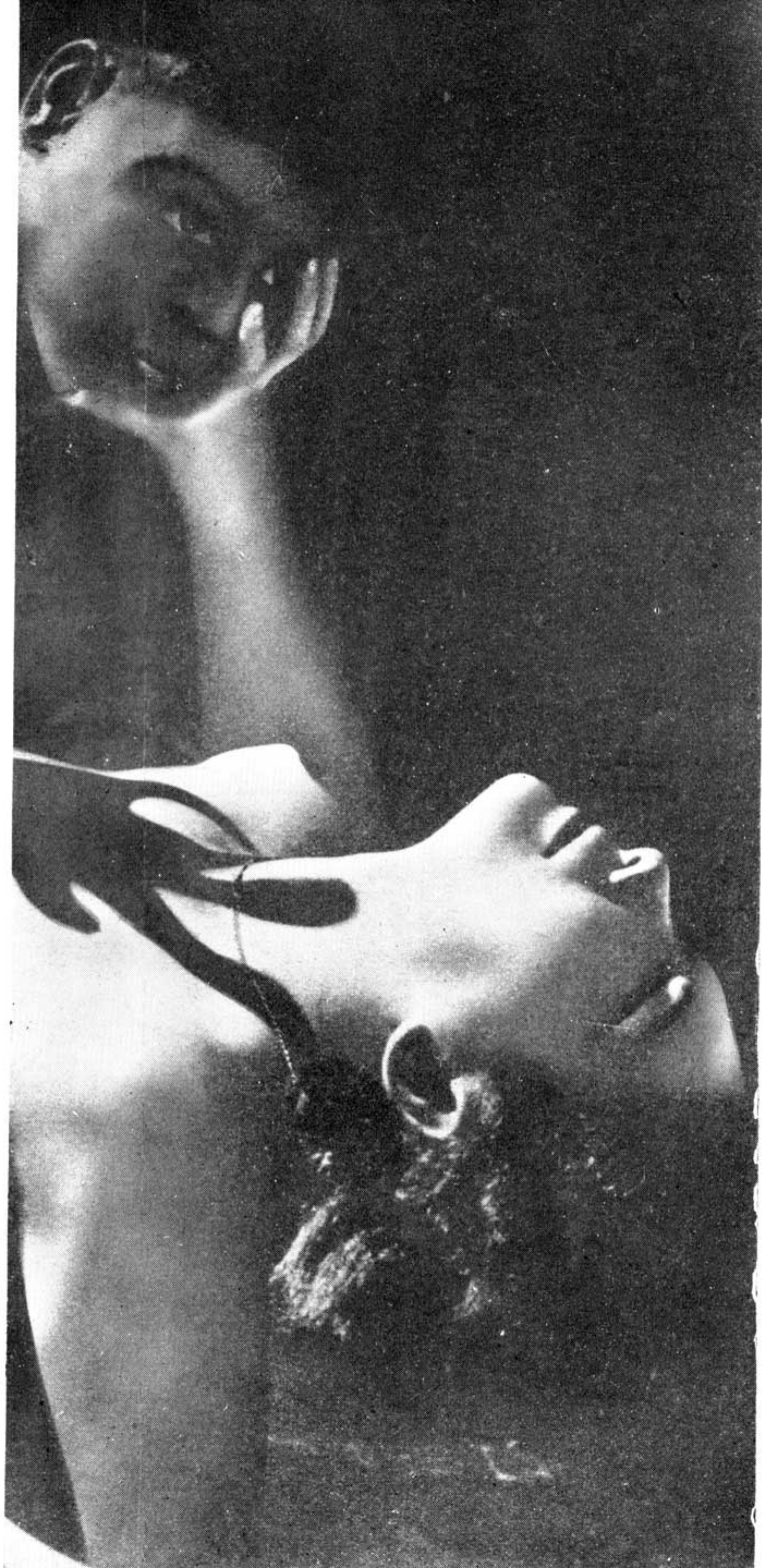
白

と

黒

光と影を最高度に生かした、見事なカメラ技術によつて醸し出されるアブノーマルな雰囲気！ ビツチリと張りつめたミルク色の肌を悩ましくうごめかせる白人の女！ 抵抗がそのまま挑発となる美しい女体！ 黒褐色のニグロの悲しい恋情が、セキを切った水のように爆発する。

ニグロの男が白人の女に抱く切ない憧憬は、世界中の男が美女に寄せる心情と共通するものだ。ここには永遠のサチズムとマゾヒズムが混淆している……





原村
松梢
作風

『燃える上海』

撮影・スナツプ集



「クソツ、しぶといアマだ！」怒號と共に滾が聴つて、「アアツ」とその度に娘は身を反らす。スパイ容
顔で捕えられた中国娘に加えられる鬼憲兵の拷問！



「フフフ、まだ泥を吐かんか！ 畜生、可愛いオツパイを
してゐるじゃないか、鬼憲兵の顔に浮ぶいやしい笑い……」



折

檻

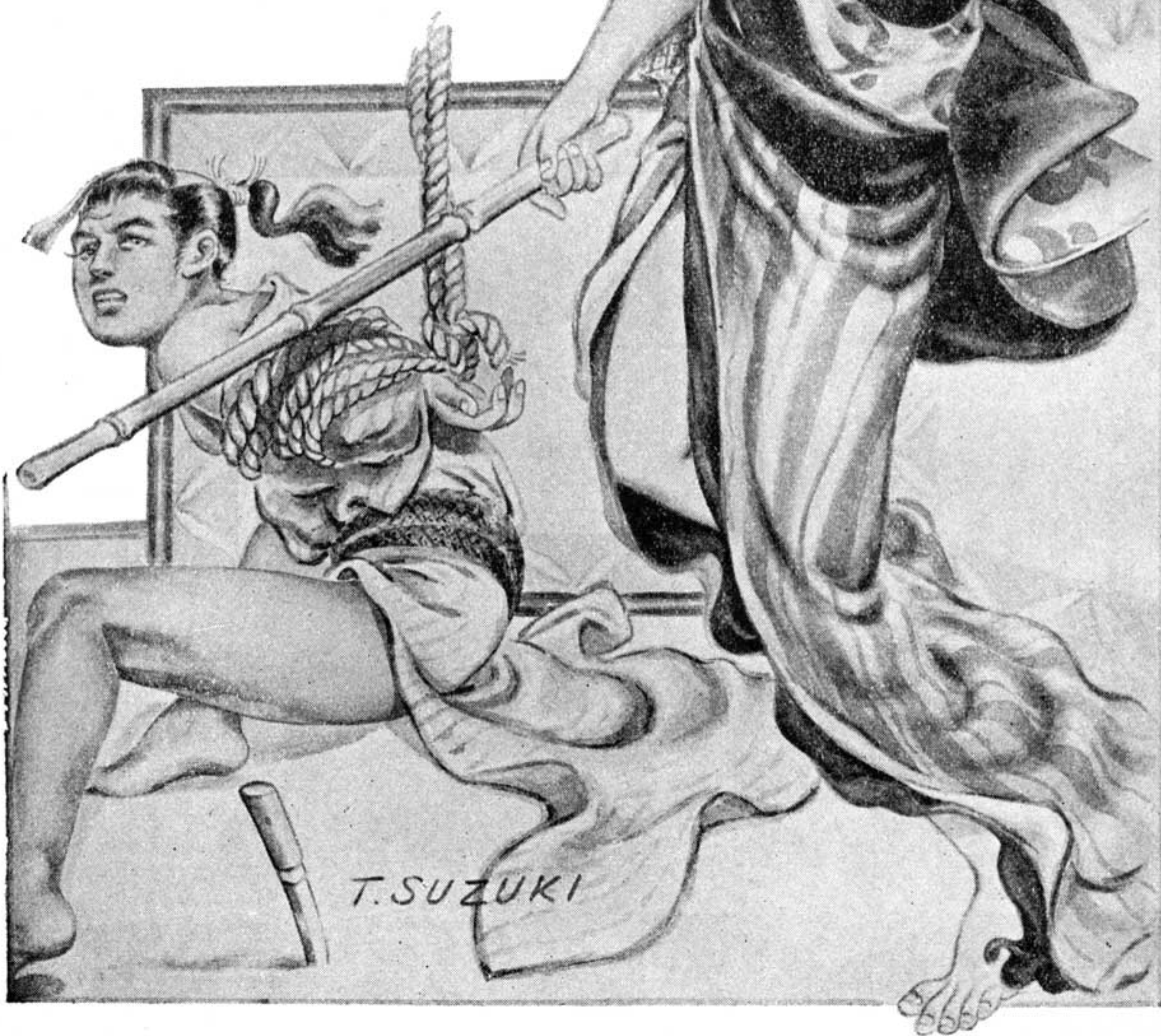
三

圖

鈴木節畫

打擲

「姐さん、もつと打つてくれ、皮が裂けて、少しくらい血が出たつてかまわない…ウ、ウツ、打つてくれ」
「あゝ、いゝとも、さんざ打つたあとで、今度は短刀で少しづつ、お前さんのからだを切つてあげるからね」



嗜虐の女

「フフ、、なんてえ顔をしてるんだネ。大の男がこれ位のことですベソをかいて、見つともないじゃないか。そんな意気地なしの癖にポツチャリした娘だとすぐ手を出しやがる。そ

の恰好をお民坊に見せてやりたいよ。いいかい、これでお終いじゃないんだよ、今日はもつともつと虐めてやるからね！」
凄いい程に美しい大きな女の眼が嗜虐の興奮にキラキラ輝いて、刺青の苦痛に呻く男の様子をさも心地よげに見つめている。

繪筆

「由美つ、どうしたんだ、その恰好は。嬉しいのかい？ 苦しいのかい？ ハハハ、、、僕を馬鹿にした罰だよ。僕が世間知らずの坊つちやんだと思つて、照子と二人でグルになつて散々金を使わせておいて、そのあげくあんなクダラヌ奴と一緒にやりがった。ハハ、、、世間知らずのボンボンが、どんな手を知ってるか、これからお前達に思い知らせてやるんだ！」

勝ち誇つた男の台詞と共に、明るい陽光の中で二人の女体がうごめく……







問われるものは、姦淫の罪か？ 縛られ打た
れ、つるされて、やがて女体から生命の
すべてが吐きだされる。息たえだえ
の白い裸体に炎が赤くうつり、
責め具に最後の悲鳴が、キ
リキリとこだまする！



「まだまだ。もつと責めてや
るぞ」ガイ骨共は裸女
を囲んで踊り狂い、
懲罰の手を休
めない――



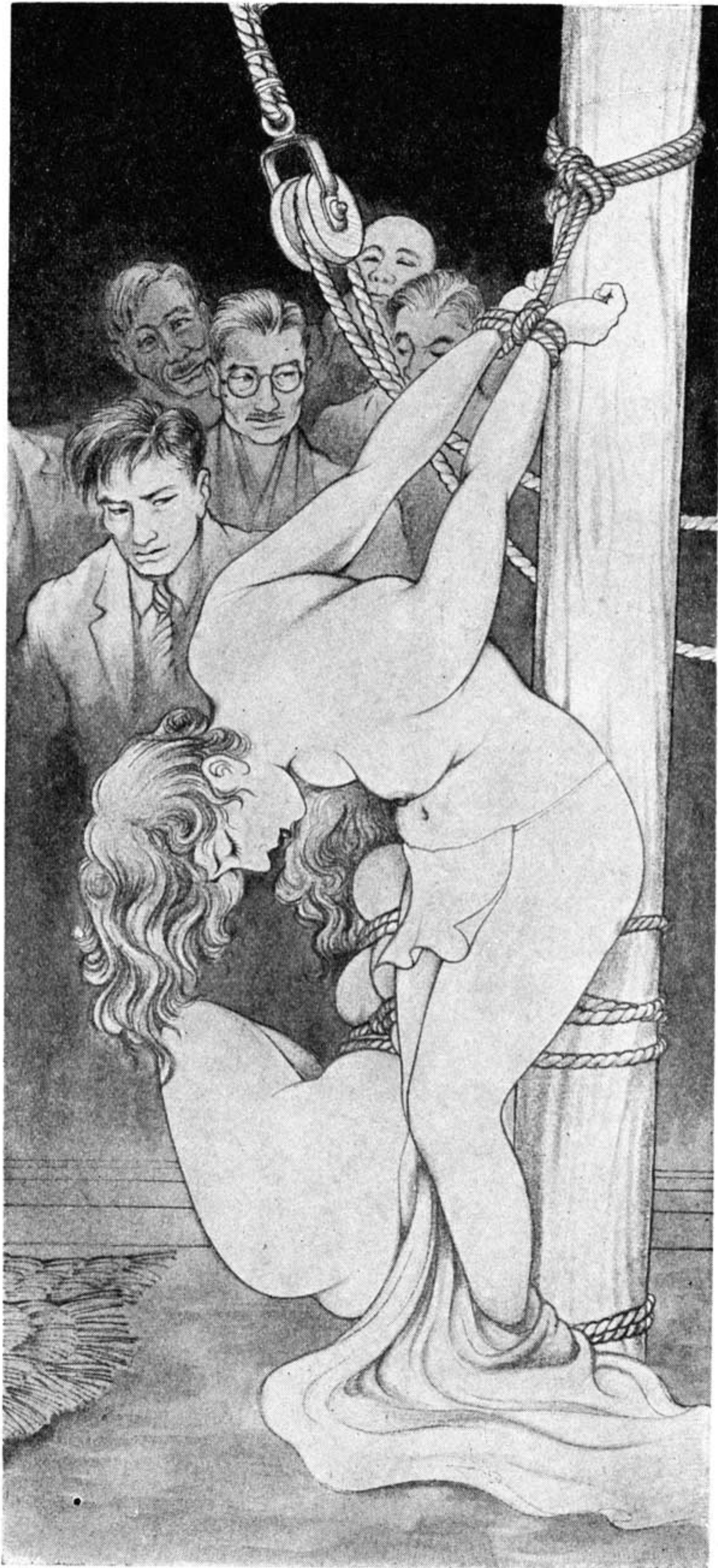
玲子
畫集

人肉市場

喜多 玲子 畫

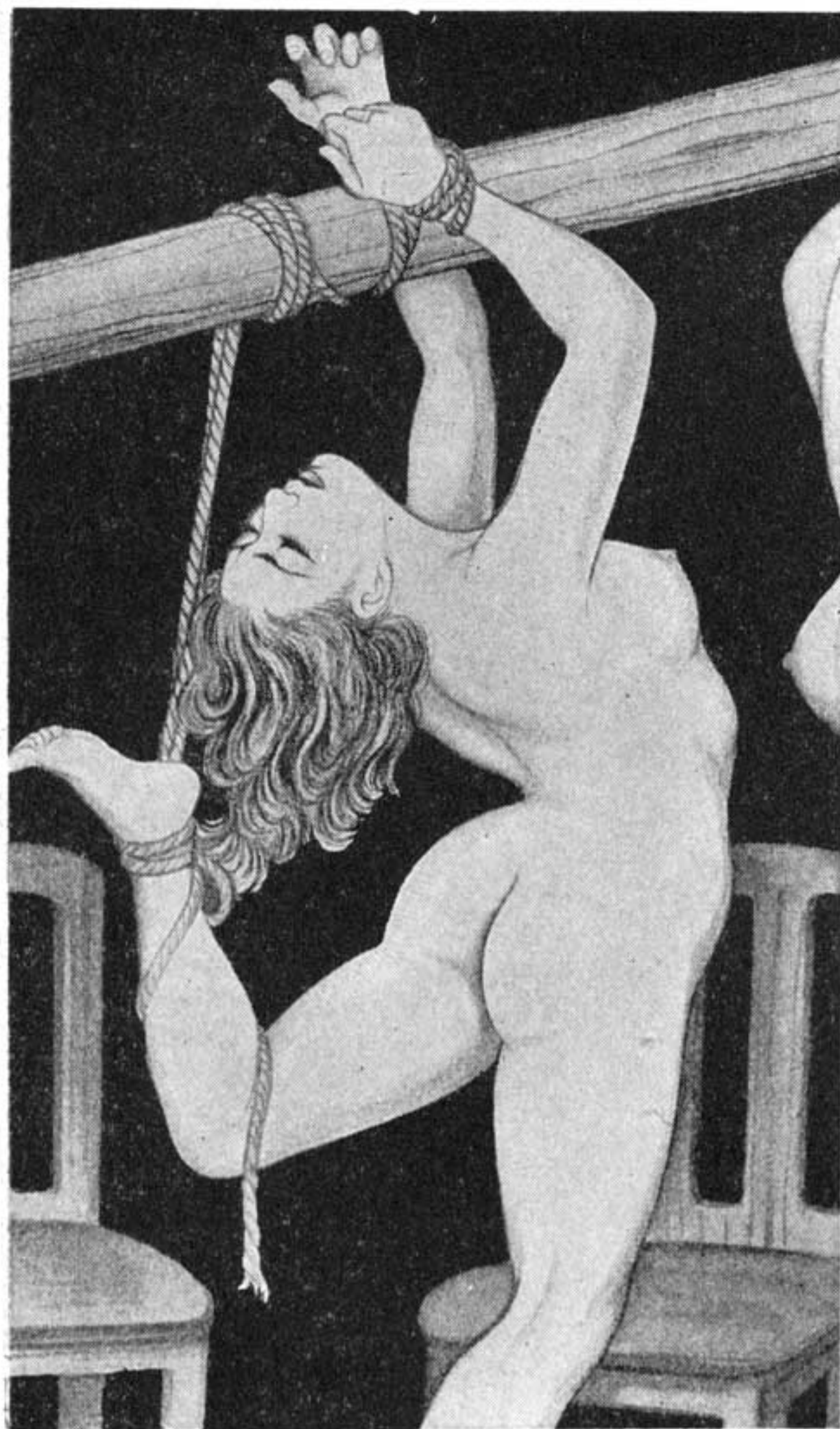
處女競賣

薄暗の中に陣をつくつたいやらしい男達の眼……眼……そこへ次々と曳き出される小羊のような娘たち。大都会の盛り場のいかどわしい秘密クラブでは、こんな処女競売があるという。善良な大衆には想像も出来ぬお伽話だ。……



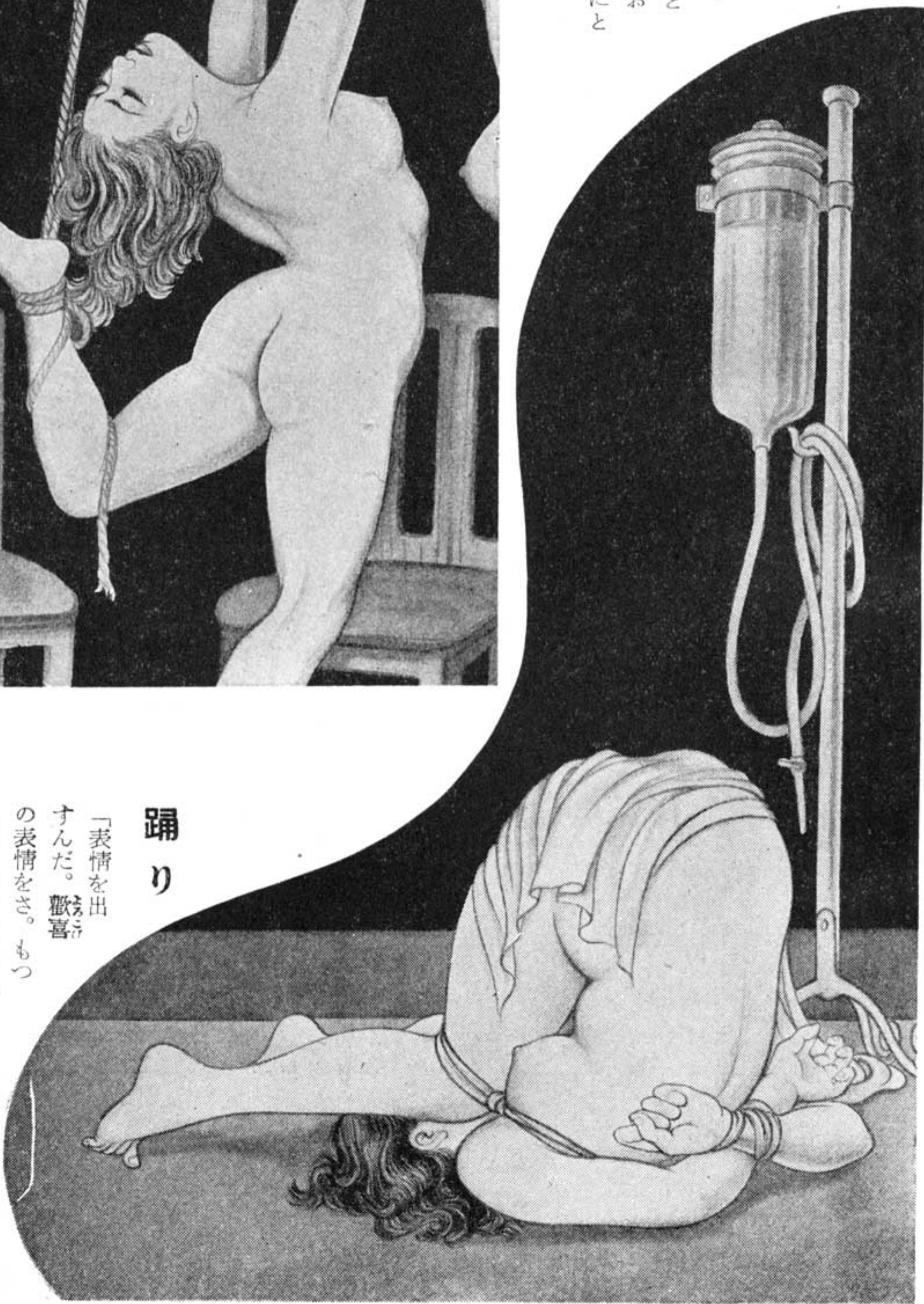
浣腸

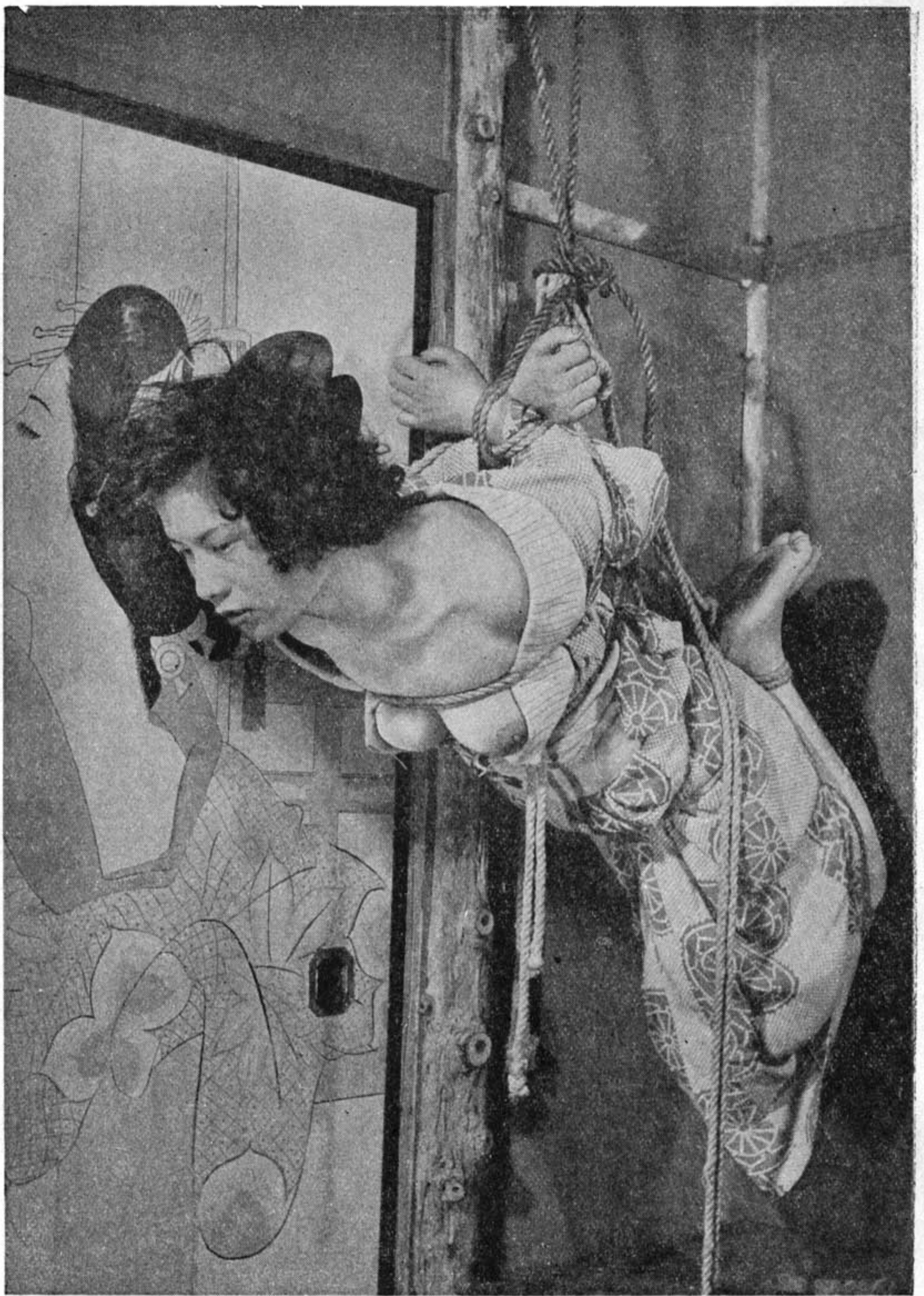
えびのように縛られてひっくりかえされた彼女。浣腸の薬液が彼女の胎内を駆けめぐる。やがて、彼女の意志ではどうにもならない作用が、おどど、おどどと、した腹にとどろきわたる。



踊り

「表情を出
すんだ。歡喜
の表情をさ。もつ
と高く肢を上げてやろうか。これから本
当の踊りを覚えるんだ」





吊りの研究

柱に出た太枝に
がんにがらめに縛
ったA嬢を、足首
と胸、胴から縄を
かけて、大の男が
三人がかりで、吊
るすのに大汗をか
いた。手を離す
と、体重十三貫五
百のA嬢の重み
で、縄は鈍い音と
ともに、二寸も伸
びた。まるい双つ
の乳房に縄が喰い
こみ、ちぎれそう
に見える。猶、A
嬢はM洋裁学校に
行っている普通の
娘さんだが、この
写真の試みのため
に、進んでいろい
ろ協力してくれ
た。



風俗草紙 四月号

本誌が誇る・豪華アブノーマル口絵集

天	(目次裏)	人	折	(アート)	(グラビヤ)	(色彩写真)	(六色折込)
一	あぶのーまる・も	肉	檻	ピクチュア	荒海に縛る	荒磯の処女	不運な貴夫人
坊	だん・画	市	三	白と黒	……本誌特写々真	……本誌特写々真	……中川彩子画
地	獄……絵文……野村英生	場……喜多木静子	罰……八木節成	囚……鈴木部構	……本誌特写々真	……本誌特写々真	……中川彩子画

大座談会
責めと緊縛もやま話……

出席者

(元・映画監督)	吉野二郎	(作家)	松井 瀧子
(脚本家)	伊藤 晴雨	(写真家)	山下久一郎

連載
官能小説

妖の虹：龍膽寺雄

(262)

男性マゾ
入門

甘美なるマゾの世界……倉田 哲郎

22

警官が用いた：訊問・捕縄・拷問の技術……三谷祥介 (105)

読・賣め絵
放浪記
猿轡と荒縄と……長岡変一郎
214

淫雨熄まず……松井籟子

未発表
秘稿 わが秘めたる記……伊藤 晴雨 (131)

変態性慾臨床報告……三宅 一朗

痴人成群像：比企狂一郎

男色の性典(手記三篇)

下 帶 マ ニ ヤ…水谷 雪夫 (50)

被虐想春譜：長塚弘一 (95)

美 青 年 サ ド…山中 哲治 (90)

奇態同性愛譚 (3) …… 高橋 鉄

わたしの男装徘徊記：佐伯京子 (200)

哀れな私の彼女たち……逢 山 浩
(188)

狂ほしき狂楽（レスポス手記集）

三
人
目
の
処
女
：松
崎
房
代

汚されたブラジャー……花田ミヨ

マ
ストオリイ
ン
東西
マゾくらべ…鬼山絢策
1136

男のラブ・エロチシズム心理

征服した女を虐める男の心理……影浦 憲
(156)

現代の男奴隸たち……朽木冬夫

女体と男のフエチスム：三宅野宅
藤介郎 (16)

淫 蕩 刺 青 談…筑 紫 吾 朗

二十万円の懸賞原稿募集・中間発表……園村恵子……

レズホス通信 (秘密な愛のサロン) 園村 真二
そどみあ通信 (そどみあの秘密な交歓室)・・・藤井 晃
242 2

讀者交歓室（読者が語り合うサロン）・・・・・・・・・・・・・・・・

女 装 ま に や の 手 記 …… 西 塔 哲
サチステイク 淫魔の狂宴……坂ノ上言夫

鏡妖云（下篇）……島本春雄

現代小說金庫

男性洋裁師：日夏由紀夫

表紙・秋吉 喬
目次絵・浜田 稔

★現代アメリカ サディズム写真集★

最近の外国映画や小説のなかに、サディスティックな場面が、相当眼につくが、この写真集のごとくアメリカでも盛んに行われている。本誌では、今号から毎号この種の傑作写真を直接入手して、どしどし発表してゆくつもりであります。

★逆さえび



★張りつけベット



★パイプと腹締め



★猿轡 マウス・ギヤック



★拝み吊り



★鉄棒と鎖



日本では賣め道具という、大
体において縄・紐・手拭の猿ぐつわ
などと限られているが、さすがに
機械文明国のアメリカだけあって、
ご覧のごとく、さまざまな器具が
考案され、それが当を得て使用さ
れている。例えば、パイプを用い
た腹締めの道具や、鉄棒と鎖を組
合わせた逆吊り器具。それに口中
に球を押し込んだ具合の猿轡など
ちよつと見かけはユーモラスだが
なかなか実用的には巧みに出来て
いる。枚数の都合で今回は発表出
来なかったが、この他に金属製の
乳房圧縮機や鉄製の手枷など、マ
ニヤには仲々の興味をそゝるもの
が多く使用されている。

フランス・レスボス寫眞集

レスボスの本場といえ、どうしてもフランスであろう
本誌が特に発表するこの写真集は、その雰囲気を余すと
ころなく写し読者に満足を与えるだろう。写真は翹い





洋裁店のマダムと娘カクレ
 ールの心よい
 酔いに、二人
 の愛も馥郁と
 薫る。娘もマ
 ダムも頬をほ
 つと上気させ
 て、しめやか
 にささやく。



「お姉さま、早くとつて？ どお、大分太つたでしよう」右

「ボタンを外すわよ。可愛い娘甘えているのね」下





「お姉さま、うれしい……」
「じつとしていらつしやいつたら……」



黄昏ごろの巴里。あなたは、街角に公園に、レストランに、
ひっそりとよりそう二人づれの女を見かけるだろう。
一日の仕事から解放された、賣子やお針子たち、それから眼
深かにベールをかけた、由緒ぶかけな貴婦人さえいる。
狂熱の眼ざしと、からみ合う白い手はこの恋人たちのもの。
そしてうつつに身を焼きながら、永劫に身籠ることなきこの恋
人たちを、ボードレールは、殉教の女たちと謳っている。
思ひに沈む牧獣のごとく砂の上にうち臥して
女たちは海の涯なる水平線に眼を放ち、
そのからみ合ふ足、組み合はす手に、
甘き懈怠と苦き悪寒のみなざるを覚ゆ。



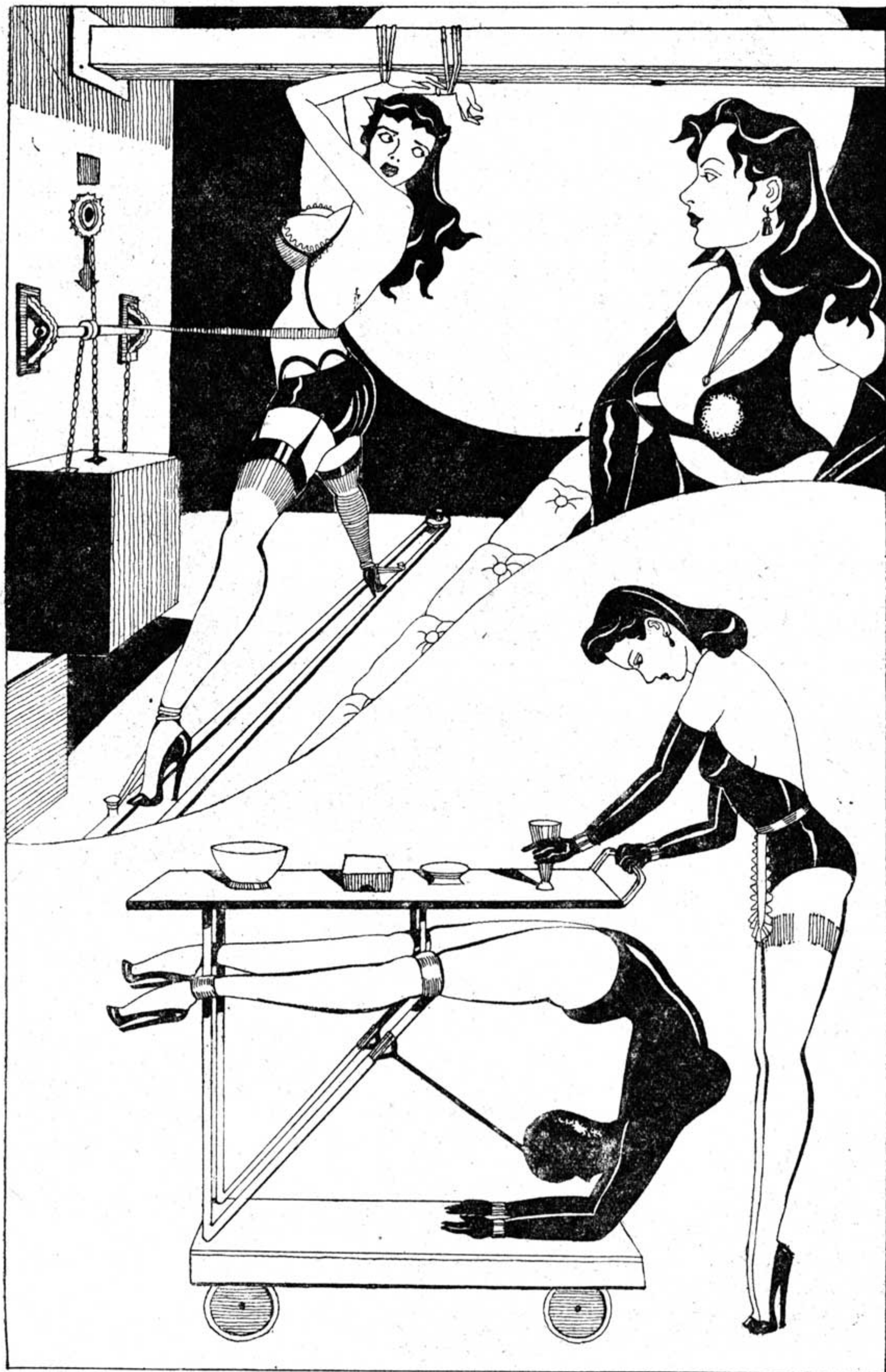
女子学生の愛の戯れ——春の夜は、寄宿舎の小部屋に、妍しい
レスボスの花を咲かせる。雌しべ同志が実を結ぶ愛の花を——



「嬉しくって泣けそうだわ」



「じらすのなんて、いや！」



機械應用の責め八態 古庄英生・畫



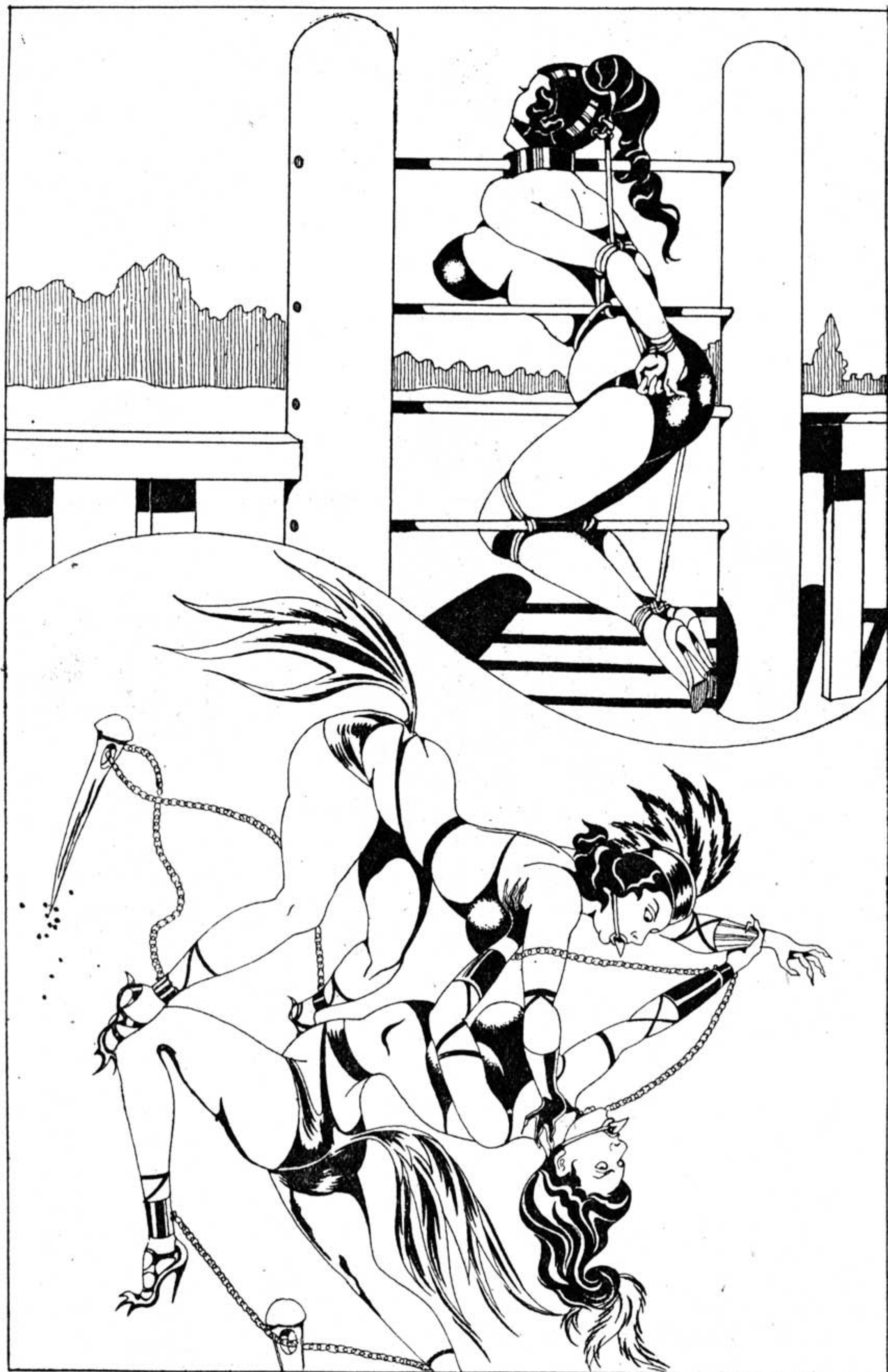
(左上) 回 転 板
(左下) 挺 子 責 め

(右上) 電 気 伸 縮 機
(右下) ティ・テーブル



(上) 人体腰掛け

(下) 箱責め



(上) 肋 木

(下) 闘 雞

嗜
時代繪巻
天

天

坊地獄

神行京一

新刊



黒塗漆銀撒の燭台の灯が、ゆらりと揺れる。

「綾之丞、胸を擡げて見い」

寶沢、別説には改行、こと徳川天一坊は、にやりと笑つてそう言つた。

三つ葉葵白綸子の天一坊は、美男だが、その眼だけは、天下を狙う大山師らしく、冷酷で鋭い。

その前で、太刀持小姓の綾之丞は、かたくなつて唇をかんでいる。たまらない姿態だ。

——美しい、窈窕絶佳の美小姓だ。

ぐいつ、天一坊の手が、綾之丞の大振袖の襟を掻きひろげる。

続いて、その手が、あろうことか、柔かいむつちりとした膨らみを掴んだ。女だ！

「フン、やつぱり女だな。可愛い顔をして、越前の隠密めッ」

その手はもう女である事が明白なのに、執



拗にムッチリと盛り上った乳房や肌を責めつけている。

「フフフフ」

冷たく笑うと、綾之丞を組み敷いて、その手の指を、ぐいと形のよい唇へ、鼻の下へねじくりつける天一坊だ。どうもやる事が異常だ。

「どうだ、これが女の匂い、つて奴だぜ」

綾之丞は、必死に「ああ、隠密などとその様な……。あたくしは、貴方様を、お、お慕いして……」

「成程、それじゃ可愛がつてくれよう」

正体がバレては仕方がない。この上は色仕掛で、と考える綾之丞、実は大岡越前守の隠



密早瀬小雪だ。が、天一坊は、女の色香にまよう、そんなちつぽけな山師ではない。紅閨淫雨。そとは成程雨だ。紅綸子の燃えるような夜具。なまめかしい緋の長襦袢一枚の小雪。あれから十日経っている。髪も姿も、本来の女になつて、しかし、小雪はもう、清純の処女ではない。後手に縛られ、緋房の紐で左



の乳房を締め上げられている。
「おれを慕うていと言つたな。嘘だ！」
「いいえ」

「なら舐めて見ろ、恋しい男の肌を。胸を、
腹をつ……」
「えっ！」

「イヤか、——隠密めつ」
「いただきます」

天一坊は、ヤせて骨張つて毛深い。

小雪は、神を念じて、その小さな赤い舌で
後手に縛られているから、及び腰になつてペ
ロリと天一坊の肌を舐めた。

塩っぽい！

何たる屈辱、何たる苦痛、それは死よりも
まさる羞恥であつたろう。

ぽろり、と不覚の涙が頬を伝う。

フフフ、奇妙な快感に、唇を歪める天一
坊。

ペロペロペロ、男の肌を、胸を……舐め
てゆく美女……が、さすがに、途中で小雪は
ガバと伏せた。

「お、お許しなされて、も、もう……」

「フン、なら、越前の計画というやつを白状
しねえ。やつは、どの程度まで調べを進めて
いやアがるんだ」

「あたくしは、決してそのような……」

「おきやがれ！ この天一坊を慕うて、か、
フン、あれから十日、おめえの態度は恋しい
男に愛されてる態度じゃねえ。恋する男との
愛情でなア、そんなもんじゃねえ」

合の金襴が、靜かに、しかし、ほんのわず
かに開く。

「隣りを覗いて見ろ！」

そつと覗いて、小雪は思わず真つ赤になつ

て眼を閉じた。見れる筈かない。そこには……。女の心理を知りつくした千軍万馬の天一坊のやることは、今更記すまでもなからう。

「見るんだ！」

びしり、と鞭が鳴る。

「眼をそらせると、コレだぞ小雪」

眼を開く。が、男ずれのした莫連女じやあるまいし、とても正視は出来ない。

呼吸が弾み、射中の血が顔へ逆流した思いで、又思わず眼をとじる。と、

ピシッ！ 激しいムチだ。

はつと眼を開く。

ハッと閉じる。

ムチ！

緊縛された乳房の苦痛とムチの激痛……

小雪は、いつの間にか雪の肌をむき出しにしている。緋鹿子の長襦袢が肩から滑り、

これを乱花の姿と言うのであろう。

雪の肌に、ムチの紅い筋。

が、小雪は今もう、隣りの光景を憑かれたように凝視し続けていた。刺戟と苦痛の果に激しい錯乱が来ていたのだ。

その夜の床。小雪は不思議と激しく燃えて小妖婦のようになつた。

翌朝天一坊は、太陽が黄色く見えたり。

しかし、いかなる天一坊の術策にも彼女は泥を吐かなかつた。脆い善のその時にでも



この上は猫責め
だ。見てお
れ！
と



女の心を征服出来ぬ激しい憎みと焦燥に燃え
立つた天一坊。どんな気丈な女でもいつべん
に降参する奇計を胸の中に浮べて、ニヤリと

凄く笑った。

「オイ、例の猫責めの道具を用意せい！」
門弟たちが分厚い板で出来たマナ板を運ん

で来る。

その大きなマナ板の上に、小雪は大の字に縛りつけ
られる。その雪の肌に、マタタビをすりつぶした液
がぶっかけられた。

そうして、マナ板の下に、マタタビが火を点ぜ
られて……猫を呼ぶこれは魔薬だ。

ニヤーオ、ニヤーオ、ウエヤーオ、

猫が、一匹二匹 三匹——十四——五十匹……

……無数に、マタタビを慕って集って来る。

小雪の肌の上を這いずり廻る猫。

マタタビに酔い、或いは転げ、或いはくね
り、或いは踊る猫。烏猫、三毛、白いやつ。

顔の上、乳房の上

ニヤーオ、ウヤーオ、ニヤーゴ、

そのいやらしさ、擦つたさ、異臭のおぞま
しさ、小雪は、呻き、泣き、叫び、そして
力が盡きてくる。全身汗でぬらぬら。

と、見て、ニヤリ縛めを切る天一坊。

が、もう立つて逃げる気力もない。

よろ／＼、ばたりと倒れる。飛びつき

纏いつく、猫、猫、猫……。地獄だ、こ

れは。

しかし、ドロを吐かぬ小雪だ。

「しぶといやつ、ええい座敷牢へぶち

込め」

その夜、この座敷牢に近づくと黒い人影があつた。

その影は低い声で呼びかける。

「姉上、姉上」



た。

「お助け致します、姉上」

錠をコジ開け、一步外へ出る綾之丞と小雪の姉弟が、バサリ、天井から網が降つて来た。

避ける間もあらずそれは巧妙な罠であつた。

徳川八代將軍吉宗公の実子である、と名乗つて出た天一坊だ。証拠の品が、あるにはあるが、何分自分が偽者なのだから、怖いのは名奉行大岡越前守の眼である。

しかし、その隠密が二人、自分の手に入つた。これ悪運盡きざるしるし。こいつらに口を割らせて、越前の計画を知らねばならぬ。

綾之丞は、素つ裸で袋網の中に閉じこめられている。そのまま砂糖水の中にぎぶり。

天下を望む天一坊である。やる事が大袈裟だ。

「フン、蟻責めというやつ。本人もたまらぬが見ている者もなおたまらぬぞ」

邸内の蟻塚を崩すと、無数の蟻どもは甘味を慕つて、袋網の中の綾之丞に襲いかかる。

これやタマルまい。顔から鼻の穴から、腋の下も胸も腹も、べつたり砂糖に濡れた肌だ。蟻に遠慮はない。

「ウツ！ ペッペッ」

眞つ黒！ もぞもぞこそこそ、無数の蟻。

網袋の中では躰の自由が利かぬ。

全身蟻に齧めかれ、噛まれ、その樂ゆき、

「あつ、綾之丞」

牢の外と内。女と男。だが、奇妙、瓜二つである。

その筈だ、二人は二卵性双生児で、始め、弟の綾之丞が天一坊の小姓として、この天一坊

陣屋に入つたのを、途中で小雪と入れ替つたのである。

それは、越前守への中間報告のために、ひそかに陣屋を抜け出した綾之丞が、急の腹痛で倒れ陣屋へ戻る事が出来なくなつたためだつ

それは言語に絶するのであろう。

苦痛——狂笑……美少年だけに凄い。

「ものの一刻も続けると気が狂う。どうじやな小雪。弟を狂者にしてもよいかな」

我が身の苦痛、汚辱はコレエもしよう。けれど愛しい弟の身が……小雪の力が、敗北の

言葉を吐こうとする。

が、最後の理性がそれを食いとめる。

——フン、それなら……

天一坊ニヤリと笑う。笑うと悪僧改行の本性をさらけ出す天一坊だ。天性の冷笑鬼。

軍師の大悪伊賀之介も、美貌のこの天一坊



のニヤリ笑いには、ゾーッとなるくらい。

綾之丞は、そのまま泉水池の中で、散々水責めをくらわされ、揚句の果て、天一坊の寢所の天井から吊り下げられた。

もうなかば、朦朧たる心気だ。

匂うような青畳。燃えるような紅綸子の夜具。裾曙の枕行燈。だが此処は地獄の部屋だ。

「鬼、鬼めッ」

「何とでもホザケ」

全くキチガイ沙汰だ。気が変になる。

が、二人とも、まだネをあげぬ。

「くそッ！」

天一坊は、いきなり綾之丞を吊す縄を切り拂い、畳の上に落ちてのたうつ彼の顔の上へ小雪の脰をぐいぐいねじりつけた。

両手を縛されて自由の利かぬ綾之丞は、息苦しさにノタうち廻る。

そうして、遂に綾之丞には死が来たのであった。窒息の死が……！

「フッフフ、死んだか。死におったか」

小雪が舌を噛んだのはこの瞬間である。

それは、言うなれば、運命の瞬間でもあったろう。

何故なら、天一坊偽者の確証を握って、越前守の密偵池田大助が紀州から帰着したのもこの日この時であつたからだ。——天一坊の末路は衆知の通りである。

(終)

風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



三・四月合併號

連載・アブノーマル官能小説

(第三回)

淫雨熄やまず

「もつと強く噛んで！」香月は千佳子をギユウツと抱きしめて、もり上つた二の腕へ再びガブツと齒をたてた。

「噛んで。抓つて。もつと、もつと！」千佳子のかすれたような聲でうわ言のように言つた。……

—

「どないでしたの？」

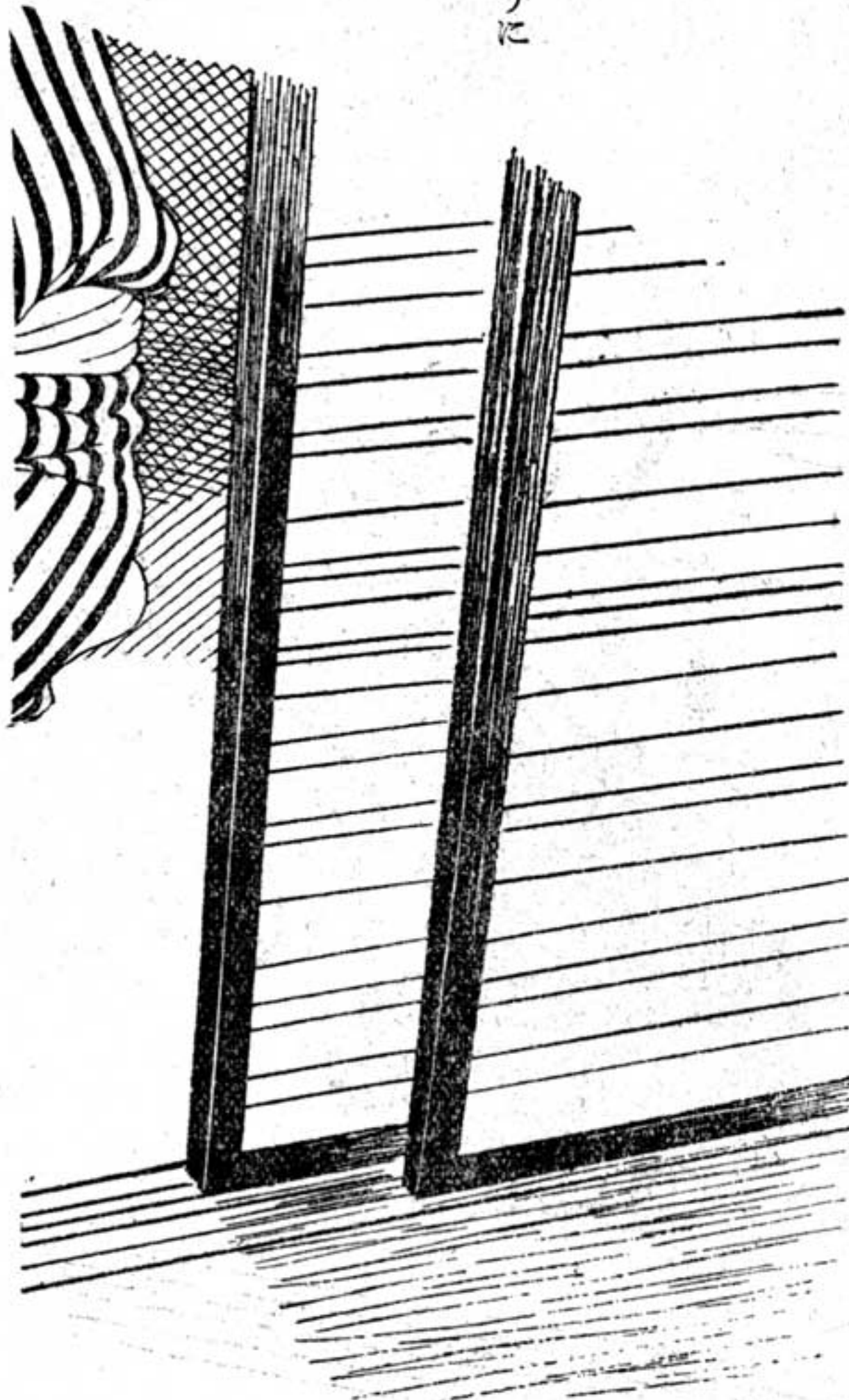
香月春夫が薄ら笑いを浮かべながら、ささやくように言つた。

千佳子は答えない。猿ぐつわをはめられたまままだから声が出ないのだ。たとえ声が出たにしろ、おそらく答えなかつただろう。

「怒つてはるのでつか？」

香月はぬけぬけと言う。

「先生は僕に感謝してもいいのでつせ。縛られたヌードは見せてあげたし、彼氏の弱味はちやん



松井 籟子
喜多 玲子 画

と握らしてあげたし、今日はええ日
と違いまつか？ そんな恐い目してにら
みはるなら、もつとこのままにし
ときまほか？」
千佳子は「イヤ、イヤ」
というように首を振った。

玲

え



「僕を怒つたりせえへんでんな？」

千佳子ほうなづきたくなかつた。怒りは胸もとまでこみあげているのだ。

「なんで返事しはらしまんねん？ ほんなら、ほんまに怒られへんめに合わせてやるかしらん」

香月は縛られたままの千佳子の体を抱いて耳もとへ口をつけた。

千佳子はその奥で叫んだ。そして香月の囁きからのがれようと必死になつてもがいた。

白いシートの上で手も足もぐるぐる巻きにされた白い裸身がピクピクとはねるさまは、白い砂浜に打ちあげられた大きな魚のようだった。まぶしい程明るい電球にかえてあるスタンドの光は、真晝の太陽のようにギラギラと、千佳子の肌を照らした。その肌に汗を浮かべて、千佳子は抵抗した。肩まである長い髪はチャリチャリと鳴った。

「フフ、フフ、」

突然隣の部屋から押し殺したような男女の笑い声が洩れた。

千佳子が自由をうばわれた体で最後の抵抗をしているのを、隣の人達はまさか女がぐるぐる巻きにされているとは想像もつかないの

★前号までのあらすじ★

美貌の苦学生齋田ユキは仕事を求めて、演劇部に標準語を教えに来ていた元女優長瀬小夜子のいる酒場の前まで来た時、そこで同じ学校の軽音楽部の学生で、校内でも顔の広い香月春夫に呼びとめられた。そして香月に紹介されるまゝ、新進女流画家真木千佳子のアトリエに出掛けた。そこでユキは縛り絵のモデルにされてしまったのだ。最初は同性の気易さからするすると全裸になつたユキではあつたが、ユキに与えられたポーズは、手錠と足枷につながれた祈る奴隷であつた。仕事が進むにつれて、ユキのふり乱した恰好の髪が裸の胸にかゝり、その痒さつたらない。もじもじするユキに千佳子は肚を立て、「動くならこうしやる」と言つて、太い縄で中二階の手すりから宙に吊られてしまったのだ。ユキは許

だろう。

「なかなかおさかね、フフ、フフ、」

女のささやきは低い声なのによく透つた。

千佳子は水をかけられたように体を冷たくした。

讓次をうばつた女が笑っているのだ。何と

しを乞うて叫んだ。すると香月が飛んで来て、ユキに猿轡をはめてしまったのだ。誰にも見せたことのない処女の体を、羞しい姿を見られてしまったのだ。それから千佳子の恋人讓次も入つて来た。そしてまじまじとユキの姿を見入るのだつた。その眼に嫉妬した千佳子は、ユキの前で讓次に接吻と抱擁を迫る。そして二人は隣室へ……

千佳子が香月春夫に縛りの撮映会があると誘はれたのは、郊外の温泉旅館だつた。そこで香月に麻酔薬を注射され、眼が覚めた時は、鏡の部屋に全裸で縛られている自分を発見していた。「変なヌード見るよりは、先生自身の縛られた姿の方がずっときれいでつせ」香月はそう言つて眼が閉ぢられないように絆創膏を貼つた。と、その時、隣室から洩れる男女の嬌声、その男の声こそ、千佳子の愛人讓次ではないか？ 讓次だ！ だが相手の女は一体誰だろう？

いうくやしきだろう！

千佳子は急に静かになつた。

いつそ香月と、と、思う。讓次の目の前で自分の体を他の男の手にゆだねて、

「私だつて……」と、讓次と、讓次の女を笑つてやろうか。

「静かにするなら猿ぐつわとりまつせ、この絆創膏も……」

香月は千佳子の猿ぐつわをはずし、目の上の絆創膏をはがした。

千佳子は深い溜息をした。

何か言いたかったが言葉がなかった。いろんな感情が渦の様になつて、言葉さえその渦の中へまきこんで、のどからさきに出て来ないような気持だつた。

「噛んで。肩を噛んで」

千佳子は香月に言つた。

激しい痛みが欲しかった。心の渦をスーッと澄ましてくれるような、肉体の痛苦が欲しかったのだ。

香月は言われたとおりにガブツと千佳子の丸い肩を噛んだ。

「ウウツー！」

千佳子は歯をくいしばつた。

香月が唇をはなしても、あとがヒリヒリと疼いた。

「もつと！」

千佳子は言つた。

香月は千佳子をギュウツと抱きしめて、もりあがつた二の腕へ再びガブツと歯をたてた。

「噛んで。抓つて。もつと、もつと！」

千佳子はかすれたような声でうわ言のように言つた。

こうしている間、羽目をへだてた隣座敷に、自分を裏切つた恋人がいることをしばし忘れられた。

「ああ、痛い！ ううん、痛くてもいいの。もつと痛くして、もつと！ ああつ！」

千佳子は酔っているようなうわずつた声になつた。

「隣へ聞えまつせ」

香月の方が気にした。

「聞えてもいいわ」

言いながら千佳子は、香月が唇をはなしたので荒い息をした。腕も肩もズキンズキンと動悸を打つていた。

「違うわよ」

隣から女の声が聞える。

急に声をひそめた男の声がボソボソとそれに答えた。

「まさか、違うわよ、そんなこと言つて、又私に千佳子のことと思ひ出させるんでしよう、憎らしい。まだ苛められたいの？ 厭がらせばかりいう……」

ピシッ、ピシッと打つ音が男の呻めき声と

まじつて聞えて来た。

いつやむとも知らぬ地獄図絵に、さらさらと氷雨が軒を濡らしはじめていた。

二

「春ちゃん、あんた、まさか真木千佳子に譲次のこと言やしないでしようね」

スタンドの中で、洗つたコップをふきながら、小夜子が言つた。

窓が一つもなく、地下室のように造つてあるメーゾン・ド・サヨの内部は、晝でも電氣をつけている。ボックスのようにソファアが二三ヶ所置いてあるが、それをへだてている境は牢格子のようで、陰惨な感じが漂つていた。

香月春夫は片隅のスタンドの前の高い椅子へ腰をおろしている。

「ここでのんでいると、チェリーブランデーが血のように見えるから妙や」

「春ちゃん」

小夜子はわざと大きな音をたてて、空のトップを棚に並べると

「あんた、聞えてるの？」

と、鋭く言つた。

「何でんねん？」

香月はブランデーのコップをなめる。

「ごまかしても駄目。あんた、千佳子に言つたんでしょう？ おまけに私達のランデヴーの場所まで教えたんじゃないの？ 本当は男のくせにおしやべりね」

「どうかしはつたんでつか？」

「たしかに千佳子の声だつたつて讓次が言うのよ。私達のいく家の隣の部屋へ誰かと来ていたらしいわ」

「先生は先生と違ふさかい、浮気なんぞ、ようしやはらしまへん」

「なによ、先生は先生つて……。先生と言われる程の馬鹿じやなしつて言つてね、そんなややつこしいことになつちやうのよ、誰でも先生つて呼びやあいいつもりでいる……」

「怒らはつたんでつか？ だつて他に言いようあらへん」

「千佳子に知れたら知れたでいいけれど、讓次はやつぱり怖いらしい。私がそれとなくたしかめてくるというのに、出るな、出るなつて、とうとう、お店すつぽかして、隣の人か帰るまで寝ていたのよ」

「ごちそうさま」

「のろけと違ふわよ。ねえ、本当にあんた言つたんじゃないの。千佳子が知つたのなら、こつちも手を考えなければいけないもの」

「僕はそんなおしやべり絶対にせえへん。第一、その真木先生らしいお人はひとりやつたんでつか？」

「ううん、男の声していたわ」

「どんな声でした？」

「春ちゃんみたい……」

「おどかさんでいて下さい」

「ほんというと、男の声は低くてわからなかつたのよ」

「さよか」

香月春夫はブランデーを口にふくんで、しめしめと舌つつみを打つた。

「それはそうと、あんたに頼んであること大丈夫でしょうね」

「そら大丈夫や。けど注

文がむづか

しいよつて、右から左いうわけにはいきまへんで」

「早く探してね」

「僕ではどないです？」

「あんたじゃ駄目。とても私が惚れそうには見えないわ」

「ほんなら先生に頼みはつたらいい」

「先生つて、讓次のこと？ あんたは誰でも先生ね、讓次に頼むくらいなら苦労しないわよ」

「何でそんな小細工せなあかんです」

「菊地がどうしても切れてくれないからよ」

「ほんなら別れずに浮気してはつたらええでつしやろ？」

「いやなの、どうしても私、讓次を私のものにするの。それには先ず私が菊地と別れなければ……」

「そんなにいいかいな」

「何が？」

「いえ、こつちのことや」



長濱小夜子に何を頼まれて
いるのか、香月春夫は珍らし
く制服制帽で学校の門をくぐ
った。降りつづいた氷雨が嘘
のように晴れて、春めいた空
気が甘く思えるのは、校庭の
沈丁花が丁度盛りのせいかも
しれない。

その晴れた空気をよそに、内
職を求める学生の群が、掲示板の
前に一とかたまりになっていた。

香月春夫はその群の中に、小崎義
一の姿を見ると、そばへ行つて肩を
たたいた。

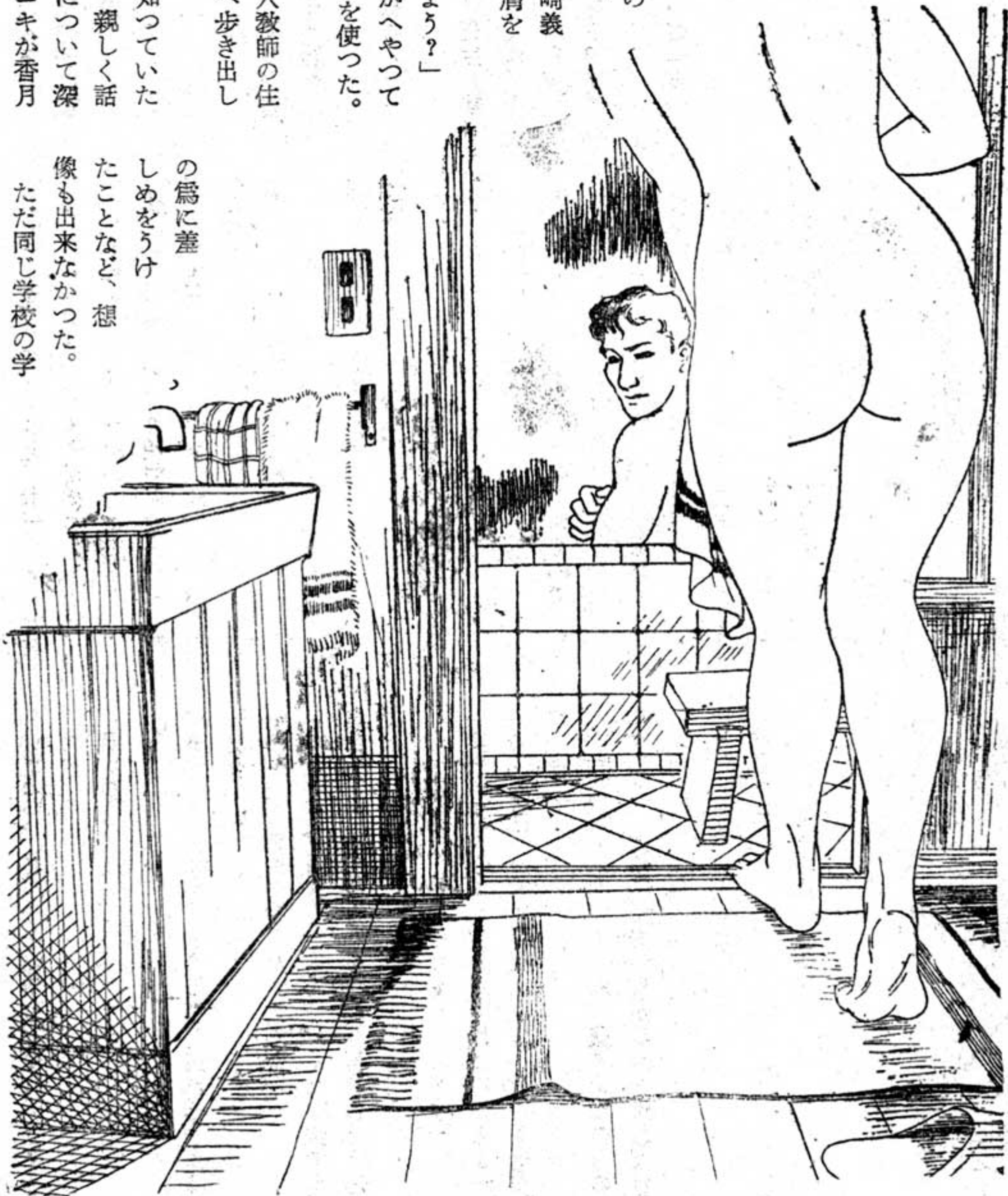
「アルバイト探しているんでしよう？」

香月はいつもの大阪弁をどこかへやつて
しまったように、きれいな標準語を使った。

「一寸向うへ出ませんか」

香月は小崎義一を促して、外人教師の住
宅の並んでいる静かな歩道の方へ歩き出
した。

小崎はユキが演劇部で香月を知っていた
から、顔見知りの間柄だったが、親しく話
したことはなかった。香月春夫について深
くは知らなかったし、まして、ユキが香月



の爲に羞

しめをうけ

たことなど、想

像も出来なかった。

ただ同じ学校の学

生であるということは、香月に対する警戒心を小崎に感じさせなかつたし、仕事を求めている身は、何にでも耳をそばだてたくなる心境にあつた。

「いい話があるんですがね。英語の出張教授に行きませんか？」

香月は言つた。

「芦屋の金持の奥さんが英語を習いたいというんですよ。僕は人に教える自信がないので……。残念なんです君にゆずりますよ。御礼もとても沢山くれるというのです」

「僕で出来るようなら、こちらこそお願いします」

「引き受けてくれますか？」

「はあ」

「御礼は一回千円位でいいですか？」

「そんなに……」

「向うが出すというのですからもらつておけばいいですよ。じゃあ、これ……」

香月は言うどズボンのポケットから封筒をとり出して、中から千円札を一枚ぬくと、

小崎の前へ出した。

「何ですか？」

小崎が戸惑つたように聞くと、

「入門料を渡しておいてくれつて頼まれた

んですよ。英語を習うのを、小唄を習う位に思っているんです。受け取つておいて下さい」

「しかし、これは……」

「いらなければ僕がもらつておきましょうか。いや、冗談ですよ。本当にとつておいて下さい。英語と小唄と一緒にするような人だと思つていて下さればいいんですよ。だからこれは入門料で、又行けば一回千円というわりでくれることになつてゐるんです」

「じゃあ……」

小崎は香月の手から千円を受取つた。それをすぐユキに渡してやつたら、金の苦勞をしているユキがどんなにかほつとするだろうと思つと嬉しかつた。

「では早速今晚案内します。僕一寸用があるので晩の七時に芦屋川の駅で待つていて下さい」

香月は言うど

「じゃ、失敬」

と、足早に去つて行つてしまつた。

四

香月は「金持の奥さん」と言つたが、応接間へ出て来た人の顔に、小崎義一は何となく見覚えがあるような気がした。

案内した香月は応接間へ通されて、奥さんらしい人に小崎義一を紹介すると、「これからランデヴーや」と軽口をたたきながら、すぐに歸えつて行つてしまつた。社交なれない義一は体をかたくして、椅子のはじの方へ軽く腰かけてゐるのだ。ちゃんと腰かけたら、体が埋つてしまひそうな椅子だつた。

「小崎さん、お食事は？」

そういう声にも何となく聞き覚えがある。

しかし、香月はただ「金持の奥さん」としか言わなかつた。

「もしか長濱小夜子さんでは？」

と、聞いていいものかどうか、小崎はためらつた。

ユキが演劇部に席をおいていたのは、父親が働いてくれていたからで、小崎よりは余裕があつたからだ。小崎義一は自分の趣味をのばす時間さえ持つていなかったのだ。ラジオさえ、聞こうと思つて聞く時は殆どない。しかし、長濱小夜子にはユキがめをかけてもらつてゐるということも聞いている。自分の愛人に關聯していることは、小崎も無關心ではなかつたから、ふと街のラジオから流れる小夜子の声を耳にとめたこともある。舞台は見なくても、小夜子の写真ぐらいは見たことも

あるのだ。

香月が案内してくれたから、夜目に標札をはつきり見もしなかつた。謝礼をもらつて英語を教えに行くというのに、うかつな話だが、相手の姓も知らなかつたのだ。

こちらは小崎義一と名のつたのに、先方はただ、「どうぞ、よろしく」と、頭をさげただけだつた。きつかけを失つて、相手の名をたづねられなかつたのだ。

長瀬小夜子なら、酒場をやつていふといふ話だから、今日此の時間に家にいることもないだろうと、小崎は思つた。

それにしても紺地に白い水玉の、洋服布地の様な着物の半衿に、樺色の様な反対色を使つて粹に着こなしている姿は、堅気の奥さんにしては妙に艶っぽかつた。

「小崎さん、お風呂が丁度沸いてますの、お入りになりませんか？」

彼女は言う。

「女にさら湯はいけないつていいますわ。さきに入つていただくと、私、たすかるんですの」

「はあ」

はじめて来た家で、いきなり「食事は？」と聞かれたり、風呂に入れと言われれば誰

でもめんくらう。

「さあ、遠慮なさらないで。それに、本当いふと、入つていただく方がいいんですわ。お怒りにならないでね、あなた、埃っぽい匂いがするんですもの」

小崎は急にどきまぎして、湯銭を儉約している身を恥じた。

しかし女は母親のようなやわらかさで、「私つて、齒にきぬきせることが出来なくていつも相手を怒らしてしまいますのよ。本当にお怒りにならないでね。さあ、お風呂へ入つてさっぱりしていらいしやいまし」

と、さきに立つて案内するように応接間のドアをあけるのだつた。

そうまでされて小崎はことわる言葉を見失つた。

温泉の家族風呂のような広い風呂場だつた。

ためらいがちに入つたものの、服をぬいで裸になつてしまえば、小崎ももうあわてなかつた。心の片隅に、はじめて来た家という緊張はあつたけれど、長瀬小夜子に似ている奥さんに、もしかしたら、やつぱり別人ではなく、長瀬小夜子その人だからこそ、此方は知らなくても、ユキの口からでも自分のことを

聞いているのかもしれない。それではじめて会つたにしては親し氣にふるまつてくれていふのかとも思われた。

埃くさいと言われた体をよくお湯で洗つてから、湯舟に浸つた。忘れていたものを思い出したような、甘い悲しさに、小崎はじつと目をつぶつて、風呂桶の木の香をなつかしんだ。

と、その時、ガラッと、脱衣場の硝子戸があいた。

女主人に入れとすすめられて入つたお湯だつたから、誰か入つてくるというようなことを懸念していなかつた。女中が石鹸かタオルでも入用になつて取りに来たのかと、湯舟に浸つたまま、脱衣場の気配をうかがつていたが、ガタンと音がして、湯殿の戸があいた。見るとさつきの女主人が全裸の姿ですらつと立つている。

五

こういう場合、おかしなことに、女より男の方が気が小さい。

もし立場を反対にして、若い娘がひとりでお風呂へ入つている時に、突然男が入つて来ても、図々しい程に落ついてみせるのが女の

身にそなわつてゐる「嘘」なのかもしれない。男はそういう咄嗟の嘘を持ち合わせていない。

小崎義一は体中真赤になる程にあわてた。湯舟に浸つてゐるのがせめてもの救いだつた。それなのに、女は平然と

「春だというのに冷えるわね」

と、世間話のような弁解のしかたで、体にぎあつとお湯をかける。と、小崎の浸つてゐる湯舟へすつと片足を入れた。

小崎はあわてて、身を小さくして、女の入れるように湯舟の半分をあけた。しかし、いやでも女のすらつとした脚から腿への線が目に入つた。

「あなた、斎田ユキさんのいい人なんですつて？」

やつぱり長瀬小夜子だつたのだ。それにしても「いい人」などという呼び方をされたことのない小崎はただ戸惑うばかりだつた。

それに、もう湯気にのぼせてしまつてゐる。流し場の方へ出たい



のだが、手拭を流し場の桶の中へ入れたまま湯舟へ浸つてしまつたのだ。どうして出ることが出来るだろう。

「ユキさんには悪いけど、今日は私のいい人になつてもらふのね」

小夜子は言つた。

「え？」

驚いて小崎は問い返した。

「そんなにかたくならないで。若い人の肌つてきれいな」

湯舟から肩を浮かしている小崎の胸がふつくと女のように丸い。

小夜子の手が這うように小崎の胸をすべつた。

「僕……」

小崎はパシヤンとお湯の音をさせて、流し場へとび出した。

小夜子はその純情さを面白そうに見ている。そして、体の血がくすぐられるような気がしてくるらしかった。

小夜子は同じように流し場へ出ると、そそくさと脱衣場の方へ上つて行こうとする小崎の前へ、大手をひろげるように立ちふさがつた。

彼が出て行くのを止めようとするのだ。

「まだ洗つてないのでしよう？ 背中流してあげるわ、さあ、お座りなさいよ」

「いいんです」

小崎が小夜子を押しつけて行こうとする、自然、裸の体と体がもみ合うようになった。

その時だつた。湯殿の戸が、ガタンとあいた。

「小夜子！」

太い男の声だつた。

小崎の方は戸に向いているから、そこへ姿を表した人が五十がらみの金歯を光らした男なのにはつとしたが、男はいきなり小夜子の肩をむんずとつかんで引いた。

「あつ！」

と、くずれるように小夜子は尻持ちをついた。それを押さえつけて、男は彼女をなぐりつけた。

小崎は思わず男の手をとめようとしたが、男はタイルの流し場へたたきつけるように小崎をなげ出した。肘を打ちつけたのが、脳天まで針をさしたように、一瞬小崎の息をつめさせた。

その間に男は小夜子を裸のまま引きずるように脱衣場へつれ出して、風呂場との間の鍵

をかけてしまつた。

温泉場の風呂なら、むしろ反対に、中から鍵がかかるようになっていゝ。それを泥棒の用心に、家庭の風呂場は、風呂場から家の中へ入れないように別の棧がとりつけてあるのだ。

小崎義一は裸のまま風呂場へ残されてしまつたのだつた。

六

「痛い！」

ひきづられながら小夜子は悲鳴をあげた。濡れたままの体が春の夜空に鳥肌立つた。

肩をつかんでいゝ男の手を、ひつかくようにとこうとしたが、その手を反対に後手にねじり上げられ、廊下の冷たい木の肌へ、頬をすりつけるように押しつぶされた形で、小夜子は

「ううっ！」

と呻いた。

男は外から帰えつたばかりなのか外套を着たままだつた。その衿もとから絹のマフラを引張り出すと、小夜子の手を後手にマフラで縛つてしまつた。

「何すんの？」

小夜子は罵った。

「あんたはいつでも私におとこが出来たらきれいに別れてやるって言っているじゃないの、こんなことされる覚えはないわ」

男はものも言わずに、そう言う小夜子の頬をピシッと打った。

小夜子は足で男を蹴った。

「こいつ！」

男は小夜子の足を一つにして押さえ、何か縛るものはないかと、あたりを見廻したが、片方は硝子戸で中庭に面し、片方は障子紙も白々としてある廊下に、小夜子の足を縛れそうなものはなかった。

男は小夜子の体を逆さに吊り下げるように、二本の足を一つにしつかかり持つと、そのまま引きずって行つた。

小夜子は髪を乱して、後手のまま、ズルズルと引張られて行く。

男は二階へ上る梯子段へかかった。

一段、二段、小夜子は逆さに引きずり上げられる。後手に縛られた手の指先を、梯子段のふちへかけて、引きづられまいとしてみた。すると、男は梯子段の中途に腰をおろしてしまつて、一つにした足の裏をくすぐった。小夜子があばれても男の力には

かなわなかった。逆さにされた頭に血が下つて来て、苦しい。

「こんなことされることないわ。卑怯よ」

小夜子は息をはづませながら言つた。

「お前の理窟は今ゆつくり聞いてやる。どうだ、苦しいか」

「苦しくなんかない！」

「よし」

男は又、一段一段梯子段を上つて行つた。素裸の肩に、腰に、背に、皮下出血の痕がにじんでいった。

やつと二階の寢室まで小夜子を引きずつてくると、ベッドの上に出ているねまきの紐で小夜子の足を縛つた。

「どうしてこんなことされなければならないの？ あんたは私が別れてくれって言つても一寸も本気にしてくれなかったじゃないの。

俺の目の前でお前が男を作っているのを見たから、きれいさっぱりくれてやるって言っておきながら、なによ、こんな……。解いてよ。こんなめに合わされることないわ」

「あれがお前の男なのか？ え？ あんな若造が……」

「若造で悪かつたわね」

「縛られていても口は達者だね。まあ、さん

さん毒づいておいで。あいにく助けをよぼうにも、奴さんは裸で風呂場から出られないし、女中はお前がちやんと遊びにやらしたらしい。お前を他の男にやらないものでもないが、そんならそのようにしてから、のしをつけてくれてやるよ」

「何をしようつていうの？」

「お前は俺が女にしてやつたんだ。人形だつていい人形はちやんと人形師の銘が入つていゝる。お前を他の男へ譲る前に、お前の体に銘を入れてやろうよ」

小夜子は男の言葉に急に激しい恐怖にとらわれた。

「な、なにをしようつていうの？」

泣きそうな声で言つた。

「俺の名は菊地だから、菊の花びらをお前の体に焼きつけておいてやろう。裁縫に使う鋲はどこにしまつてある？」

「知りません」

小夜子はおののきながら言つた。

菊地とはつきり手を切る爲に、彼がいつもいうように、男があることを見せてやろうとして打つた今日の狂言だつたのだ。「本当におとこがあるなら、俺も男だ、きつぱり別れよう。ただ口から出まかせでは承知しない。」

俺の目にはつきり見せてくれ」と、口癖のように言う菊地の言葉を、うつかり信じていた小夜子だった。ただ本当に自分の愛している譲次との仲を見せなかつたのは、それで菊地が別れてくれたにしても、譲次に菊地との交渉を見せて、もし、ひとのお古をもらうような厭悪感を譲次が持つたら、折角、菊地と手を切つても、あぶはちとらずになると思つたからだ。そこまでは深く気を廻してことをはこんだ小夜子も、菊地の嫉妬が思いがけない強さで自分の身にふりかかつてこようとは想像していなかつたのだ。惻かなようでも、それが女の愚かさなのかもしれない。

「鰻はどこにおいてあるのだ？」

重ねて菊地は聞いた。

「知りません。ねえやがどこかへしまつて

おくんでしよう。私は知りません」

「言わないな」

菊地はズボンのベルトをぬくと、小夜子の裸の肩へピュウツとふりおろした。

「あつ！」

と、小夜子は逃げようとしたが、足首を縛られているから膝でいざるだけだ。

「言え、さあ、どこだ？ 言え」

菊地のふりおろすベルトの下を犬のように這い廻つて、

「知りません、知りません！」

と、小夜子は絶叫した。

「よし、言わないな。鰻のさきを、一つ一つの花簪にして、菊の印をつけてやろうと思つたが、言わないならこうしてやる」

菊地は小夜子の小簾簾から、打紐やしごきを何本もととり出して来た。

そして、小夜子の胸から二の腕へ廻して、しつかり紐をかけて後手に縛り直すと、小夜子の体を床に転がしたまま、ベッドの脚へ縛りつけた。それから、彼女の足を折るよう小夜子の頭の方へ無理にまげると、一つにしてベッドの上の枠へ縛りつけてしまった。小夜子の体は半円を画いて、身動きも出来なくされたのだ。

「もうやめて、ねえ、あの人は私の恋人じゃないのよ、あの人と何の関係もないのよ。だから、もう許して」

小夜子は紐を解こうともがいてみたが、無駄だった白い裸身が波打つ様は、菊地の目を輝かさせる効果しかない。

菊地は小夜子の様子を面白そうに見ながら、ゆつくり煙草に火をつけた。

「ああ、もうかんにんして！」

その煙草の火でどうしようとするのか、小夜子は菊地の目の色で解る気がした。その火でジリジリと肌を焦がされたように、彼女は油汗をかいだ。

しかし彼はそんな小夜子を横目で見ながら一服吸い終ると、灰皿へ捨てた。

小夜子はほつとした。

しかし、今度は彼は寝室へそなえつけた三面鏡の引き出しから西洋剃刀をとり出すと、ペタペタと革でとぎ出した。

小夜子は又息をつめる。そして恐怖は思わぬ絶叫になるのだつた。

「もう許して。本当に、本当に、あの人は何でもないの。アルバイトの学生さんなの。あなたを一寸かついであげただけ。冗談なの、本当に冗談なの。もう解いてよ。お願い」

菊地は剃刀の切れあじをためすように、自分の指の腹をあててみながら、冷たい目を小夜子の鼻へなげた。

まだベルトで打たれる方がましだと思ふ程、何をされるのかと思う不安はたまらない恐ろしさだった。

その時、階下で電話のベルがリーン、リーンとけたたましく鳴り出した。

(未完)

男性マゾ 甘美なるマゾの世界

Kは後手に縛られたまゝ、石鹼も水もつけないで、妻に髪を剃られるのである。「痛い痛い」と彼は叫ぶが、妻は叫ぶが、妻はフ、ンと鼻先で冷笑して、「層亂暴にこしぐと剃る。故意か偶然か彼の皮膚から血がふき出る……」

一 アブの道徳

親愛なる本誌の愛読者諸氏には、それ／＼軽なり重なりにアブの世界を経験し、或は興味を持つておられることゝ思う。

ひとくちに「アブの世界」と言うが、セックスの面において、どこからがアブで、どこまでがノーマルなのか、その限界の至難なことは、これ迄この道の大家達が屢々口にしているところであり、「私は絶対ノーマルな性慾の持主だ」と主張する人にだつて、どこかにアブに共通する要素を持つているのである。又「アブ」に対する社会的通念に依る批判

倉田哲郎
陳野重 磨画



そう言う人は自己の性向の輕重の価値を冷靜に判定して善処するが良いと思う。このような抽象的な言い廻しでは分り難い人もあるかと思うから卑近な例をあげて具体的に説明して見よう。

を恐れ、或は普遍的道徳の觀念から

自己の性向に煩悶する人があるとすれば
良家の青年が戀愛したとす

その相手の女性が娼婦、或は不良少女であつたとする。そして二人に結婚の意志がある。すると青年の周囲からは、社会的通念に依る批判を以て反対の声があがる。

ところが二人の恋愛は双方眞剣であつて、一緒になれなければ心中してもと言う熱のあげかたであつた場合は、識者の批判は多少變つてくるであらう。それは大別して二種に分れる。

「それ程迄に想い合つてゐる同志なら添はせてやろう」と言う説と「イヤ何が何でも断じて反対だ」

と言う二筋道になるが、この後者の説は、自我の強い頑固な人間か、或は二人の恋愛の熱度の価値を輕視している人であつて、公正に議論すれば後者の説は必ず敗ける。

但し此の場合、二人の恋愛の熱度が批判の重点となることは当然である。

この恋愛の女性の立場を「アブの性向」に置き換えて考えて見ればよい。この場合も、その「耽溺」の熱度が重大なポイントとなつてくる。

その他にアブの場合は道徳的觀念上の批難と「良心の呵責」が煩悶の種となる。

ところがこの「道徳」なるものが「普遍的

道徳」なのであつて、常人には通用するが、特殊な人間には当て簀らぬ「道徳」なのである。

「良心の呵責」はその点に気づかず、本人が「普遍的道徳」の觀念上より自己批判するから起ることである。

「アブの世界」に対しては「アブの道徳」がある。それは決して眞の道徳を歪曲したものである。ではなく、私は私流に正しい道徳であると確信しているが、今此処でそれを論ずると夜が明けるから他日に譲る。

二、被縛の快味

何故冒頭にこんなことを書いたかと言うと私はこれから「アブの世界」を耽美しようと思う。それが單なる「アブニスト」の神經をくすぐる「ために書かれたもの」と思われたくないからである。私はアブノーマルセクシアルデザイナーに就いては眞剣に探究しているつもりである。私も若い頃には自分の「アブの傾向」に就いて羞恥とか良心的な悩みも大に味わつたものであるが、現在では羞恥も良心の呵責も感じない。それが私の神經の癱痺した故によるものであるとは決して思つていない確固たる信念がある。

さて「アブの世界」と言つても些か広いが私の受持ちは「マゾの世界」であるからその方面の讚美にとりかゝらう。

「アブの世界」のうちでもマゾヒズムは最も理解し難い性慾の種類である。

女性には比較的この味が直ぐ分る場合が多いが男性の「マゾ」となると、その心理が非常に複雑で、アチラのエライ学者やお医者さんが一応分つたようなことを書いているが、彼自身がマゾヒストでない限り、なか／＼マゾヒストの心の裏側は覗ききれないものである。

男性マゾにしても、細かく分ければ、数限りなく細別できる。然しこれを細かく分類していると又日が暮れるから簡単に二種に大別しよう。

マゾヒストには肉体的苦痛を尊ぶものと精神的苦痛を喜ぶものとがある。これから記すマゾプレーは男性を主体に女性を対照とし同性間のマゾ、自虐等には觸れない。

肉体的苦痛を主としたプレーの入門第一課は「被縛」である。

「被縛」自体はさのみ苦痛ではないが、然しこれは体験した者でないとその眞のよさ

が分らない。

ノーマル人種でもサヂストでもよいから、一度奥さんが恋人に縛られて見るとよく分る。

相手の女性にサヂの気がなくとも、此方が縛られて、自由を失つたと見ると、多少いたずら心が起きてくる。

第一に女の表情が変る。

ニツコリ笑つて見下す顔。そこに今迄見られなかつた彼女の美しさを発見するだろう。

女の野性的な美しさを知りたいと思つたら先ず縛られて見れば、今まで一度も見せたことのない野性美を発揮してくれる。

又次から次へと起る妄想がこよなくたのしいものである。

このように自由を失つた自分を前にして、彼女は一体どんな風な態度に出るかしら？

あゝもされるか、斯うもされるかと想像するだけで、マゾヒストは、非常に昂奮するものである。

縛られて見ると、心理的に自分が彼女より一段下の人間のように思えてくる。それはふだんはえばつていても、男が病氣になつて、女の力に縋られればなくなつた時に、今迄感じなかつた尊敬に信頼と愛慕を知るように

自由を失つた自分に較べて、自由な彼女に尊敬と畏怖の念が湧いてくる。

然し又この縄さへ解けば、対等或は優位に復活することができると言う楽しさも分ってくる。

兎に角これは体験して見ないとその味が分らない。想像していた以上の事柄が、事実となつたり妄想となつたりして生じてくるものである。

故に陳腐ではあるがマゾ入門の第一として、この被縛を除外することは出来ない。

三、直接苦痛のプレイ

肉体的苦痛と言へば、刺す！ 斬る！ 焼く！

が浮ぶが、これ等は身体に痕の残る場合が多い。そしてこれ等は入門者にはまだ早い。

然し女に刃物を持たせると言うことも又楽しいことのひとつで、スリルも相當ある。

私の友人に、もとレヴェーの俳優だつたMと言う男は、妻君に匕首を持たせて、芝居をする趣味の男がある。

妻君も女優だつたからそこは心得たもので女剣戟もどきに、片肌脱ぎとなり、匕首を閃めかして、腹も突き刺したり、眼の玉をえぐ

り取つたり、首根つ子に刃を当つて、ゴシゴシと首をチョン斬つたり、口を開けさせて、口の中へブツツリ突き通したりさせる。(勿論彼の五体は今もつて完全であるからそれはそのような「眞似を」させるのである)と思うが、彼が私に喋べる時は決して「眞似」と言う言葉をはさまないから、私ははさまないで書いたが、中にはゴカイする讀者があるかも知れないから止むを得ずチュウシヤクを加えておく)

又私と同職業の雑誌の編集をやつてゐるKと言う友人は、妻君にでも愛人にでも剃刀を持たせることが好きな男である。

Kの妻君は現在では完全なサヂストで、彼のよきパートナーとなつてゐるから、彼と非常にうまが合うようだ。××は「これで頸動脈をザクツと斬つてやつたらどうだろう」とか「言うことときかないと、これで耳を削ぎおとしちやうぞ」と脅かす。

そして彼等の常に行う剃刀のプレイは、女に縛られたまゝで、髭を剃つて貰うことである。

この場合、Kは後手に縛られた手を下にして仰向けに寝て、妻君(或は彼女)は、彼の胸にデンと跨がり、石鹸も水もつけない

いで、ジョリ／＼と彼の髭をけずつて行くのである。

「痛い／＼」と彼は叫ぶが、妻君（或は彼女）は、フ、ンと鼻の先で冷笑して、構わず一層乱暴に、彼の頭を片手で抑えつけて、ゴシ／＼と剃る。時には故意か偶然か、彼の皮膚から血がふき出る場合もある。

そのような時には、彼の妻君（或は：面倒くさいから彼女としよう）彼女は手の指で、それを拭き取る。その指がそれ以前にどんな汚ないことをした場合であつても構わずに、彼の頬や唇を撫でて血を拭き取る。血が止ら

ないようだと、指で暫らくおさえたり、又は

その場にあり合わせる布きれ（例えば彼女のズロースとか、特殊の場合に用いる専用タオルとかの類）で拭き取つて、それで一寸おさえていると不思議に直ぐ血がとまるそうである。

Kはこの他に脛毛も剃らせることがあるそうだが、この方がより以上に痛く、斬られる場合も多いそうである。

それは顔だと、あまり方々に切り傷を拵えるのも可哀想だが、脛なら構わないと言う気持と、脛の毛など剃らせるとは失礼至極とばかり思いきつてゴリ／＼やるからだそうであ

る。

四、健康的なプレー

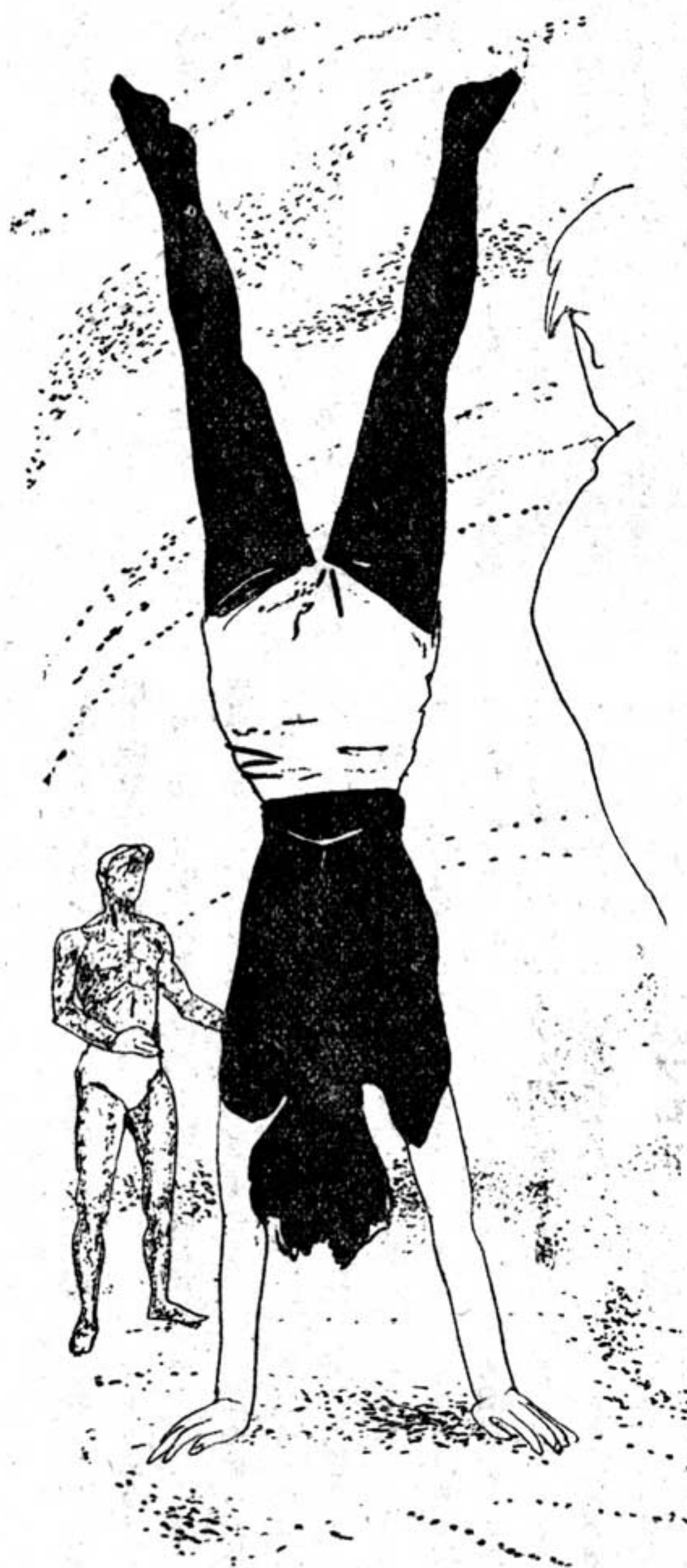
痕の残らない苦痛を味わう方法としては「逆立ち」も面白い。これは私もやつたことがあるが、女性の前に逆立ちをすると相手の女性は、まずその珍奇な形態を発見して笑い出す女が多い。

中にはチョン／＼と觸つて見る女もある。

そして女が許してくれる迄は、逆立ちを続けている義務がある。（あることにする）

これは自分の意思の強さを試すためにもなり、健康的にも非常によいことだそうで、着衣かそうでないかは御随意だが、逆立ちそのものは皆さんに推奨したい。特に女の子の前でやると、一人でやる時よりも励みがついて、長続きするものである。

又こんな方法もスリ



ルがあつて、傷がつかず、苦痛の程度も強く健康的である。

先ず仰向けに四つん這いになる。

出来るだけ腹と腰を高く持あげて、身体を反らせる。

そしてその高さに応じて背中の下へ蠟燭に火を点けて立てる。

背中をうんとそらせていれば熱くない程度の間隔を保たせておくことが必要である。

そうしておいて、彼女に腹の上に跨がつて貰う。

これは相手の女性のサヂつ気を試すのにも都合のよいプレーである。

サヂつ気の少ない女だと、両足を疊へつけて、加減して跨がる。そして此方の要求次第で、加減しいく／＼除々に重圧を加えてくる。

だがこれも二度三度となると、サヂつ気のない女でも、別に色々の感情が働いて、此方の要求に応ぜず、強い圧迫を加えることがある。

サヂつ気のある女は、テンから面白がつて疊から両足をはなして迄、押しつけてくる。

これはあぶら汗が流れてくる。

多なぞどんな寒い日でも直ぐ暖かくなる。

私の友人で（これは女性であるが）このプレ

ーの大好きなひとがいる。勿論跨がる方である。彼女は全裸もしくはパンティを脱いでデカに跨がるのであるが、相手の男性との呼吸をよくのみこんでいて、適当な時間を凌ぎ得る程度に調節するが、究極の所はそのまゝでは許さない。必らずどんな頑丈な男でも潰してしまうそうである。

「潰す」と言うのは、男の方が熱さに耐えきれなくなると、身を捻つて退こうとする、が女の方がピッタリと両股ではさんでそうさせないから、仕方なくそのまゝ蠟燭の上にヘナヘナとくずれ折れてしまうのである。

この場合いきなりドスンと潰れると、蠟燭



の火が消えず、疊を焦かす恐れがあるから、熱くなつて、我慢できなくなつたら、思ひきつて、背中をピッタリと蠟燭の頂上へくっつけてしまう。焼けた蠟燭がベッタリとくっついて非常に熱いが、蠟燭の太さにもよるが、やけどが痕になる程ひどくなること

はない。

(痕になつても治る)

五、崇拜のプレー

マゾヒストには肉体的苦痛を排斥し、精神的苦痛を喜ぶ型もある。

精神的苦痛の最も端的な表現は「屈辱」である。

私の最近の知人でWと言う男は官吏で相当古株の方であるが、彼は妻君を「絶世の美人」と自讃している。

彼の妻君には度々会つたが、彼の言う美人の象徴にはまだ拜顔の栄を賜つたことがないから果して「美人」かどうか分らぬが仮にそうだとにしても、私はその方の「顔」はあまり多く見ていないし、どう言うのが「美人」なのか標準さえ知らないから、仮にコンクールがあつたとしてもその選者になる資格はないところ。ところが彼は若い時からの蕩児で、アマ、プロ数百人の「美人」に面会したそうであるが、未だ曾つて彼の妻君程の「美人」はないと断言し、顔や身体よりもその「美人」であることが眞の美人であると力説している。

彼の妻君は上の顔もなか／＼美しくて、あながち彼の負惜しみでないことが肯定される

彼はもと／＼ノーマルな好色人種であつたが現在の妻君と結婚してから、その「美人」であるためにマゾづきが生えて来たようである。

その動機となつたところのものは、或る夜妻君の美人に「面会」して、しみ／＼と眺め入つてみると、その非の打ち所のない完成品に、改めて彼女を尊敬する思念が起きて来たと言う。

彼が始めてこの「美人」と近々と顔を合わせたのは、彼女がスヤ／＼と眠つてゐる時だつたが、見れば見る程魅力が増して来て、これが自己の専有物であると言うことに誇りと幸福感をしみ／＼と味わい、その彼女を尊敬崇拜する意味で接吻したと言う。

こゝ迄はその行爲そのものはマゾではないだが同じ接吻するにしても、常人の接吻は、たゞ愛着の衝動のみであるが、マゾヒストのそれは、多分に尊敬崇拜の念が強く、自己本位の接吻でなく、彼女本位の接吻であるところ。に根本から本質的に差違があるのである。

彼はそれからこの「絶世の美人」に対して自分の如き汚れた極道息子が一言の挨拶もなく対等につき合うことに対して、僭越であると考えようになつた。

こうなるともうマゾの領域である。

然しこの「高貴なる美人」は至つて庶民的であつて、彼の来訪を快く許したばかりか歓迎する意志を見せるので、仕方なく彼もその訪問を許してはいたが、彼自身としては極道息子以上に彼女を尊敬し出したのである。彼女自身は自分がそれ程天性の美しさを備えて生れて来たと言うことを全然自覚しないものゝ如くであつた。

彼は彼女の王座を占めるこの女王ばかりでなく、その股肱の重臣である。ふくよかな太腿迄も尊敬した。これこそ文字通り「股肱の臣」であると痛感した。

果はその末輩に到る足の裏恩足の指先に到る迄、恭々しく、愛敬し、過去の自分の不遜な態度を詫びる気持が強くなつた。

この女王は彼の忠勤を愛でて三種の貴液を与えてくれたそうである。

マゾヒストW氏は「神酒」と尊称しているが眞からその気持に迄到達することが出来るれば、この分野に於けるマゾヒストとして相当の貫録が備わつたと言つてよい。

さてこれから新しい屈辱プレーの数々を書こうと思つたが予定の紙数が盡きたので、後日に譲ることにする。

座談會・カ一回

緊縛よもやま話



この座談會のゲスト、吉野二郎氏は、元松竹・日活の大監督であり、現存する人としては恐らく日本映畫界の最長老である。伊藤晴雨氏は既に讀者も御承知の「緊縛と責め」の大家。カメラマン山下氏は現役の「緊縛フォト」研究家。松井女史は本誌連載「淫雨熄まず」の作者。この多彩な顔觸れによるオーソドックスな責め談義を、フアンの讀者にお贈りする。この特異風俗座談會はテーマ・及び出席者を變えて當分連載しますから、何卒御期待下さい。

特殊風俗

責めと



出席者 (發聲順)

(元・松竹・日活 監督) 吉野二郎

(畫家) 伊藤晴雨

(寫眞家) 山下久一郎

(作家) 松井籟子

本誌側氏家富良

映畫の責め

回顧談

吉野 一休、責

めということとは、映画界では、このごろはいくらかやかましくなくなつたですけれども、今までは、それは虐待だといつて、私などがやろうとしても、なかなかやらせなかつたものです。それで、当時映画界で勢力のあつた浅草の映画館主など、よく伊藤さんの例の縛つた画を私に見せては、「オイ、こういうのをやつて呉れよ」といったものです。もつとも、映画監督の中でも、私やマキノ



寫眞説明 右頁の右手を上げているのが山下氏、その隣は松井女史。左頁右端から向つて左へ、伊藤氏、吉野氏、左端は氏家編集長

省三、衣笠というようなのは皆自分たちが舞台でたたき上げてきていますから、自分たちのやつてきたことや、それから伊藤さんの画の話などをしては、俳優たちに向つて「どうも君たちのは縛られていても、ちつとも感じが出ないじゃないか」といつてよく話したものです。どうも「風俗草紙」のあの画のような感じは一つも出ていないのです。まア、それで私もそんなことをいながらずいぶん数知れないほど、今までに撮つて来ましたが、印象に残っているものと言えば「浦里時次郎」ですね。

伊藤 電気館でやつた時分の松浦月枝の浦里は、あれはあなたがやつたのですか。あの時の、雪はなんでやつたのですか。

吉野 あの雪には麩を使つたのです。ちようどあれは、マキノが死んだ頃で、あれがトッキーの始まりです。それであの責めの場面は、ぼくが感じを出そうと思つて、普通ならば、ただ坐つて後手に縛つてあるやつを、ぼくはわざわざ横に転がしてみたのです。でも、さいわい検閲でチョン切れずにすみましたが。

伊藤 それで、今の麩の雪ですが、どれぐらい使いましたか。ずいぶん使つたでし

よう。

吉野 夜明しをして京都中歩いて棒になつた長い麩を買い集めてきて、それを金のフルイでゴシゴシこする。そうして粉にしたものです。上ツ皮の赤い所は明日のお弁当のおカズになつていというわけですが（笑）そうやつてできた白い粉を、簀の子の上へ大道具を二人くらい乗せておいて、扇風機で吹かせる、そうすると、一ぺんサーッと舞い上つて行つた粉がサラサラとまた舞い落ちて降つてくる——そういう仕掛けでした。とにかくあの写真は徹夜で一晩で撮つた、しかもトッキーです。ところであの責めの間が長いのです。しかし、やはりすべて振りというものがあつたのに、それを縛つたままです。それから、カメラを移動して後から撮つたり何かしたのだけれども、なかなか間が保ち切れなくなつて、苦心したものです。また、悪役のばあにそこでうんと浦里を虐めさせようとしたところが、最初やらせた大林梅子というのは、こういうのはいやだからひまをくれという。仕方がなくて、別の女優に変えたら、これもいやだという。結局三人目で撮りました。が、弱つたもんでした。

山下 吉野先生なんかご存知と思います

(出)(席)(者)(の)(横)(顔)

吉野二郎氏 早撮りのベテランとして過去の日本映画界に盛名をはせた。大正初期から昭和七年頃迄に監督した映画実に七百本あまり。しかも氏の作品は必らず儲かつたというからたいしたものである。代表作に『悲願千人斬』『三日月次郎吉』などがある。

伊藤晴雨氏 読者も既に御承知の『緊縛と責め』の大家。

松井藤子氏 本誌連載『淫雨熄まず』の作者。女流作家に美人は少いという説を裏切つて、女史は稀に見る美貌である。

山下久一郎氏 本年四十五歳現役パリパリの緊縛寫眞研究家。十数年のたゆまぬ研究は実を結んで、縄を手にしては今やベテランである。

が、よく日活時代に新聞の連載ものを撮つた監督で「照る日曇る日」なども撮つた人ですけれども、この人は、ほかの監督さんたちがつておチャラカな縛り方はやりませ



山下久一郎氏好みの最近作

んでしたね。あの「照る日曇る日」は沢村春子さんが出ていましたか……。

吉野 あの人は今、青森でおでん屋の女将か何かをやっています。まだ大河内が売り出す頃の人でしたけれどもね。

山下 それから伊藤大輔もキツチリ縛る人で、背中へカメラが廻つても、チャーンと縄がかかっています。それから、例の阪妻を育てた千葉青果もほんとうにキツチリ縛りましたわ。

伊藤 鍋島の猫をやった鈴木澄子が、小松

嵐の馬子のお時で、水責めになるところがあったが、あれの時は、八代不尋は、ほんとうに縛つてやつていましたよ。それともう一つ題名は忘れたが、やはり鈴木澄子が、船の上で縛られて吊し上げられていて、波がドブーン／＼とくるというのがあつたけれども……。

山下 あれは有馬のなんとかというのですよ。私は外地でみましたかね。

吉野 映画の責めも、やはり監督自身にその気分がな

いとほんとうの気分はでないものです。千葉青果もそうだし、伊藤大輔もそうなのですがね。私が、野村芳亭と二人で撮った「女と海賊」というのがありま

すがね、これは勝見庸太郎……

山下 と、川田芳子でしたね。

吉野 これは全部船の上の場面ですね。船で名古屋まで行つて撮つたのですが、ゼイタクなものでした。小さなボン／＼蒸気みたいなのを三艘も四艘も使つて、今ではえらくなっているカメラマンたちを全部使つて撮つたのですが、タイトルを使つたのはこの映画が始まりです。

山下 私の十七くらいの時ですよ。

吉野 あの脚本を書いたのが伊藤大輔です。

山下 伊藤大輔という人には、そういう気持ちがあるのか、ないのかは知りませんでしたけれども、あの人の映画の中で時々たとえば「興亡新撰組」の中などにもちよつとサジズムとマゾヒズム的なものを見受けるのですがね。

〔松井氏出席〕

山下 それから原作とはだいぶちがつていましたけれども、国枝史郎の「天明旗本陣」というのがあつて、これは片岡千恵蔵花井蘭子などが出たのですが、その時に、花井蘭子の役が火の見櫓へ吊される場面があつたのです。私はトリックかなアと思つ

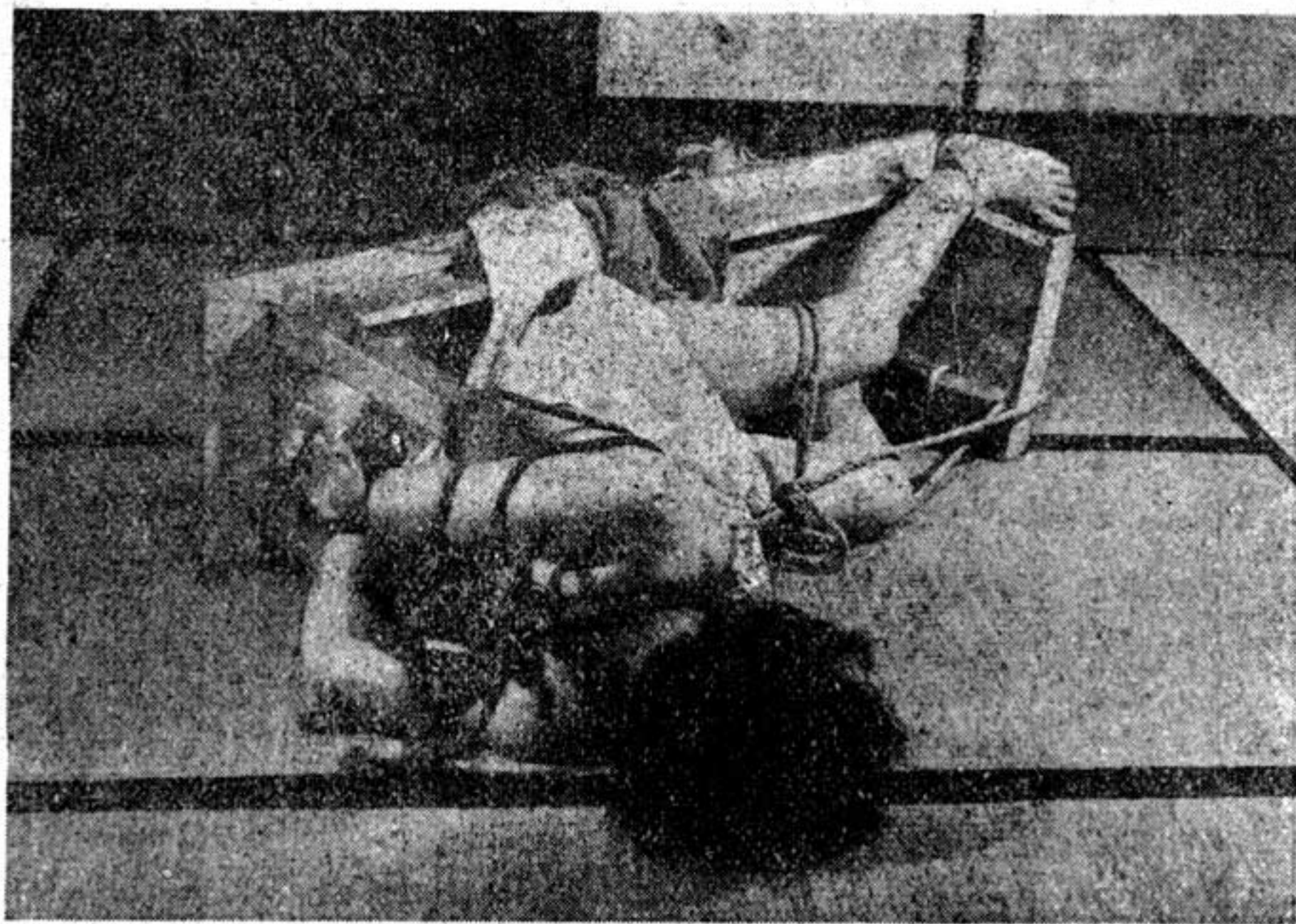
てみていたらそうじゃあない。大写真になつたらば、ほんとうにうしろ手に縛られてぶらさがっているのです。それから、羅門光三郎主演の「深夜の紅駒」でも、櫻井京子が、ほんとうにぶら下つていましたね。

妻を縛る経験

氏家 今度は山下さんの研究苦心談を一つ……。だいぶひそかに苦心なさつてこられたということを書いておきますので……。

山下 いや、苦心も何もないですよ(笑) 大体、私は少年時代から、こういう方が実に好きでして、十六、七の時分から「講談クラブ」「面白クラブ」などにそういう絵が出ていたりすると、もう胸をワクワクさせてむさぼり眺めていたものです。それで伊藤先生のお描きになつたものも、すでにその頃から拜見しておりましたし、お名前も知っていたわけです。たしかその頃、渡辺黙禪の「地を飛ぶ明星」の挿画として倉の中で吊している画を伊藤先生がお描きになつていらつしやいましたけれども、私は失礼ながら、これは先生の今までのものの中でも最高ではないかと思つてゐるのです。

まアそんなわけで、私はその頃から自分でも多少絵心もあり、写真は好きだし家庭でコソ／＼やつたりしていたのです。その後大陸に渡つたのですが、大体、私は酒を飲むわけではなし遊ぶわけではなし、ただこれ一方だつたのです。幸い大陸へ行つてから私をよく理解してくれるパートナー女房をもてたのです。当時北京にいて勤務していたのですが、わりあい暇もあり、金もあり、家も広い。それにカメラも良いものを持っていたものですから、家へ歸つて来ては、女房に頼んで写していたのです。女房も、私はよく働かし、別にほかにクセはない、ただそれだけを楽しみにしているのだということをよく理解して、写させてくれました、かれこれ二百枚ほどできたのを秘蔵して楽しんでいたのです。



伊藤晴雨氏好みの指導寫眞

氏家 繩の掛け方なんかはじめはわからなかつたでしょう？
山下 よく、いきなりうしろ手にして、

うしろから結んで行く方がありますが、あれは年期の入っていない証拠です。手は一番あとに結ぶべきだと思うのです。こんなことには別に原則とかなんとかいうものはないですけれどもね。それで、私なんかは勤めている時でも、乗り物に乗っている時でも、あの首から縄をかけて、その端をどこへ持つて行つて結んでやろうかなどと考えているのです。そして、今晚一つやつてやろう、縄は二ヒロか三ヒロもあればできるだろうなどということばかり考えては家へ帰るとやつていたわけです。

氏家 奥さんはビックリしなかつたですか。

山下 今のが三番目の女房ですけども最初はどれも皆ビックリしましたね。しかし、女房も、その時々によつては、まんざらいやでもないこともあるらしいですよ。これは伊藤先生もご経験だろうと思いますけれどもね。ことに私の、この前亡くなつた女房などは、日本的カルメンみたいな非常に情熱的な女で、亭主がカメラをいぢくり始めると「サアやりなさい」とは云わないうにしても、だまつて自分でお化粧をし始めたものです。

松井 その奥さんは、別にいぢめ殺したというわけでもないのですか(笑)。

山下 飛んでもない！ 近所でも私は愛妻家を通つていたくらいで……腎臓病でなくなつたのですよ。

伊藤 やはりぼくの三番目の女房がぼくにいぢめ殺されたのではないかというので、あの検事がこれを取り上げて問題にしかかつた。これは、ぼくの家内の妹がその検事のところへ行つていて、恋してしまつたために、因縁を付けたらしいのだが。

山下 それで、私も、そうやつて家へ歸つては写していたのですが、その頃新聞社に勤務していて社の寮にいたものですからお風呂場が共同なのです。ある晩のこと、寒い時分でしたが、そこで写真の水洗いをしたところが、始末するのを忘れて二枚ばかり、そこへ残してきてしまつたのです。翌日、私は九時か十時ごろまで寝ていたところが、女房が私を起していきなり「私はもう死ぬから」というのです。どうしたといったところが、実はあの写真が残つていたので、皆がそれを見て朝から大評判だという。私も、それは悪いことをした、しかし、それは大したものではない。ただアラビヤナイト調の、身体に鎖を

かけたものなので、別に局部を見せたものでもないし、オレが芸術家だということも知つてゐるのだから、かまわないなじやいかといつてなだめはしたのですけれども、とにかく「おもてを歩けない」といわれて困つたことがあります。今でも時々そういうことはやらかしますけれども……。

緊縛遊戯

氏家 プレイとしてはどうですか。

伊藤 それは手になるたけうしろえ縛るんですね。なかなか思い切つて出来ませんかね。

若い頃、北千住の遊廓えよく遊びに行きました。最初の晩から縛つてもよいという女に会つた。しかし荒縄を用意する訳にはゆかないので、ちりめんのしごきで縛つた。

そんなことでつい半年ばかり通いつづけたことがあります。

どうも、松井さんが傍にいたのでは、こんな話はちよつと困るけれども……(笑)。

吉野 私も吉原でそんな経験がありますよ。いそがしい店で女郎はサッサと次の客の方へ行つちまう。

すると四十過ぎの、まだ相当色っぽいや
りてのばあさんがなくさめに来てくれた。
この女がいゆるマゾでしてね。

つねつたり、縛つたりしないと満足しな
い。

亡くなつたトビの頭の亭主に毎晩いぢめ
られていたのが、習慣になつたらしい。

伊藤 大体そういう女には膽汁質の人は
少くて、神経質の人が多い。だから、瘦せ
た女は大体縛ると喜ぶといえるのです。

氏家 しかし、プレイの場合、うしろ手
に縛つたら女性の方は苦しいと思います
が、そんなことはありませんか。

伊藤 いや、苦しいからおもしろい。

山下 そう苦痛ではないらしいですね。

伊藤 最初は多少苦痛でも、縛られつけ
ると習慣になつてしまふし、大体、やろう
という意志がある時には、すでに軽くして
いますからね。

氏家 今、うちの執筆者に少し研究させ
ていまして、近く発表するように意気込ん
でいますけれども、いい加減に縛ると、ち
よつと軀を動かすと簡単にほどけてしまつ
てダメだということをいつておりました
ね。だからプレイとしても相当ギリ／＼と

縛らないと……。

山下 縄というものは相当強くかけたよう
でもわりにはどけるものです。私など、遊び
半分に、お前これを十分でほどいてみる、懸
賞金をかけるなんていいますけれども、そう
すると、十分くらいでほどいてしまひます
ね。ことに脚なんかは、ゴソ／＼上下してい
る間にゆるんでしまひます。

伊藤 絹糸を撚つた縄ならば、絶対に解け
ませんね。だから、刑事の持つてゐる捕縄は
全部絹です。それから芝居の宙乗りの縄も全
部絹です。

吉野 そう／＼、それに絹でないと宙乗り
のタグリがきかないからね。

山下 もつとも手錠さえも外すという人が
あるのだから、一概にはいえないですけれ
どもね。

氏家 プレイとしての縛りは、結局愛情の
最高度の形式なのですね。

山下 そうですね。愛情が根底にあれば、実
に楽しいものだと思います。単に興味として
のそれは、もう少し古いんじゃないかと思う。

伊藤 それから、もう一つ、女の髪を壊し
てやるという気持がありますね。つまり、昔
日本髪の場合の話だが、女は、髪を壊される

と、もう往来へ出られないというので、そ
れで、わざと髪を壊してしまうのだね。

吉野 われわれがそうでしたね、なじみ
の女の島田や丸まげを壊して、そして二つ
三つ殴つてからの方がいいな。

伊藤 だから、羽左衛門の色女になつた
小吉というのがいたが、その所にいた抱
えで吉奴というのが、半玉あがりの一本に
成り立ての頃に柳橋の亀清が何かの宴会の
時に、お前のマゲを壊してもいいかいとい
われて、いいわよといつてマゲを壊された
けれども、平氣でお酌をしていたので、そ
の晩身請けされてしまつたという話があ
る。つまり、女の髪を壊すということは、
女にとつては生命と関連のある重大な問題
だと思ふのです。

緊縛とホルモン

氏家 奥さんを縛つた経験をもう少し……
それは写真を撮るだけの目的では無かつた
んでしよう？

山下 ええ、ムロンです。私はたま／＼
何かの拍子にアマチュアからプロのカメラ
マンになつただけで、写真機を持たない時
からやりましたよ。



伊藤晴雨氏指導の縛り

氏家 それで、ご自分の奥さんがキレイなポーズをとってくれると、やはり……嬉しくて、新鮮な愛情も湧くというわけです

ね。

山下 ええ、そういう楽しみは大きかったですね。私ももう今年で満四十五歳ですが、

三十二、三の時分、一時間撮影をやっているともう性感情に二ッ進も三ッ進も行かなくなつたのです。これは皆そうらしいので、昨夜、私の家へ来られたお客さんなんかは、ごていねいにオリエンタルカラーで撮っていますが、この人なんか、声の小さな実におとなしい人ですけども、「山下さん、とにかくこの趣味で、撮影したあと朝まで寝られないですよ」といつていましたけれども、この点は共通したものです。

氏家 そうしたよろこびは、伊藤先生の動物電気ではないけれども、奥さんの方にもやはり通じるでしょう……。

山下 そうですね、さアもう痛いだろうから、縄をほいてやろうというので、ほどこかかると抱きついてきたりする、そうするともう全然感じのちがう女になつていましたね。

松井 それは、はつきりしたプレイとして行うのですか。つまり、そうし

なかつたならば夫婦の間がつまらない……

山下 そんなことはないのですが、つまり一種のホルモンみたいなものです。

吉野 山下さん、全部仕事を終つてしまつてから、お二人がどういう感じになりますか。

山下 どういう感じって、こちらの方はまさに鬼の首でも引き抜くぐらいの元気が出ます。相手の方も五回に一回くらいは、相当協力的になります。

松井 毎回というわけには行かないですか。

山下 私は、幸か不幸か、現在の女房が三人目ですけども、三人が三人とも受入体制がちがいます。だから一概に「何回に一遍」とかいうようなパーセンテージみたいなことはいえませんが、私の感じのところでは、この前亡くなつた女房——さきほどお話ししたカルメンみたいな女の場合、私も短気なものですから、たまに喧嘩をする。そうすると、女房も心得ていて、すぐ裸になつて押入れから縄を持ってきてさあ縛つてくれという。そうすると、私がお前は心から縛りたいのではない、ただ

オレにサービスするためにそういつているのだ、というのですが、結局、私もテレクさいけれども、よし、それじゃあ縛ってやろうといつて、縛る。それで結局、仲直りしてしまふということがよくあつたのです。

吉野 その仲直りの時が一番いいのですね。

女性マゾ論議

氏家 身体をぶつということは、実際にはどんな風ですか

伊藤 それはこちらは痛くなくて向うが痛いのだからね。しかし、ほんとうは、ぶつよりも、つつく方だと思う。射的にたえると手ごたえというやつだが、これがぶつ場合には間接的なのだ。ところがつつく場合は、この手ごたえというやつが直接的にあるような感じがした。

松井 何でつつくのですか。

伊藤 針でつついてもいいしね。「紅皿欠皿」では針——芝居では銀紙だけれどもでつつくことになっています。

氏家 この雑誌をはじめから実にファシオンが多いということに驚いています。皆チ

ヤンとした紳士で教養も高い方達です。松井先生の周囲にもそんな方、いらつしやいますか。

松井 三人程いますけど、皆生活力があつて、うまく楽しんでいるようです。プレイとしては高級なんじゃないですか。

氏家 女の胸を縛るのはどうですか。うちの読者で一方でもいいから縛ってくれという注文があるのですが……。

伊藤 それはたとえ一方でも、気絶するか

ら絶対

にやつ

ては駄

目です

よ。縛

つたら

ものの

五分と

保つも

のでは

ない。

吉野

乳房は

いけま

せんね。

伊藤



近着アメリカ責め・鎖とパイプ

だから、乳房を縛つてある画が描いてあるのはウソなのです。

山下 大体、縛ってもらつて気持ちがいとかいう女があればそれはウソです。僕はそう思いますね。ただ亭主に奉仕するためにやつているのであつて、たまには幾らか「いい」という日があるというだけのものです。私など女房を裁縫の裁ち台の上につむけにして縛るのですが、まあ一カ月

に一回や二回はプレイとして承認出来る時もあり、あなたまかせで、どうにでもしなさいというような時もないことはありません

松井 ただ、「これでこの人のものになったのだ」ということで喜びを感じるということはあるでしょう。

氏家 本質的なマゾヒストならそうだと思いますね。しかし、勿論、緊縛だけでなく同時に男の方も少し愛情や同情がなければいけないでしょう。山下さんなんか、どちらかというと言術意識旺盛だが喜ばなかったのではないですか。

山下 私は数多くの女を知らないし、全部が全部どうであるという断定はできないけれども、やはりその人の性格によるでしょう。大体、一般に子供なんかはぶたれて喜ぶものはないでしょう、しかし大人になると、一年に何回かは、非常にデリケートな刺激を求めている時もおそらくあつて、そういう時にちょうどめぐり会えば、両方とも非常に幸福を味えるわけでしょう。

しかし普通の女房を持った場合、いつも／＼そううまくは行かないでしょう。

氏家 しかし、愛情から出た縛りであつて……。そうして安定した夫婦であればプレイとして相当効果があるんではないですか。もつとも相手の女性の性格にもよりますか。

山下 イヤ、なかなかそううまくは行きませんよ。

松井 女の人を縛つて喜ぶ男の人も、いやがる男の人もあるのと同じように、女の人の中にも、縛られていやがる人もあれば喜ぶ人もあるでしょう。

山下 だから、サドとマゾとが神の配合によつて偶然一緒になればいいのですがね。

松井 しかし、愛情があれば、そうなるのではないですか。

伊藤 そういうことはウソです。仕方がないからやるというのが、せいぜい一番いい場合でしょう。

山下 さきほどお話した私の死んだ女房のように、私と喧嘩した時に裸になつて寄つてくるといふような情熱家だったから、意識的にサービスしたのです。私は子供がいないから、ふざけ半分に手カセ足カセをさせたまま家中を歩かせるのですが、それが、亭主に身も心もまかせて、何もかもぶち込んでいると思わせるらしく、異常な幸福感を起させる場合が多かつたようです。

松井 ですけども、縛つて奥さんが手がしびれるとかいうことはありませんか。

山下 それはあります。けれども……アトも何もつきません。ご遠慮なく一つ(笑)。

伊藤 縄のアトは一定の時間を経過すればなおります。

山下 ものの二十分もすればね。

伊藤 お湯に入れば一番いいがね。但し縄で縛つて打ツちやつて置くと、そこから擦りむけちまつて、ウチが湧くというようなこともありますが……。極端な場合は……。

製作の苦心いろいろ

吉野 縛つたりする時の設備はどうなるんですか。

山下 設備はどんなことをしても部屋の中でつくれますからね。大体、私の念願はリアルな、美しい吊しということなのですが、しかし、この吊しだけはむずかしいのです。私などが散々苦勞した吊しでも、愛好者によつてバックがどうだとか何がどうだとかいつていろいろ批判もされますけれども、それならやつて見ろ、絵や映画とはまたちよつとちがうのだから、と私はいう

のです。

実は、昨年十一月頃、ある良きモデルの協力を得て、一回やらせてくれ、もしできなかつたらすぐやめるからといって、とりかかったところ、辛抱してやつてくれたので図に乗って逆さに見てみたのです。とにかく千五百ワットくらいのランプで投光すると、腰巻とか着物とかの色彩が実にきれいで、二十年間カメラを持っていたけれど、もう光と色彩とに眩惑されてパチ／＼と切つてしまった。しかし、その出来は、最初期待したほどではなかつたです。

松井 よく画に描いてあるようにはならないですか。画で描くと、髪の毛が下へ行つてしまうけれども……。

山下 行かないです。たとえば、ここに壁があるとすると、そこへ脚を突つぱつてもらつて「く」の字形にでもなつてもらえばですが……。

松井 腰で吊つたらどうですか。

山下 そうしたらちようど学校の鉄棒の上で手を上げたと同じ格好になつてしまいます。

吉野 映画を撮る時に、縛りの場面だと俳優の方はいやだとかなんとかいってなか

なか縛らせないのですが、まあ早いところやつてしまうわけです。そういう場合、私の注文は、顔を上げてもらいたいだけでも、どういふものか、女の子は下を向いてしまふ。よく芝居で「これでもか／＼」といつてぶん殴ると、ウーンといつて上を向くところがあるでしょう。あれを、映画の場合でも欲しいのだけれども、どうも、なかなかそういうようにやつてくれないので、価値がない。

氏家 松井さんもお描きになる場合のご苦心があるでしょう。

松井 私には、吊してもらつたりする人がないから困るんですよ(笑)。この前の、お宅の「夢魔」で、簞笥へ縛り付けたのを描く時にも自分でやつてみたのですよ(笑)。ちよつと人が見ていたらやれませんか(笑)。しかし一応は自分でやつてみないとわからないものですからね。

伊藤 このごろの小説なんかをみると、どうも想像ばかりで経験のないものが多いような気がしますね。うな、ところの描写にしても、まず初めは「アー」という発音で、「ウー」というのは最後になつてからのだけけれども、どうもそれが最初からいきなり「ウー」というなり声が出て来たりしています。

松井 しかし、「アー」というのを出すまいとすると「ウー」になりはしませんか。

氏家 実感のある叫びを文章で現わすのはむづかしいでしょうね。

松井 字ヅラというものがあるでしょう。そこにやはり字ヅラの上のウソも出てくるのですね。

吉野 「アー」の方が安ッぽいでしょう。

松井 そうですね。

氏家 話はだんだん終りに近付いてきたのですが、結局、愛情から出たプレイが一番楽しく理想的ということになりますね。しかし、江戸時代の浮世絵、歌舞伎などに、いやがる女を無理に縛っている場面があります、……

伊藤 あります。いやがる女をムリに縛る歌舞伎などにはとても迫真力があるね。山下さんの前で失礼だけれども、それはモデルを雇つて一日幾らでやつたのとはちがいます。

山下 それはそうです。「コン畜生」といってやつたのは、ライトなんかかけずにそのままやつても、何か強いものが出ますね。

伊藤 それについてゆつくり話をする

永くなつて大変だけれども……大体、私が若い時分（大正初期）には、モデルなんかもまだ縛られる経験のない頃だが、私はカフィーの女を狙つたものです。往来を歩いていて、これはものになる女がいるなと感じると、そのカフィーへパーッと入つて行く。かならず一人くらいそういう女がいる。そうすると「お前、芝居を観たことはないかい、芝居は好きかい」といつて、好きだといつたら芝居をやりたくないかい、明烏というのをやつてみないかい」とうまく誘う。当時五円も出すと島田のカモジが買えたものですから、それを買つて来て、これでやつてごらんといつて、早いところをやらせてしまつたものです。

吉野 私の方で女優を縛る時には、今度のストーリーはこういうのだといつて、これに君が出ると一躍有名になるのだから、そのつもりで、一か八かガマンしてやつてくれといつて頼むのです。それが大体そういう場面は大詰なのだから、だんだんやつて行つて、雰囲気盛り上つた所で撮るわけだからやりいのです。しかしセットの都合で、そういう大詰の縛りや責めの場面の

方を先に撮らなければならぬことになる。ちよつと困ることがあるのです。

氏家 山下さんは、いやがる女を縛つた経験はないですか。

山下 それはあります。その方がズツとおもしろいですね。実は、私が二十代のころ、ある宿屋に泊つていた時、その女中で、いつも私の部屋へくる女中がふざけるのが好きで、私が座つたり寝たりしている時にくるとよく私の耳をひっぱつたりいぢつたりするのです。そこで、よし、こんど一度こいつを縛つてやろうと思つて、行李へかける縄をある朝床の下に秘しておいた。その女がきて、いつものように私の寝ている鼻をつまんだからいきなり起き上つてその手をグイと引っぱり、細曳きを出したところが、彼女は寢床の中へ入れられるとも思つたらしく顔色を変えて抵抗する。しかし、組み敷いて、浴衣の上からガンヂガラメに縛つてしまつたのです。あまりにめえは毎朝人の寢床へきていたずらしてうるさいから縛つちやうのだ、これから髪の毛一本々々引き抜いて料理してやるといつたところが、勝手におしよといつてひつくりかえつてゐる。私もあまり永くそうやつて置けないから縄をほどいたところが、そ

れを本人は帳場へ行つて話したらしいのです。そうすると、帳場の方では、一層のこと天井へ吊してくれればいいのにといつたので、笑つてしまいました。

山下 話はまた戻りますが、私は一番初め、女房を縛つた時に、女房がどうするのときくから「どうもしないが、たのみがある」といつたところが、「わかつた！ 私の腕に入墨をするんでしよう」というのですごいことをいうなアと思つて、こつちの方がダーツとしてしまつたことがあります。

氏家 いやがる女に入墨をするというのは男にとつてはなかなかいいらしいですね。

山下 これは有名な話だけれども、昭和二年、私が二十の頃ですが、当時「新愛知」新聞の三面を埋めた記事で、名古屋の百万長者が、自分の屋敷へ芸者を連れてきては、うちの男衆が寄つてたかつて縛り上げて、ウムを云わさず蛇の入墨をしては、それを皆金で解決していた、ところが五人目か六人目の芸者の時に金で解決できずにとうとう／＼明るみへ出たという事件です。

氏家 そうなればもう犯罪ですね。では、皆さんどうも長い時間ありがとうございました。（終）

サチステイツク
時代小説

鏡

妖

傳

下篇——鏡翁の巻——

へつへつへつ——と笑つて、にじり寄る青面鬼月太郎。「もつと、うんと、わめかせてやろうか。まだ泣き足らねえんだろ……え、小房！」蠟燭に火をつけて、その焰を、ふわりと小房の鼻面へ——

島 本 春 雄
中 島 喜 美 画

四、綱廻しと乳房吊り

月が中天にある。冴えた、名剣の様な細い月だ。山の稜線だけが、ほのかに青白い。

東山多寶の峰。その下は密林だった。かすかに、ほんの微かに流

れ込む月の光。

小さな小屋がそこにある。一夜で建ち、半刻もあれば、跡形もなく綺麗に消し去る事が出来る山透破独特の一夜小屋だ。

「へつへつへ、いい眺めだぜ。その恰好じや鏡小町もともと値打が無いというものさ」

嫦娥月太郎、酒をくらつて、上々の御気嫌である。

「お前さん、いつたいあたしを、どう仕様つて云うんだい？」

鏡小町小房の、れいの鼻にかかる妙な声だ。

「さあ、それを今思案中さ」

「ねえ、いい加減におしよ。昔は、お互に、鏡翁の眼を盗んで、惚れあつた仲じやないか」

「ふつふつふ、心配えするな。あとで舐める様に可愛がつてやらあな」

と、こうして、會話だけ聞いていれば、至極艶めいた感じたが、この場の光景は、どうしてどうしてそんなもんじやない。





第一、鏡小町の姿が地上にはない。

小屋の前の僅かな空き地——。その空間、地上から六尺の宙を、東西に八尺の綱が、ビーンと張り渡されている。そうして、その両端は、杉の巨木の幹に、東高西低の傾斜をつけてガッキリと捲き止められてあつた。鏡小町はこの綱に、括り猿の形でぶら下げられているのだ。

両手両足を駄の前に、緋縮緬のしごきで縛り合わされ、その合せ目の下を八尺の綱がビーンと通つて、彼女を宙空に支えている。

「どうだな小房。てめえは花房紫近の持っていた肌守りの鴛鴦雄鏡を手に入れている。あの鏡にや、どんな仕掛があつたんだ？ 鏡の中にや、確かに鏡翁が仕込んだ伊予水軍の絵図面が隠されてあるんだ」
 嫦娥月太郎、宙ぶらりんの鏡小町の下に立つて、手利剣の先で、彼女の豊かな肌をチクリと突いた。

小町は、緋縮緬の長襦袢が一枚つきり。空中の綱に、必死に両手両足ですがりついた様な形でいるので、その長襦袢の裾はふんわりと地へ垂れて……。彼女は下半身が剥き出しになつているのだ。

また、チクツと突く。

「いたつ！ 痛いじゃないか」

「痛けりや白状しな」

チクツ、チクツと突きあげる。

紅い、小さい針の頭の様な血の珠が、真つ

白な小町の肌の上に浮く。

「……いたつ！」

思わず奇妙な形に躰をひねくつて、

「よ、よしなつたら……」

チクチクチク……突つつき廻して、

「さあ、白状しろよ」

「……しらないよ、あたしや。まだあの鏡の

カラクリは解けてないのさ。痛い！ ヒーッ

本当だつたら。痛いっ！……嘘じゃないよ。

色々いじくつて見たけど、鴛鴦以外の彫り絵

もなし、中空になつてる様でもなし……ヒッ

ッ！ でも何処かに絵図面の半分が隠してあ

るに違ひはない。ねえ、月さん、降しておく

れよ、二人共同でさ、やろうじゃないの。鏡

つくりの名人が、精魂こめて仕上げた鏡だよ

……どんな風に鏡の中へ絵図面を封じ込めた

のか、一寸やそつとじや判りやしない。ねえ

二人寄れば文珠の智慧つて云うじゃないの。

痛たつ、いた、あつ、ヒューッ！」

「ふつふつふ、いい声だぜ。三人寄ればだ。

間抜け奴つ。手前の云う事なんぞあ鼻糞程も信用出来るもんか。さあ、ぬかせ、絵図面はどこだつ」

「知らないつて云うのに」

「ようし、知らねえんだな」

「あつ、お前さん、どう仕様てのだい」

「こうするんだつ」

嫦娥月太郎、いきなり、鏡小町の躰を、八

尺の太綱にびつたりと密着させ、ぐるぐる巻

きに縛りつけて仕舞つた。

鏡小町の身長が五尺余り、何の事はない、

八尺の綱が、途中でその長さだけぶつくりふ

くれた形だ。

そうしておいて、小町の躰を、ぐるんぐる

ん、グルングルン廻し始める。

綱がよじれて、みつしギリリ、みつしギリ

リと、よじる程に、ねじる程に、固く強く、

はち切れそうになる。

ふつ！ と手を放す。

ピンピンピンビン、物凄勢いで廻転し、

よじれを戻す綱！

これは、小町にとつて、想像を絶する痛苦

な責めだつた。強烈な円心力——彼女の眼球

が飛び出る様な感じ……！

それを、一回——二回……三回。

眼から血が出る。鼻血がドツと出て飛び散る。幽暗の杉木立の中で、これはこの世のものとも思えぬ光景だつた。

「どうだ、白状するかつ！」

「……」

応えがない。失神しているのだ。

「ちえつ、だらしのねえ」

ぐつたりとノビている小町を、縛めを解いて小屋へ担ぎ入れる。

それから暫くして、小町はふつと正気にか

えつた。

痛いっ！

まずまづ先に来た感覚がそれだつた。

事実、全身に赤い縄目の跡が縦横無様に、

蜘蛛の巣のように走っている。

痛い、といえ、全身余す所なく痛いので

ある。が、さて今のばあい、彼女を失神から

現実の世界へと呼び戻した痛撃は、乳房にあ

つた。

鏡小町の乳房は、畸型じみて見える程大き

くゆたかであつた。その乳房が、今、双つと

も強靱な細い革紐で緊縛され、その革紐は、

小屋の天井に結えられてある。

つまり彼女は、乳房で天井から宙吊りにさ
れているのだ。そうして、足は自由だが、両
手は後手に自由を奪われている。

十二貫の全身を、二つの乳房だけで支えて
いるのだから、これや大変だ。

小町の額に脂汗がじつとり。痛い、なぞと
あり来たりの言葉では表現出来ない苦痛なん
だが、さて身を揉む事は苦痛を増すだけだ。

ツン、ツン、ツン、と神経を切断されるよ
うな激痛！

こらえもならず、つい、くねりと身をよじ
る。と、それが刺戟となつて、ゆうらりと裸
身が揺れる。

「ヒイッ！ つう！」

くねる。——ゆうらり。腰を振る、自由な
足を曲げる、むなしく空を蹴る……そのたび
に裸身の揺れが大きくなり、

ゆつさ、きりキリ——！

「ヒイッ」

ギイッ、ゆうらり——！

「たすけてっ！」

鏡小町の小房は、余りの苦痛に、早く、双
つともお乳が、胸からもげてとれたらいいと
思つた。

顔がカッカツと火の様に熱い。意識が再び

朦朧としかける。

嫦娥月太郎は、この様子を冷酷に見詰めて
いる。酒をのみながら、薄笑いすら浮かべて
いた。

「小房、白状する気になつたかい」

「します、白状……します。救けてっ！」

「伊予水軍、倭寇八幡船秘寶の絵図は？」

「鏡の中に、鵜鴎の雄鏡の中に……」

「何と？ あの鏡はお千絵が持つて逃げた……」

……くそっ！」

「早く、救けて、降ろして……！」

「うむ」大刀を抜いて、スカツと革紐を斬る
ずしんと床へ地響き打つて落ちる鏡小町。

乳房の緊縛と両手の縛めを解いてやる。

彼女はその拍子に、ふーつと又気が遠くな
つた。

乳房を一寸強くしめつけられるだけで多く
の女は気を失う。それを、小房は、千切れる
程に絞り縛られ、然も天井から乳房吊りの責
めを受けたのだ。

気が狂わずにすんだのが、凡そ不思議と云
うものであろう。

彼女の乳房には、当分感覚が戻らないに違
いない。

「お千絵小姓の奴、いつたい何処へうせおう

たかな。これやどうでも、小房の隠れ家から
眼が放せねえ。野郎、ひよつとしたら戻つて
いやがるかもしれねえし……裸で逃げやがつ
たんだあの女郎は……フン、それに蔵の中に
や於縫のアマが押し込められている訳だし……
よし、当分この小房と同居と洒落るか」

嫦娥月太郎は、そう決意すると、急に酔い
が廻つてきて、ヤケくそな思いがめらめらと
噴き上げて来る。

五、裸女振子

「ふおっふおっふ……」

不気味な笑い声が、陰にこもつてあたりへ
木霊する。

狭い、六疊余りの部屋——というより、土
間である。

荒筵が一杯に敷いてある。四周は土壁、天
井だけが一部分板だ。

これを要するに、つまり此処は地下部屋な
のであろう。天井まで六尺弱馬鹿に低いのだ。
裸蠟燭が一本、黄色い焰をゆらめかせ、部
屋は寒々と薄暗い。

笑い声の主は、あの白髪白髯の怪老人だ。

黒つぽい、僧衣の様な物を着て、檜の台の上にある丸い銅器に、コチコチ、カチカチと何やら細工の藝を入れている。丸い銅器は、銅製の鏡だ。老人は、その裏地にどうやら彫琢

の腕を揮っているのであるらしい。

時々この怪老は、ふおつふおつと異様な笑

い方をしては、視線を天井に転ずる。天井——といつても、この地下室へ通じる上げ蓋の杉板を除いては、粘土質の黄色い土

の層だが……その天井に、あの美しいお千絵の姿があつた。

土の天井にぶち込んだ四本の杭に、両手両足を張り切れんばかりの太の字に縛られ、口惜しそうに眼を剝いている。

低い天井。顔をしかめ、

眼を怒らせ、べつべつと

唾を吐き散らし、口汚な

く罵るこの美少女を眺め

ては老人は、またフオッフ

オツと笑うのだ。

「どうじやな、紫近。苦しい

かの」

「ふん、これしきの事、なんだい」

「ふおつふおつふおつ……威勢が

よいの。しかしなあ、いずれその姿

のまま白骨になるかと思うと、聊か

不憫じやのう」

「えつ、何だつて？ やい、クソぢぢ

い。あたしをこの儘ではつたらかしに

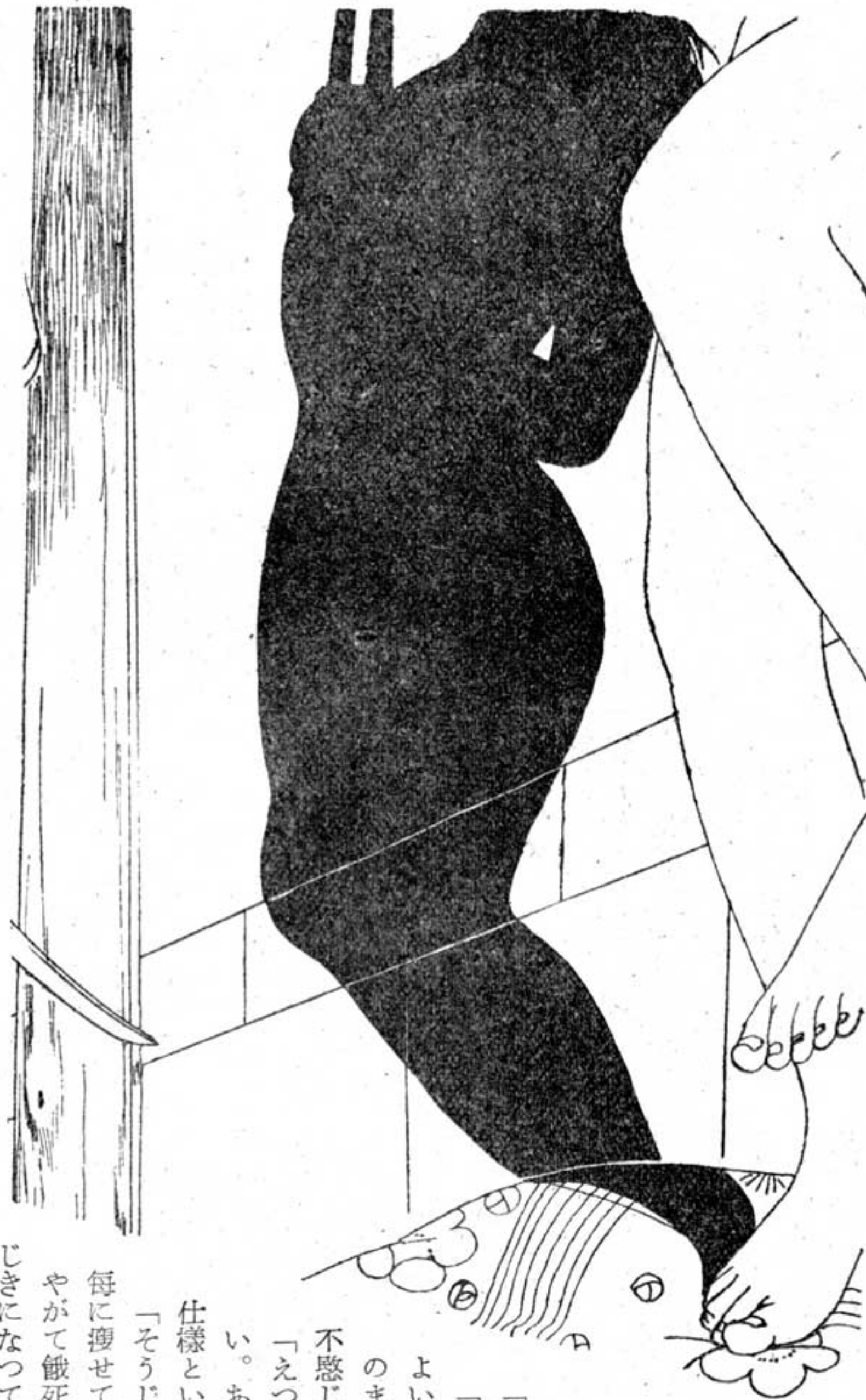
仕様というのかい」

「そうじやよ。その美しいからだは、日

毎に瘦せて、やつれて、骨と皮になつて、

やがて餓死する。すると、腐れて蛆虫のえ

じきになつて、骨ばかりの骸骨になる。……





そうなたら、蒲

団に寝かせてやろうわい」

「それ、ほ、本気かい？」

「本気じやとも。わしはな、美しい女が、やつれ瘦せさらばえて死んで、腐れて骸骨になる様を、この丸鏡の裏に彫り遺すのじや」

「氣違いつ！」

「ふおつフオツふおつ……」

「ねえ、勘忍して。おじいさんの言う事何でもきくから」

老人は、もう知らぬ顔で、コチコチと、磔の千絵女の姿を、銅鏡の裏面に彫琢し続けている。

「ねえ、おじいさん……お許しになつて。ねえつたらア……あたし、とつてもいい事してるんだよ。ネエ……」

人間、変れば変るものだ。いくら妖婦の素質があつたとはいえ、花房紫近として本願寺に起居していた頃は、花も羞らう美小姓で、蜻蛉のつがいを見てさえ、真つ赤になつて眼



を閉じた彼女が鏡小町

とのアブ生活からこつち、俄然小妖婦とでも云うべき豹変ぶりだ。

「ちき生つ！ 鬼つ！ 化けぢぢい！」

あんまり、のべつ幕なしにワメキ散らすので、とうとう、

「煩さいわい、腐れ女め」

ひよろりと立ち上つて、

「ちいと、静かになる様にしてやろう」

立ち上つて、お千絵の両手の縛めを解く。

枕と足首を縛つた縄とを繋ぐ鎖に幾分余裕を持たせてあるから、手首の自由を得た彼女の裸身は、逆様さかさまに吊り下る、反動で、ゆつさ、ギツチ、ゆつさギツチと、妖しい人間振子となる……！

ふおつふおつふおつ……

笑つて千絵の背を、一層強くドンと突く老人。大の字に股を張つた逆身の裸女振子は、狭い地下部屋の中を、筵床すれすれに、ゆつさギツチ、ユツサぎつちと、大きな振子運動である。

ゆつさ、ギツチ、

「ヒーイ、救けて！」

ゆつさ、ギツチ、

「ふおつフオツふおつ」

裸蠟燭の灯が、あおりを食つて、右へ左へふわりふわりと揺れる。その度に反対側の土壁の上に、奇怪な影が、或いは巨大に或いは小さく、或いは歪み或いはふくれ、或いは濃く或いは薄く……千変万化に躍り狂う。

狂う——そう、この老人は狂っているのであらうか。

ふおつふおつフオツ、と笑いながら、思い出した様に、コツコツ、カチカチと銅鏡の裏に彫琢の業を続けるのだ。ヒーッ、ヒーッ、次第に細く鈍くなつて行く人間振子の悲鳴を、こよなき楽の音と聞きながら……。

蠟燭の灯が、急にぱつと明るくなつた。盡きんとする、その最後の焰である。

ふつと、灯が消えた。蠟が盡きたのだ。

しかし、コチコチ……コチコチ……彫琢の音はまだ続いている。闇黒の密室の中で、なおもコツコツコツコツ——と。

老人は闇に眼が利くのであらうか。それとも、矢張り気が狂っているのであらうか。

お千絵の人間振子は、もう静止している。

悲鳴も聞こえない。失神したのか。海藻のように髪を乱し、逆さになつて、彼女は氣を失つていたのであろう。

コチコチ……コチコチ……

暗黒の中の彫琢の音にダブつて、何やらぶつぶつ呟く声が聞かれる。老人の声だ。

「——鏡……鏡は女のいのちぞな……ふおつふおつ。磨いてやるわ、彫つてやるわ……ふおつふおつ……女子が、泣いて、苦しんで、悶えて、飢えて、瘦せさらばえて、ふおつふおつ……死んで、眼が、口が、腹が、顔が、鼻が、腐れてドロドロになつて、ふおつフオッ……白骨の骸骨になる様を、三十六の鏡に彫つてやるわ、三十六相、ふおつふおつ……刻んでやるわい……」

コチコチ……コチコチ……

「——小房奴……月太郎奴……ふおつふおつ殺し合え……怨と色と憎悪で……殺しあうがよい……フオッふおつ」

カチカチ……コチコチ……

「鴛鴦鏡……魂があるぞ、わしの、従五位下上総介の魂が籠つておるぞ……ふおつふおつ……雄鏡は雌鏡を求め、雌鏡は雄鏡を求め、ふおつふおつフオッフオッ……夜泣きするのじや。——小房奴、月太郎奴、思い知れ、思

い知るがよい……」

急に、ふわりと、冷たい風がこの地下部屋に流れ込んだ。天井の上げ蓋が開いたのだ。

そこから、片耳の、獅子鼻の、鰐口の、醜怪な顔が覗く。畸型与力鳴子善四郎である。

が、老人は氣付かない。彫琢の手も、うわ言の様な呟きも止めない。

「八幡船の秘寶……ふおつふおつ……馬鹿なやつ……死ねつ、死ぬがよい……」

コチコチ……コチコチ……

「——女、魔物じや……女は魔物……つくつてやる、磨いてやる……刻んでやる。地獄の三十六相……呪いを籠めて、つくつてやるぞ……呪いの鏡じや、呪詛鏡じや……」

善四郎が眼をギョロツと光らす。

「成程、大体の所はのみこめたわい」

呟やいて、すんと地下へ降りる。懷から蠟燭を出す。火を点じて、

蠟燭を出す。火を点じて、

「狂つたな、翁！」

「だれじや、お前は——」

「こういう面の男だ」

「何じや、人間の化け者か。お前の様な男に用はない。わしは、女が欲しい。若い綺麗な娘じや」

「それをどうする」

「刻むのじや、地獄の三十六相、わしには見本が要る。苦しむ女、わめく女、悶える女、腐れ朽ちる女……ふおつふおつ」

「薄団の中の骸骨、あれも彫つたか」

「ふおつふおつ、彫つたわ彫つたわ、腐れ肉の姿をな……この女も」

と、逆さ裸身のお千絵を骨と皮の指でさして、

「今に死ぬぞ、今に腐るぞ……まだまだ苦しめ悶えさせて、その姿を彫り刻む、女が要る、女が……ふおつふおつ……」

「老醜——老狂。鏡聖変じて鏡鬼となるか、生かして置くも不懸、こりや斬るぞ！」

居合斬り！ 血煙り！

「ふふふ……お前は死んだ方がよいのだ」

善四郎は血刀を鞘へ納めて、お千絵の傍によつた。

「本願寺小姓花房紫近、実は美しい女であつたとな。お千絵、よい名じや。よいからだじや、俺は命の恩人……してみれば、少し位楽しんでもよからう。フフ、ハハ、」

こいつの缺点、天才は又色餓鬼だつた。はて、地下の密室で、それから何が起つたか。筆者はわざと書くまい。



汗と血の臭い。喘ぎ。嬌声。含み笑い。推して知るべし……。

六、狂女狂笑

鏡小町の隠れ家。その例の四疊半。春信の屏風も紅綸子の夜具も、そのままだが……

鏡小町の小房が、夜具の上に後手に縛られ横坐りになっている。この前で嫦娥月太郎は毛脛まる出しの大あくらだ。

小房は、今は裸ではない。例の裏緋羽二重綸子銀糸鏡の繡模様の着物を着せられている。

「ねえ、いい加減に縄をといっておくれよ」

「いけねえ。てめえは女の癖に、一筋縄じゃゆかねえ術者だ。そんな危ねえ真似は出来ねえ」

「もう降参といっているじゃないか」

「信用しねえよ俺は。駕轡鏡を二つ共手に入れるまでは、まあ不自由でもそうして貰おうか」

この時、低い、しかし何か異常な笑い声が響いて来た。

ホホホホ……ヒヒヒヒ……フフフフ……

「見ろつ、於縫の奴は、とうとう狂つちまつたじゃねえか。あいつは雌鏡の行方を知っているんだぜ。馬鹿奴つ、下手な事をしやあが

つて。於縫に狂われちや、雌鏡の行方を探す
なあ一層骨だわ！」

そうか、於縫は遂々狂つたのか。女の身を
同じ強制された色小姓生活であつたにせよ、
花房紫近のお千絵とは違つて、草笛紅之丞の
於縫は、その身に変態性も妖婦的素質もなく
ただ可憐で繊細で、感じ易い美少女に過ぎな
かつたのであろう。

それが、あのおぞましい、釣瓶責め、肌舐
め、そうして死人と蛆虫の息詰る陰惨な藏責
めにあつては、もう一たまりもなかつたに違
いない。

確かに於縫は狂っている。嫦娥月太郎が、
小房を引つ担いでこの隠れ家へ戻つたときに
は、彼女はもう狂つていた。

月太郎は縄を解いてやつたが、むろん狂気
は戻らなかつた。

蔵の中で、ホホホ、フフフ……と虚ろに笑
いながら、這い寄る蛆虫を踏み潰し、死人の
腐肉をつつき廻し、

「——鴛鴦鏡……鴛鴦鏡……」
と、無意味に呟やいている。

「——それやお前さんの責任さ。お前さんが
あの時あたしを襲つたりしなかつたら、あた
しはあの娘が狂う前に、泥を吐かせていたん

だよ。へん、ざまあ見やがれ、あの娘が狂つ
た以上、もう雌鏡の行方は永久に判りつこな
いわさ」

と、突然、姫御前のあられもなく、こう罵
しる鏡女小房。

「くそつ！ 草の根分けても探し出してや
る。お千絵はいずれ此処へ戻つて来やがるだ
ろうし、そうすりや雄鏡は俺の手にへえる。

雌鏡もいずれは手に入れて見せる。嫦娥月太
郎は執念の透破侍だぜ。今に見やがれ！ 鏡
が手に入つたら、おめえの首は塩漬けにし
て、故郷の木魔へ送つてやらあな」

へつへつへつ——と笑つて、にじり寄る青
面鬼月太郎。

「もつと、うんと、わめかせてやろうか。まだ
泣き足らねえんだろ、……え、小房！」

蠟燭に火をつけて、その焰を、ふわりと小
房の鼻面へ——

「あチッ！」
「えい、じたばたするねえ。さ、笑つて見ろ。

ホホホと笑つて見ろ。笑つて……笑わねえか、
このアマ！」

「あチッ！ ……ホ、ホホホ」
「ふん、いい声だよ」

櫻桃の乳つ首に、蠟燭の焰をペロリ！

「アチッ！」

「ふふふ……月様、もつと、——とな、そう
云つて見ろ」

左の乳つ首に、黄色い悪魔の舌をふわり！
「あチッ！ ヒイー」

「云わねえかつ」
「あチチ、うつ！ ……つ、月様」

「おう、可愛らしい声を出すぜ。この火で、
からだじゆうの美という美、みんな焼いてや
ろうか」

この時、お千絵を案内役に、佝僂与力の鳴
子善四郎が、のつそりと姿を現わした。

「嫦娥月太郎、もう手は廻つたぜ。この家の
ぐるりあ捕手の山だ。神妙にせい！」

よう、音羽屋！ 汚たない千両役者だが。
さて……

嫦娥月太郎は獄門になつた——と、彼鳴子、
善四郎は自作の「安政波奈志」に書き遺して
いる。

鏡小町の小房は、これは三條河原で晒し首
になつた。

於縫の狂気は遂に恢復せず、お千絵は尼に
なつたらしい。どんな尼さんが出来た事か！
最後に、善四郎の遺誌に依ると、鴛鴦の鏡

は、鏡翁が花房紫近に与えた物が一つあるだけで、紅之丞の於縫は何も知らなかった。二つある様に、そしてその鏡の中に、和寇八幡船の秘寶図を封じ込んだ様に、小房と月太郎の兩人に思い込ませたのは、鏡翁の計略であつた。

老年期に入つてから、はじめて女というものの味を、小房に依つて知らされた鏡翁は、その小房の、月太郎との姦通を知ると同時に逆上し、慾の皮の突つ張つた二人を、みにくい争いに誘うため、絵図面封入の嘘をでつち上げて、自分は鏡の間の地下部屋へと陰棲したのだ。

そうして、彼もまた狂つたのであろう。狂気の血が、彼の体内に遺伝していたのかも知れぬ。

鳴子善四郎は、『安政波奈志』の最後の行に、次の如く書いてゐる。

調べて見ると、《鏡翁は、元寇役の水軍大將伊予河野対馬守通有十八家の一、村上義弘と申す海賊大將の流れを継ぐ血統の一人である……》と。

和寇八幡船秘寶絵図の噂も、そんな所から出たのであろう。

(終)

伊藤晴雨著 五枚一組映入手差 価五〇〇円 共
凄艶女體拷問私刑秘画集

伊藤晴雨著 豪華上製絵巻物 価五〇〇円
美人十二支責め絵巻

峰岸義一著 B六判 二五〇余頁
千零 夜 価二五〇円 二二二

伊藤晴雨著 A五判 和装美本百余頁
黒繩 記 価三〇〇円 二二四

伊藤晴雨著 A五判 和装更紗表紙
責のこれくしよん 価三〇〇円 二二二

伊藤晴雨著 菊判和装美本
小説に 責の代表名作選 価三〇〇円 二二二

伊藤晴雨著 価五〇〇円 二二二
十二カ月行事奇態刑罰図譜

高橋鉄著 A五判美装 価三〇〇円 二二四
続・あるす・あまとりあ (性愛開眼八
十六法の分析)

高橋鉄著 A五判美装 価二二〇円 二二四
人性記 (1) 日本インテリゲンチヤ
一千名の懺悔録

高橋鉄著 A五判美装 価二二〇円 二二四
1集 あまとりあ 性愛五十年

原浩三著 A五判美装 価二二〇円 二二四
4集 あまとりあ 浮世絵・秘戯画の鑑賞

御註文は現金書留又 東京都千代田区 株式
は小為替にて御申込 神田猿樂町一ノ三 会社
み下さい尚書留御送附御希望の方は書留料加算御送金下さい。 振替東京二四二五一番

晴雨隨筆 第一冊 小型和装美幀
責の四十八手 価一三〇円 二二共

晴雨隨筆 第二冊 小型和装二色刷
絵物語血血郷談 価一三〇円 二二共

晴雨隨筆 第三冊 小型和装美幀
危機一髪画譜 価一三〇円 二二共

晴雨隨筆 第四冊 小型和装美幀
与力同心岡ツ引 価一三〇円 二二共

晴雨隨筆 第五冊 小型和装美幀
性犯罪と私刑 価一三〇円 二二共

紅夢樓主人著 縮刷凸版刷和装(同性色情史)
美少年論 価一〇〇円 二二共

キドロン・シュトック著 B六判二二六頁
被虐の家 価三二〇円 二二二

高橋鉄著 A五判美装 価二〇〇円 二二四
定本・あるす・あまとりあ (性交体位六
二型の分析)

高橋鉄著 A五判美装 価二〇〇円 二二四
補冊あるす・あまとりあ (新体位三十
八型の分析)

高橋鉄著 A五 価二五〇円 二二四
紅閨秘匣 (性交補技秘奥の
分析と研究)

高橋鉄著 写真豊富 A五判 価二二〇円 二二四
2集 あまとりあ 異常性愛36相の分析

高橋鉄著 A五判 価三〇〇円 二二五
えろす・福音書 (性愛学の巨弾)

日本特集出版社代理部



男色の性典

手記二篇

下 帯 マ ニ ヤ

Aはゆつくり歩いてくると、湯殿の外扉を開けた。Fさんが夢中で手を伸ばすのと、Aのガツシリした両手が、濡れているFさんの髀をしつかり抱きしめるのとは同時であつた……

水 谷 雪 夫

では、実際困つて了う。

私が、東京世田ヶ谷の、帝都線の駅に近いそのアパートに住んでいたのは、昭和二十三年の春から夏への約半年の間だつたが、その頃は御存知の如く、終戦に続く衣料難のまだまだ烈しかった頃で、それがつまらぬ下着類だとは云え、そうそう無くなつて了うと云う事は迷惑な事だつた。

私は、次の洗濯から、陽当りは悪かつたが部屋の中に干して出かける事にした。

これで一カ月許りは、私の下着の紛失と云う事件は起らなくなつたが、夏の始めの或日暫く溜めて了つた洗濯物を洗おうと、押入れを開けて、ゴソゴソやつて

その日も、日が暮れてから歸つて来た私は、廊下に干した洗濯物を取りこみ乍ら、はつと気がつくと、一人で顔を赤くして了つた。

又、無くなつてゐるのだ。

それも、今日で三度目……それも決して猿股とか越中褌と云つたものが消えて了うのだ。耐らなく恥しい様な、ちよつと可笑しい様な、とても怒る気にはなれない私だつたが、こう続けて紛失するの



いた私は又、紛失事件の起きた事に気づいた。

然も、それが無くなつたと云う事は、例えば夫婦生活の秘事を、他人に盗み見された様な憤りさえ感じられた。

と云うのが、判然云つて了うと、当時二十二歳になつたばかりの私だから、独身の身にしてみれば、青春の思いに眠れぬ夜もあつた。

そんな時に、汚して了つた越中褌を、何気なく丸めて押入れに放り込んで置いたとしても、独身の若い学生の生活だったのだからと御許し願えると思う。

その大変な代物が無くなつて了つていたのだ。

私はその日、私の部屋を訪れて来ていた客を思い浮かべてみた。

隣室の独身会社員で二七になるWさん、とT大に通学している私と同年のK君、夜間キャバレーのバンドに勤めているFさん。

然も、三人とも、私が部屋を空けた時に室内にいた事実が夫々あるから疑わしい。

と云つて私には、私如き者の汚れた褌な

どを、此の三人が盗み去ると云う理由が無い様に思われた。

考えてみれば、実際紛失している以上此の三人以外の者が持去つたとも考えられない。その時、フツと私の頭に浮んだのは、自分自身憶えのある同性愛と云つたものに関係するフェチズム行爲ではなからうか……

そう思つてみると、晝面で始終、遊んだ女の話などばかり聞かせるWさんや、スポーツマンで快活で、私も知つていて可愛い恋人のあるK君とは思われな

残る処は、バンドマンのFさんだけである。

私より一つ二つ年上らしいFさんの色白な優しい感じの姿態、一途な思いを秘めた如く黒く光る瞳、女性的な言語動作、思い当る節々ばかり……その上、彼は、晝間はアパートにいて夜になると出かける商売でもある。

犯人はFさんと、決め込んで了うと私は、変に落着いて了つた。

もともと、ホモ傾向のあつた私は、中学時代に、私が受身の形で始つた或る関

係から、自分が成長するにつれて、いつの間にか、能動的な立場に立つての相手を求める気持ちに変わつていた。

その頃、私に愛情を寄せてくれる女学生がいた。

私も、その娘を好いていたし、愛してもいたが、何か、一つ欠けて了つていて様な淋しさ……そんなものがあつて、如何しても満足出来なかつた。

Fさんを犯人と決めこむと、以前とは変つた意味で、Fさんに興味を感じ始めている自分に、私は、娘との恋愛関係に満足出来なかつた大きな理由を発見した思ひだつた。

Fさんは確かに美貌の主であつた。男性的でもない、と云つて、女性の色っぽさを持つそれでもない。只、単に美しい……云わば絵の中の顔の様な、生きてゐる人間であるだけに、それが神秘的にさえ思われる美貌とも云えた。

私は、不思議な慕情に、しきりと悩まされた。

二、三日経つた日曜日の午後、私はいる事を確めてから、Fさんの部屋を尋ねた。



知合いになつてから殆んど、Fさんが私の部屋へ来て、トランプしたり麻雀したりしてばかりいたので、Fさんの部屋の中へ入ると云うのは珍しい事だつた。

暑い日だつたが、Fさんは、キチンと、白の開襟シャツにズボンをはいて、私を迎えてくれた。

寢間着兼用の如き浴衣一枚の私は、ちよつと戸惑う思いだつた。

扉を閉めて、部屋の中に二人きりになると私はすぐに云つた。

「Fさん、悪いけど、僕の褌や猿股、返してくれませんか……」

ギクツとした様に私を見つめたFさんは忽ち身体をブルブル震わせると、崩れる様に両手を突いて……

「済みません……」

と顔を上げない。

その手をとつて、私は

「いいんですよ。返してさえ呉れば、僕は何とも思いませんよ。只恥かしいから」

然し、Fさんは、尙も顔を外らしている。

私は、Fさんの肩を押さえたまま立つた。

「じゃあ帰ります。後で返して下さい」

「恥かしいのは僕です……」

消え入る様な声で、向うを見ながらFさんが呟く様に云つた。

「僕を軽蔑するでしょう」

「しませんよ。僕には君の氣持が判る氣がする。でも、よくない事です」

そう云つて、立去ろうとする私の腰の辺りに、急に、振向いてFさんが取りすがつた。

「貴方が好きだ。とても好きなんです」

必死な思いをこめた眼つき……黒い美しい瞳には涙さえ溜つて……

その美しいFさんに、腰の辺りにすがられて、ゆさぶられると、その積りの野心があつて出かけた私だつたから、忽ちグニャグニャになつて了い、ドスンと腰を下して了つた。

以前とは違つた意味での、親しい仲になつてから、私は、Fさんから、凄いいコレクションを見せて貰つた。

それは、大型のトランクに殆ど一杯に詰つた、男性の下着類、その多くは褌であつた。

それは、色々なものがあつた、六尺褌と云つても、普通の晒木綿の白いのやら

黒いもの、赤いもの迄あり、もつこ褌と云うのもあるかと思うと、三角の黒い水泳褌もあつたし、越中褌も色々あつた。

然も、それらの中、白く洗濯されたものやら、薄黒く汚れたり、果ては汚点のついたものやら、異臭を放つもの迄あつたのは壯観だつたし又驚いた。

海辺の漁師の家、臨海学校の脱衣場、人目のない物干場、学生達の風呂場、等、あらゆる処からの、Fさん苦心のコレクションであつた。

Fさんにとつて、コレクションを始めてから恋愛関係の生じた男は、私が始めてであり、生来、内気で内攻的なFさんは、こう云つたコレクションで、僅かに慰められていたと云う。

コレクションにしてみれば、矢張り汚れたものの方が好ましいそうで、秘かに私の汚れた下着を狙つていた処、偶然私の部屋に一人で入つた時、フト押入れの中から微かな臭氣に氣づいて、あれを持ち出したと云うのだ。



半日位の間ならば、確実に判ると云う事だった。

その鼻で、私の汚れた禪を見つけられて了ったわけで、こればかりは絶対に返さないと言つて、遂にFさんは、それだけは返して呉れなかつた。

此のFさんの、禪に対する執念は大したもの、私の場合でも、まず私を、禪一つの裸にしてと

云つた具合で、禪をしていない裸像には興味が半減するとの事で、最初、禪をしている裸で始まつて、やがて興到つて終る。こう云う場合にFさんは100%、満足するらしいのである。

禪とFさんの結びつき……これには、きつと、Fさんの過去に、何か理由があると氣づいた私が、それとなくFさんに色々と尋ねてみると、これは、Fさんも充分自覚していた事で、次の話をして呉れた。

Fさんの父親は、陸軍中將だつたそうで、終戦の一年ばかり前に南方で戦死したとの事である。



Fさんは、軍人の息子として厳格に育てられたが、生来、病弱だつたので、父中將もFさんを軍人に育てるのには断念していたらしい。

そのFさんの邸に、毎日やつて来ては、中將の靴の手入れなどをしたり、薪割り、風呂炊きなど迄やつて呉れるAと云う当番兵がいた。

当時、Aは二十二、三歳だつたと思われる田舎出の、頑丈な身体の青年だつた。

まだ、大東亞戦争の始まつたばかりの頃だつたから、Fさんも十六、七で、中学へ通っている紅顔の美少年だつた。

中学へ入る頃から、Fさんは、何となく上級生の一人二人に、特別に魅力を感じ

える自分に氣づいていたが、中学に入つて暫くした頃、同級の或生徒から、自慰行為を暗示され、それを覚えると同時に、上級生、下級生間に行われる或種の話を聞くにつけては、心秘かに慕わしく思っている上級生と自分とのそう云つた交際を想像し、又その上級生の肉体を想像する、Fさんだつた。

それでいて、自分の美貌が、上級生間に於て評判されるのを知り乍らも、自分が好ましく思っている上級生には、その素振りも見せる事の出来ないFさんでもあつた。

それは、Fさん生来の、消極的な内気さからだつたかも知れないし、又、厳格な躰けによつて育つて来たFさんの環境の故だつたかも知れない。

外に出せないだけに、年と共に益々、その傾向の強くなつて行くのを、独り感じていたFさんの前に、朝晩、接触出来る存在として現われて来たのが、父の当番兵をしているAであつた。

Aが傍へ来ると、いつでも汗臭かつた若い男の臭いとも云うのか、兵隊の服



装の皮革の臭氣と混り合つて、それは、Fさんにとつて、ひどく刺戟的だつた。

又、Aは、決して美男子ではないが、浅黒い身体が筋肉で締つていて、眉が濃い、男らしい顔立ちだつた。

彼が、上半身裸体になつて、薪割りなどしている姿は、Fさんには、息がつまつて苦しくなる程、見事だつた。

此のAが、又、Fさんを秘かに愛しく思つていたらしく、それは、女氣から離れた兵營生活の中で、Fさんの邸で過す時間でも、女と云つては、Fさんの母の中將夫人女中の中年女ばかりでは、美少女にも、見まほしいFさんの美少年ぶりが、大變魅惑的でもあつたのだから。

Fさんは、いつとはなく、Aの態度の中に不思議なものを感じる様になつた。

早く云えば、挑発的な態度を見せるのだ。Fさんの部屋から見える所で、裸になつて薪を割つた。

それは、Fさんが薪割りなど見る時の、うつとりとした表情を充分知つての上でのAのやり方と思われた。

又、Fさんの眼の届く限り、井戸端などでは、裸になつて身体を拭いたりもした。

見まい、見まい、そう思い乍ら、どうしても、視線をやつて了うFさんだつた。

Aはもともと読む物が好きなので、Fさんはよく雑誌等を見せてやつた。

その内に、氣がつくとFさんのいない間に、Fさんの部屋にAが入つて、アチコチいじり廻したりしてある形跡がある様になつた。

神経質なFさんは、他人に居間を荒されるのは、大變嫌だつた。

二、三度注意したが、或日、Fさんの机の上で、Fさんの便箋を使つて何か書き物をした跡があつた。カツとなつたFさんは、Aを呼びつけると鋭く尋ねた。

すると、思つた通り、Aが故郷へ便りを書いたと云うのである。

兵營内では検閲がある。それでは具合の悪い事を書

いたのかもしれない。

「検閲されて悪い様な事書いたのかい」

「違います、普通の事です」

「僕が、他人に此の部屋使われるのを嫌つてる事知つてるんだろ……」

「知つてます」

「それなのに、どうしてしたんだい」

すると、Aはニヤリと笑つた。

そのニヤリに、耐らなく嘲けられた思いで、Fさんは思わず机の上に在つた筆箱の蓋をとると、Aの横つ面をピシリと殴りつけた。

すると、又、Aはニヤリと笑つた。その上、「自分は、

殴られても痛くないですな」

Fさんは、逆上したまま、夢中で同じく机の上に在つた物差しを手にすると、Aの裸の上半身を、滅茶苦茶に叩いた。

Aは笑うのは止めたが異様な輝き



のある眼つきでFさんをジッと見つめ乍ら殴られていた。

Aが自分に打たれる事に満足している……その事実を判然と知ると、力が抜けて、殴る手を止めると、フラフラと部屋を出て了った。

それがあつてから暫くの間、Fさんの方から、Aを避けていたが、或日曜日の夕方沸き立ての風呂へ入っていたFさんが、フト窓から外に眼をやると、その狭い塀と湯殿との間の、柿の木の下に、変な恰好で立っているAの姿に気づいた。

湯殿の屋根の上の水タンクに井戸水を汲み上げていたらしいAは、折から真夏の事として裸になつてポンプを動かしていたものと見えた。

柿の木の下に、向うを向いて立っている裸のAの尻の辺りには、越中褌がダラッと下っている。

下帯を脱している……そう思つて、息を殺した。

Fさんの唇は、興奮でワナワナと震えた。

と、その時、予期していた如くに、Aがクルッと此方に向いて、ニヤツと笑つた。

Aはゆつくり歩いて、湯殿の外扉を開けて入つて来ると、勝ち誇つた如くに、Fさんの前に突つ立つた。

Fさんが夢中で、手を伸ばすのと、Aのガツシリした両手が、濡れているFさんの身体を、しつかり抱きしめるのとは同時であつた。

FさんとAとは、その時だけだつた。

あれだけ、夢中になつたFさんなのに昂奮が静まつて了うと、父の身分から来たりする自尊心やら、犯罪感に似た後悔の念、道德感から来る自責……そんなもので、Fさんは二度とAの傍へは寄らなかつた。

それでい乍ら、その心の底には、Aとの事を再び望む欲望が烈しく起き、壁越しにAの声を耳にするだけで動揺を感じる程だつた。

Aを憎いとFさんは思つた。そう思う心の隅に、此の世でAを一番

愛しい者に思うものもあつた。

間もなく、Aは、中隊と共に大陸に発つ事になつたのを父から聞いて知つたFさんは、それが最後と思われる日に、遊びがてらに来ていて、兵営へ帰る前に風呂へ入っているAの隙に、脱衣場からAの下帯を盗んだ。

どうしよう云う意識もなく、何と云う事なくそうして了つたのだ。

都合のいい事か、悪い事か、若い男の脂性らしく、Aのそれは薄汚なかつた。しかし氣にならなかつた。

Aがいなくなつてから、その下帯を秘かに取出した。

最初は、自分が裸になつて、その褌をしめてみた。

次には、匂いを嗅いだり、頬ずりしたりした。

そして、Fさんは、満足した。

その事があつてから、Fさんは、慕わしい男性が現われると、その人の肌についた物が欲しくなつた。

学校のプール開きがあつた後は、好きな上級生の猿股を盗んだり、又、鞆の中から水泳褌を盗み出したりした。



Fさんにとつて、禪一つの男の裸体は、此の上ない一番美しいものだそうだ。

下帯を美しいものと感じ出す始めは、Aが眼の前に、下帯一つの姿になつての裸を始終見せる様になつてからだとも云う。

Fさんの意見では、一般に、色気と云うものが、僅かな衣類をそれとなく着けている危な気な処に一番感じられるのと同じく終局的には、カタボリックな躍動を見せる男の裸像の美しさは不可欠だが、その寸前にある下帯姿の裸には、デリケートな魅惑に溢れていると云うのだ。

又、私との短い間ではあつたが、何度かのあいびきの時にも、互に禪一つの姿で、特に私には、もっこ禪と云うのを着用させるのだつた。

肉体の上を布一枚で掩うのは、成程、越中禪か、もっこ禪に限られる。

垂れがないだけ、もっこ禪は、越中禪よりいいと云う訳であろう。

Fさんが、持病の胸の方を、急に悪くして療養所へ入院して了つたのは、二十三年

の八月の始めで、一ヶ月後の九月の始めには、都合で私も、そのアパートを引拂つて実家へ歸つた。

Fさんは、一年経たない中に、亡くなつたと、後から、そのアパートの住人の一人から聞かされた。

父も母も亡くして身寄りの無かつた筈のFさんだつたから、考えると気の毒な程淋しい人だつたと思う。

然し身寄りのないFさんだけに、あのトランクに一杯詰つた貴重？であつたコレクションは如何なつたであらうかと考えたりする。

それと共に、その中に残つていた筈の私の恥ずべき、汚れた越中禪の事を思い出しては、身のすくむ思いがするのである。

被虐想春譜

それからは一週に一度位ずつ呼び出されて、彼等の鞭の下にのた打ち苦しむ、奴隷の一人とされてしまつたのです。でもそれがいつしか奇妙な楽しみとなつた私は……

長塚 弘二

アブニストとしての私を告白するのに、はとも勇気がいることでした。しかし本誌に次々と発表される多くの同志の方の赤裸々な告白に励まされて、此の奇

妙な体験を一人だけの胸に秘めていることが、何か心苦しいようで、意を決してペンを執る氣になつたのです。でも物を書くことの不得手な私のことで、きつと



読み辛いであろうことをお詫し、併せて読者の皆さんの御批判をいただきたいと思ひます。

私の異常な性格は、幼いころからあつたように思いますが、目について判然としてきたのは十一、二歳のころであつたようである。近所の友達と遊ぶにも、きつと皆さんも経験があると思いますが、泥棒ごっこなどを好み、それも必ず泥棒役を志願し、捕えられ、縛り上げられることに喜びを感じていたので。今考えると、マゾの傾向があつた訳で、友達も私を縛り苛み弄ることに興味を持つてきたようでした。小学校を終え商業学校に進んだ私は、入学して半年目に私の開花とも云える体験にぶつかりました。自分で云うのも何ですが、その頃の私はいわゆる紅顔の美少年でした。

どこの学校にも必ずいるのですが、此の学校にもバンカラ学生のグループがあり、その中心のKは五年で、柔道部の主將で全校生の畏怖的でした。噂ではKはその方でも相当な者で、毎年新入生中から彼のペットを探し出し、暴力で自分の物にするといわれる暴君でした。そのKに狙われたの

が私だつたのです。最初Kは私に対して好意的態度で何かと世話を焼きだしました。でもその頃の私はKを無性にきらいました。内向的な私は余り友達をも作らず本を読んだり、一人で物思いにふけていたのが多かつたのです。



その内にKは、その腹心の者を通じて私に手紙を届けてくるのです。男からラブレターを貰つた訳ですネ。「君は俺の求めていた理想の人だ。いつも俺の心の片隅に君の美しい瞳が笑っている……」と云つた奇妙なものでした。

私は黙殺しました。二度目も三度目も知らぬ顔でいました。四度目の手紙は多分に脅迫的になつてきました。

「もし君があく迄今迄通りの冷たい態度をつづけるのなら、俺にも覚悟があるからそのつもりで返事せよ」と云うのです。

一寸恐ろしくなつた私は、週番の上級生の所にその手紙を持つて行きました。私の学校では、五年生が一週交替に全校の規律維持や指導に當つて居るのです。所が、此の週番の生徒に此の手紙を渡したのが大失敗だつたのです。それから三日目でした。その日は丁度日曜でしたが友達とて余りいない私は、学校に行き説書するつもりで出掛けました。校庭のベンチで本をひろげて二三行読み出した時でした。

先日手紙を渡したMと云う上級生がそばに立つていました。「長塚一寸こいよ此の前の手紙のことで聴きたいことがあるんだ」と云うのです。私は何の疑念も持たずMの後についてゆきました。Mは私を、校庭の外れにある物品倉庫へ連れ込みました。そこにはやはり五年のHがいました。Hは副級長をしていて、下級



生にも人気のある美少年でした。私は、Hのいることによつてすつかり安心してしまひ、倉庫の奥の方へ行きました。すると、私の予想もしていないことが、起きたのです。

MとHは私の両腕をつかんで、後へねじ上げるのです。そしてポケットから出した細紐で、後手に縛り上げてしまいました。余りのことに声も出なかつた私はHに食つてかかりました。「何するんですか、解いて下さい」でも、HもMも、何も云わず、白布や手拭で私の口を掩い猿轡をされてしまひ、もう救けを呼ぶことも出来なくされました。その上、後手の私をそばの柱に縛りつけ、両足も二重三重に縛りつけられてしまつたのです。

何故こんな目にあわされるのか分らない私は、唯身をよじつて逃れようと思つても動けば動く丈、細紐が腕に喰込む丈なのです。叫んでも声にならず、恐ろしさと不安とでぐつたりしそうな位でした。

私を身動き出来ぬようにしてしまつたHとMは、顔を見合せてニヤツと笑うと腕時計を見ました。「オオ十時だぞ、もう来る筈だな」一体誰がくると云うのでしよう。

その時でした、倉庫の入口でガヤガヤと人声がして誰か入つてきました。「どうしたうまくいったか？」と顔を出したのは。あつと思わず声にならない声を出した私は屈辱感に身を震わせました。Kなのです。私が黙殺しつづけたKは、その手紙の通り私に復讐の機会を作つたのです。ニヤニヤと笑つて、満足気に私のもだえる姿を眺めたKは、そばに近寄つてきました。Kの後にはグルーブの連中が四人程いました。しかしあのHが此のグルーブにいたのは私を驚かせ絶望感に誘います。Kを始め皆は、私の前にドッシリと腰を下ろしました。

「おい長塚此の間の手紙の返事はどうなつた。いいいいいよ、今日はいやでもお前の返事を聴かして貰うサ」

Kは、上機嫌でこんなことを云うのです。Kの復しゆうなのだと思うと、私はこれから私に加えられるであろう数々の辱しめを考えて、顔を真赤に染めました。するとKは、

「おう顔を赤くしたな。うれしいのか。そうか、待つてろ」

と云うと、皆と何か、ひそひそと相談

しているのです。

すると皆は、私の両腕を一旦解き、左右に抜けて横の梁へ吊り上げるように縛りつけるのです。そうして猿轡をもう一度固く締め直しました。そうして置いてHが私のズボンのバンドに手をかけます。私は彼らの意図を察しました。そうです、私は身をもがきました。でも左右に吊上げるように固く縛りめられた両腕は、身をもがく度に腕に手首に縄がきりきりと喰込む丈なのです。両足首も同様です。

息を呑むようにみつめているK達の顔も、妖しく燃えていました。自由を奪われてゐる私は、どうする事も出来ません。みじめな姿は我乍ら浅間しく、涙がこぼれる許りの口惜しさでした。KがMに何かささやきました。

そうすると、H達が私の身体を柱からはなして、改めて吊下げるように縛りました。今迄は柱で固定されていたのですが、今度は完全に宙吊りなのです。足がやつと床にふれる程度なので、二重に手首に喰い込んだ縛めの痛いこと、六・七人の同性の前に、もう私は必死でした。



何とかしてそれ丈はと思う私の苦悶の姿に彼等はますます悦び楽しんでいたのでした。

そうすると、Kがいつ用意していたのか、二尺程の竹の棒を持つて私に近寄ります。私は、きつとあれで殴られるのだと観念しました。

ところがKは、その竹の片端に私の片足を結びつけ、股を人字形に開けて、反対側の端に片足を結ぶのです。手は吊上げられ、股をすくめようにも、うんと開かれて縛られてしまったのです。そうして置いて、私のその哀れな姿を、彼等はカメラに収めました。

正面から、後から、横から、余す所なく、彼等のカメラに写し取られて、私に残ったのは、恥ずかしさと絶望感だけでした。Kは、

「おい長塚、今日は日曜だからな。夜までゆつくりしてゆけよ。どうだいうれしいか」と云い乍ら、にやにやする。その辛さは、御想像に任せます。

やがてそのような私を、彼らは下ろして、今度は体操に使う跳箱を持つてきて、その上に私をうつ伏せにし、両手を箱の穴

へ通した縄でしつかりと縛りました。

私は彼の意図に気がつきました。何と云うことでしょう。自由を奪われている私に……。私は身をもがいて、逃れようとしたが、それは全然無駄なあがきでした！

それ丈ではすみませんでした。この日一日は、充分に彼等によつて辱られ、辱しめられ、やつとその日の夕方になつて、縛しめから解かれました。手にも、腕にも、足にも、縄目の跡が赤くつき、臀部から背中には鞭

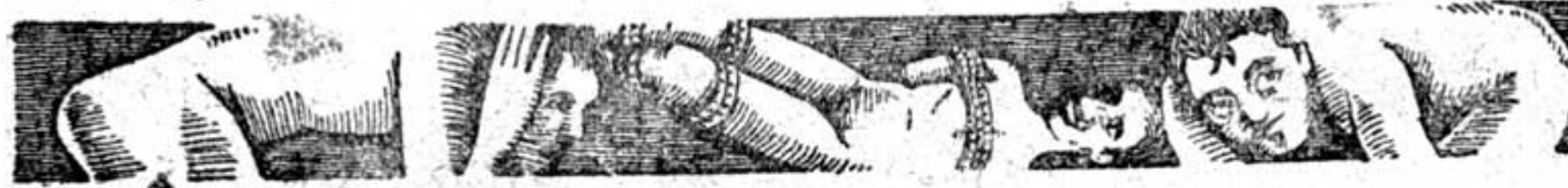
打たれた印がはつきりと残されていました。その上、彼等は先程カメラに収めた私の羞しい姿を材料に、私に誓約書を書かせて、今後は必ず彼等の呼出に応じ、如何なる事でも甘んじて意に従うことを誓わされてしまったのでした。

それからは一週に一度位ずつ呼び出さ



れて、彼等の鞭の下にのた打ち苦しむ、奴隷の一人とされてしまったのです。でもそれがいつしか奇妙な楽しみになつてしまった私は、先天的にマゾの素質があったのでしようか……

今はKも且も皆大東亞戦の勇士として散り、私は貧しい一サラリーマンとして





生きております。でも植付られた此の悦びを忘れることが出来ず、夢に迄いじめられてみたいと思つて悩んでおります。どなたかKのように、Hのように、此の私を縛り

上げ鞭打つて下さる方はいないでしょうか。

若しそのような方が、私の前に現われたら、私はそのよき奴隷として、苛れ弄

ばれるのに決してためらいは致さないつもりです。港ヨコハマの一角に、ひっそりと住む一マゾヒストは、必ずその日の訪れるを信じております。

美青年サド

……弘が私の横に坐つてゐるのに氣づいた。「何だい、如何かした？」「鐵治さん、僕鐵治さん好きだ……」それを聞いた瞬間、私が弘へ抱いてゐた感情が燃え立つた……

山中鐵治

その海岸は遠浅だったので、満潮時を除いては、沖迄歩いて行つて泳がねばならず、泳ぎ終つて濡れた身体のまま風呂場へ入る頃は、疲れ切つて物を云うのも面倒臭いと云つた感じだった。

弘と私は並んで三和土の上に立つて、水を浴びた。

塩水にグッショリ濡れている海水パンツを無雑作に脱いで、私は湯舟に浸つた。弘は、何故か愚図々々している様子だ

つたが、海水着のまま下駄を履くと湯殿から出て行つた。

弘の様子で、弘の様な性質の少年にあり勝ちな裸になる事を恥づかしく思つてゐるのだろうと察する事が出来た。

湯舟に浸つて考えてみると、弘と一緒に泳ぎに出たのは今日が始めだった。

ツベルクリン陽転とかで此の一年は過激な運動を避けると云う意味で海水浴などは真つ先に中止されていたのだ。



今日は如何云う風の吹き廻しか、「貝のコレクションに行くよ」と、別荘番夫婦に云うと、裸になつて私の後について来たのだ。

弘と私が知合つたのは、まだ二カ月許り前で、私の学友が都合で中止した後釜として、私は弘の英語と数学を教える事になつた。

弘は、色白な柔弱そうな然し、美しい顔立ちをした青年だつた。

夏休みに入ると、弘は、自分の家の海辺の家へ出かける事になつていたので、当然の様に私も避暑と洒落込んだわけだ。

家は別荘と云う程大きくはなく、母屋には夫婦者が留守番と云う名目で住んでおり庭先に在るバンガロー風の離室に、私と弘は寝起きする事になつていた。

何と云う事なく私は、弘の事を考え始めていた。

年下の美少年を見ると、すぐにも愛情を覚えて了い、何と云う事なく身近に置きたい欲望を感じる私の性癖だから、この夏休みの弘との生活はこの上もなく楽しいものに思えたのだつた。

今の場合も、それとなく私の肉体を、さらけ出す事によつて、弘がどんな反応を示すか……又、私自身、弘の美しい裸像を見たい……そんな気持の混り合つた興味にそそられていたのだが、それを敏感に察した如くに弘は海水着のまま出て行つて了つた。

然し、私が裸になつた時に、チラリと寄越した弘の視線には、私にも覚えのある思春期の頃の、ひたむきな興味が溢れていて、それが一瞬、ムツかゆい様な露出の快感になつて、私に感じられもしたのだ。

私が、湯殿の棚の上の猿股をはき終えて湯殿を出ようとする時、弘が、「鉄治さんの浴衣持つて来たよ」と、自分も浴衣姿になつて、私の浴衣を持つて入つて来た。

「有難う。弘君、如何して風呂へ入らなかつたんだい。僕の前で裸になるのが恥しかつたのかい……」

と云うと、弘は慌てた様に、「鉄治さん、御飯の仕度出来てる。食べちゃつたら町へ行きましょう。お祭りなんです」

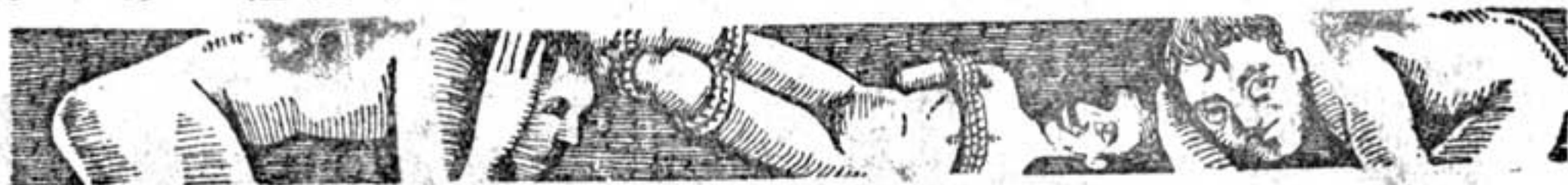
そう聞くと、成程、先刻から私の耳に入つていたはやしの太鼓の音……と肯けた。

その町の夏祭りのクライマックスは、海辺から真直ぐ一丁程の間の道を、海から上つた神輿が暴れ歩いて来て、小高い山の上の神社迄の急な石段を、もみ上げられる時である。

相当な勾配の、二十間程の石段を、威勢のいい海辺の若衆に担がれた神輿が、ワッセワッセと、提灯の波を従えてねり上つて来る。

それを見んものと、石段の両側にも、昇り切つた境内にも、人が溢れていた。深夜十二時近くに神輿が神社に上りつくとその日の行事は、まず終りで、海辺の満潮時には水中に在る赤い鳥居の傍から、神社迄の一本道の両側に並び切れるだけの夜店が出て、此の町の、しきたりで、祭りの三日間は全ての家の戸は夜通し開けられ、人々は眠らないで騒いで過すと云う。

その上、若い男女の間にも、いわくあり気なならわしもあるらしく、兎に角、祭りの間は町中挙げて破目をはずすらし



かつた。

私と弘とが、人波の中をしつかり、手を握り合つて歩いていたら、後からドヤドヤと通り抜ける若者達があつた。

向う鉢巻に赤いたすき、夜目にも白い腹巻に褌、そして足袋揃いの、いなせな姿だつたが、彼らが通り抜ける時、私の手におかしな手触りで、変な触感が残つた。

見ると、酔っているらしい彼らは全裸だつた。

弘も、気づいたらしく、ジッと見ていた様子だつた。

海辺の大鳥居辺り迄来ると、そこで一応人波が止つて、戻つて行く様だつた。

其処では、又、先程の若者達と同じ姿の青年達が十数人集つて騒がしかつた。

人だかりの後から覗き込むと、酒の勢いで一升壺を握つて暴れ出すらしい一人の若者を同輩達が止めているらしかつたが、やがて、またまた騒ぎ立て、いきり立つその青年は、がんじがらめに縛り上げられて了つた。

集つた人々は、面白がつて見ている様子だつた。

くだらない……と帰ろうとして気がつく

と、私を握る弘の手が、ギョツと強くそして汗にジツトリと濡れている上に、弘の瞳がいつになく異様な光りをさえ見せているのだ。

私は、ぐいと引くと、先に立つて歩き出したが、弘は、まだまだ未練あり気に振返つていた。

波打ち際を歩いて、満潮の海水に足を濡らしつつ私達は弘の家へ帰つた。

私は殆ど無口だつた。

弘の様子から見て、何か弘の性癖が判る様な気がして、そればかり考えていたからである。

パンガローの離室に入つて、寝る仕度をしている弘に私は口を開いた。

「君、先刻、変に興奮してたね……」

「そうですね……」

明らかに弘は、慌てていた。顔の赤くなつていくのが判る。

「下品な奴だから、いい気味ですもの」

「あんな奴、殴つてやりたいかい……」

「ええ」

「あの前に、僕は、あいつ等の一人の、」

「知つてました。下品ですね……」

それきりで、その話を止めて、私は暫く黙つていたが、突然に尋ねてみた。

「弘君、変な事きくけど、君なんかでも矢張り、……」

ギクツとした様に弘は、私の顔を見つめて口を開かない。

「真面目な意味でなんだよ。誤解しないで……判るね」

然し、弘は睨む様に見つめているだけで、これには、些か私も困つて了つた。

「御免よ、止そう此んな話……」

そう云つて、寢床に入つて了うと、

「鉄治さんはしますか……今でも」

弘は相変らず私の顔をジッと見つめている。

「仕方のない時はするさ……」

弘は、そのまま黙つて了つて、暫く寢返りしている気配がしていたが、やがてスタンドが消えて暗くなつた。

どの位か経つて、窓からの月明りで周囲が割合に判然と見えて来た時、私は弘が私の横に坐つているのに気づいた。

「何だい、如何かした？」





「鉄治さん、僕鉄治さんが好きだ……」

熱い口調……それを聞いた瞬間に、私が弘へ抱いていた感情が燃え立つた。

私はゆっくり起き上ると、固くなっている弘の身体を抱き込んだ。

武者ぶりつく様に弘は、私の懷へ飛込んで来た。

さて、その次の夜が来ると、待ち遠しい様に、弘は離室の扉に鍵をかけ、窓にはカ

ーテンを引いた。

今迄の彼にない程、行動的で快活に見える弘だった。

自分から、クルクルと裸になつてしまふと、今度は、弘は笑い乍ら私を裸にするのだ。

「鉄治さん、僕の云う事きいてくれる？」

「ああ、いいよ、何でもきくよ」すると、躍りかかつて来る様に、弘は私を麻縄で後手に縛り上げた。

御丁寧に胡座をかいた両もも迄縛り上げるのには私の方で驚いた。

そうして、弘は、新聞紙をクルクル巻いた棒の様なものを振り上げ、

「お芝居なんだから、鉄治さん、打たれたら、痛そうにするんだよ……」

そして、ピシリピシリ私を殴り始めた。私は最初の一撃で、既に相当な痛味を

覚えたし、縛られた縄が腕や足に喰い込むのも、応えたが、それよりも、紙の棒

を振り上げる弘の瞳の怪しい迄の輝きに魅かれていた。

「痛そうにして……もつともつと」

その弘の言葉に、私は、ウーンと唸つたり身体をねじらせてみたりしたが、その中、両手両足縛られてる悲しさで自分から、仰向けにひっくり返つて了つた。

それでも、尙、弘は打ち続けた。私の気持に変化を認めると、今度は、弘は違つた縛り方で、それも馴れた手つきで、首から胸腹腰足と縛つていつた。

海老の如くに縛り上げられて、床の上に転がされた私は、餘りにも巧妙な弘の縛り方に感心した。

どつちへ動いても、私の身体自体の僅かの動きでも、縄にかけられた私の躰が締め上げられるのだ。

その私を、わざと弘は、あちこち引っぱつて歩いた。

これには私も参つて了つた。然し、縄をほどいては、その跡を懸命に擦つたりして、いたわつて呉れる弘の様子を見ると、此の美少年の爲なら……

と変な義侠心を起して、

「まだいいよ。好きな様にしても」と、快感どころか苦痛で耐らない拷問

を自分から催促迄しているのだつた。

弘の命令で、私は、弘のベッドの上に



横になり、簡単に手足を縛りつけられた。弘は私の胸の辺りに、馬乗りになる。

ホモの経験のあつた私だが、その時迄はまだ受身でも能動的にでも経験は無かつた。

然し汚れを知らぬ感じの弘の少年らしい瞳を眼にすると、不潔感などは、些かも起きなかつた。

私は奴隷の如くに、弘の云うがままに従つた。

それが終ると、弘は私の臍を細目の紐で縛り上げている感じだつた。

そうして、私に見える様に、太目のローソクを示すと云つた。

「絶対に火傷はしないから……ね」

火の点つたローソクを手にして弘が立つた時、まだ次に起る事柄が私には判らなかつた。

然し次の瞬間、私は熱い蠟涙の垂れ落ちる灼熱感を強く感じていた。

全てが終ると、弘は、実に献身的だつた。弘との例えようもない快美な日々、私は我を忘れていた。

愛 続 者 通 信

私も御誌の愛読者です。三年前浅草の映画劇場で始めて経験をして以来その楽しさが忘れられずそれらしき映画館へ参ります。又、『禁色』を読んで以来日比谷公園へも行きましたが五〇歳位いの商人風の男に後を尾けられいやな気持ちになりました。私の理想のタイプはフアリーグレンチャーや、トニーカティスの様な優さ型です。私の始めての男は、私を見て

「わア素晴らしいなア」と云いましたからよい方なのでしょう。私の性格は陽気なお茶目型です。（他人はそう見ないらしいけど）プラトニックな恋をして見たいと常に思っています。どなたか同年配前後の青年がおりましたらお便り下さい。又、二月号の交歓室にのつた（PHELO）というウールニングの方と文通したく思っております。もしこの文をお読みになつたらぜひお手紙を交歓室気附で下さい。

（東京 TOM）

本誌五月號に乞御期待！

毎號讀者の驚くべき激増ぶりに、喜んだり慌てたりしている本誌は、いよいよ年來の希望であつた外國（米・佛）からの豊富な資料ルートを開拓することが出来ました。これら資料の活潑な掲載によつて、増々清新充實の紙面を作製讀者の皆様の御期待に應える心算であります。特異な趣味雑誌であり、濃密なマニヤの雰囲気、に耽溺出来る『風俗草紙、五月號』に今から御期待下さい。



警官が用いた……

訊問・捕縄・拷問の技術

……だいたいこの捕縄は『キメツケ』と言うもので、犯人を縛るときにまごつくと、その刑事は賊にナメられて相手にされなくなるばかりか、かけ出しの『お新』だと輕蔑され……

三 谷 祥 介

小 田 明 男 画

★

もちろんなにごとによらず例外はあるが、だいたいにおいて強盜犯人は単純な性格の持主だ。気が小さくて怒りっぽくそれでいて女に好かれる一面を持つている。彼等のほとんどすべてが、女のために強盜を働くのだから——女にもてるのはあたりまえかも知れない。

ともかく強盜は、ヌスミの技巧を用いないで、いきなり人を殺したり強迫して金品を



強奪するので、憎くむべきヤツに相違ないが、ひとたび刑事の手に落ちて逮捕されると、驚くほど素直になる。そして、犯行をすらく／＼自白するので訊問には手数がかからない。ところが上手に泥棒を働く犯人は、容易に自白しないものである。そこでこんな泥棒を取調べる刑事は訊問にあたつて技巧を用いなくてはならぬ。ではいったいどういう手段で自白させるか？ と言え、まず、なを、食いのや『ノミモノ』をつめて責め立てることだ。犯人が自白すればタバコを喫ませてやるとか鰻丼をご馳

走してやるとか、いろいろ手をつくして自由を追まらなくてはならない。いずれにしても最後には拷問という手段があつた。

ところが新憲法が制定され人権が尊重されるようになった今日では、拷問どころが誘導訊問すら出来ない有様である。

刑事は犯人を取調べるに当つて、「君の不利益になることは答弁しなくてもよろしい」と申渡さねばならない。

「盗んだ金はいつたい何に使つたか」と訊問して、

「生活費に使いました」と答えた場合、たとえばそれが闇の女を相手にして、湯水のごとく使いはたした事実がわかつていても刑事は犯人の供述にしたがつて、訊問調書を作らねばならないのだ。刑事の身にとつてはまったくナサケない世の中になつたものだ。

盗んだ金でふざけ散らした相手の女が、のこ／＼と刑事部屋へ現われて、

「刑ちゃん、あたしの彼氏に会わせてよ」と面会をもとめた場合は、理由のない限りこれを拒むことが出来ないし、彼女たちの差入れは必ず犯人に渡してやらねばならぬ。刑事が食いものやノミモノで犯人を責めたのは、今は昔の物語りになつてしまつた。

現在の犯罪捜査は犯人の自由にはあまり重きをおかないで、すべて証拠固めに重点がおかれている。しかし自由のない捜査はとうてい出来ない相談であるから、刑事は、犯人に自由に答弁をもとめ、その供述を熟考しながら、犯行の全貌を読んでゆかねばならなくなつた。『ヨミ』のたしかさが必要になつたワケである。

だから刑事もまた、碁や將棋の棋士と同様で、すべて理詰めの捜査となり、動きのとれないところまで犯人を追ひ込んでゆかねばならない。では、訊問が役に立たなくなつたかと言へば、決してそうではない。戦前とはぜんぜんカタチの変つた訊問の形式となり、拷問の技術も戦前とはまるで姿のちがつた心理的拷問が行われるようになった。

科学捜査陣に『ウソ発見器』や『テーブルコーダー』が登場したことは、あきらかに心理的の拷問でなくてなんであるろう？

★

刑事は攻撃の立場であり、つかまえた犯人は守備の立場に置かれている。そこで無理な攻撃の手が、刑事の訊問に現われてくるのは争えない事実だ。

刑事部屋には経験をつんだ古参の『デカ長』がいて、新米の刑事を一人前に仕立てるのであつたが、犯人を取調べるコツは、まず自分がじつくり落ちつくことだと説明して、洗面器に塩水を満し、その中に蛤を入れて刑事部屋へ持ち込んだ。デカ長は、蛤の貝が口を開くまで、根気よく新米の刑事にながめさせた。りしたものである。こうしているうちに『なるほど』とうなずいて、訊問のコツを会得するのであつたが、この頃では新らしく刑事訴訟法が制定され、刑事が容疑者を同行した場合は、四十八時間以内に、犯行の裏づけとなる物的証拠を固めなくてはならなくなつた。だから戦前のように蛤の貝の口の開くのを待つていような、呑気なことでは間尺に合わない。

只今の世の中は、碁の手合でも角力の仕切でも、すべて時間に制限されている——ひとり刑事部屋ばかりが、時間的に無制限だというワケにはまいらない。

きわめて有利な物的証拠があがつても、睡眠を与えるべき時間中に、犯人を留置場から引き出して取調べるようなことをするとそれはただちに拷問ということになる。そこで刑事はわずかな時間に、もつとも利き目のあ

る訊問をしない限りは、制約の時間を犯人に稼がれて、ただわけもなく放免しなければならぬという憂目を見るのだ。犯罪の捜査も見ようによつては、一種のスポーツ化したと言えないことはない。ともかく刑事の訊問はきわめて短的に、犯人の胸を突き刺すような言葉の発見でなくてはならぬ。

★

刑事が犯人の手口を『ヨム』ということは地理にくわしい自動車の運転手が、たとえば上野の駅で客をひろつて、これから杉並までと言われたとき、どの道を通つて杉並までゆけば、いちばん近くて安全かということが即座に運転手の脳裡にうかぶのと同じようなものである。ものなれた古参の刑事は、ほとんど間違なく犯人の手口を読んで割り切るこゝとが出来たのだ。なぜかと言え、すべての犯行には必ず手順があるからだ。この図星をさされると、いかなる犯人も頭をさげて『ヤマを割る』のが普通だが、女の犯罪人にはこの手を用いてもおおよそ無駄である。女はどんな目に遭つても用心深くて容易なことでは自由するものではない。また物的証拠を突きつけられても、精神的には動揺しないとい

うのが特徴である。そのほか、男の犯罪人と相違するところは、非常によく拷問を耐えしのぶ点である。肉体に苛酷な鞭を加えても、男子にくらべて痛みを感じるものがすくないのかも知れないが、理由はもつと奥深いところにあるようだ。つまり罪悪感が男の犯罪人と比較すると、非常に低いように思われる。

「あのときあんなひどい目に会わされなかつたら、わたしは決してこんな結果にならなかつた」と述懐してく、やしがたりする。

「あのときは、いつたいつのことかね」と刑事が訊問すると、今からちょうど七八年前初めて男に恋心をおぼえた当時のことだつたり、ずつと以前に電車の中で紙入れを掏られたことが、犯罪を犯す動機になつたと考へているようなこともある。

こんな場合の刑事の訊問は、

「あなたは決して悪い女ではないが、いつの間にかひどい目に会うようになった」と言うふうに、あたかも他人のしたことを取調べているかのような態度で、訊問をつづけてゆかねばならない。

普通一般の女が、どんなときどんな気持ちで泣くものであるか？ つぶさに観察したことはないが、女の犯罪人が刑事部屋で泣く理由

を、深く掘さげて観察すると、彼女たちはただもうワケもなく『く、や、く、泣いているようである。では何かそんなに、く、や、しいか？ 自分ひとりだけ不幸な目に会うことがく、やしいのである。

★

私は小柳みさという女スリの常習犯を検挙したことがある。デパート専門の賊で、彼女はいつも貴婦人のように着飾っていた。私は現行を見てとつたので、女の後をつけた。

「もし、奥さん。警察までご足労が願えないでしょうか？」

「あなたは？」

こう言つて女は落ちつき拂つて振りかへつた。

「刑事です」

「どんなご用かぞんじませんが、そこらで自動車をはろつて下さい。まいりました」というのだつた。

私は女のスリを同行して、刑事部屋へ連れ込んだ。ところが小柳みさは、私の訊問を片ツ端からしりぞけて頑として自由しない。そこでとうとう送検ということになつたが、出てきたのは腕時計が二個紙入れが四個という

稼いだ。

「どうだい奥さん。きれいさつぱりと自白しなさい。あなたはいまどこに住んでいるのかね」と私はきいた。

「大きなお世話よ。どこに住んでいようと勝手じやありませんか。わたしの懐から何が出ようと、これはみんなわたしの稼ぎなんですからね」と言つて、この女スリは啖呵を切つた。

物的証拠は目の前に出てきたし、なんとも文句のつけようがないが、女スリには悪びれた態度がみじんもなく、繊弱い女の細腕で、いがないスリを稼業にし、二人の女の子を養つていると、くやし涙をあふれるように供述した。

「わたしはスリこそ働いているが、たつた一度もパンパンのような真似をしたおぼえはございませぬ」と見得を切るのであつた。

小柳みさの言葉どおり解釈すると、スリを働くことは職業だというのである。

「刑事さん。あなたがたは、汗水たらして稼ぎをしているあたしなんか目をつけないで、悪いことをしている政府の役人たちをふんじばりなさい。弱い女をいじめた

りなんかして、ミツともないじやありませんか」と言つて私に意見もしてくれた。

人のモノを失敬するというスリの稼業が、もし悪いことだつたら、世の中にはこれ以上の悪事を働いて、しかも大手を振つて生活しているものはいくらでもある。どう考えてもスリという職業が悪いとは思えない——というのが小柳みさの世相観であり、こうして働かなければ、親子三人はどうして生活が出来ないというのであつた。

「警察のあなたが、スリをやつちやいけないというなら、あたしたちの生活を保証してください」と、ひどい権幕になつた。

目白の住宅街で『晝アキ』をやつた泥棒が用筆筒を開けて紙入れぐるみ一万四千円の札束を盗んで、ほかのものには目もくれず、一目散に逃げ出して山手線へ乗りこんだが、運



の悪いことには、ちやうどその省線に乗り合せていた月島の春吉というスリが『晝アキ』をやつた泥棒の懐中から、今のさき搔拂つてきた紙入れを失敬した。ところがこの現行をそばで見えていた池袋警察の中山刑事が、「おいこらッ!」と、春吉の腕を掴んで手錠をはめた。

驚いたのは『晝アキ』をしてきた泥棒先生だが、彼はかん／＼になつてスリの春吉に喰つてかかつた。中山刑事はなだめすかして電車の中で被害者になつた泥棒と、スリの春吉を刑事部屋へ同行することになつた。

「ともかくきてください。さッそくこの男を取調べて、紙入れはあなたにおかえしいたします」

こんな話になつたので、空巢をやつた泥棒は、のこ／＼と刑事の後から警察の門をくぐつた。こうして月島の春吉が刑事部屋で取調べをうけているところへ、女中を連れてとりいそぎ訴えてきたのは、目白の住宅街に住む三浦の奥さんであつた。彼女は、「ちよつと買物に出ている間に、泥棒に這入られて紙入れを盗まれました」と言うのである。

よく見るとその紙入れが山中刑事の机の上

にのツかつていたので、二度びツくりしたのは三浦の奥さんだが、さらにもつとひどく驚いたのは、スリの被害者としてわざ／＼刑事部屋へ同行してきた搔ッ拂いの泥棒先生だつた。この事件はついきごろ実際あつた悲喜劇であるが咄嗟の場合に、すでにこのイキサツを間違なくヨミ取つて、刑事が瞬間に事件を処理するということは、たやすいことのように、やつてみるとなか／＼むつかしいことである。

中山刑事はいきなり搔ッ拂いの腕を掴んで手錠をかけた。ヨミのたしかな刑事は、無言のうちにも訊問のコツを十分に心得ている。

★

終戦になつていち早く、警視庁

へ乗りこんできたのはアメリカのMPであつた。彼等がまず最初に、いちばんめずらしがつたのは、巡査や刑事がポケットへ納い込んで、虎の子のように大切にしている捕縄であつた。



「それは何か？」と質問されたので、「犯人を縛る紐だ」と刑事は答えた。

MPが手に取ると、手垢で黒光りするほど使い慣れた麻紐だが、よく見ると男子のシンボルそっくり固く丸めて鰻の牛蒡巻きそつくりだつた。

「はほう」とMPは唸つた。彼等は感心して――輕蔑して唸つたのである。

刑事の捕縄は、速日MPの手から占領軍の最高幹部に披露されたが、席上で、日本の警察がいかに低級であるかということが、話題になつたと言うことだ。

やがて間もなく天くだり式に、

「日本ボリスの腰間からサーベルを取りのぞくこと。捕縄を廃止して、金属製の手錠を携帯させること」と言う命令が通達された。

アメリカ軍の言うことを聞かないワケにはゆかないので、さつそく日本政府はその命に服したのであるが、いくら貧乏国の日本だとは言え、金属製の手錠がなかつたワケではない。またアメリカの本国からわざ／＼旧式のピストルを拂下げてもらつて、巡査の腰にぶらさげなくとも日本には国産のピストルが山ほどあつた。

なぜ日本政府はわが警察官に金属製の手錠を持たせず、麻紐の捕縄を持たせていたか？そしてまた、ピストルの携帯に反対して、玩具のようなサーベルを腰間へさげさせたか？それについては次のような理由がある。

日本は徳川幕府の時代から士分の格式ある同心でさえ、あまた捕物衆を引きつれて、いわゆる犯人の逮捕に向うときは、十手、警笛、捕縄のほかは身につけることを許さなかった。犯人が抜刀して暴れ狂つても、鉄砲その他の武器は固く禁じていたのである。申上げるまでもなく、犯人とは言えわが同胞に、手傷を負わせず生捕りせんがための思いやりだった。

この精神は、明治四年の十月に、はじめて警察制度がしかれてからも、古来の伝統として受けつがれたものである。そのころの中央政府は、巡査に警杖を持たせる考えたつたが明治維新の革命直後であり、国内は物情騒然たる有様——そこでやむを得ずサーベルを用することになった。が、しかし巡査の抜刀は固く禁じてこれを許さず、嚴重な規則をもおけた。

巡査の中には竹光のような官給のサーベルでは満足せず、家に伝わる銘刀を持ち出してひそかにサーベルの中味を取りかえる者もあったが、それはことごとく没収されて譴責の処分をうけたのであつた。だから巡査が深夜のパトロールにサーベルをがちや／＼させて歩くのは、賊を見つけて斬りつけるためではな



い。住民の警戒心を喚起し、泥棒を追いつける目的だった。

いかに兇惡な常習犯でも、サーベルの音がすると『ヤマ』を見つけてひと仕事に取りかかった賊でも、遠くへ立ちのくことが仁義だとされていた。

明治から大正にうつり終戦になつた昭和の二十年まで、兇賊と闘つて殉職した巡査は、

この七十年間に、全国を通じてわずかに二十人である。この巡査たちは、逃げる賊を追いつめて殉職したもので、賊の方からいどみかかったものはほとんどない。言わば窮鼠猫を噛む結果になつたものだ。賊と警官の間にも言葉には言いつくせない仁義の結びがあつた。

こんな仁義はアメリカ人にはわがらない。

★

「護送だよ」と言われて、犯人を留置場から引き出してきた刑事が、右の手に捕縄を取り出して、手さばきもあざやかに、分秒を争つてものの見事に縛りあげる光景は、涙ぐましい刑事部屋の風景であつたが、金属製の手錠が捕縄に取つてかわつた今日では、もう再び見られなくなつた。

終戦になる前まで、刑事の修業は捕縄からだと言われたので、どの刑事も捕縄のさばきには一苦勞も二苦勞もしていた。だいたいこの捕縄は『キメツケ』と言うもので、犯人を縛るときにまごつくと、その刑事は賊にナメられて相手にされなくなるばかりか、かけ出しの『お新』だと輕蔑され、前科のある賊は言葉をかけても返答さえしなかつた。

『お新』は、コロシの現場から拾いあげた下駄だとか、血のついたハンカチなんかを持ち歩き、出所を調べてあるくような仕事が関の山で捕縄のさばきが刑事の年期を物語る証であつた。だいたい捕縄は、外部から見えないように、両方の腕と両脚の脛の下を縛るのである。これが犯人を護送するときの作法だが約五メートル（一丈五尺）に限られた麻紐は

一方が長くなつたりまた短くなつて容易なこ
とでは手際よく結べないものである。

『捕縄祭り』というのは、盆の十六日に氣の合つた刑事が集つて、白木しらぎの三宝さんぼうにうや／＼しく捕縄を乗せ、供物を飾つて、刑事たちがひたすらな心で懺悔することである。

罪を犯したとは言いながら、不淨の繩目をかけた人達に謝罪することでもあつた。この夜は、迷宮入りした『コロシ』の亡者が、煙のごとく、ときには影のように捕縄を乗せた白木の三宝の前に現われるという迷信が言い

伝えられている。とは言えスリや泥棒を追いかけて『コロシ』の現場をいそがしく駆け廻つてゐる刑事たちのことだから、最初のうちは神妙に取りすまして、いつの間にか座がくずれ、精進料理を押しつけて酒を飲みはじめると、骨休めの遊山気分になるのが常のことだつた。

ところが終戦後になつてからは『捕縄祭り』も絶えてなくなり、五十四手の捕縄の結びを知る刑事はどここの警察をさがしてもいなくなつてしまつた。

★ 本誌・定價變更のお知らせ ★

発刊以来、特異風俗雑誌の王座をゆく本誌は、前々から多数の愛読者の御希望により、量質共に充実した豪華雑誌たるべく研究を続けて参りましたが、愈々本号よりカバー付華麗製本とし、色彩口絵、アート上質紙前附、及び本文等の大々増頁を敢行、文字通り採算を省みぬ読者サービス誌と致します。従つて本号より毎月号定価百五十円と変更致しましたので、直接お申込の方は左の如く御送金下さいませ。

(本誌一ヶ月分) 百五十圓 (送料共)

(〃六ヶ月分) 九百圓 (〃)

(〃三ヶ月分) 四百五十圓 (〃)

(〃一ヶ年分) 壹千八百圓 (〃)

申込先・東京都千代田区神田猿樂町一之三 日本特集出版社

(振替・東京二四二五一番)

風俗草紙賞定二十萬圓懸賞原稿大募集

★豫選通過作品・中間発表！

本誌一月號に發表しました、〃風俗草紙賞設定・二十萬圓懸賞原稿大募集〃は、當初より異常な反響をまき起して、愛讀者各位の熱烈なる御支援裡に、豫定通り二月十日〆切ました。總數百五十篇あまりの應募原稿は、到着と同時に選衡委員である四先生に配付し、編集部への検討とともに、ここに左の如く〃豫選通過作品〃を決定致しましたので、中間発表致します。

どの一篇をとつても讀みごたえのある、個性的な力作ぞろいでありましたから、最終的審査を控えた委員の先生方も、編集部も共に嬉しい悲鳴をあげております。今後一カ月の間に慎重な再審査の上、入選決定の發表は次號五月號誌上に掲載致します。何卒全讀者の御期待を乞う次第であります。

風俗草紙・編集部

第一部

闇の中の白鳥	黒田初太郎(横須賀市)	或る少年の話	寒川恵之助(大分縣)
奴隷王子	正宗菊三(石川縣)	同性を求めて	吐夢閑人(札幌市)
犬になめられた女	龍宮乙彦(東京都)	月光の妖精	影山次郎(浦和市)
アブの芽生	草香直樹(北海道)	燃える青春	中正夫(東京都)
同行二人	轟瀧夫(東京都)	アブノルマル・ヒストリセス	津上淳(不明)
三匹の牝獸	櫻井文夫(鹿兒島縣)	男 女 中	前田一夫(東京都)
にわとり夫人	小原菊枝(福岡縣)	ホテル・プリスタン零號室	松澤零(桐生市)
淫樂亭	多田夢志男(兵庫縣)	友田家の女囚	東田操(東京都)
		奇妙なホテル	宮脇誠一(福岡縣)

稽古	砂川榮(大阪府)	乳房へのあこがれ	小森淑江(仙臺市)
裸女と鮫	玻玖藍作(宮崎市)	雨の作品	逢坂純(京都市)
愛撫と凌辱と	志賀啓太(大阪市)	外道の贅	瀬戸明(山口縣)
陰火	類十兵(石川縣)	平戸の虐殺	川野京輔(廣島市)
寶氏の秘密	須渾朔(靜岡市)	人生記	藤井宏(鳥取縣)
花火	白河五百里(京都市)	風流水浴譚	乃川伊都(東京都)
夜明け前の出來事	石田星弧(東京都)	若竹	吉川容子(鳥取縣)
奴隸日記	水野重之(大牟田市)	グイナスとマース	梅野美波子(東京都)
妄執鬼	弓鬼崇(名古屋市)	變態性欲の解剖	砂藤隆司(三重縣)
妖虫刺愛	弓鬼崇(名古屋市)	心の惡魔	添田四郎(東京都)
焰の千代	阿名山張八(三重縣)	近代嗜虐文藝史	吾妻等(京都市)
良にうごめく女	北澤正(東京都)	私のアブ遍歴	杉井杏子(千葉縣)
アマゾンの焼蛤	草田矢津二(京都市)	アブ・ラーゲ研究	神代達男(大阪市)
美女哀話	永井昇次郎(岡山縣)	緊縛に憑かれて	青山透(德島縣)
返らぬ夢	夕月多美枝(兵庫縣)	殘虐の女王	三好靖二(靜岡市)
變光星	相磯秀雄(千葉縣)	マゾ・プレイ研究	和田修(京都市)
ピエロの死	阿部貞夫(德島市)	江戸の男色・現代の男色	渡邊童太(横濱市)
女體開股	鬼矢隆郎(大阪市)	そとみあの愛戯	南川弘(東京都)
赤いカーテン	伊藤春夫(千葉縣)	男色哀歡	太田惠介(大阪市)
美偶魔戀症	梓耕太郎(山口縣)	責めの極致	納富一郎(東京都)
復讐魔	角田鬼三郎(山梨縣)		
暗雲	野尻誠(青森縣)		



読切連載 男性洋裁師

「下穿きだつて、寸法だけは、きちんととりませんと、やつぱり……」などと、お客に云うような事を云いながら、彼は美子のスカートをとり、コルセットをもちあげて、下穿きを露わにした。美子は下穿きは、とりかえたばかりなので、恥かしくはなかつたが……

日夏由紀夫
水沢深雪画

美子は裁断台の上で、「あッ」と、思わず声をあげた。

袖の左右を間違え、同じ型の袖を二つ裁つてしまった事に気がついたので。

「何て事だろう！ よつぽど、どうかしているわ……」

自分で、自分をわらうようにつぶやいた。昔、洋裁学校へ行つて
いる時分には、よくそんな間違いをして、あわてたもんだが、一人
前のデザイナーになり、こうやつて、澁谷に店をもつようになって
からは、裁ち間違えをするような事は、めつたにある事ではなかつ
た。

それを、こんな……。幸い、生地を余分にもらつているから、
何とかごまかせそうだが、本当によつほど、どうかしている。

ア、いのせいかも知れない、と思つた。

それもある。昨日から、はじまつて、何となくホツとした所だが
そのせいで、気分が重くて、いらいらして仕方がないのだ。

——だけど、そればかりではない。

さつきから気になつて仕方がない。

美子のうしろの、生地や、既製服をならべた棚の向うが、仮縫室
になつてゐる。

ガラスの入つた扉で、へだてられてゐるのだが、その扉ごしに、

関夫人の、若やいだ含み笑いの声が時々きこえてくる。

何をしているのだから知らない。知りたいと思わないが、クツク

ツと、もれてくるその笑い声は、いかにも甘つたれた、いやらしい

ものに美子にはきこえ、それが美子の神経に引つかかるのだ。

一体に、良吉の寸法とりは、永すぎる。——と美子は思う。

美子だと、五分もあれば、全部とりおわれるのに、二十分、永い
ときは三十分もかかつてとる。

あのせまい密室のなかで、三十分も、どうやつて寸法を計るのか

見当もつかないが、関夫人も関夫人だ。

「あら、ダメよ。くすぐつたいわ」

「はア、でも、こうしませんと。……もう少し、こつちのおみ足を
……」

「いやですつたら。……まア、乱暴ネ」

「これは……どうなさいます？ つけたまま……」

「脱つて頂くわ。それじゃないと、——春のだから」

「そうでございますね。ちよつとの違いで、シルエットが全然ちが
つて参りますから、どうしても……」

また何の声もきこえてこなくなつて、店の方の物音だけ、いやに
はつきりきこえる。

「奥様は、こんな所に笑窪がお出きになるのですネ」

「あら、そんな所のも、えくぼつて云うの？」

「ぢや、何て云うんですか？ 奥さま」

「さア知らないわ。ただの肉の窪みぢやないのかしら、……本当は
ふとつてゐるつておつしやりたいンでしよ」

「とんでもない。奥様」

「あら、赤くなつてデリーつたら」

わざとらしい夫人の高笑いにまじつて、

「ほら、そうしてお軀をお動かしになると、こんなに窪んで。なん
て魅力的なんでしょう！」

とつてつけたような良吉のお追従がきこえる。

どこを、どんな風にしてゐるのか見当もつかないが、肥つた関夫
人の足もとに、ひざまづいて、何かいやらしい事でもしてゐるよう
な良吉の姿が、見えてきて、美子は、無性に腹が立ち、いきなり、
仮縫室のドアを開けてしまいたい衝動をこらえて、ジャキ、ジャキ
と、裁ち鉄の音をさせていると、ヤツと扉があいて、気のせいか、

真赤に上気した関夫人と、テープ・メージャ
ーをくびに巻いた良吉が出てきた。

「ネ、マダム。……デリーーつたら、ひどい
のよ。云いつけてあげるから！」

と、スカートの脇のフアスナーをしめなが
ら関夫人が、良吉をにらんだ。

「あら、デリーーが、何か奥様に、失礼な事
でもしまして？」

「ええ、とつても失礼なこと！」

おこつていのでない証拠に、コンパクト
のなかで唇の形を直しながら夫人は云う。

「あまり、奥さまが、お美しいせいぢやござ
いませんこと？」

美子も自分の感情をおさえる事にはなれて
いる。

「まア、マダムまで、あんな事を云つて……
…」

二

「じや、この間のお話の方は、宅に話してお
きましたから……」

と、云いおえて、関夫人が表にまたした車
でかえつてしまうと、美子は、急に、冷たい
顔にかえつて、

「鏡をのぞいてごらんさい！」

ボンとハンカチを、良吉に放つた。

ハンカチは、良吉の足元へ落ちる。それを
ひろつて、鏡の前へ行き、口紅をふいている
姿へ、

「うちは、洋裁店ですから、ヘンな真似はし
ないで頂きます」

と、ケンのある切口上で浴びせた。

「嫉妬ですか？」

「失礼なこと云わないで頂戴！私は、店主と
して、云つてい

のです」

「だつて、マダム
——」

「云いわけは結構
です。うちは女
お客さまばかり
ですから、一々、

ベタベタされちや、店の娘に対してもいめい
がつきませんし、外聞も悪いので、一切、へ
んな事はしてもらいたくないのです」

「だけれど、関さんは、うちの上得意だと思
いましたから、……」

言葉つきは丁寧でも、底に、美子をなめ切
つた図々しさが感じられ、美子は一層いらだ
つて、

「だから、余計、失礼なことをして頂きたく
ないのです？」

ドンと、鉄で裁ち台をたたいた。

「でも、しかけてきたのは関さんの方なんで
すよ。私が、こうして、ひざまづいで、ヒッ
プ廻りを計つていると、あの奥さんいきなり
私の頭をもつて、自分の前へぐーつと私の顔
をおしつけたんです。ずいぶん失礼な事する
と思つたんですけど、じつとガマンして、そ
うしていると、……」

「そんな、キタナらしい事ききたくありませ
ん。とにかく変な事はして頂きたくないん
です。下着なんか脱らなくても、寸法はとれる
でしょう？ あなたもデサイナーなら、職業
に対する誇りだけは、もつて下さい！」

「でも、女のお客様たちは、みんな私の前で
下着をとりたがりますから……」





美子はカツとして、裁ちかけの布地を、台の上にたたきつけ、
「うちの大切なお客様を侮辱しないで下さい！ 私はあなたみたいな男見るのも、けがらわしいんです。辞めて下さい！」
と、云つてしまつた。考えもなしに口から出た言葉だが、一たん言つてしまつと、今までやつておいたのが、おかしい位、我慢が出来なくなつて、
「マダム、どうして、そんな事云うの？ 私、こんな一生懸命やつてゐるぢやないの？」

誠心誠意マダムの爲にしているのが分らないの？」

などと、彼が甘えるときの女言葉で、近よつてくるのも、虫酸がはしるように感じ、つと、顔をそむけた。ちやうど、その時、

「マダム、あれなの？」

と浴びせられたからたまらない。いきなり大型の裁ち鋏をとると、彼を目かけてパツと投げつけた。

さすがに、あわてて、身をそらしたし、美子の方でも無意識の間に当たらないように投げたのだらう。鋏は、彼の軀をかすつて、うしろの商品ケースに当り、入つてゐた一枚ガラスをこなみじんにくだいた。

店の方で使つてゐる女の子が二人、びつくりした顔をのぞかせたが、すぐ又、レースのカーテンの向うにかくれた。

三

勿論、良吉がやめても、美子の店は、少しも困らなかつた。

もともと良吉は、半年ほど前に、美子が裁縫師を募集したとき、やつてきた男だつた。

その裁縫師を募集したとき、美子は、勿論婦人服の裁縫師と云えば、女ばかりだと思つ

て、良吉のような男がくる事は想像もしてなかつたので、良吉が店へ入ってきたときはびつくりして、「あ」と云つたまゝ、しばらくは口も利けなかつた。

「私、ダメでしょうかマダム」

良吉は、そんな職業のせい、最初つから甘えた口調で、おもねるように、ボンヤリしている美子にたずねた。派手な格子の上衣をきて、髪の毛は、くしの齒がそろい、身ぎれいだつたが、三十をいくつか過ぎてゐる年恰好では、その身ぎれいさが、かえつてうすつべらな感じを与え、それだけに、女には組しやすい感じだつた。

「ダメつて、私、男のひとが来るつて思つてなかつたので……」

美子は、何となく笑つてしまつた。

「男女の別が書いてなかつたものですから……」

良吉も、ホツとしたようについて笑いなから云い訳した。それできまつたようなものだつた。

「でも、あなた、経験あるの？ 婦人服の方……」

男の服の職人だと思ひ込んで、そうきくと「私、婦人服専門なんです。……」

という話だつた。

話をきゝながら、美子は、ふと、一つの思いつきを考えた。

この男をやとい、片カナの名前を与え、専門のデザイナーとして宣伝する。

これは、ハイカラな、素晴らしい考へだ。

巴里でも、一流のデザイナーは、デイオールでも、ファットでも、みんな男ではないか。

問題は、婦人客が、男の裁断師を忌否しないか、どうかだが、最初つからデザイナーとして權威をあたえれば、案外、女の洋裁師よりよろこばれるのではないか。

こういう美子の商策だつたが、それは見事に当つた。

彼に、眞赤なジャージの上衣をさせ、前髪にパーマネットをかけてちよらせ、名前も、デリー・松木という事にして、お得意の客に一人一人紹介した。

仕事をさせてはじめて分つた事だが、良吉の仕事ぶりは、なつていなかつた。

履歴書には一通りの経歴が書いてあつたがいざ、仕事をさせてみると、殆んど、何も出来ないと云つてよかつた。

洋裁の単語一つにしても、時々とてもない間違ひをする。たとえば、ジレーというも

のが、どういふものか知らなかつたり、フレシスリーブと、キモスリーブの区別が分らないのだから論外だつた。

しかし、それを、おぎなつて、あまりあるのは、客のうけが良い事だつた。

實際、そうでもなければ、とつくの昔にくびを切つていた所だ。

さすがに、はじめは、

「あら、男のデザイナーさん？ 私、恥かしから、やつぱりマダムに寸法はかつていたぐくわ」

など云う客もいたが、そう云う客もなれてくると、平気で、良吉にはからせるようになる。

はじめから、

「あら男の洋裁師なんてちよつといゝわネ。やつぱり、テーラードなのは、男のひとの方がしつかり出来るから……」

など、先へ立つて、仮縫室へ入つて行く勇敢な夫人もいた。

仮縫室の扉は、その時まで、下までとゞくカーテンだつたのだが、それを換えさせたのは、関夫人である。

「女同志なら、計つてゐる所を外から見られても可笑しくはないけど、デリーに計つて

もらっている所を、人に見られたら、何かと思われそうでイヤだわ」

と、主張して、それから、扉になつた。

「デリーさんの寸法は、やつぱり丁寧で正確だわ」

など、扉を出てきながら、赤い顔をして云う女客が多くなり、良吉の寸法はかりの間は、それに比例して延びるばかりか、

「この間の寸法は、どうもうまくとれませんでしたので、もう一度……」

などと、一つの服を作るのに二度も寸法をはかつたり仮縫いをしたりする事もあつた。

お客も、そういう式を喜んでいらしいので、美子も、とやかく云うことも出来ない。

一体、仮縫室のなかで、良吉は、どんな仮縫いをやつているか、美子は、知らんふりをして、のぞいた事もないので、知る由もないが、一度だけ、こんな事があつた。

「マダム。マダムは一体どんな下着をつけていらつしやるんです。たとえば下着きなんか……」

ミシンを掛けている美子の所へきて、何思つたか、そんな事をきいたので、

「失礼よ！ そんな事、答える必要はないわ」と、二十八歳になつても、そんな時は、や

つぱり赤くなつた。

「いや、誤解しないで下さい。私、下着だけは、専門で作つていたんで、とても旨いんです。私の作つた下着をきたら、どんな方でももう他の下着はきられませんか。——それで、おきゝするのですけど」

「私、レナウンの既製品をはいているわ。それで、十分ですけど……」

「それはいけません。いやしくも洋裁店のマダムが、そんな事じゃ困ります。私に一つ作らせて下さい。本当に穿き心地満点のピツタリしたものを作つてごらんに入れます。やつぱり洋装は下着からで、もう外国ぢや、全部注文です……」

など、知つていのか、知らないのかベラベラとしやべりながら、美子の手をとるばかりにして、仮縫室につれて行つた。

美子は、斷わるのも面倒くさく、それに、一体、そんな自慢を云うなら、どんな立派な下着をつくるのだらうと、半分は彼の弁舌につられて、仮縫室へ入つて行つた。

「下着きだつて、寸法だけは、きちんととりませんと、やつぱり……」

など、お客に云うような事を云いながら彼は、美子のスカートをとり、コルセットを

もちあげて、下着きを露わにした。

美子は、下着きは、とりかえたばかりなので、恥かしくはなかつたが、厚いと云つても富士絹なので、透けそうで、不安だつた。

洋裁屋同志なのだから、と思うのだけど、それでも男の顔の前に下着きを出すのは、勇気が要り、素人の女客は、何て大膽なものなのだろうと今更おどろいた。

「まず、こゝを計り……」

胴のくびれに、メーヂヤが廻り、「こうやつて、一つ一つはかるのです」

そこから、ヒップのふくらみに、何度か廻り、

その次は、もゝのつけ根の太さ。

またぐりの深さまで、はかられた。

男の指が、その辺に、すつとふれる度びに快感とも、気味悪さとも云えるものが、ズンと走つて、美子をふるえさせた。

自分も普段、女客のその辺に、何気なくふれることもあるが、その度びに、こんなに感じるものとは知らなかつた。これは、氣をつけねば——と思つたが、良吉は、まるで、故意にやつているように、何度も手をふれてはかり直し、

「ホラ、このレナウンの下着だと、こゝがい

くらか、たるむでしよう？ 私がつくると、こゝがこの優美な曲線にぴつたりと合つて、どんな柔かいドレスをきても表にひびかないし、第一、はいた心地も満点なのです」など、掌を当てたりした。

色々な型と特長をもつたパンティを半打。生地は、ナイロンと富士絹をつかい、作つてくれたが、そのパンティを作つておるとき良吉は、まるで、偏執狂のようで、食事もとらず、問いかけても返事もしない有様だつたら、美子は、有難がるより、気味が悪くそのときはじめて、良吉を、おぞましく思った。だから、出来上る途中で、何度も仮ぬいをしたが、美子は、

「もう、いゝ加減になさい！」

と、おこつて、ろくに軀を、あずけなかつた。それでも、良吉は、汗を流すような熱心さで、

「どうも、この曲線が、うまく行かない。もう少しダーツをとつた方がいゝかな」

など、ひとりごちては、作りなおしていた。

今はいている美子の下穿きは、そうして良吉が、凝りにこつて作つたもので、さすがに穿き心地はいゝが、そう思うと気のせいかな、

何だか、良吉の汚れた手に包まれているような思いにとらわれる。

——そんな事で、良吉が仮縫室のなかで外の客たちに、どんな態度をとつたか、おおよその見当はつこうというものである。

たしかに、あの男は、ヘンな所があつた。そう云えば、三十いくつになつて、結婚もせずに、女の肌につける下着や、服ばかり、作つておる男なんて、少しおかしい。私の下着をつくつておるとき、眼の色なんて、完全にヘンタイだつたと、美子は、今更のように、ぞつとした。

四

美子の店は、また女ばかりになり、半年前の清潔さをとりもどしたが、それと同時に困つた事が起きた。

と云うのは、責任裁断デリー・松木の名札が外されるのと同時に、目に見えて、お得意がへり、注文が少なくなつた事だ。

それが、松木のとつた客ならとも角、その前からのお得意さえ、注文してくれなくなつてしまつたのは、どういう事なのか美子には分らなかつた。

「寸法をとらせて頂きます」

と美子が云うと、大抵の客が、

「デリーは？」

ときく。

「はア、ちよつと、都合の悪いことがあります……」

と云うと、明らかに失望したように、「そう」と、云い、

「寸法は、前にとつたのでいゝわ。それでやつておいてよ」

など、いかにも面倒くさそうであつた。だから店は、良吉が入る以前にかえつたのではなく、それより悪くなつてしまつたのだつた。

何よりも一番こまつたのは、関夫人の態度が一変した事であつた。

美子は、店の造作をかえて、モダンな感じの店とし、生地も豊富にとりそろえるために資金の一部を関夫人から出してもらつたように話してあつた。殆んど、承諾していたのに、最近になつてそれを突然、断ると云い出したのである。

「でも奥さまが出して下さるというので当てにしておりましたのですが……」

と、いくらか、怨ずるように美子が云うと「えゝ、私もそう思つただけど、——ハッ

キリ云うとネ、デーリーさんがいなくなつてしまつたら、この店が、そんな流行るかどうか、私には分らなくなつてきたのよ。いわばデーリーさんが居るといふ事が、この店の特色だつたのですから……」

関夫人との仮縫室でのイチヤツキが原因で良吉とケンカした事を知つてでもいるような敵意のある態度だつた。

あの、うす気味の悪い、ヘンタイじみた良吉のどこに、女客を引きつける魅力があるのか、女としての経験の浅い美子には分らなかつた。

女と云うのは、一方で花を愛したり、美しいものにあこがれたりしながら、その半面で、チンを可愛がつたり、猪をいたぶつたりする残忍な、動物的な面がある。

良吉は、いわば、その女の暗い、恥かしい面の象徴のようなものかも知れないと遊谷の表通りの、相変ら

ずの織るような人通りをながめながら、美子の心は暗かつた。

五

その夜のことである。

通いの店員やお針子をかえしてしまふと、美子は、春めいた風にさそわれて、近所の風呂屋に出かけた。

美子は、櫻が丘にアパートの一部屋をかりて、毎日そこから通つてゐるのだが、こゝ二三、ある洋裁雑誌の懸賞に応募するデザインを考えるために、店にとまり込んでいた。風呂で髪を洗つたので、ターバンのようにタオルを頭に巻いた美子が、店の裏口から入ろうとすると、カフェーの裏口と向いあつたその暗いすみに、何かうずくまつていて、美



子の姿を見ると、ムクムクと動いたから、彼女は、ぎよツとして、

「だれッ！ そこにいるのは！」

と、それでも勝気にきくとがめた。するとその人の影は、たよりなげに、ふらふらと立ちあがつて、

「マダム。……私です。……デリーです。許して下さい」

そう云いながら、彼女の方に倒れるように近よる。美子は、ハツとして、一歩さがり「一体、どうしたの。……もう、何も御用事はない筈よ」

裏口のドアに、カギを差込みながら、とがめた。

本来なら、だまつて、入ってしまったてもいいのだが、さすがに、優しい女心は、そんな仕うちが出来かねた。自分がかえるのを、くらがりに、うずくまつて待つていたのかと思うと、あまりに、あわれである。

酔っているらしい良吉は、いきなり、地面にガクンとひざを突くと、

「マダム。また、私を働かして下さい。……おそばで働らかして……私、マダムのことが忘れられなくつて。……マダムの爲なら、どんな事でもします！ どうか、棄てないで」

美子の、湯上りに匂う、生あたまかい裸のスネを、両手をひろげて、かゝえると、そのまゝ、泣き聲を出しながら、叫んだ。

「まア、外聞が悪いから止して！ そんな、棄てるの、棄てないのつて！」

美子は当惑して、良吉の腕をとつて起そうとするが力の入らない男の軀は、鉛のように重く、

「マダム。私、どんな事でもしますから、おそばに仕えさせて！」

男の涙が、気味悪く、ふくらはぎに伝わつておちていくので、

「とにかく、近所の人に何と思われるか分らないから、内へ入つて！」

腹立たしく、男の肩をつくと、やつと店のなかへ入れて、内から、カギを掛け、カーテンを引いた。軀が、汗で冷たくなつているのが分つた。それ位、近所の人に対して恥しかつた。

六

勿論、それは、良吉の描いた狂言だつた。そういう狂言を演じる爲には、男としての見栄も誇りも棄てなければならぬから、だれでも、こんな事が出来る訳ではない。しかし

良吉のように、棄身になれば、当惑するのは女の方で、女を当惑させれば、この狂言は九分通り成功と云えるのである。

女が身をまかせるのは、愛からばかりではない。時には、単なる当惑からの時もある。

美子は、店のなかに、良吉を引入れたものの、男の軀をあつかいかねて、

「一体、どうしたの、ちゃんと話しましょう。……ネ、あなたが、働いてくれるのは、結構です。お店の爲にもなる事ですから」

と、まつわりついてくる軀を、押かえして自分との間をあけながら、

「たゞ、……女のお客様に変なことだけはしないようにして下さい。主人である私が困りますから」

と、かなり下手に、かんで含めるように云うのだが、その意味をとりちがえたのか良吉は、

「私の好きなのは、マダムだけです。マダムがしろとおつしやれば、床もなめます。……外の女客に、サービスするのは、お世辞からなんです。私、本当は、いやなんです。汚らわしいんです。女なんて、みんな、ケダモノみたい。……でも、マダムだけちがいます。マダムは、美しく、気高くつて」

と、くどくど、かきくどきながら、美子の掌に、涙でくちやくちやにぬれた顔をおしつけた。ハダシでいる足の指を一つ一つ犬のようになめたりする。幸い、湯上りだから、足の指は、バラ色にすき通つていて、なめられても恥かしくはないが、美子は、この奇妙な愛の告白に全く当惑して、どうしていいかわからなかった。

良吉は、女なんて、ケダモノみたいだと言うが、美子にしてみれば、そうしている良吉こそ熊か何かのケダモノのように思え、とても人間の男とは思えなかった。

「ネ、もう、帰つて！ 私一人なんですから。」

——そして、明日から、またきて下さい——

そう、かなり、きつく云つて、ソファの上から立ちあがろうとした。

すると、じゆうたんの上にうずくまつていた良吉がいきなり、彼女の両足をぐいと引き起すように、かゝえたので、ハヅミを喰つて「アッ」

と云つて、腰をあげかけたソファの上にまたドスンと落ちてしまった。

その女主人に、飛びかゝつた男の軀は、いままでの、ダラダラした仕草とは別人のように素早く、

「何をするの！ 承知しませんよ。……失礼なことしたら、許して上げないよ」

と精一杯に叫ぶ、美子の口も、男の酒くさい口にすぐふさがれた。

美子は、狼狽した。

大体、酔つた男を、女一人の、夜の店に入れた事からして、乱暴だつた。わざわざ自分から、まねいたと云えるのだ。

だが、そんな、うかつな事をしたのも、それまでの良吉の態度が、いかにも女々しくてそんな事をしように思えなかつたからで、それに、だまされたのだ。

二人は、しばらく、ソファの上で争つた。

スタンドが倒れて、灯りが消えると、あとは、向いのホテルのネオンサインが無言のまゝ争つている二人の姿を、赤と青に染めちがえた。美子の白いふとももが、ソファのはじめに、ぬつと延ばされ、それがしきりに、けるものをさがしていたが、やがて、力がぬかれて、ぐつたりと垂れた。

そのふとももに、からまり、やがて、床へおとされた白いものは、良吉が縫つたパンテイらしい。ネオンに照らされると、夕やけにそまつた白い雲のように見えた。

カーテンを引いた表を、自動車の警笛がう

るさく行きかう時刻である。二人は、死んだようになつて、この自動車の音をきいていた。

それから一月ほどたつと、美子の店は、新装され、新しい春ものの生地も、豊富に店の奥につみあげられて、生気をとりもどした。新しいデザインの人形が飾つてあるウィンドには、デリー・松木、責任裁断、という金のネームプレートが置かれてある。

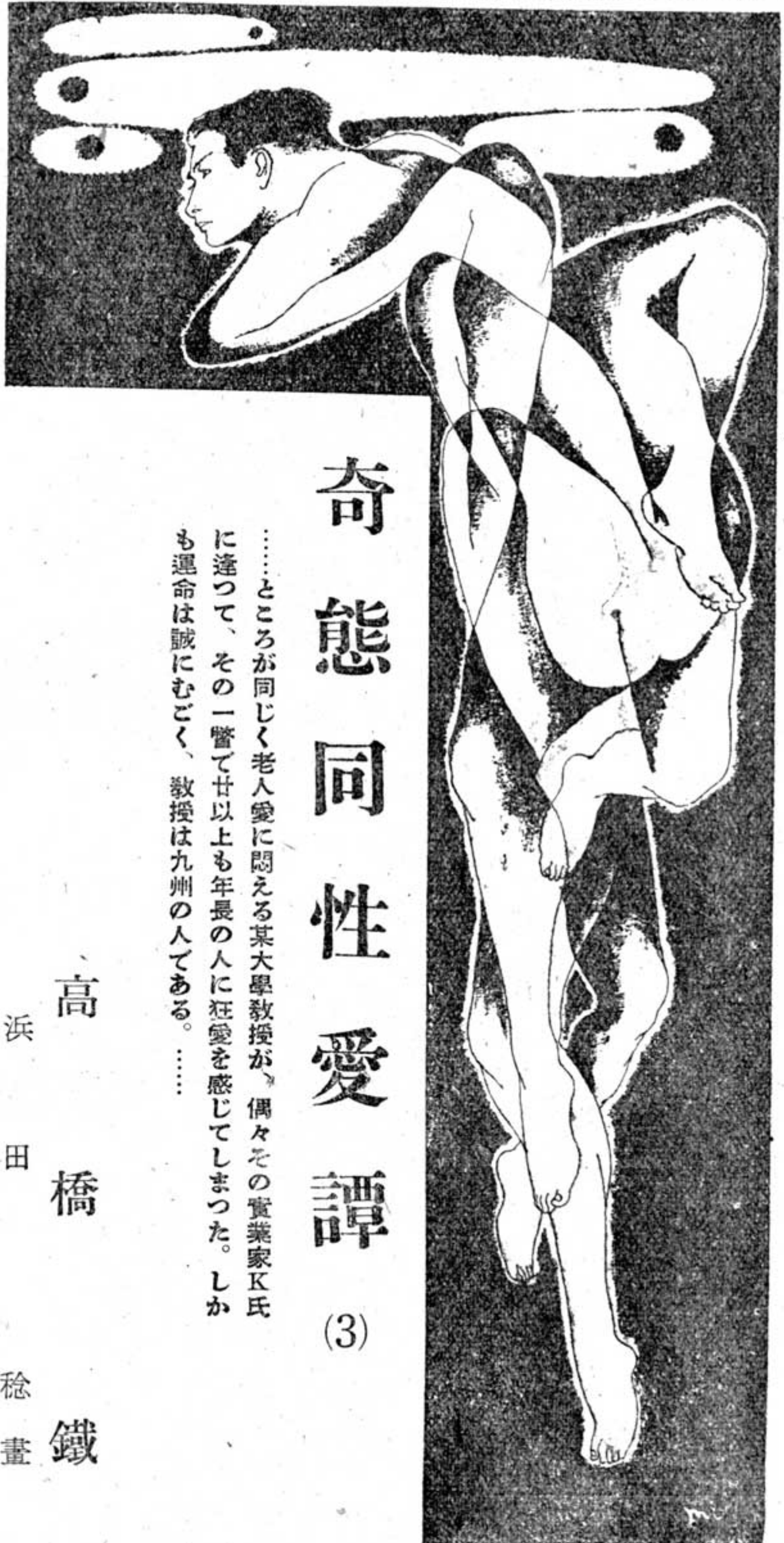
デリー・松木が、海外デザイン研究のために外遊するという噂もある。……主に外国婦人のしている下着の研究だそうだが。

(この同終り)

愛 読 者 通 信

私は貴誌を得て明るい道を見出しました。今迄サヂストである女性に求めようもなく、物足らなく思つていました。私は二十歳の健康な男性で、容貌、体格共十人並です。強烈なマゾヒストではありませんが、二十歳から三十歳位の太った御婦人に馬乗り、叩き、撥り、縛られてみたい気持で一杯です。どなたか理解ある御婦人を紹介して下さいませんか。

(横浜 S・T 生)



奇態同性愛譚 (3)

……ところが同じく老人愛に悶える某大學教授が、偶々その實業家K氏に逢つて、その一瞥で廿以上も年長の人に狂愛を感じてしまった。しかも運命は誠にむごく、教授は九州の人である。……

高橋 鐵

浜田 稔 畫

1. 女から逃げる男たち
2. 少年愛
3. 老人を慕う手記

女から逃げる男たち

普通の性発達をとげた男心では、女の黒髪とその匂い、もり上った乳房、豊かな臀つき……などは敵しがたい蠱惑であらう。そ

して肉の円柱と謳えられる双腿の天井に秘められているヨニは殊に「性崇拜」の奥の院とも云えよう。

ところが、同性愛の人々にとっては、それが、それあるが故に女はいやだと云うのである。「女の髪の毛の匂いを、満員電車なんかの中でかきされると、ゲツと吐きそうになります」とか、「我慢して彼女の牀にさわつてみましたが、ぶよぶよした触感で、氣味が悪いだけでした」とか云う。

ヨニをふと見て、「幽霊みたいに恐しい印象をもつた」と云う人も少くない。又、やむを得ず嫁さんを貰つたが、「泥沼のよう」だつたとか「爬虫類のようなぬめぬめした感触」だつたとか云つて、初夜からイムポテンツに陥つた人も非常に多い。結婚生活をうまくこまかしている人でも、実は細君の体臭を、嗅がないように、乳房や臀部・性器などへさわらないようにと避けながら、彼女が男だという幻影を描きつゝ夫婦関係を続けている人が多いものである。

そういう人は、大概、幼少の頃にふいと女陰をみせられたり触れられたりしたその時、その妖氣にあてられたのだと云える。

しかしながら、高等生物の原則として、人間も亦、凸と凹との本能をもっているから、男は皆、結局は、凹の刺激を求めざるを得ない。オナニーや相互自慰に、「手のくぼ」とか太腿を求める他、肛交・吸茎など、皆、男の中の凹（体孔）によるものではないか。

こうしたホモ手段は、云うまでもなく一般的なものだが、私は唯一例だけ、玄妙な報告に接したことがある。

それは、もう廿餘年もホモの巡歴を経て来た或る社会的地位の

高い老紳士が旅行先で深い契りを結んだという同性（同じく教養の高い人らしい）の懺悔である。

その二人はホテルの浴室で、窓外の景色を見おろしながら互いに抱き合つてこう語つたという。

「私はあなたのような立派なのを持つている人が好きなんです。自分が精神的にも女みたいな立場になるのは嫌なんです。又自分が男性の立場で相手を女性のような立場に置くのも嫌いなんです。あく迄も男と男でつきあいたいんです。それが一番美しいの同性愛ですよ」

「確かにそうですね。女みたいなのが欲しければ女を相手にすればいいわけですからね」

「女は穢ないもんですが、男でありながら女の役目をする男はもつと穢いですよ。我々美を愛する人間にとつては問題ぢやありませんね」

この人達の愛のすべは、フェラチオやバック・ゲートではなく箸のように二人を一つに合せて透らすのである。

そうしているうち、相手は眼下の風光に酔つたように、語り出した。

「私は旅なんかでいゝ景色を見て、あゝ、いゝなあと思うと、その景色に惚れちやつて性慾を感じるんですよ。山などを歩いているとき、景色がいゝと昂奮してしまつて、よく古い大きな木に穴がありますね。その穴で泄らしちやうんですよ。北海道へ行つた時なんかは、雪景色に惚れて、雪へ杖で穴をこしらへて……。信州へ行つたときは、林檎畠に赤い林檎が美しくなつて見えるのを見

て、高い枝から取つたのをナイフでえぐつて真ん中へ穴をあけました」

「その林檎は——どうしたんですか」

「捨てましたが、しかしその林檎が可愛くなつて、何だか愛する人のような気がして、捨てゝからも未練が残りましたね。京都に苔寺というのがありますね。西芳寺というんですが、あそこの寺の、一面に敷きつめた緑色の苔にすっかり惚れまして、あの柔かそうな厚ぼつたい苔の中へと思つて実に去り難い思ひでした。人が見ていましたのでそんな真似も出来ませんから指で押してみただけで我慢しましたが、あそこへもう一度行つて想いを遂げたいと思つてますが」

此の人たちは、女の性器は元より、男の口腔や直腸粘膜もいやだという。そして男同士のファルスを合せて絶頂に達する。

しかも風景に惚れるという。大地というものは世界中、大抵、女の身体のシムボルである。だから本物の女性器はいやだが、大自然の穴にはあこがれているのであろう。

「勤王」の志士橋本左内は、木花咲耶姫を祭る富士山に登り、その山嶺から噴火口の大穴に放尿して「我、咲耶姫と交れり」と叫んだそうである。

昔々の「今昔物語」には、京から東へ旅をしている男が、路傍の垣のうちの蕪をとつてそれに穴を掘つて泄らしたという話がある。その蕪を喰べた少女が妊娠し、孕ませた男の名を打明けてくれと父母が云つても、勿論判らない。その数年後、旅人が再びそこを通つて、連の男に数年前のことを打明けているのを聴き、娘をめぐつて貰つたという噂である。

兎に角、「ホモ」の人は、殆んど皆、女陰を薄気味悪いという。それを見たり想像したりして「羞恥嫌悪の念」を感じる人や「性慾を刺戟興奮され」ない人は、おそらくホモだと云つてもよい。結婚などする「資格」のない超男性である。

日本のハズレから隔月ぐらゐに私を訪ねて来られる美青年がある。彼は大学で美学を専攻した知性的な青年だが、たゞ「玉にキズ」といえば、異性嫌悪症（純同性愛の大きな特徴の一つ）に憑かれていたことだつた。

夢の中でも、真ッ裸な男に抱きしめられるとか、互に弄根をすとかいふのをみて、夢精する。オナニーもそういうことを頭に描いてする。女性など何とも感じない。夢にも見たことはないと言ふ。

しかし、御両親はまさか、そんな精神傾向とは勘づかないので、さかんに嫁を探して、死ぬより辛いと訴えられるのであつた。私も随分、時間をさいて自己分析を導き、すくなくとも「両性愛」になるようにいろいろな方法を探つて上げたものである。

ところが、最近、来訪されたとき

「もう結婚してみてもいいのではないでしょうか」

と云い出すので、きいてみると、其後、両親が奨める一人の娘さんときあつてゐるうち「少くとも精神的には愛せる」と思へるほどになつて来たと云うのである。

そして、も一つ——最近の夢には、裸の男ではなく、みずみずしい全裸の女性が彼を抱きしめるところが多く、それで興奮の極に達するようになったと云う。たゞ、下体をさぐつて行くと、その裸女にはヨニでなく、ファルスがある。そこで眼が醒めること

が多いと云うのであつた。

これはたしかに大変化だと云えよう。しかし、実はまだ「女陰恐怖」男根羨望」が残っているのである。そう思つて、女性器の美学をさまざまに教えているところである。

実際、純然たる同性愛の人には、夢をきいてみるとハッキリ診断出来るものである。彼らは必ず、男の裸身と男根、或いはその象徴的なものをみて夢精する。そうでない人は純ホモではないと



云つてもよいのである。

少年愛

同性愛の人が求める対象は、非常に限定されているものである。そのために、彼らの悩みは一層深みへ行く。

特に一番多いのは（約六〇％）、——十六、七才から廿才ぐらいの少年を愛撫したい、愛撫されたいという苦惱であろう。

そのために、中学や高校の先生や校医、時には学
校前の文具店や書店の経営に入つてゐる方さえ相当
居るらしい。

たゞ、そういう少年に「ホモ」を教えてしまふの
は大変な罪惡だと云つて、心の苦斗に悶えてゐる場
合も珍しくない。

それには、無論、少年達の社会苦も知らない清純
な心を愛するからでもあるし、成人して行くピチピ
チした肉体も美の焦点でもある。が、最後には、や
はり、完熟しかけてゐる性器に魅かれるのである。

満員電車の中、映画館の闇、銭湯での接触など、
多くの手記にはありとあらゆる「痴漢」的行動がざ
んげされている。

しかし、揃いも揃つて少年愛を求める人は、少年
達の春草のような体毛と、半包莖への興味に燃えて
いる。

「もう明日にも成人になりそうな、大きさは成人
とあまり変りない形……」（A、原文のまゝ）

「翻転してやればフランス全部が見えるそれは……あゝ私は鬼畜でしようか。それとも彼等を大人にしてやるリーダーでしようか」(B原文のまゝ)

少年愛には、こういう心理が強いらしい。

それには、自分自身のその頃の何かの印象が潜んでいる筈である。

けれども、それと同時に、今にも綻びそうな蕾を自分の手で今開かせてみたいというような通有の欲求が含まれているに相違ない。

年長の女性が少年のを弄んで、童貞を奪つたり、そうでなくとも Ejaculation をおこさせて楽しむというような事実は、世界中にはびこっているが、これこそいゝ証拠であろう。

つまり、同性愛ばかりでなく、女性の中にも、共通な少年愛があるからだと云える。

中には、同性愛・異性愛共に、「完全」な包莖のものゝほうがいゝと云う「異常性愛」がある。——これは、まぎれもない変痴崇物症と云えよう。

老男根を慕う手記

こうした「対象」の不思議な選び方を調べてみると——まず一番多いのは、前に記したとおり、「少年」であるが、次には、同年輩ぐらいの者、それから、自分より五つか十ほど年上の者という風に、厳とした「趣味」がある。

ところが、中でも奇態なのは、六、七十才以上の老人だけにあこがれているというタイプ。

これは、同性愛の場合だけではなく、若い青少年が妙に老女を愛したり、若い女性が老爺にウツトリするという風な異常愛として現れて来る。老人愛 (Presbyophilia, Gerontophilia) という学術名さえあるくらい。

だから、特にこの場合は「同性・老人愛」とでも云えよう。光りを放つような禿頭をみると、その人のファルスが聯想されてたまらなくなるといふ人もあるし、真白な髪や髭に敵しがたい魅惑を抱く人も少くない。

教養高い或る紳士は、(たとえば、ハッキリした名をあげて失礼かも知れないが) 文楽の吉田文五郎老がお姫様の人形などを使っている姿をみてみると、九十才に近い彼の袴の下肉体が想像されてならぬと告白された。

又、「敗軍の將」寺内將軍、探偵小説の大御所江戸川乱歩、或いは歌舞伎の大御所中村吉右衛門、文壇の長老長与善郎、志賀直哉などの風貌に欲情すると云うホモ党もある。

上京する度に私を訪れて来られる北海道の五十三才になる実業家がいます。彼は、それより十ぐらいの上、つまり、六十三、四才程度の老人と、一生涯、「同性生活」を送りたいという悲願を抱いておられた。

ところが、同じく老人愛に悶える某大学教授が、私のところで偶々その実業家K氏に逢つて、その一瞥で、廿以上も年長の人に狂愛を感じてしまった。しかも、運命は誠にむごく、教授は九州の人である。

彼は、距離を越えて、大分、ラブレターを送つた。そして遂に悶々の情おさえたがたく、(私にも内密で) 九州から北海道まで訪

ねて行つたものである。

その結果、「実は、自分も自分より年長の人だけしか愛せないから」とハッキリことわられ、貴君はまだ年が若いのだから何とかして一日も早く異性を愛せるように努力しなさいと忠告された。そのとき——札幌の雪の宿で涙を噛みしめていた教授は、しばらくして、顔をあげ、いきなり相手の手に縋つて叫んだという。「では、誠にぶしつけですが、貴方のお嬢さんを僕に下さらんてしようか。そうすれば、僕は、お嬢さんを貴方だと思つて一生愛を捧げて行きます」

しかし、この真剣な（冷く云えば滑稽な）願ひも直ちにキツパリ謝絶されたのである。

このことを後に報告しに來られたK氏は、又、真剣な顔で、「ねえ先生、可愛い娘を同性愛の男なんかにはやれるもんですか」と云つた。——私は、その深刻な矛盾に、実のところ、失笑しかけた。が、直ぐホモの人々の若悶に、暗然としたものである。

しかし、老いた肉体との異妖な秘戯を赤裸々に語られると、筆者のように冷い科学者でも、時には淡いトキメキを感じることもあるものだ。例えば、その一つの手記——

Z氏は、富裕な老紳士であるが、自分の「心の病気」はもう癒らないとひとり諦め、寸暇を得るとホモの天国を遍歴しているという。そして匿名のまゝ彼の日記を私へ送り続けていられる。

街で、老いた気品のある浮浪者（フナバシ）を拾つて、その老人に帽子から洋服、靴まで新調してやつては温泉へ同行したりする「趣味」である。

そのZ氏が、もう廿年近く前、某地へ梅見に出掛けた時——「ふ



狂える妻を縛りて.....

わが秘めたる記

私の感想は専門醫でないから粗雑な観察であるが、狂女は寒中でも裸體になつて寒さを感じない.....発作が起つた時は、縄の痛さも鞭の痛さも更に感じない.....。

被虐被縛の実験談という事になると、私の経験は極めて少ない。実の所を云えば、責めに興味を持つて写真を撮つたり、写生をしたり、絵のコレクションを始めてから四五十年になる。

其間、当局の彈圧を受けたり、地獄の一丁目である検事拘留十日、豚箱へ投げ込まれた事前後二回。こんな犠牲を拂つた私は専門雑誌が現れようとは思ひもよらなかつた。このようなわけで昨今は無上の幸福を味つてゐるが、それにしても、「責の実験」という事になると、極めて少ないというより絶無に近いので、私の体験記は至つて線の細い面

白く無いものにならざるを得ない。

事實を赤裸々に書けば、人道上忍ぶ可らざる事もあるので未発表にしておいたが、道徳標準が昔と違つた現代に於ては、左のみ私を攻撃する人もあるまいと思われるので、思い切つて、私の女房が発狂して死んだ際に実験した責の話を書く事にする。

私は女房という名称が大嫌いだ。妻という名までに止



めたい。女を自分のものにしたという、妻という名称でいい。友人正岡容君が花園歌子と結婚した当時、「女房よりもよろしく申候」という様なながきを度度頂戴したが、丸鬚の大嫌いな私は、女房という名を好まない。それはとに角として、私の第一の妻は、私の責

の研究と趣味に一致せず、当才の女子を残して別れてしまつた。第二の妻は、責の研究をする便利上使つていたモデルで、同僚約十年。食客に置いてやつた文士の卵、泉川某といふ仲になつたのを感附いた私は、黙つてもおられないので、荷物を持たして離別してしまつた。此間の消息を誇大に書いたのが鈴木泉三郎作「燐刑」である。

雨 晴 藤 伊 文 と 繪

「燐刑」は大正十年五月、早稲田文学に脚本として掲載され、翌六月帝国劇場に上演。主人公津村有年という画家（即ち小生）は、市川弘升事鈴木邦三が扮し、私の妻であるキセという女は、くにとという名で、帝劇女優鈴木福子が扮した。作者が鈴木で、役者二名が鈴木であるといつて評判であつた。

「燐刑」の上演は僅か二日間であつたが、當時としては女を縛る事が珍らしかつたと見えて其評判は非常なもので、変態性慾画家伊藤晴雨の名は一度に海門に拡まつてしまつた。嗚呼、吾ながら呆れざるを得ない。

此時、泉川に扮したのは、築地小劇場出身の東屋三郎であつた。演出は仲木貞一氏で、舞台装置は井上洪範氏だつた。人の悪い洪範氏は、私の壞れかかつた画家室をソツクリ写生をして、其ま舞台に移したので、幕が開くトタン、私の知人などはアツと云つた程写實的な装置であつた。

この火あぶりは、大正十三年五月、再び五月信子に依つて有楽座に上演され、十五日間超満員の大入を続け、五月信子はこれ売り物にして、日本全土、私の宣伝をして呉れたのは、有難いやら迷惑やら、何が何だか判らない。

其頃、少し云いにくいというより書きにくい事であるが、私は妻の妹に恋をしていた。妹はノブという名で、これも東京美術学校のモデル（コスチューム）であつて、鍋木清方氏の傑作「試みるゝ女」（切支丹踏絵の遊女の絵）のモデルになつた女で、妻は色が黒かつたに反し妹はすこぶる美しく、大塚へ芸妓に

でたり、清元の師匠になろうとして延壽大夫の門弟になつたり、家には沢山の狼連の男弟子がワンサと来るといふ美人であつたから、私は最初から此女に食指が動いていたのであつたが、姉と出来て了つたので妹は引下つてしまつた。一石二鳥の中一鳥が去ると、釣り落した魚は馬鹿に大きく見えるもので、妹に夢中になつてしまつたから、姉である妻が不満を持つのは蓋し当然で、これが数年の後、同居人の泉川某と妻が相愛の仲になつてしまつた原因でもある。馬鹿を見たのは私で、ア

プもハチも取らずに妻は男に呉れてやつちまつた。というより、妻の方でスタコラ追込んで行つてしまつた。

さてこうなると淋しい。モデルの妻は、吊し上げたり雪責にしたり、元來がモデルであるから、雪の中へ裸体で転がしても、衆人の見ている中で全裸体にしても平気で、写生も

出来れば写真も撮らせる。「賣の話」という現在では珍本になつてゐる神田神保町の阪本篤という本屋から出した本の口絵の賣の写真の如きは、今でも珍品とされているがいうまでもなく、妻をモデルにしたものである。そうした、自由に使えたモデルの妻に追いつられ見ると、物心両面共に淋しい。妹との恋は成らず、妻には逃げられる、貧乏のドン底と何とも云えない悲観の極。カフェーの女を探し廻つていた。

此頃は、私の町はカフェー盛んなりし頃で約半歳のカフェー通いの後、ようやく、これはと思う女と知り合うことが出来た。これが私の第三の妻で、即ち、本題に示す狂人の妻である。妻を縛つて、折檻の實驗をした當時を顧みると、少々氣狂いじみたように思われるが、その体験記を次に記すことにしよう。

こんな事を書く場合、女というものの価値と、人間の道徳というものを、全く度外に置かなければ正直な告白は出来得ない。本記事を見、私の道徳性を云々される人があれば、それは私が自己の趣味の爲に道徳を踏みにつたという迄の事であるから、見方の如何は必ずしも問う所でないと考えている。

私がカフェー・マルミの前を通り掛ると「おじさん」と、冊前後の女が私に声をかけた。私は女をからかうつもりで飲みに入つた。これが始まりで、女は私の家、散々破れた家

まづの

スーフ

ブーッ

う

へ妻として這入つて来た。女には又美しい妹と母親があつた。母親は姉の身が決つたのに安心して、郷里の弘前へ歸つて行つた。私の責の實驗は、又此の第三の妻に加えられた。

寒国に育つた女と

いう事と、容貌が私の画に適している云わば私の画になる顔で、年齢も亦相当している。係累も少なく性格も到つて温順で、粗放な私とはおよそ正反對の女であつたから、私にとつては実に忠実な申分のない妻であつた。第二の妻が無精であつたのに引換えて、綺麗好きで始末屋で貧乏を苦にせず、先妻の子供を自分の子供の様に可愛がつて面倒を見て呉れた。申分の無い女であつたが、好事魔多しの

譬の如く、同棲三年にして意外な事件に遭遇したのであつた。此時ばかりは、物驚きをしてない私も途方に暮れてしまつた。それは、突然其貞淑なる第三の妻が発狂して仕舞つたのである。

昭和六年の四月。紀州めぐりの写生旅行をするために、東京駅へ向う途中、妻の言葉に妙なアクセントがあるなとは思つたが、まさか発狂と迄は気がつかなかった。紀州を七日位かゝつて一週して大阪に歸つて来て、千日前に落成したばかりの大阪歌舞伎座の楽屋に私の弟子になつている市村羽左衛門を訪ねると、「先生東京からお手紙が参つております」と、一通の封書を出された。封を切つて見ると妙な文句が並べてあるので、コイツは少し変だワイと直観したので、急いで、取るものも取りあえず、帰京して見ると、留守中に完全に発狂して、私の秘藏している絵や写真を座敷一杯に散亂させているのである。其中で今でも惜しいと思うのは、鎗木清方氏の青年時代の作で、金色夜叉の口絵の原画である。これは、清方氏も見て、表装の事など相談に乗つてくれたもので、其他にも支離滅裂に引き破られた珍書も少なからず、画室一杯に山積された古書の山を見て、暫くは呆然として



なす所を知らなかつたが、放つても置けず、精神病院に入院の手續きをとつて、友人の帝劇幕内主任伊坂梅雪君の世話で、当時有楽町の日劇前にあつた更科の主人から百圓という大金を借りて、市外板橋區にある武蔵野病院へ入院させた時は、前途全く暗タンとしてカフエーの女を身元調べもせず妻に迎えた私は軽卒であつたと思つた。妻の前身が何であつたかも知れず、ひたむきに女を求めて、縛る事ばかり考えていた。唯美しいモデルが慾しかつたので、賣場の写真を撮らせるのに柔順な女ばかりを求めていたので、求める者が与えられた事は事実であるが、余りにも残酷な結果を産む事になつた。妻の前身は弘前の豆腐屋の娘、迄はよかつたが、其先きがよろしくなかつた。怠け者の兄と家の貧しい爲北海道室蘭市幕西遊廓に娼妓となつていたという事が後になつて判つた。

第一の妻は手の附けられない程の娼婦で吝嗇、第二の妻はモデル商売で無精な女、第三の妻は田舎の女郎上りとは、揃いも揃つて下らぬ女ばかりを相手にしたもので、人生の最大不幸である。私は今でも文金高島田に大振袖の女と結婚の真似事でもして見たいと望んでいるのである。誰か云う「鏡の無い国でも

あるまい」と。鏡は私の若い心持ちを写さなと思つてゐる。狂つた妻の病院生活約三年私は入院費に追われ通しであつた。到底全快の見込み無しというので病院から退院させ画室を病室に改造し、妻の母である六十に垂んとする老母を郷里から迎えて看護して貰つた。

そんな時にロクな面の描ける筈は無い（勿論今でもそうであるが）技術がグン／＼下つたのが自分でも判る位である。此間に、妻を縛つて撮影した沢山の写真を、妻の母が発見してしまつたから、大変な事になつて仕舞つた。

妻の病氣は痴呆性のもので、梅毒から来たものである……という医師の診断である……とすれば、娼妓が遊客から受けた梅毒で、私と交る以前のものを私が引受けた訳である。間抜けな話であるが、事ここへ到つては、三年添つた妻はやはり妻で、死ぬまでこの狂妻を抱えていなければならぬ。それにしても此女を雪責にして撮影した写真は実に高価な犠牲を拂う結果になつたのである。何故かという、弘前に生れて何の教養も無い豆腐屋の婆サンが、数多き責めの写真を見た時の驚きは、忽ちに怒りと変じて仕舞つた。妻の母

であるこの老婆は、この写真の何枚かを、妻の妹がかつて小間使として奉公していた石郷岡検事の処へ持参して、婦女虐待の告訴を提起する様懇願した。そこで石郷岡検事は小間使をしている内に特別な関係ある妹の母の懇請を容れて、その証拠調べに乗り出した。

この事がどういふところから洩れたか、私のもとにひそかに知らせて呉れた友人があつた。その人は私の親友額田六福君の舞台社の同人で、岡本綺堂門下の寺田鼎君である。寺田君は後に劇作家川村花菱氏の女婿となつて夭折した人で、この寺田君が事件を友人の検事長谷川劉氏に釈明して呉れて、若し石郷岡検事が私情を以て貴下を犯罪者と見なす様な場合は、長谷川検事がある人を通じて貴下の研究的立場を説明するから、安心せよと懇々来訪して語られ、私は寺田君と長谷川検事の好意を感泣した。其後旬日、石郷岡検事の書生という男が来て、私には何の話もなく老婆の行李の荷造りを手伝い、老婆を連れて郷里へ歸つて行つたが、当の石郷岡検事からは何の通知も無かつた。

後に思えば、徒然の余り妻の被縛の写真を無教育な老婆の眼に触れさせた私が悪かつたのだ。妻を縛つて雪の中へ全裸体にして転が

したり、天井から吊下げたりしたのが原因で発狂したものだと思ひ込んだらしいので、無理も無い事かも知れない。私や私の友人達の説明で、さすが頑固なアタマの妻の母も漸く納得が行つた頃、妻の病勢は頓に昂進して、家の中を歩くのさえ困難な程であつた。無智なる妻の母は、これを病氣が快方に向つたものと思つて、しきりに私に、又昔の如く、妻を縛つて責めて見て呉れというのである。私は全く意識を失つてゐる空虚な女を研究の対象としたところで、無意味である事を説明したが、老婆はもしその間に何等かの反応があれば、それが全快に近づいたのであると信じて時々その事を私に勧めるのである。そしてそういういつた時に限り、狂妻と私と並んで寝るのを見て、喜んで別室へ行くので、私は実に腸をかきむしられる様な心持ちがして、堪え難い苦痛であつた。

併し研究の前には人情を没却する事もあると自分勝手な理屈を附けて、私は廢人に近い妻を荒縄で縛つて軽く打ち叩き、或は爪を立て、狂人の感覚を試験したが、狂人の被縛者は次の様な結果が生じるといふ事を知つたのみであつた。

私の感想は専門医でないから粗雑な観察であるが、

- 一、狂女は、寒中でも、裸体になつて寒さを感じないこと。
 - 一、一定の時間に多少正氣に歸つて自分が何故に縛られてゐるのか、何か悪い事をしたのかと聞くこと。
 - 一、発作が起つた時は縄の痛さも鞭の痛さも更に感じないこと。
 - 一、數字の觀念はその間にも忘れぬこと。
 - 一、生理的な快感全く無きこと。
 - 一、嫉妬心強くきわめて神経質なること。
- 等々——また、死去の前日迄平生の如くであつて、私が或る劇団の女優を同伴して歸つた際の如きは、觀察力が通常人同様で、狂者といえど同性に対しては嫉妬心を抱くという事も判るのである。

こうして書いては來たものゝ、私は、余りにも痛々しい責の犠牲者である発狂せる妻の最後を語りたくないのである。情景と形容詞を沢山に書いたら、読者の喝采を博しそうな事實談も、肉を削つて骨丈けを並べた丈けでは面白く無い。さればといつて、これを細密に描写する事は許されないので、大ザツパに描

いておく事にした。

私は後になつて考え、千載の好機を逸したと思うのは、折角死んでしまつたものを、そのまゝ棺桶へ入れてしまつたことで、これは残念な様な氣がしてならない。出来ることなら、死体を種々な方法で縛つて、あらゆる角度から撮影しておいたら、何等かの参考になるだろうとも考えて、そのまゝ焼いてしまふのが惜しい様な氣がした。その時は、此方も半分ヤケになつていたので、酒を呑んで外出してゐる場合もあつたし、家の中は全く化物屋敷の様になつて、始めての訪問客などは氣味悪がつていた。動坂の化物屋敷というあだなさえ立つた位で、當時を追想すると、よくも生きて來たものだと思ふ事がある。

そうした生活の中でも無慮數千枚に上る、半生を棒に振り當時の金にして數万を費した写真、戦災前迄うずたかく保存していた。戦火が隣りに燃え移つた時、私はもう「女の寶物」は私の生命と共に亡びるものと思ひ、靜かに一枚の蒲団を被つて、二升の白米を携えて焼夷彈の降る中を逃げ出したが、翌日濛濛たる烟の中をかき廻してゐる二、三人の姿を見て、何か淺ましい様な氣がしたのを、今も鮮やかに覚えてゐる。



被虐・ストオリー

東西マゾくらべ

(西の巻)

「エイッ！」と掛壁をかけて、素足で出羽三の禿頭を思いきり蹴とばすのである。このシーンは全くハツと息を飲む程の壓巻であつた。出羽三は仰向けにひっくり返り、蹴とばした美恵子の脚は……

鬼山 絢 策

八 木 静 男 畫

その頃私は非常に浅草を愛していた。

日に一度は公園をブラついて来ないと気が済まなかつた。品川に住んでいた私は毎日毎晩市電に乗つて浅草へ通つたものだった。

昭和五年から七年頃のことである。

当時今のロック座がその頃は万盛座と言つて「グランテッカー」と言うレビューが掛つていた。川田晴久がアキレタボーイズを編成する以前で、この小屋に歌手として、あの独特の哀愁味のある型の崩れた歌い振りが、既に浅草つ児の人気を博していた。

その万盛座のレビューガールと私は「奇妙な関係」に陥り（それは決して恋愛ではなく、何と表現したらよいか結局「奇妙な関係」と言うより他にないのだが）私の書いたレビューのストーリーがグランテッカーに上演されたりして、楽屋にも出入りするようになり六区の人間の仲間入り出来たことを非常に嬉しく思い、得意にもなつていた時代だった。

私は浅草の人間になりきるつもりで、品川の親父の家を飛び出して田島町のアパートに移つた。

田島町と言う所は松竹座の前の大通りを越した向う側一帯で、あの大通りを一寸入つた所の「緑荘」と言うアパートが私の浅草に住んだ最初の住所だった。

其処へ移つてからはほんとうに浅草に耽溺した。
 当時は親許から月に百円宛仕送りを受けて居たから生活のために働らく必要はなかつた。

私がレヴェューの脚本を書いたのも、生活のためではなく、公園の演芸人との交際を求めたためのものだったから、気が向けば書くし臆怖な時には三月も半年も何も書かずにはいたこともあった。

私の仕事は専ら六区の小屋を覗いて廻ることだった。映画館よりも演劇の方を主に覗いて歩いた。

当時は今よりも劇場の数も多く、レヴェューも少女歌劇、漫才、浪花節、劇、剣劇、曾我の家の喜劇、色物の寄席、等々と現在よりも遙かに多彩だった。只ストリップだけがなかった。

私はそれ等のあらゆる演芸を見て廻り、その中から、私の嗜好に合ったものを見つけ出すとそれに熱中して、同じ物を何度も観た。

今はなくなつたが、映画街の裏通りに、玉木座と言う小屋があつて、私はこの小屋が特に好きだった。

エノケンが「プペダンサント」を組織した

のもこの小屋だった、その後メ

キメキ売出して松竹座に移り、その後

へ日活の

監督だ



つた中

山吞海、丸

山夢路、佐藤久

雄などが寄り集まつてレ

ヴェューを出して居たが、それも解散

して、その次は漫才や安来節などの色物がかかった。

そうなるで見物の人種もがらりと変つてレヴェューの時のサラリーマンや学生などに入れ替つて労働者や職工などが、舞台に下品な野次をとばして喜ぶような雰囲気になつて来た。

この万才の中に、なかなか秀逸なのがあつて、それが私の嗜好を刺戟するものが多分にあり、私は欠かさずに変り目変り目に観に行つた。

私は万才の、女が男をひつぱたく所に堪らない魅力を感じた。

あの「張り扇」と称する骨を抜いたシナシナした扇子で、男の額をピシャーリとい音をさせてひつぱたく、あの時の女の腕には遠慮会釈のない力がこもつて居て、思いきり強く何度もひつぱたくのが、芝居ではなく真実であるために私には異様な迫力を感じるのだつた。

当時は男と女の万才と言えば、女が男を叩くのが定石とされていた。又これが意味もなく観衆に受けた。私には意味のないどころか非常に色々な妄想を逞ましくさせる程意義のあるものだつたが観客のうちで、そう言う風に受取る人間は、当時は少かつたであらう。

恐らく観客の多くは弱い女性が力強い男をピシピシと殴りつけるその矛盾を滑稽に感じ、又無意識のうちにサジ的な、或はマゾ的な気持が働いて喝采していたのだらう。

男の方が一々女にあげ脚をとられ、やりこめられ、「間抜け！」だとか「馬鹿野郎」とか罵しられた揚句、扇子の鞭を額に受ける。

観客の中には面白がつて、「もう一ちよう」などと声をかける者もいる。すると女の方は客に媚びるように調子に乗つて又男を一層強く殴りつけて見せる。

この頃の漫才には、そうしたマゾヒスティックな要素が笑いのエッセンスとして多分に含まれていたのだ。

玉木座の漫才大会に関西の漫才師が東上して来て関東の連中と競演したことがあつた。

その中に「妙子家出羽三」と「妙子家美恵子」と言う一組の漫才、私は今迄にない異質な刺戟を受けた。

二

元来漫才の本質は話のやりとりの中に、一方が話の引き出し役となり、一方がおどけ役となつて、おかし味を醸し出すのが原則であるが、それぞれの特徴を現わすために、それ

とは違つた「売り物」の芸を持つてゐるものである。例えば喉自慢で浪花節や民謡や小唄を聞かせるとか、アコーディオンやギターのうまいもの、又は芝居の声色や、真似事を売り物にしているもの、一寸した曲芸をやつて見せるもの等、一通り話のやりとりの終つた後で、各自の独特の「売り物」の芸をやつて引込むのが漫才の常識となつてゐた。

「妙子家出羽三、美恵子」の「売り物」は一風変つてゐた。

このカップルは徹頭徹尾女が男を打撃し、侮辱するをもつてを売り物として居たのだつた。それがどう言う風に演じられるかは二人の演技を見なければ分らぬことだから、一寸舞台を覗いて見よう。

出羽三と言う男は四十二三の髪の毛の薄くなつたあから顔の肥つた男である。

美恵子と言う女は漫才なんかにしておくのは惜しいような美人で、一寸見ると二十七八だが、或は三十を一つ二つ越えて居るかも知れない。男のような太いガラガラした声を出す女で、竹久千恵子に似てゐた。

出羽三はいつも水色の紋付の羽織と角帯で白足袋で出たし、美恵子はエンジの裾模様には髪は洋髪で夜会巻きに結つたり、時には何と

言う髪か知らぬが、斯うした芸人特有の愛つた結いようをして、後にスペインの女のさすような三角型の櫛をグツとさしているのがよく似合つた。

又此の頃の漫才の女の風俗の特徴と言えは帶止めを斜めにしめるのが小粹に見えて流行したものだった。美恵子は銀台に金を象嵌した髻若の面の帶止めをしていたが、あれは確かに相当高価なものだと思ふ。

美恵子は奇妙なことに左手にダイヤの指輪をはめていて、右手には指輪をしていなかった。

この二人が舞台へ出てくると美恵子が、「あんた今日はバカにいい男振りやねえ」「さよか、恋人が出来よつたでな」

「へエ、あんたでも恋人が出来ますか」「そう馬鹿にしくさるな。わてかて恋人の一人や二人出来ますがな」

「道理でメカシこんでるわ」と笑いながら、右手で出羽三の顔を逆撫でする。

「あれ、何や、あんたの手濡れてまんない」「アハ、今便所へ行つて手拭くのを忘れた」「イエッ！ あんた手洗つて来たのんかいな」

「ウツカリして洗わなんで来た」

「ウエツ、ほなら今の濡れたの何や」

「何かていいわな、大したことあらへん、お蔭で手拭けてしもた。アハハハ」

「冗談やないで、ひとの顔便所の手拭いと間違えてけつかる」

「そう怒りなさんな。であんたの恋人つてどんな人や、美人でつかい」

「それがもうポチャポチャツとした可愛い子ですわ」

「アアアアよだれがたれる」と又右手で出羽三の唇の辺りを撫でる。

「ああ汚ない舐めてしもた」

「ペツペツと舞台へ唾をする。」

「でその人商売は何してますの」

「ダンサーですわ」

「へエ、ダンサー、随分モダンな商売やね」「此の間贈り物しました。雷門歩いてたら上等の手袋売つてたさかいこれを贈り物しよう思つてな、見切品で八十銭」

「八十銭！ 安い手袋やな」

「その店にズロースも売つてました。これも見切品で五十銭。これは女房に買つてやろう思つて一緒に買いました」

「何や男の癖に女房のズロース買う阿呆があ

るか」

「わては女子には一様に親切な方でね。でその手袋に手紙をつけて彼女の許に送りましたのや」

「何て手紙書いたの」

「恋しきさせ子様、私の心をこめた贈り物を受けて下さい。貴女は商売柄、これを一日に脱いだりはめたり何回もすることでしょう。今度の日曜には是非これをはめて来て下さい。そして私の手でこれを脱がさして下さい。私はその下のあなたのふくよかな皮膚に喜んで接吻します」

「へエ、大層熱烈な文句やね」

「ところが大失敗してしもうた」「どうしたの」

「手袋送るつもりで間違えてズロース送つてしもうたんや」

「エエツ、阿呆ッ」

美恵子は張り扇は持つて出なかつた。彼女は専ら平手で出羽三の禿頭をピシヤリピシヤリと殴るのである。この時も小気味のいい音が出羽三の額に鳴つた。

「何て失礼なこととしてしもうたのや。彼女ビツクリしたでしょう。あなたは商売柄、これを一日に何回も脱いだりはめたりするでしょ

うなんて書いたら怒るわ」

「どうも済んまへん」

「今度の日曜には私の手でこれを脱がして下さい。そしてその下のふくよかな皮膚へ接吻しますなんて、あんな一体どこへ接吻するつもりなんや」

とこれで観客はドツと来る。

話のやりとりからしてこんな調子でありそれから女剣戟の真似となり、美恵子が玩具の刀を持つて来て振り廻す、出羽三が十手で御用御用とやつて何遍も斬られる。斬られる度に活き返つて御用々々と向つて来るのを肩を斬つたり胸を斬つたり、刀を平にして禿頭を叩いたり、股の間へ突込んでごしごしやつたりする。

美恵子は片肌脱ぎとなり、左手で裾を捲つて、太腿も露わに暴れ廻るが、この二人の殺陣は相当稽古を積んだもので、この辺が女剣戟のエロを真似ての売り物だった。

最後に出羽三を四ツン這いにさせて、その首根つ子の所へ片脚かけて大見得をきる。

首を踏みつけられた出羽三が恐る恐る首を横に向けて、



「ウワア……」

と片手で眼を掩う。

「どこ覗いてんのや、ど助平」

「あんた雷門行つて来なさい」

「何でや」

「五十銭でズロース売ってますわ」

これを「サゲ」として引込む日もあるが時にはこんなこともやる。

歌舞伎の真似で仙合萩の「床下」をやる。

出羽三が男之助で美恵子が鼠になる。ここでは反対に出羽三が美恵子を四つん這いさせてその背中を足で踏まえる。その所がまずいと言つて何度も背中を踏み直す。しまいに美恵子が怒つてしまつて

「一々難癖つけなさんな」

「ハハ、斯う言う時や、ふだん尻の下に敷いてばかりいるから、思い知らしてやるのや」

「阿呆くさい、もうやめた。今度は妾があなたの頭踏んでやるわ」

「へへ、そう簡単には踏まれませんわ」

此処で美恵子は話のやりとりをしながらはいて居た足袋を脱ぐのである。そして

「あ、五十銭落ちてたい」と舞台の前方を指さす。

「どれ、どこに？」

と出羽三が舞台へ小腰をかがめて前へ出たところを、クルッと片手で裾を捲つて

「エイッ！」

と掛声をかけて、素足で出羽三の禿頭を思いきり蹴とばすのである。

このシーンは全くハツと息を飲む程の圧巻であつた。

蹴とばされた出羽三は仰向けにひっくり返り、蹴とばした美恵子の脚はレヴェューガールのように高くあがつて、友禪の裾模様から太股のつけ根迄露出するが、ズロースが見えないのである。

彼女はノーズロで舞台に出ているのかも知れないと思つて、私はこの二人の漫才を二度も三度も観たが、遂にその確証は掴めなかつた。

三

私は二三日続けざまに、この出羽三の漫才を目当てに玉木座へ通つた。

出羽三が引込むともう用はないので私は小屋を出て、三岩と言う浅草名物の安い飲み屋で飲んでいた。

すると間もなくのれんを潜つて出羽三が入

つて来たのである。

そしてキヨロキヨロと席を探している。三岩はいつも一ぱいに混んでいたからトバ口には空席はなかつた。恰度私の隣が少し空いていたので、私は席をあけて

「どうぞ——」

と呼びかけた。

「あ、おおきに——」

彼は角袖を着て、血色のいい顔をニコニコさせて私の隣へ腰かけた。

「大層混みますな」

「え、此処は安くてうまいからいつも斯うですよ、ときに失礼ですがあなたは出羽三さんでしょ」

私は単刀直入に突込んでいつた。

「へ？ さようでおます。があなたは……」

「僕も公園の小屋に勤めている者ですよ。僕は貴方のファンなんですよ。今も舞台を拜見して来ましたよ」

「ハハ、そりやどうもおおきに……」

そんなことから、盃のやりとりが始まり、舞台の話をしたりしているうちに、出羽三が「ときにどこかこの近所に貸間はおまへんやろか」

と言う。彼は約三カ月位浅草を根拠として東京で稼ぐつもりだと言う。その間に住む部屋が欲しいと言うのである。

恰度私のいる「縁莊」に空いた部屋があるので、それを話すと、彼は喜んで今から部屋を見せて貰いたいと言い、私と一緒に縁莊へ来て、恰度私の隣の部屋が空いていたので、その場で其処を借りてしまった。

このアパートは六区の芸人が多く住んでいて、管理者の築山と言う人も芸人を好んで入れる風であつた。

斯うして私と出羽三とは非常に親密な交際をするようになった。

出羽三と、美恵子は矢張り夫婦だつた。

出羽三は元大阪で相当大きな小間物屋の惣領だつたが、放蕩に身をもち崩して、南地で芸妓をしていた美恵子を落籍して妾にしたが、店が左前になつて来たので本妻と別れて美恵子と一緒にになり、美恵子が一度芸妓に出ようと言うのを止めさせて漫才になつたのだと言う。美恵子にして居る帶止めは、出羽三がまだ羽振りのよかつた頃の品の品の中で一番高価な帶止めを、その磐若の面が気に入つて美恵子に与えたもので

出羽三は「東京でもこれだけの品物をつけてる女は一寸ありません」と自慢していた。磐若の如き女性が出羽三の理想の女性であり、美恵子をして磐若の如くあらしむるべく、その象徴としてこの帶止めを贈つたのである。

出羽三は美恵子を溺愛していた。朝は先に起きて飯を炊き、彼女の肌着や下着迄洗濯してやり、文字通り「嘆天下」の生活だつた。

然し現在の出羽三の心境は財産や名譽よりも、この恋女房と睦まじく暮し毎日舞台で、女房に頭を殴られたり、足蹴にされたりして観客から笑われることをもつて満足し、私生活において下男の如く、美しい若い妻君に献身するのも彼自身の快樂であり、現在の生活が彼にとつては理想的なものだつたのである。彼の芸に就いて、彼は私に斯う釈明している。

「私はもともと素人で根からの芸人ではおません。漫才と言うものは他愛ないようではない。その道に入ればやはり奥の深いものです。私には本式の芸事による極め手と言うものを持つとりません。そやかてこの年して修業して見た所で追つつく訳もありませんさかい、私は私なりに女房に玩具にされて、それがお客さんに受けるなら、私さえ恥をさらせばよい

訳で、それでおまんまが喰えるもんならこの手で行こうと決心しましたのや」

社会的通念として女が男に屈辱を受ける場面は悲劇的に同情の眼をもつて視られ、男が女の玩具になる点に就いては喜劇的な眼で視られる。この弱い者が強い者を征服すると言う矛盾から滲み出る滑稽味を、彼の嗜好に合わして観客に訴えようと言うのが彼の狙いであるのだ。

四

然し彼は非常に芸熱心であつた。

漫才師にはタネを提供する者がないと永続しない。エンタツアチャコが成功したのも蔭に秋田実と言う優秀な原作者がいたからであるが、出羽三夫婦にはこのタネを仕入れる先がなかつたので、勢い二人で新しいアイデアを生み出して行かねばならず、そこに二人の苦心があつた。

私は彼の性格と芸風を愛好し、私の嗜好と同気相求むるものがあつたから、彼の舞台を観てダメも出し助言もしたのであるが、彼はこれを非常に徳として、新しい演し物に就いて私に相談するようになった。それは私も彼と同じ性向の人間であることを告白したこと

により親近感が深まった故もある。

私は第一に彼の幕ぎれに演ずる「床下」

の所作事に就いて苦言を呈した。

「あれはあまり面白くないですね。あなたが美恵子さんを踏まえると言うことはあなたの主義に悖ることでしょう。それにあの『五十銭落ちてた』と言うのはいかにも能がなさ過ぎますよ。総べてが最後の美恵子さんの蹴りに持つて行くための工作だとしても、あまりに子供だましで不自然です。あれは止めた方がいいでしょう」

「イヤ私もそう思つてはいるのです。けどお終いの美恵子がパアツと足をあげるところが受けるもんやさかいあれひとつを頼りにやつとりますんや」

「あの程度のことだつたら他にもやりようがあるでしょう。あなたは歌舞伎は相当観てますか」

「ヘエ、好きですさかい一通りは観ております」

「だつたら忠臣蔵の大石良雄と村上喜剣、あれをやつたらどうです。あなたが大石になる。美恵子さんが村上喜剣の代りに女侠客か何かになつて蜻蛉の足を喰わせる。喰わせておいてパツとやればいいでしょう」

「なる程、そりや面白い、あんた済んまへんが型をつけてくれますか」

彼等夫婦がアパートへ歸つて来るのは、大抵十一時頃だつた。十時に小屋がハネてから近所の飲屋で晩食を済ませて来るのでそうなるのだが、時にはお座敷が掛つたりすると十二時一時に歸ることもあつた。

この「お座敷」なるものが出羽三の惱みのたねであつて、夫婦二人で招ばれる所なら喜んで行くが、時に依ると美恵子だけ来てくれと言う注文もあつた。

そんな時に彼は独り「三岩」あたりで一ぱい飲んで私の部屋へ来て話込むのだつた。

その日も美恵子はどこかへ出かけて居たが私達が話をしている所へ歸つて来た。

「いつも御邪魔していて御迷惑だわね」

彼女は相当飲んで来たと見えて眼のふちをあかくしていた。そうした時の彼女は一層美しくコケティッシュであつた。彼女は舞台で関西弁を使うが、東京の人と話す時には標準語で喋つた。標準語と言う上り東京の芸人達の用いる巻き舌の鉄火な調子であつた。

「あ、恰度いい所へ歸つて来た。いま先生から新しい芝居に就いて智恵を拜借してた所や。早速稽古して見ようやないか。先生に型をつ

けて貰うてな」

それから彼等夫婦の部屋へ移つて稽古にとりかかることになった。「ま、先生は一ぱいやりながら監督してくんなはれ」とウキスキを出したりした美恵子は一寸照れくさそうにしていたが、そこは芸人のことゆえ悪びれずに稽古を始めた。

ところが美恵子はその芝居を見ていないのである。そこで私と出羽三とで芝居の荒筋と喜剣の性格を説明しなければならなかつた。

「この村上喜剣と言う武士は九州の劍客で大石の崇拜者なんです。祇園での放蕩も敵を欺く計略だと思つて、その苦衷に同情して会うのですが大石の方では敵の間者かも知れぬと警戒して本性を見せない。どこ迄も酔いしれた呆氣面をしてるものだから、喜剣はほんとうの腑抜けだと思つて、今度は怒つて大石を侮辱すると言う筋なんですから、最初は大石を崇拜していんぎんにした手に出る。途中から半信半疑になり、終には、大石の計略にのせられてほんとうの腰抜けだと思ひ込んで怒る。と言う段取りになるんですから、貴女の役かたとえ喜剣でなく女侠客の『むら気のお剣』であつても喜剣のつもりでそのように変化して行く調子を出して下さい」

「こりや本格的ですね。そうとうむづかしいけどしつかりやれや」

そこで歌舞伎でやるのと大体同じせりふを出羽三と二人でやりとりし、最後にお剣が怒つて蛸のあしを足の指の先へのせて大石に喰わせるところでは、何にもなしで只喰う真似だけでは面白くないと言うので、赤いゴム風船をのつけて喰わせることにした。「何やこの蛸の足ルーデサツクみたいやな」と茶利をいれて出羽三がじかに美恵子の足に唇をつけてゴム風船を喰う、これは後を向いて直ぐ吐き出す。この美恵子がゴム風船を足指の上にのせて出羽三の顔の前に突きつける足の高さに就いて、何度もやり直した。

最初は足を高く持上げて、赤い腰巻から白い脛を出して見せるのが色気があつてよからうと出羽三が言つたが私は反対して、そこは足をあまり高くあげずに、一寸持ち上げる程度の方が良い、そうすると勢い大石の出羽三が頭をウンと低くさげて唇をもつてゆくことになる。その時の格好に滑稽味を出した方が面白い。そこで色気を見せるなら、「あらほんとう食つちまつたよ、呆れた野郎だよ」と、裾をパツと捲つて出羽三

の肩へ片脚かける。ここで太腿の辺り迄捲つて大いにエロ味を出せばよいと提案した。出羽三も賛成してそれで行くことにした。

美恵子は酒の気も手伝つてか至極大膽に、私の眼の前で、危な絵もどきのきわどい所まで捲つて出羽三の肩へ足をのせた。

「そこで最後に喜剣が大石に痰を吐きかけるんです」

「そこん所も一層のことほんとに痰をひつかけてやつたらどんなもんでしょね」

この辺に來ると美恵子はすつかり調子にのり出羽三の肩を踏まえて平然と言つてのけた。

「そしたら確かに受けることは受けるがお前いつも都合よく痰が出るか」

「出るわよ痰ぐらい。ひつかけて見せようか」

美恵子は出羽三を見下して艶然と笑いながら「カーツプ！」

と、ほんとうに私の見ている前で出羽三の顔に痰を吐きかけて見せたのである。

「あつ、ひどい、こりやひどい！」

出羽三のツルツルの禿頭から額へかけてタツプリとより上つたあお白い痰がダラリとたれ下つた。

「アハハハ、これは受けるわきツと……」

美恵子は出羽三の羞恥と快樂の交錯した戸惑つた表情を見下して小氣味に笑つた。

この芝居は三人の興の趣くままにかなりあくどいものになつたが、事実この通りの場面が玉木座の舞台上演されたのである。

読者の中には観た方もあると思うが、唯最後の痰を吐きかける所だけは、やはり実際にはいつも痰の蓄えがなかつたので、大抵は、出羽三の肩へかけた脚で思うさま蹴とばし、出羽三が仰向けにひっくり返る時に両脚をひらげて股間から真赤な禪を見せて「もう目茶無茶ですね、こんな芝居やめた」と言つてキリをつけていたが、日に依つてはほんとうに舞台上で痰を吐きかけて見せ、出羽三が懷中から鼻紙を出して拭いて見せることもあつた。私も客席で何度も観たが、痰を吐きかけたときには隣で観ていた職人風の男が「あ、ほんとにやりやがつた、ひどいな」と言つて笑つたので、ドツと爆笑の渦が捲き起つた。舞台ではほんとうに青痰をひつかけたのは漫才に限らず他の演劇に於いても見たことはなく、恐らく出羽三美恵子の専売の芸だと思ふ。私と出羽三夫婦とは益々親密になり、遂に彼等の私生活迄窺い知るようになったのである。

(続)

風俗美術館

上 フランスのある鞭打ち小説の挿絵。学園で女生徒が意地悪な老女教師から臀打ちをされているところ。處女の羞恥がうまく描かれている。

左下 奴隷制度のある頃、女主人の怒りを買った召使の男女がこれから私刑を受ける場面である。

右下 十八世紀頃フランスの家庭に備えつけられた折檻道具。





右上・炙刑の一種。抱かされた鉄
 の罐がジリジリ熱せられてくると
 いう仕組み。古代中国より伝わる。
 右下・十九世紀初め、奴隷船上の
 リンチ。黒奴を虐めるス
 ペイン人船長の快心の表
 情が巧みに描かれている
 左上・十九世紀のサロ
 ンはサデズムの巣窟だつた
 左下・下男下女に木馬責
 めを命ずるフランス婦人





恋する女の足跡のくぼみに、我身を押しあてて身もだえた男もある。形よき女の靴のかかるとに、熱い口づけを重ねたいと願うのは、画中の男ばかりではあるまい。典型的な靴フェチズム。



右上・洋装店のボディに抱きついて、密かな快感を楽しむ中年男、無機質の性愛とでも名づきたい恍惚感が、画面に躍っている。第一次大戦後、ダダイズムとともに流行したアブノーマル

左下・ぬぎすてられた女の下着のように、ダラリと無気力化するることによって快感を感じる男の姿。文明が進むにつれ、この変態的傾向は強まる。女は、地に這つて犬になれと命じている



恍惚の男性美



ソドミニストの好みは色々だが、この写真の男性たちのような、逞ましい肉体と野性味のある容貌にひかれる人も多い。分厚い胸、筋肉の盛り上った太腿は、ソドミアならずとも一種の色情を覚えさせる、男性美の極致と云えよう。

變態性慾臨床報告

商店のショーウィンドにある女の髪の毛は何の刺戟もあたえなかつた。彼にとつては、生きている髪でなくてはならなかつた。娘の髪を切る瞬間がエキサイトの頂天であり……

三宅 一朗



おことわり

クラフト・エービンの『性的精神病学』（フシコパチア・セクスアリス）は、性科学とくに異常性欲学における不朽の名著である。これまで、暫々、その内容の紹介、一部の抜萃や引用が行われてきたが、完全な邦訳はまだ現われていない。

アメリカでは、ロビンソンが協力して、少しずつ増補した新版英語訳を出した。この最新刊が、本書の最も新しいかたちであるようだ。エービンの学説は、今日から見ると、やや古い学説がなきにしもあらずだが、それでも、全体を通じて、異常性欲の研究者の必読すべきバイブルである。

これまで、本書の完訳を意図する出版社も雑誌もなかつたが、たまたま本誌が、その完全なものを何年かかつて運載したいのとこのとで、一応、前記の最新版によつて、最初から終りまで根気よく掲載したいと考える。しかし、本書は、あくまで学術書であつて、小説でも興味本位の物語でもない。読者も出版者も、よほど根気がないと随いて行けまい。私としても、できるだけの最善をつくすつもりだが、残念ながら、私は性科学者ではな

い。医学用語などに滑稽を演ずることもあろうと思う。しかし、この世界的な名著に取り組む以上、私は私なりに勉強して行くつもりで、将来この国に残る資料としたい。

一 足に酔う男

この患者は五十二歳の男子である。身分や地位は低い、その父には異常性はない。これといった遺傳的素質もない。患者は、神経質な一人息子である。

七歳のころ、女中が部屋を掃除しようとして靴や靴下を脱いでいるのを見たとき、ある特別な獨特の昂奮を感じたのを覚えている。あるとき、彼は、女中に、足のうら特に足の指を見せてくれと頼んだことがあつた。

学校へ行くようになり、本が読めるようになると、惨虐な話や拷問の記事などが好きになつた。もし、何か惨虐なことが女の命令の場合、とりわけ嬉しくて心がはずんだ。

奴隷を扱っている小説を喜んで読み、そういった話を聞いていると、ものすごくエロチックに昂奮した。

彼は、じぶんの周りにいる若くて美しい女の奴隷になりたいと願つた。そういう女と長時間の散歩をしたあとで、彼女の足、ことに

その足のうらや、足の指のあいだの美しさを想像して狂気のように昂奮した。そのときの彼女は、おそろしい無慈悲な女であるとし彼に鞭打や拷問を加えることを命ずると空想して嬉しがつた。こういう空想をたくましくしている時が彼の天国であつた。

十五歳のとき、女中が犬に足をなめさせているのを見てた。そこで、彼は、それから後は、女中にたのんで彼の見ているところで犬に足をなめさせた。そうして、とうとう、彼は、犬に代つて自分から女中の足をなめるようになった。

その後、十八歳までは寄宿舎に入つたので、こ

うしたことを実行するチャンスがなかつた。ただ、とき／＼、女が残酷なことをした話を聞いて昂奮するだけだつた。だが、そのさいそういう残酷な女の足のうらや足の指のあいだをなめることを想像して激しく動揺した。女性には少しも興味をもたなかつた。他の



男性にも愛着を感じたことはなかつた。大人になつてから娼婦と遊んでみたが、前もつて足をなめないとか成就できなかった。もし巧いかなないと、途中でなめなおし、いろ／＼な拷問をして彼を苦しめる話を女に

させ、それを聞きながら時を過していくのが習慣になつた。

高貴な婦人の足が、靴が小さくて窮屈に圧迫され、ひん曲り、何日も洗わないので臭くなっている、と彼は想像しても

のすごく昂奮した。だが、空想以上であるが、じつさいその足をなめることになること

さすかの彼もためらつた。こうしたことを空想したが、彼は、それらの実現は怖くて出来なかつた。彼は、女にたのんで自分が注文した手紙を自分宛に



出させ、ひとりでマゾヒズム的な空想にふけ
つて楽しんだ。そういうった手紙の一例を示す
と次のようなものである。

× ×

あたくしは、あなたに、あたくしの足の指
や足のうらをなめていただくと、かならず激
しい喜びを覚えます。ことに、あなたと御一
緒に散歩したあとで、あたくしが靴をぬいで
靴下をとり、その足を、あなたが万遍なくお

なめになることを考えますと、もう、いても
立つてもいられなくなるほど惱ましい夢のよ
うなたのしみを感じるのをごさいます。あた
くしの足のうらの写真を次の便でお送りいた
します。汗ばんだあたくしの足のうらを、あ
なたがおなめになると、あたくしは、まるで
美味しいお酒に酔ったように、うつとりとな
つてしまいます。

たといおいやでも、お逃げあそばそうとし
ても、あたくし
は、むりやりに
あなたのお口の
ところへ足をも
つていつてなめ
させてやります
わよ。そして、
まるでいやしい
奴隷のように、
びし／＼と鞭で
打ちつづけてあ
げますわよ。

あなたを苦し
ませ、いちばん
怖ろしい拷問で
あなたのお命を

うばい、もたえ死なせてあげますわ。あな
たを、息もたえ／＼に、のたうちまわらせ
ながら、あたくしの足をなめさせてあげま
す。ちやんともう、その用意ができてい
るのでございます。それが、あたくしの何よ
りの楽しみなのですもの。あたくしは、あ
なたをうじ虫のようにふみつぶし、このか
かとでにじりつけてあげますわよ。

もし、あたくしの靴下をお所望でしたら
すぐお送りいたします。でも、あなたは、
それにキッスし、すつかりなめまわし、さ
らに水につけて汚いしみでよごれた水をお
飲みにならないといけません。あたくしの
命ずることを一つでもして下さらないとあ
れば、すぐに鞭で、打つて／＼打ちのめし
ますわよ。あたくしは、あなたに絶対の服
従を命じます。すこしでも従わないと、あ
なたをライオンの檻のなかに投げこみ、あ
なたの肉を食べさせてしまいますわよ。

二 髪切り男

四十歳の男子。独身。父は、一時的な精
神病にかかったことがある。母は強度の神
経質な女。患者の智能は普通であるが、幼
時から癡癡にかかり、強迫観念にかかった。

いちどもオナニイをしたことがない。恋愛をしたがプラトニックであつた。何度も結婚しようと考えたが、だいたい、めつたにコイツスに行わず、また満足したことはなかつた。むしろ嫌悪した。三年ほど前に、ある重大な事件のために精神的な打撃を受けた。熱病にかかり、うわ言を言つた。

この状態は、前記のような素質を遺伝的にもつている彼の中樞神経を大いに傷つけた。

八月二十八日の夜、彼はパリで逮捕された。

この事由はこうである。つまり、彼は、群集のなかで若い娘の髪の毛を切つたのであつた。手に髪の毛をもち、ポケットに鉄を入れていた。彼の申立によると、一時的な幻覚に負け、激情のあまりやつたのだと弁解した。それから、それまでにもう十回も女の髪の毛を切つたことを自白した。

女の髪を切ると、そのとき強烈な感情のたかぶりを感ぜたと云つた。

当局が彼の自宅を捜査したところ、六十五個の髪の毛束が出てきた。しらべてみると、前に一ど、同じような犯罪で逮捕されたが、証拠不十分で釈放されていたことが判明した。彼の陳述によると、その三年來というものの、夜ひとりしていると不愉快になり、苦しく

のぼせ、めまいを感じ、女の髪の毛にさわりたいくてたまらなくなつた。

そして、やりきれなくなつて表へ飛びだし何らかの方法で若い娘の髪の毛にさわると、はげしい快感を感じ、はては、じつさいにそれを入手したくなつて髪切りをするのだつた。そのときは、強いリビドを覚えた。だが家へ戻ると、何という恥かしいことをしたのだらうと後悔した。しかし、女の髪を手に入れたという欲望が、どうにもならなくなるのであつた。

彼は、ある女と親しく交際したが、交際しているあいだは、そういう欲望は一ども抱いたことがなかつた。

ある夜、またも娘の髪の毛を切りたくなつた。どうにもその欲望を抑えることができずついにそれを実行し、髪の毛を手に入れて帰つてくると、とつぜんある種の満足が湧いてきた。どんなことをするのがという、その切つてきた髪の毛で全身をこすりまわすのである。

疲れがでる。すると、だん／＼冷静になり自分の行爲が恥かしくなる。そうして、二三日というものは全く外出もしないでいる。こうして、数カ月のあいだ安靜にしていると、

またぞろ女の髪の毛を手に入れたという欲望が起つてくる。もし、その欲望が達成されない、いら／＼して、やけに不愉快になり、それこそいても立つてもいられなくなり、その欲望をおさえることができなくなる。

商店のショーウィンドにある女の髪の毛は何の刺激もあたえなかつた。彼にとつては、生きている髪でなくてはならなかつた。娘の髪の毛を切る瞬間が昂奮の頂点であり、そのときは一切の知覚を失い、いろいろと追求してみても、そのときのことはぼんやりしていて想い出せない。

彼の家からは、髪の毛ばかりでなく、ヘアピン、リボン、そのほか多くの女の装身具や髪飾品が現われた。

彼は、こうした物のほかに、新聞、木片その他のつまらない物を集める癖がある。また、一定の道路を通ることに強迫観念的な恐怖を覚えた。法医学的な鑑定によると、彼は遺伝的な素質があり、その行爲は異常色欲を附随している強迫観念の上に立つたもので、未熟な犯罪行爲であるとされた。彼は無罪で精神病院へ送られた。

三 同性愛女性

二十六歳の人妻。数カ月前に結婚した。こ

の患者は、公衆の面前で、一婦人の頸を讚美し、大びらにそれにキッスして褒めた。そのやり方が、あまり極端だったので、他の人たちから非難されたことがある。

彼女は良人にたいする妻の義務には従った。結婚前、良人にたいし、私には倒錯的な色情があります、と打ち明け、良人の精神的特性だけを尊重します、と告げていた。

彼女の父は神経病的なところがあり、むしろ女性的なものをもっていた。彼は、ヒステリイ性の発作にかかり、情事については冷淡であつた。父系の叔母には、良人と夫婦の交わりをするたびに金を拂う人がいた。つまり、良人に一定の金をやつて他の女で満足してもらうためだった。

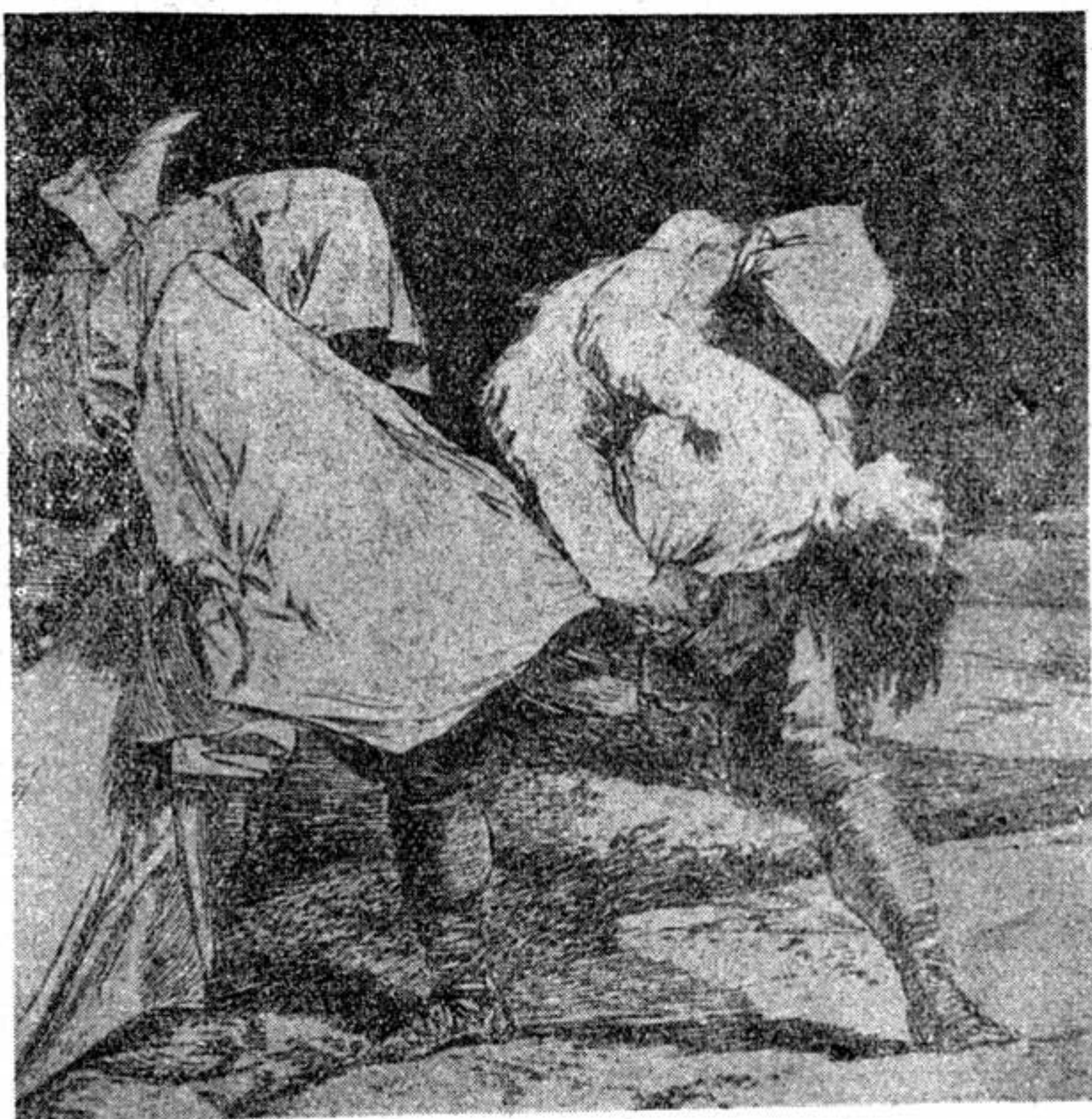
この患者の母は、色情過多だったという。

この母と、娘は、十四歳になるまで一緒に寝ていた。十五歳のとき、母から離れて女学校に入った。女学校では、惻巧で明敏だった。

人が、彼女の前で下品なことをした。これが大きな衝撃になった。十二歳のとき月経があり、以来べつに異常はなく故障もなかった。彼女は、十二歳のとき他の娘に心をひかれたが、それでも数年間というものはつきりした感覚は意識しなかった。だから、そも／＼の初めから、同性に心をよせる自分は普通人でないと感じていた。彼女は、同性の前では衣服を脱ぐことだけが恥かしかった。

だいたい、二十歳のころから恋情を覚えるようになった。けつして男性に心をひかれることがなく、はじめから処女と若い人妻だけに心をよせた。その結果、そうとう多くの女たちと恋愛を経験した。親もとをはなれて寄宿舎に入つたので、厳しい監督もされずお金もあつたので、自分の好みを満たすチャンスが簡単に作れた。

だが、その後、従姉に誘われて女同士の恋愛を知つた。彼女は、いつも能動的な立場だった。他を満足させるために自分を卑下することはできなかった。



勉強もよくし、優秀な成績をおさめた。

七歳のとき、精神的傷害を受けた。父の友

た。ただ、女性的な異常を好んだ。ところで、自分と同じような同性愛女にたいしては全然心が動かないばかりか、嫌悪を感じた。彼女が好んで愛した女は、独身の上流婦人で、精神的にもすぐれていて、妻味があるほど美しいか、それとも溫和な内気な婦人であった。

彼女は、右に述べたような多くの遺伝をもち、かつ色情昂進症だったので、これという心が惹かれる美女に会うと、すっかりノボセ上つて熱情をおさえることができず、夢中で相手に突進して行つた。このときは、あらゆる物が、みな赤一色に見え、意識が衰えてしまふのであつた。ものすごい刺戟的な女で、自分の感動を制御するのが困難であつた。

二十三歳のとき、ある女と知りあいになつた。

その婦人は、外見的には同性愛的ではなかつたが、たいへんな色情過多で、良人がインポテントなので十分な性的満足を得ていなかった。この婦人との関係は、患者の同性愛的情念を高度に刺戟し、彼女の性的欲求を非常に昂進させた。

彼女は、ある令嬢とも親密な関係をむすび、自分は男装して写真を撮り、男装して公

衆の中に入出入した。しかし、いつも警官に見された。

以後は、男装して道に現われることは止め結婚の一年前は憂鬱性にかかり、そのころ自殺をくわだてたことがあつた。

彼女の性生活には、倒錯性欲のほかにもマゾヒズムやサヂズムがあつた。彼女みずからが言うところによると、彼女が愛する者にひどく叱られると非常に快く、愛する者に耳を打たれると涙がでるほど嬉しい、と。情欲がたかぶると、キッスより愛咬のほうが強い快感を覚えた。

彼女は、自分の行爲がいけないことを十分に知つていたが、どうしても止めることができなかった。

しかし、それによつて知能に害を及ぼすことは少しもなかつた。いつも、正直な妻、善良な母たらんと念願し、良人を満足させて妻たる義務を果そうと努めた。

彼女の精神的、肉体的の第二次的性徴は、一部は男性的で一部は女性的であつた。

遊戯にたいする趣好があり、喫煙、飲酒を好み、衣服にたいする男性的好み、女性的な手工にたいして興味がなく下手糞だつた。哲學的な講義には興味があり、歩行や姿勢が男

らしく、強い線が顔に現われ、声は低く、骨格はたくましい。

脂肪堆積は少いが、筋肉はたくましく発達していた。骨盤は狭くて、これらは男性的特徴である。

四 ハンカチ狂

四十二歳の独身男。一八九二年三月十一日、裁判官は被告を鑑定に付した。よつて同人は病院へ送致された。

彼は、身長一・六二メートル。堂々たる体格。健康、營養良。頭は、やや小形で、陰鬱な表情、神経質的な顔。中度の神経衰弱。他に身体的異常はない。

一八七八年、第一回の判決で、強盗盗罪で一年半の禁錮に処せられた。

一八八〇年に、商人の妻のハンカチを盗んで十四日間拘留された。一八八二年に、路上で農夫の娘からハンカチを奪つた。強盗未遂罪で告訴されたが、警察医の鑑定の結果、強度の神経衰弱と精神作用の病的障害が犯罪時にあつたことが証明されて釈放された。

一八八四年、同じような状況のもとで女のハンカチを強奪して四カ月の拘留を受け

た。

一八八八年、市場で女の懷からハンカチを奪った罪で四カ月の禁錮をうけた。

一八八九年、同じような強奪をして九カ月の禁錮に処せられた。

一八九一年、同じ罪で十カ月の禁錮。

彼は、いつも若い女からハンカチを奪った。

日中、平気で人の前で盗みを行い、そのときは殆ど周りには注意していない。ために、すぐに捕まってしまうのである。ハンカチの他は盗まない。

一八九一年十二月九日に釈放され、十四日の年末の市で百姓娘の懷からハンカチを奪つて逮捕された。

そのとき、別に女のハンカチを二枚もつていた。

ハンカチを盗んだ動機については、そのとき酔つていて、ただイタズラにやつたにすぎないと申し立てた。

遺伝については不明。十四歳のときソドミイをやつたという。子供のときから強い色情を感じ、早くから性交やオナニイをした。十五歳のとき、一人の馬丁が、若い女のハンカチで快感を得ている、という話をしていたの

を聞いた。彼は、このことをある機会に試してみても確かめ、それ以後は、若い女を見るとハンカチによる性欲にかられるようになった。

酒の酔からさめて平常にかえると、刑罰が怖くなつて情欲に抗うことができたが、酒を飲むと、どうしても抑制できなかった。

女持ちのハンカチでも新しい物は全く効果がなかった。いちど女の手にふれた物が色情的に彼を昂奮させた。

女の手にふれたハンカチを持つている間は、リビドもあり勃起も起つた。わざとハンカチを道に落しておいて、何度も女の手にふれさせようとしたり、女に踏ませたハンカチを女の頸におしつけて、つまり、何でも女の肌にあふれたハンカチを作つて逃げたこともあった。

彼は、そういつたハンカチを直接に身体につけて楽しんだ。

女性と関係することは少しも望まなかつた。女そのものより、むしろハンカチのほうを愛したからである。

病院で鑑定した結果、異常素質の上に病的な不可抗強迫があり、中度の精神薄弱があった。彼は無罪になった。

原稿募集

★経験談・告白・手記

(四百字十枚から十五枚以内)

誰でも自分だけの奇妙な秘密な経験をつや二つ持つてゐるものです。殊にアブ党諸兄ともなれば、一寸知人友人には話せないが、といつて自分だけの胸にしまつておくのは惜しい、といった話があるに違いないと思います。どんなお話でも結構です。御申込の秘密は厳守しますから安心して御投稿下さい。

★アブ・ストオリー・小説

(四百字二十枚から二十五枚以内)

アブストオリーとは前記の異常な体験談などを、やゝ小説風、物語風にまとめたものです。

★掲載分には一枚壹百円から貳百円の間で稿料を呈します。但し原稿の返却はお断り致します。

送り先は

東京都千代田区神田

猿楽町一之三

日本特集出版社編集部

征服した女を虐める

男の心理

影 浦 憲

「女を泣かせるのは、いゝ氣持だろ？」
彼は、ウツフンと鼻で笑った。「スー
ツとしますね。ことに、自尊心の高い
勝氣な女が見榮も外聞も忘れて……」

一

男が、何故、征服した自分の女を虐めた
がるかという心理の分析をする爲には、ま
ず、男が、「女を征服する」という事の意
味をハッキリさせなくてはならないでし
う。

それではなくては、その女を虐める心理も
分つてきません。

そこで、少し遠廻しですが、一体、男が
どうして「女を征服したがるか」という事
から分析して見ましよう。

一体、男はなぜ、

女と肉体の交りをも
つことを、征服など

と大げさな物の云
いかたをし、それ

を得得として、友
達や仲間に云いふ
らして歩いたりす
るのでしうか。

この点は、いつも
女のひとが、迷惑し
たり、当惑したりす



男のアズエロ チズム心理

る点で、女の人には、恋人が出来ても、「男を征服した」などとは決して云いません。心の秘密として、そつと胸の奥にしまつておき、人に云いふらしりしません。男が出来ると、女のひとは体全体が色づくなつたり、美しさを増したりするから分るので、関係が出来た翌日にそれを自分から云いふらしたりは絶対にしないものです。ここが男の愛と、女の愛との違いです。女のひとは、いつも、二人の秘密を男が他のひとにしやべつた、と云つておこりますが、男にしてみれば、それは、悪気があつての事ではないので、つい、しやべつてしまうのです。

その位、得意だからです。

女の人にとつて、恋人が出来るといふ事は「ああ、私は、自分の生活の全部をかけて、愛するひとが出来たのだわ。今日から、私にとつて新しい人生がはじまるのだ」といふことでしょう。

ところが、男にとつては、女と関係をもつたという事は、新しい生活のはじまりではなく、一つの事業の成就であり、ある精神の作業の完成なのです。

「チキシヨウ！ ぞうだ。俺は、とうとうあの女を手に入れたぞ！」

正直なところ、愛する女と肉体関係をむすんだ男の心のなかは、これに近いのです。征服という意味も、そういう心理を云つたものです。

自我などと云う言葉をつかうと、大変むづかしくなりますが、男の自我は、社会に向けられており、自分以外のもの（即ち、社会）に自我をぶつけることで、自分をためし、自分の本当の姿を知ろうとする心の働きが、男にはあります。

いつでも、何かに、自分を賭け、自分を試してみる。不可能と思われるような冒険に立ちむかう勇氣もそこから出るのですし、あぶない仕事に手をだしたり、大変な事業を起したりするのも、みんな、そういう心の働きがする仕業（しわざ）です。

さて、そういう心は、女にも向つて行きます。

男にとつて、女というのは、得体の知れない動物であり、マンモスに比すべき、偉大な未知の怪物であります。

従つて、これを生捕りにし、自分のものにするということは、大いに彼の冒険意欲をそそりますし、「やり甲斐のある」大事業なのです。

ことに相手が、美人であつたり、貞操のかたい女であつたりすれば、なおさらのことです。

前途の困難さは、それだけそれを征服したときの満足感を昂めますし、他の男に対する優越感も大きいと云うわけです。

「人みなのが得がてにするというヤスミコ得たり」とうたつた万葉の昔から、男の心理はかわりません。

お金もあり、社会的な名声も、得ている男が、一人の若い娘の心を動かそうとして、苦心サンタンしている例も、私達の周辺に見られますが、これこそ、女性を自分のものにするという事業が、どんな対社会的な仕事にもまして、男に魅力的か、という事情を語るものでしょう。

ディマジオにとつて、その輝やかしい全野球生活のどんな瞬間にも、マリ・ノを得たときの満足以代るようなものはなかつたでしょう。

う。
男が女を征服するという事は、こういう事です。

それは自我の充足であり、世界を自分の腕にかかえる事なのです。

どんな男にとつても、恋愛が、こういう事を意味しない事はありません。

二

さて、ここで、一人、私の友人を御紹介しましょう。

彼は、今年二十八歳になる色事師です。

今までに女性を、(と云うのは素人の女性のことですが)四十人近く知つたと豪語しています。四十人はどうか分りませんが、いずれにしても大したものです。

そこで私は、ききました。

「——征服した女を虐める男の心理つて云うんだけどネ、一体、君なんかでも、女をいじめるかネ」

すると彼は、ずるそうに笑つて、

「虐める事なんて、ありませんよ。僕はフェミニストだから」

「まあ、君がフェミニストかどうかは、また別のときにゆつくり議論する事にするが

……、いつか、君、会社のトイレの所で、R子を泣かしていたじやないか。あれは、どうしたんだネ」

「あ、あれですか。困つたな」

と、頭をかきながら、

「あれは、ちよつと。……あんときは——と」と少し考える風をしたが、

「あ、そうだ、家を出て、僕と結婚するかどうか、きいてたんです」

R子の家は、大変なブルジョアですから、評判が悪いこの男との恋愛には、家では、絶対反対だつたのです。

「だつて、君は、結婚する気は少しもないつて云つてたじやないか」

「ええ、結婚する気なんか無かつたけど、あんまり、あいつが、結婚は結婚、恋愛は恋愛なんて、割切つて、スマしていやがるから、困らしてやろうと思つて……」

「すると、彼女を困らす爲に、結婚しようなんて云つて、泣かした訳だね。少しも結婚する気なんか無いのに。……ひどい男だなア。

それで女を虐めた事ないなんて云えるものかね」

「なるほど。……やつぱり、僕もいじめているな」

「女を泣かせるのは、いい気持だろ？」
彼は、ウツフンと鼻で笑つた。

「スーッとしますね。ことに、自尊心の高い勝気な女が、見栄も外聞も忘れて、うらめしそうな顔をしながら、泣くときなんかはネ。そういう時の、得意さなんて、ほかでは味わえませんよ。僕なんか、その得意さを味わいたために、女をひつかけているようなものだ。はじめは、こつちの事なんて鼻もひつかけないような顔をしていた女が、僕にいじめられて、自尊心をふみにじられながら、それでも、やつぱり僕から別れられなくてついてくるようになったてしまふ。これ位、面白いことはありませんからね」

「はア、大分、はつきりしてきたぞ。——すると、何かネ。女をいじめるというのは、征服したという快感を、反スウして自分で味わいたいからなのだな」

「と云うよりも、征服したか、どうかを、確認したいんじゃない？」

「自分が？」

「相手にもネ——」

そう、そういう事もあるのでしよう。

女のひと自身、ひどいことをされて、泣かされて、それでも、

「ああ、こんな仕打ちをされても、私は、やつぱり、あのひとから離れられないんだわ」

と、自分で、そう考え、自己暗示におち入って、女の人には、そういう自分の感情に酔うような性質がありますから、自分から参つてしまう。……

この男なんかは、そういう女の人の心理の動きもちゃんと計算に入れての事なのでしよう。

つまり、自分も、本当に、この女を征服したんだという確証を得たいのと同時に、相手の女の心にも、消しがたい烙印を押してしまおうとするのではないでしようか。

三

ここで一つ思出した話を書いておきましょう。

ある機会に、ある人妻の性愛のつつ突んだ打あけ話をきいた事があります。

ちやんとした会社員の奥さんで、美人で評判のひとでした。

一緒にこたつに入りながら、きいたのですが、女のひとは、一度、へだてがとれる

と、きわどい話でも平気でするもので、この時も、いろいろきけました。そのなかで一番色っぽかったのは、

「どういう、



式が一番感じますか」

ときいたとき、少しもじもじしてから、

「私、少しヘンなのね。お腹の上に——××

××——それは、はじめネ、赤ちやんを作りたくなかつたので、それが目的で、そんな風

にして頂きましたのよ。……そんなとき、思いがけなく、とつても良くて、それから……」

少し意外でした。

「どういう所が、いいんでしょう」

「汚されたって、感じが。……とつても、そういう感じがするでしよう？ それが……」

そこではじめて分りました。

「汚される」それも「虐められる」と同じように、女性にとつて、堪えられない快感なのです。

「汚される」って云つたつてきたないものじやありませんし汚れるわけではありません。

つまり心理的なもので、男も、女も、汚すとか、汚されると云つて、

そのことを、わざと深刻に考え、それに酔いたいのです。

女だつて、性の快感はあるのです。

快感を味わいながら、汚されている、いじめられてる、と考え、そう考えることによつて、本当の深い責任から逃れたいと、あせるのです。

ある待合のお内儀と一緒に、遊谷で秘密映画を見たことがあります。

お内儀と云つても、もう五十近い女で、それだから、平気で、男と一緒に、そんな

映画も見るのでしようけど、観覧後、どんなのが一番、良

かった、ときくと、

「あの、画描きの」

と答えました。

パリの画描き

が、その画をか

いにきた娘や、

画中の女と、た

わむれるという

筋で、見た方も

あると思います

が、変った場面

があります。

女を、化粧台か何かの上にうつむきにも

たれさせておいて、愛をかわすのですが、

これは、お腹の上にじやなく、その反対

に――。

やつぱり、汚すという感じがつよく、そ

の画家も、そういう心理的な効果をねらつて

いるように、ていねいに、動作したのです。

おそらく、そこが、感じたのではなかった

でしょうか。

「もう、何て云つたつて、俺のものなんだぞ

でしようか。

泣いたつて、わめいたつて、俺のものなん

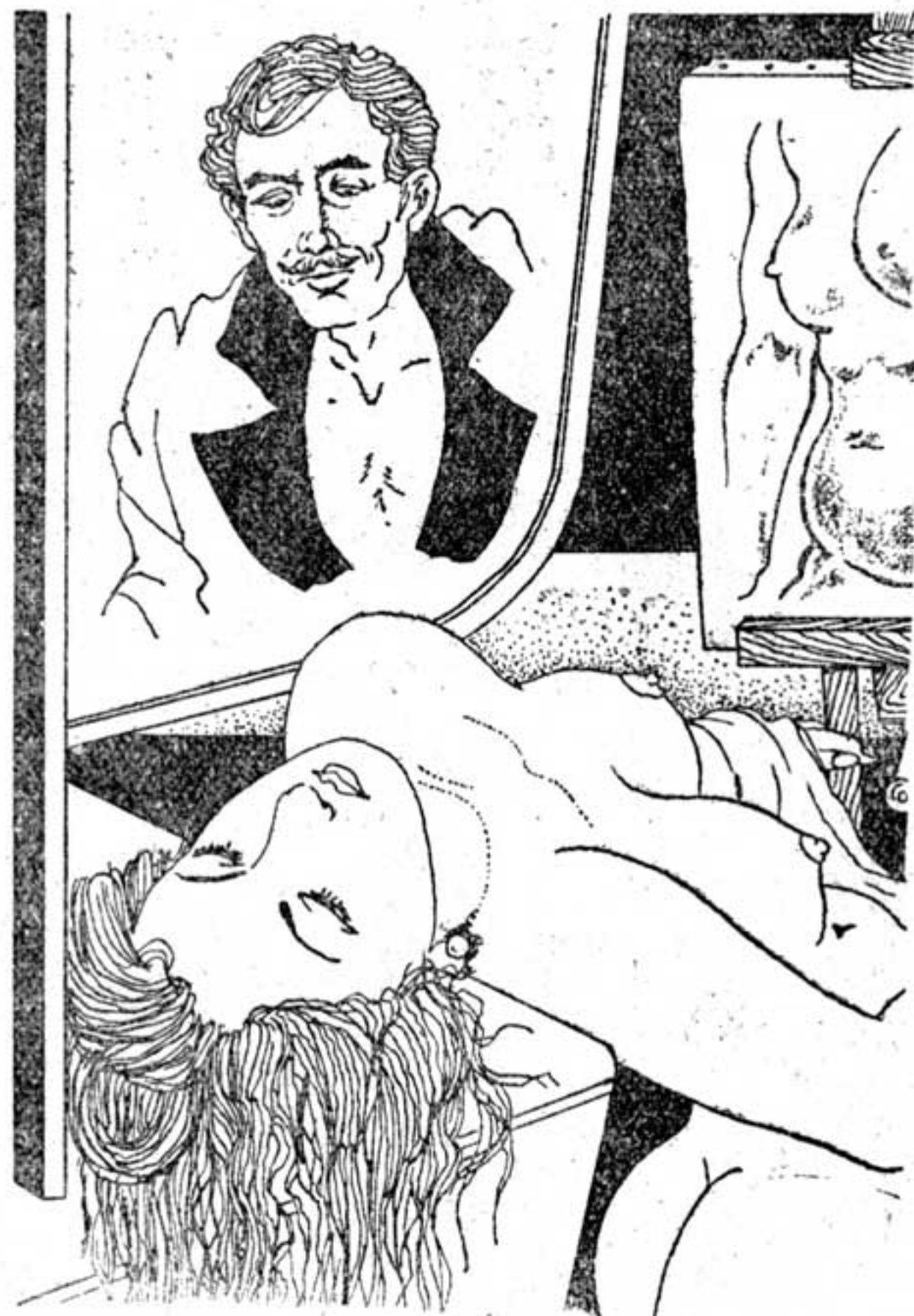
だ。ほら、こんな、ひどい事をしたつて、イ

ヤ、とも云えないで、いるじやないか」

男の態度は、そんな事を語っているよう

で、

した。



四

さて、私は、この文章のはじめの方でしきりに征服、征服という言葉を使いました。

しかし、一体、男が、女を征服出来るもの

でしようか。

これは、たとえば、家を買うとか、会社の

社長になるとか、貯金をするとか、という事

とは、ちよつとちがいます。

形のない、計算する事の出来ない人の心の

なかのことで、それを計るのは愛情というも

のなのですが、また、これ位、不安定な、不

確かなものはありません。

「私は、あなたを愛しているわ。私はあなた

のものよ」

と云いながら、彼女は、次の瞬間には、外

のひとと、楽しく食事をしたりするのです。

「私は、あなたに征服されたわ。もうダメだ

わ」

などと、なげいても次の瞬間には、立ち上

つて、映画を見に行つたりするのです。

自分のものにしたと思つた次の瞬間には、

それに疑いをいだき、征服したと思ひながら

彼女のなかの何一つ、自分のものと主張出来

ないのです。

生きて、動いている美しい、女の軀とこころ。

男が、あせり、いらいらするのは、征服した確証が何もないからです。

男が女を虐める心理というものは、この愛の型の不確かからきています。

たとえば、前の色事師の話のように、結婚する気もないのに、結婚する爲に家出しろと強要するのは、女の愛情をためしてみたかつたのでしょうか。

「女をいじめるのは、変態つて云うけど、男はだれでも、愛している女をいじめてみたいんじゃないかな。口説くどけですもの」

という、この青年の言葉は、そういう意味なのでしよう。

「大体、どうやって、君達、女をいじめるンだい」

ときいて見ました。

「女を泣かせるのなんて、訳はありませんよ。先ず、僕を愛してないんだらうつてきくんです。ほんの遊び相手として、もてあそんだらうつて云つてやるんです」

「何云つてんだ。君の方が、もてあそんでるんじゃないか」

「えへへ……。そうなんですけどネ。『も

てあそんだなんて、ひどいわ』大抵そう云いますから『本当に愛しているなら証拠をみせろ』とか、『君は、ひどい女だね。××君とも熱海行つたつて、皆が云つてゐる』なんて、ある事ない事云つて、向うが混乱する位、間いつめて行くんです。するとしまいに『ひどいわ、ひどいわ』つて泣き出しますよ」

「あきれたもんだねえ。——その他には」

「他の女と三人でいましょう？　そういう時に、他の女の方に、やさしくしてやつて、自分の女にはワザとツンツンしてやるのも効果がありますね。二人つきりになると忽ち泣き出しますよ」

「だれだつて、恋人との仲の良いところを他人に見せたい気持をもっているから、その裏をかくンだね。——心理的ないじめ方でなく肉体に加える虐めというのは、君たちの間にあるかしら」

「さア……せいぜい、キスマーク位じゃないんですか。キスマークだつて、いたみとか何とかつて事じゃなく、『ママに見つかつちやうわ、困るわ』なんて云うのを押さえつけて、やつちやう。つまり、困らせるのが目的なんです」

「なわでしばつたり、ムチを加えたりする趣

味はないの？」

「ええ、僕は一度も、そんな事したことがないから、……でも、何だか、気持は分るな、今、僕が云つたような事をもつと、強くしたようなものじゃないかしら……」

「そうだろうね。男の気持の底には、そういうものが、かならず、あるンだね」

そうなのです。

考えてもみてください。愛の確証を得ると云つても、どうして、それを得ることが出来るでしよう。

空の色のように、うつりやすく、つかみがない、愛のあかしを得ようとして、はじめはただの心理的な虐めをはじめても、その沼は泥沼で、底がありません。

心理のジレンマにおち入つて、しまいに病的な加虐趣味になつてしまうのです。

この解決のない、愛のたしかめゴツコにも唯一つの解決法があります。

あまりおすすめ出来ませんが、愛する人はじめて、そこで愛の証しを得るのです。

近松の昔から、私達がやつてきた唯一つのたしかな愛の証し、それは「心中」です。これからも、この方法が無くなる事はないでしょう……。

(おわり)

現代の男奴隷たち

「アゴを引いて！」と稽古用の扇子の先で、グイと頤を突く。一人の重役さんはベンベンたる太鼓腹を「おなかが出すぎる！」と拍終いじめられる……

朽 木 冬 夫

(1) 刺 戟 養 生

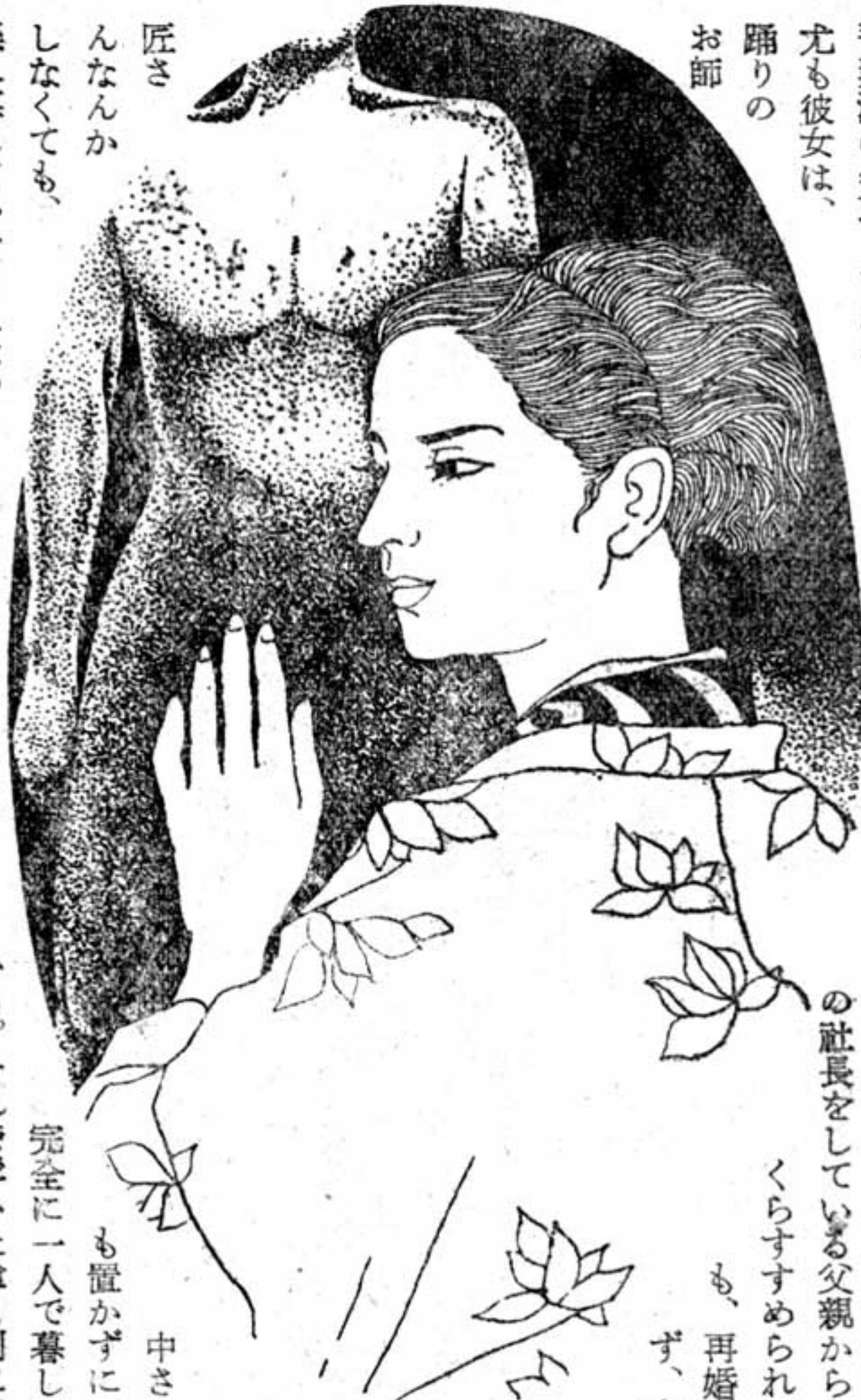
うちの近所に、日本舞踊のお師匠さんがいる。吾妻喜代美といつて、その名の示す通り、吾妻流の名取りである。

尤も彼女は、踊りのお師

思うまい。年はやつと三十になつたかならぬくらいである。背がスラリと高くて、子供を生んだことのない女性特有の弾力がある。よつぽど潔癖な性質なのか、或る会社の社長をしている父親からい

くらすめられて

も、再婚せず、女



匠さんなんか、しなくても、

楽に暮していける人なの

だが、若い未亡人生活の退屈をまぎらすため

と、それにやつぱり、踊りが何より好きなの

である。ふだんスマートな洋装姿で町を歩い

ている時など、まさかお嬢さんには見えない

が、かといつて、踊りのお師匠さんとは誰も

い。

完全に一人で暮している。それで浮いた噂も別にな

も置かずに、中さえ

ただ、彼女の所に、踊りの稽古にやつてくるいわゆるお弟子さんは、絶対に男ばかりである。いろいろお稽古ごとのさかなな世の中なのだから、男だつて日本舞踊の+

男のアス・エロ チズム心理

つや二つ習つたつて、けつしておかしいこと
はないのだが、こう男ばかりのお弟子さん
というお師匠さんも珍しい。

しかしこれには理由がある。彼女の稽古が
凄くきびしいのだ。もともと吾妻流は藤間流
から派生したもので、例の藤蔭静枝の稽古の
はげしさは有名だった。その伝統をうけつ
いでいるにしても、彼女の稽古は苛烈きわまり
ない。だから、ふつうのお嬢さんなど、お弟
子になれないのである。

気に入らないことがあると、彼女は手当り
次第に、ちようど持つてゐる物で、弟子の身
体をなぐる。

「アゴを引いて！」

と、稽古用の扇子の先
で、グイと頤を突かれた
ため、そこが痛々しくみ
みず腫れた弟子があつ
た。こんなことで、ふつ
うの娘の顔にキズでもつ
けたら、大変にちがいな
い。さいわい弟子は男ば
かりなので、どんな残酷
な仕打ちも出来るのであ
る。

弟子の男たちは、いずれもちゃんとした、
かなりな身分の紳士ばかりである。その中の
一人の重役さんは、ペンペンたる太鼓腹の持
主で、いつも彼女から稽古のとき、

「おなかが出すぎる！」

と、強いいじめられる。或る男は、うつか
り汚れた足袋をはいて稽古舞合に立つたため
殊のほか、彼女の怒りを買い、そのまま寒中の
庭に突き出され、いつまでも雪どけのジトジ
トした庭土の上で凍えていた。稽古のときは
きまつて白足袋をはくものだし、着物は薄い
単衣だから、多はこたえる。

いずれにしても男たちは、どんなに打たれ
ようが責められようが、彼女につらく当たら
れれば当たられるほど、ふしぎな満足感をお
ぼえるのだ。切れ長な眼尻が文字通り裂けて
しまふような顔で、抜けるように白い肌の色
が、いつそう青ざめて、怒りに怒る彼女の表
情に、男たちは妖しい戦慄をおぼえるのだ。
その証拠に、弟子の数は増えこそすれ、けつ
して減少することはなかった。

そしてこれらの男たちは、とりたててマゾ
ヒズムのマニヤというほどのものではない。
「何と申しますか、一種の刺戟養生ですな。
まつたく、あの美しい師匠から、ギュー／＼

の目に合わされますと、下手なマッサージ
より生き／＼と血が廻ります」

と、一人の弟子が述べた言葉から、現
代男性に共通の心理がうかがえる。刺戟養
生とはいいい言葉である。現代人はみんな、
何らかの刺戟を渴望している。諸事あわた
だしくいらだたしい現代世相の中で、病的
に尖つた人間心理をやわらげ、神経的な疲
勞感を回復させるものは、すこしでも強い
刺戟以外にない。早い話が、若い人々が強
烈なジャズ音楽に陶醉するのも、一種の刺
戟への欲求なのである。

實際われわれは、一向に変わらばえのしな
い日常の繰り返しに倦き／＼している。揚
句に、身体のしんそこにズーンとこたえる
ような刺戟に憧れる。それもなかなかこ
とでは、肉体的な倦怠感をもみほごすわけ
にはいかない。それ自体が完全な陶醉であ
り高度の恍惚状態であるところの刺戟が欲
しい。

するともう、女のやわらかさ、やさしさ
悩ましさが与えてくれるところの、痛みや
苦しみ以外には考えられない。殆どどの男
性が、例外なく抱く心理的饑飢の一つとし
て、女人国の夢があり、そこで思う存分、

自分の肉体を賣め苛まれないという憧れがある。つまり、すべての男性は、一度女性の肉体的奴隷になりたいと切望するものなのだ。

(2) 罪と罰

ところで、外国には「マンハンタークラブ（男漁りの会）」とか「ブルデル・フォン・ダーメン（婦人の爲の青樓）」とかあつて、大いに女性たちが、男の奴隷を求めるけれども、まだまだ日本には、そのような積極的な女性が少ない。女の前にかしずきたい、女からいじめて貰いたいと切望しても、なかなか思うようにいかぬのが現状である。で、そんな欲求に馳られた場合、妻か恋人にたのんで、縛つて貰つたり、鞭打つて貰つたりすることで間にあわせなければならぬ。が、折角身体を投げ出して、まかせきりにまかせても、相手の女性がこちらの氣持をすっかり理解しない限り、満足な結果はえられない。

しかし、やむにやまれぬ欲求を抱いているマゾマニヤのために、恰好な話がある。その道の人々のあいだでは「沖田夫人のパーティ」と呼ばれている一種のパーティなのだが、いわゆる秘密クラブみたいな集りではない。澁谷の高台にある沖田邸で、月に一度か二度、

たのしい歡樂がつくされるのである。勿論、きらびやかな夫人連ばかりの集いで、男氣は一つもないのが特徴だ。但し、たつた一人だけ、その夜の犠牲となるべき男性が、どこからか拉致されてくる。

拉致されるといつても、その男はあらかじめ拉致されるように予定してあるのである。つまり夫人連の交つた趣向にサービスする意志さえあれば、拉致される男に誰でもなれるというわけだ。強いて資格とも称すべきものをいうなら、その男は相当に身分が確かで、しかもマゾヒストでなければならぬ。

さてその夜が来て、指定された地点に立っていると、一台の自動車が全速力で近づき、男のそばで急停車する。あつというまに男は車内に引きずりこまれる。ふたたび自動車は全速力で疾走しはじめる。氣がついてみると運転手も、男を両側から捕えている怪漢も女である。しかも車内で、男は猿ぐつわをかまされ、両手両足を堅く縛られる。

こうして男は、沖田邸に運びこまれるのである。さらに男は、奥の一室にかつきこまれ、そこで十人ばかりの夫人連がズラリと腰をおろしている真中に、ドサリと放り出される。猿ぐつわだけが、とりはずされた。ガヤガヤ

と一しきり夫人連がおしやべりするのを、その夜の裁判長が制して、「では本日の裁判を開始します」と宣言する。この場の趣向は、女性国の敵たる男性国の捕虜を、嚴罰に処すべき裁判が行われるという次第である。以下一々の訊問形式は省略するが、つまりこの男は且て如何なる罪を女性に対して行つたかが徴に入り細にわたつて取調べられる。そしてこの男は、他の男性一般の罪を代表し、その責を負わなければならない。やがて、判決が下る。

「女性に対して不親切、無作法などなどの罪によつて、鞭打ち百回の刑に処す。異議ありませんか？」

というふうな具合になる。

「追加！ 裸にしてゴム責めの刑」

などと、勝手に他席から声がかかることもある。ゴム責めとは、生ゴムで身体中をこすり回すことである。生ゴムが肉をはさみ、体毛をジリジリ巻き取り、間断なき痛みが彼を責めさいなむ。又、鞭打ち百回といつても女性一人から百回ずつ打たれるのである。

まだまだ、いろんな刑罰の種類があつて、

嫉妬の罪には「逆さ吊りの刑」とか、大食いの罪には「水責め」とか、夫人連の想像の許す限りの仕打ちが施こされることになつてゐる。

要するに、これは夫人連にとつて、愉快な遊びなのであり男にとつては願つてもない被虐趣味の満喫なのである。打明けたところをいえば実はわが「マゾヒスト・クラブ」の案出した一件で、さいわい風変わりな遊びを好む沖田夫人との提携によつて、この企てが実現したのだつた。

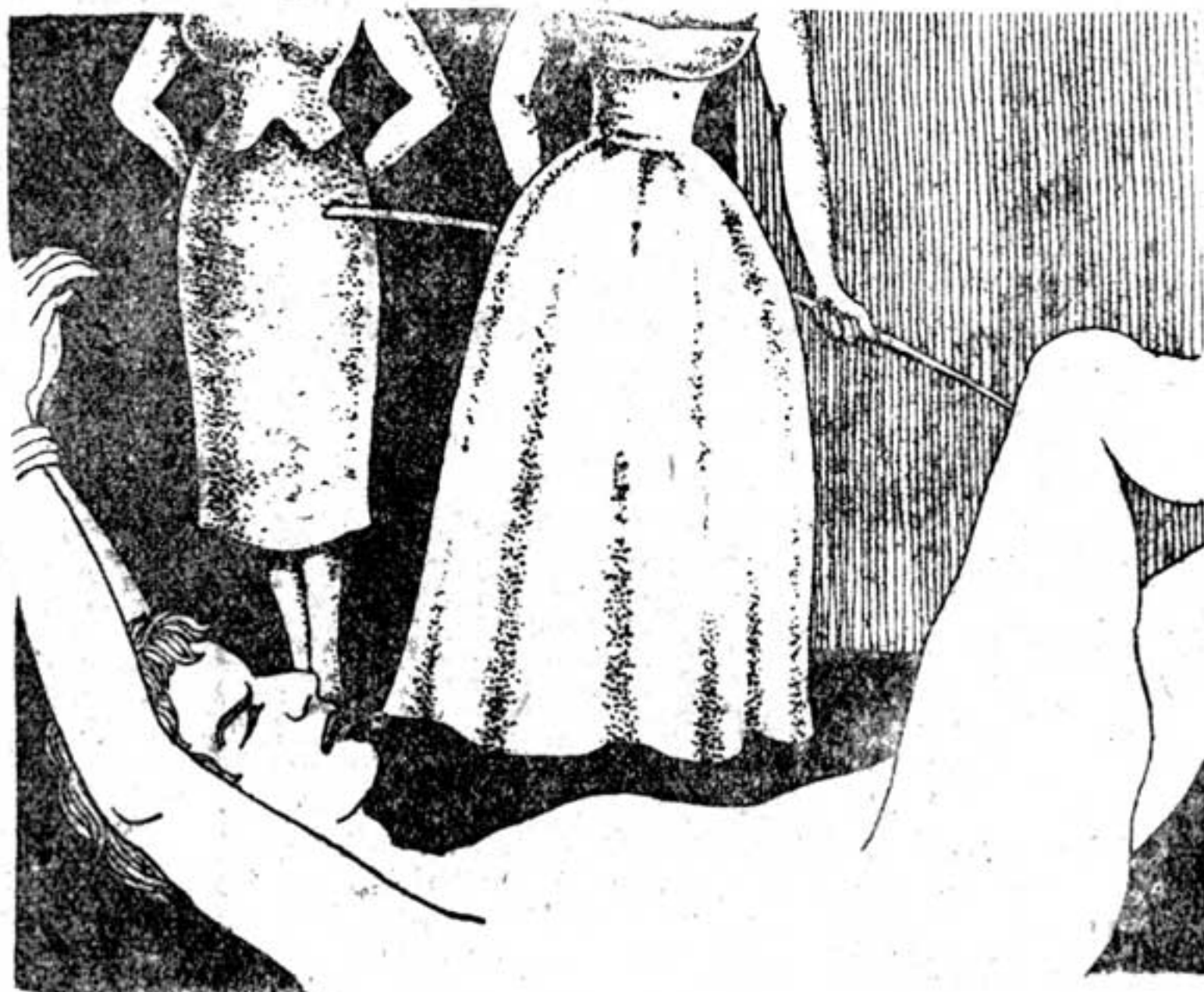
罪といい罰といいわがマゾヒストにとつては、好適の主題である。罪にともなうスリル感、罰に含まれる苦痛感、マゾヒストにとつてこの上ない魅力である。マゾの心理は、常に罪と罰の意識により構成されてい

る。

又、とりたててマゾヒストと限るまでもなく、現代人の心理の中には、罪と罰にロマンチックな、甘美な雰囲気を感じる傾向がみられる。ということ

は、逆に、急激な息苦しいテンポで流れすぎる現代に生きる者すべてが、多少なりともマゾ的性格をもつてゐることの証左である。

とまれ、もうすこしくわしく罪と罰の趣向について述べたかつたが、事情が許さぬので一見他愛もない話になつてしまつた。あとは、マゾヒストのみに許された異常な感覚と想像力で補つて頂きたい。



(3) 若き奴隷

いかなる男性も、少年期から青年期にかけては、女性に対して受身な欲望を感じるものである。即ち男性は人生の前半期に於ては被虐の立場をとる。よく自身のことに ついていえば、少年の頃頃は美しい少女達をお姫さまに見立てて、彼女たちから縛つて貰つた上で暗い押入れなどにとじこめられたいと願つたものであつた。又、よくは毎朝、一人の氣に入りの女中から、きまつてパンツの紐を結んで貰つたが、「そんなにキツく締めては、腹が切れてしまいますよ」といわれても、「いいんだよ。もつとギュッと、もつともつと」

と氣が遠くなるほどの思いに放心し、快感を得るのだつた。

こうして青年期に至つては、他の誰もと同じく、年長の女性に愛されたい氣持を強く抱いた。年長の女性に愛されたいという氣持の底には、まぎれもない被虐の心理がある。

ところが、女性一般は、少女期から処女期にかけて、特有の残忍性を心理の底に秘

めている。

いまここに、若い学生たちのあいだで、すっかり有名になった令嬢がいるが、この話ばかりと誰の胸にも共感を呼ぶにちがいない。令嬢の名前は、仮りに光子としておく。

光子には小学校の頃から、入れかわり立ちかわり家庭教師がつけられた。家庭教師には殆んど学生アルバイトの連中がやつて来た。もつとも光子のみならず、光子のような少女の家庭教師になつた若者は、必ずマゾ的心理の、妖しい快感を経験した筈である。

光子はよく、お金を落した。それを盗まれたと思ひこむのである。すると大抵の場合、家庭教師が疑いをかけられるか、又は光子の思惑の犠牲者とならなければならなかつた。

ともかく、盗人になりおおせて光子を満足させるのも家庭教師のつとめと心得るのが、大抵の学生的心情であつた。

「あんた、そんなにお金欲しいのなら、これあげるから、取つてごらんさいよ」

と、次に光子は威丈高になり、火の中に投じて熱く焼けた貨幣を、掌で握らせる。ここで怒つてしまう家庭教師は、そのとき限り光子のもとから姿を消すのだ。が、マゾヒストなら、これほど強烈な被虐の喜びはない。焼

けた貨幣を、云われるままにギュッと握りしめて、ジリジリと焦げる掌の肉の疚きに耐える瞬間と、それを燃えるような瞳でみつめる光子の視線の激しさは、それこそ生命の燃焼する愉悦の享受に外ならない。

「注射してあげるわね」とか「イレズミしてあげるわね」とか云つて、光子が、ペン先で家庭教師の腕や手先をチクチク刺すようになったのは女学校に行くようになってからである。勿論、焼けた貨幣を握らせることは、いつまでたつてもやめなかつた。こういうふうに見てくると、むしろ光子のサディズムを強調するようだが、そうではなくて、彼女の暴虐に奉仕する若きマゾヒスト達が、いかにその後被虐の喜びにますます耽るようになって来たか、数えきれないほどなのである。それに、サディスティックな行爲なくして、マゾヒズムは成立しないのだし、光子の場合、彼女に奉仕する男性は意外に多かつた。

長ずるに及んで光子は、家庭教師に風呂を湧かせるようになった。そうして、きまつて「うんと熱くしてね」といいつけるのである。風呂が湧いて、その旨を光子に告げると、湯殿から素つ裸の光子の叫び声が、家庭教師を呼びつける。云い草は、

「こんな煮え湯の中に入れると思つてて、あんた入つてごらんさいよ」

と、無理矢理に家庭教師を、そのまま湯に漬けるのである。家庭教師は地獄の責苦の中で、ヒタイからあぶらをたらしながらそのまま死にそうになる。が、立ちあがらなかつた光子の監視は、容易に上ることを許さない。やつと許されて湯壺から上つたときフラフラになつた家庭教師は、大抵めまいのために、そこにしやがみこむ。すると光子の容赦ない折檻が、彼の肉体に対して繰り返し加えられるのである。だが、こうした半死半生の目に合う気持は、他にかけがないと家庭教師たちは告白するのだつた。美しい裸の処女から受ける打撃は、むしろ天恵の筈にも必敵するのだ。

尚、フェティシズムやサディズムにも関聯してくるので、それはそれぞれの項目に属するものとしてここでは省略するが、光子は彼女の足の爪を、男の歯で噛み切らせた。あるいは谷崎潤一郎の小説にもあるように、足指に食物をはさんで男にたべさせた。彼女の足下にひざまずくことで、無上の喜びに浸る家庭教師は、いま列をなして、自分の順を待っているのが事実だ。(終)

ワキガ天国

「といったワケで、今日まで独身でいるんですが、どうせ今となつては、なまじ結婚なんかして俗っぽい苦勞をするより、このほうがよかつたと思つています」

客は、四十五、六の小柄な男。べつに、これといった、特徴はない。そこらに普通に見える。独身者らしく、さつぱりと頭を刈りこんで、きれいにヒゲを剃り、きちつとした洋服を着ている。

彼は、私の読者で、静岡に住んでいる人だが、とき／＼上京して来る。意を決して私を訪ねたという。ところが、何も意を決さなくてもいい話で、けつきよく、彼は、生来のワキガ・マニヤで、私が外国に行つていたことがあり、西洋人の女のワキガについてペンを走らすことがあるので

そんな話を詳しく聞きたかつたまでだ。

「で、西洋人の女は、みんな強いワキガを持つていますか？」

「みんなが皆そうかどうかは知りませんが日本人にくらべて多いようですね」

「でも、何だか甘酸っぱい、乳臭いみたいな体臭がありますね」

「チーズ的な匂いですよ」

「男もワキガが多いですか？」

「まあ多いですね」

★男のアフ・エロチズム心理★

女體と男のフェチズム



……耳から下の、ふつくりした顎への線、まだ若い娘の、生毛の生えたオトガイくらい美しいものは此の世にないと斷言し、道行く女の子のオトガイを見るために、わざわざそばへ行つて……

三宅 一朗

「私など、終戦後、アメリカの女が沢山やつてきたので、わざ／＼そばへ寄つて嗅いでみるんですが、ちつとも匂いませぬね」

「それやダメですよ。やつぱり、上衣を脱ぐとか、うんと接近してじやなくちや」

「と思いますが、おぼえがありません。行きすがりに、ふツと強く鼻をつかれると、つい我を忘れて、その女の人に從いて行くんです。まるで、不良青年みたいですが、否応なしに引きつけられるんです」

「私はね、正直にいつてワキガ気遣いですがやりきれなくなるほど強いやつは御免です。適度に強いやつ。夏になると、下着が少し黄色く染まるくらいのが一番いいです。ワキガがない女だと、ぜんぜん興味が起りません。反対に、ワキガを嗅ぐと、どんな御多福でも勃然としてきます」

「お母さんがそうだったんじゃないですか」

「それで何か面白いことがありましたか？」

「少しはね。さア、今まで何十人、何百人の女を従けたか知れませんか。しかし、べつに悪いことはしていません。たいていは、たとえば菓子屋で買物をしていると、後から入ってきた三十位の立派な奥さま風の女が、あれ頂戴、といつて手をのばしたとたんに、ぷーんと素晴らしい匂いがします。すると、もう、私は、ボオとしてしまつて前後を忘れ、ふらふらッとその人の後をついて行くんです。そして、百のうち九十九まで、途中で、だん／＼冷静になつて従けるのを止めます」

「その百のうち一つで何か面白い経験は？」

「ありますが、まア御勘弁ください。こんなのは話してもいいな。これは従けて行つたんじやありません。私の町にある映画館の売店にいた女の子ですが、この子が、私に煙草をひよいと腕をのばして出したとき、ぷーんと来ました。それから、その子目当てに映画館へ通つた通つた。二度も三度も同じ映画館に行く。しよつちゆう売店へ何か買いに行く。とう／＼親しくなつて問題の点にふれました。君は、ワキガが強いね。あら、彼女が真赤になりました。困つてるのよ、治す方法ないかしら？ とんでもない、ぼくはワキガ

が大好きなんだ。男つて女のワキガ好きなんだよ、心配することはないよ。で、けつきよく、私は、その女の子を旅館に連れこむことに成功し、心ゆくまで素適な匂いをたんのうしました。処女でした。これが、きつかけで女というものは、ワキガがあると大へん気にしている。そこを利用すると簡単にモノになることを発見したわけです。つまりは、私にとつては一挙兩得つてワケで、さア、それから、すつかり大膽になつて、ワキガに悩んでいる女を、かれこれ二、三十人も口説いては成功しました」

「女たらしつてところですね」

「自分ではそう思つていません。非道なことをした覚えもありませんし、たいていの女はワキガを好む私を却つて有難がるのが多いのです。ことに未婚の、そのために婚期が遅れている女はね。人妻は、本人たちの話によると、はじめはイヤがつていた良人も、しだいに好きになつて、却つて普通の女と浮気をしなくていいと言つていたのがいました」

「なるほど。ワキガがある女は、ふつうの女より情熱的だと思いますが？」

「そうかも知れませんがね。私は、ふつうの女はあまり知らないんでして」

「たしかにそうですよ。で、あなたは、どんなふうに嗅いで楽しむのですか？」

「どんなふうにつて技術も絲瓜ありませんよ。匂いですからね。私の経験から言いますと、直接に鼻を押しつけるより、少し、三、四センチ離れて嗅いだほうが一番いい。腕を挙げず、びつたりと身体につけて隙間を嗅ぐのもいいです」

「キッスするでしょう？」

「腋の下にですか？」

「ええ」

「しますよ」

「どうですか？」

「あまりよくありません。相手はいいらしいんですが、ワキガの腋の下にキッスすると、あと一時間ばかり唇が痺れたみたいになりますよ。痺れ薬をつけたみたい」

「そうですかね」

「ほんとです。その痺れ、残んの香が何とも言えませんな。あ。そうだ、写真」

と言つて、彼は、おもむろに持つていた鞆から大きな封筒を取り出し、無慮、三、四十枚の写真を私の前に出した。一見して、私はあッと驚いた。どれもこれも女の腋の下の写真ばかりである。



「腋の下なら、たいていの女はイヤがりませんよ。顔は出ないし、それほど恥かしくないし」

「これ、みんなワキガのある女ですか？」

「ほとんどそうです。私の一生の想い出です」

今更のように、その男の顔を見直した。

「呆れたでしょう。でも、べつに害のあるマニヤだとは思われないでしょう。よくあるワキガ治療の広告など、案外に私のようなのが

ワキガ女を探す手段かも知れませんか」

「それや妄想でしょう」

「こんどは、そんな広告主のところへ行つてワキガ女一覽表でも見せてもらおうと思ひます。なアに個人的にも社会的にも悪いことばりして、先生、ずるいですよ、ひとつ外国の女のワキガの話を聞かせて下さい。そのためにお訪ねしたんでしたのに」

彼は、まるで私を怪しむように、いま出し

た写真をそそくさと靴の中に蔵いこみ、あらためて、きつと私に向きなおるのであつた。

男のフェチズム

誰でも、男なら、痴漢や変態男と言われないう者でも、女の腰巻やパンツなどが洗濯竿に乾してあると、チラと眼をひかれよう。それを盗んで集めるとなると完全なフェチストになるが、多かれ少なかれ、男は、フェチズムを持つてゐる。物、なるだけ彼女の肌に触れたことのある物は、強く男を引きつける。それは彼女の代替物であり代理人である。恋人から、煙草をプレゼントされてさえ、自分が買った物とは違つた感興を呼ぶ。まして、彼女の、秘奥の、男のあこがれの肉体の部分に直かに触れた品物は、男にとつて興味にプラス愛着を感じさせるのは当然だ。それによつて、彼は、匂い、形、色、弾力、味覚、あらゆる感覚を呼び起す。

フェチズムの大御所ブレトンヌは、終始一貫、女の脚と靴を崇拜し愛し、その二百数十巻の著作、ことごとく右の精神が貫いているが、我国には、まだブレトンヌ先生に並ぶ豪の者は現われていた

いようだ。

シモオヌよ、お前の髪は、で始まる有名なグルーモンの詩は、毛髪フェチズムの詩として知らぬものはあるまい。ポオドレエルの女の髪にたいする熱狂ぶりも、世界周知である。むかし、今のように洋服が流行らない頃デパートの掃除人のところへ毛を買いにくる紳士がいた。着物の御婦人が一日に何万と出入りするデパートでは、閉店後、掃除をするに相当に多くの抜毛が落ちていたことがわかる。それを内緒で買いに来る紳士は、よほどのマニヤだったに違いない、とうとう掃除人に打ち明けたところによると、彼は、自分が関係した女の毛を一本ずつ永年に亘って集め何百本かを芯にして、デパートで買い集めたので包み、やつとのことで座布団が一枚できたと喜んだそうである。

そのほか、女体についての男のフェチズムは、昔から色々な話が伝えられ、性科学のほうでも無数の実例が挙げられている。犯罪にまで至るフェチズムも多い。クラフト・エビングが示しているハンカチ狂など、たつた一枚のハンカチのために何度も検挙され、性懲りもなく、釈放直後に女のハンカチを奪つて刑務所へ入れられる男の実例など、

むしろ気の毒を通り越した話である。

こうした庶物崇拜はさて置いて、フェチズムを広義に解し、女のからだそのもの、たとえば、前掲のワキガとか乳房とかお尻とか特定の部分だけを狂愛するのがある。元来、これは、フェチズムとは言えないかも知れないが、以下、やや珍らしい話と思われるのを紹介しておこう。

オトガイ君

たいていの男は、女の女らしい部分を愛好する。だから、乳房とかお尻を好くのは当たり前で、乳房マニヤとまでなる人も、じつは至極正常であるのだ。ストリップが依然として廃らないのも、女の乳房とお尻のためである。言いかえると、ほとんどの男が、この二つのものにたいするフェチストであろう。画家には普通人以上のフェチストが多い。ルーベンスなど、よほどのお尻マニヤだったに違いない、そうでなくては、あれほどのお尻は画けなかつたであろう。ルーベンスやラブレエのお尻狂愛については、これまで折にふれて書いたから割愛しよう。

娘のオトガイを熱愛していた友人がいた。彼は、気の弱いロマンチストだったが、女の

一番うつくしいところはオトガイだと言つていた。耳から下の、ふつくりした顎への線、まだ若い娘の、生毛の生えたオトガイくらい美しいものは此の世にないと断言し、道行く女の子のオトガイを見るために、わざ／＼そばへ行つて覗きこんだりした。

そう言われてみると、なるほど美しい。こゝに思春期の娘のオトガイは、今でも彼の御蔭で、この世の美しいものの一つであるわいと観賞するようになった。彼は、観賞の域にとどまつていなかった。とう／＼、少しでも顔見知りの女の子だと、無断でそうつと撫でてきやつと悲鳴をあげさせたり、知らない娘だと、じつに綺麗ですな、と感に堪えたふうにもメたりして、次第に近隣の女の子から気味悪るがられてきた。

昭和六、七年の頃だった、この男が私を横光利一さんのところへ連れて行つた。漫然とした文学青年で、ぜん／＼ワケのわからない詩や小説を書き、自費で自作の詩を一枚の紙に印刷して友人に配つたりしていた。芥川を真似て、先祖の墓の前でヴェロナールを飲んで三日ばかり眠りつづけたこともあつた。横光邸で、苦節時代の中山義秀氏などを交えて話しているときは普通に近いものだが、家

を出て東北沢の駅にくる間じゆう、女の子の
オトガイの美しさを説くのであった。

そのころ、私は、早稲田終点の近くに下宿
していたが、あるとき、オトガイ君が、約十
冊ばかりの新刊文学書を持ちこんできた。ど
うしたのかと訊くと、先生(横光さんのこと)
から貰つてきたのだ、と言う。三宅君にも読
ましてくれと言われていたが、実は、今日、
僕は彼女とランデヴーがあるんでお金が要る
から、先生には申訳けないが、この本、売つ
ちやおうと思つてゐる。ついては、すまない
が、君の服を貸してくれ。といった次第で、
彼は、私の服を着こみ、一抱えの本を持つて
意気ヨウ／＼と出かけた。

この後日譚が二つある。オトガイ君は、私
の服を返しに来たが、さつぱり元気がない。
さては彼女に失敗したなと察し、それとなく
訊いてみた。彼女というのは、東京駅降車口
の近くで新聞売子をしていたおトヨという女
の子で、中々の美人、当時は女の新聞売子が
少なかつたので有名だつた。オトガイ君は、
おトヨ女史のオトガイに参つてゐた。私が見
たところ、彼女は、どう見ても処女ではな
く、むしろアダっぽさがあり、ニコ毛が生え
たオトガイは、わが文学青年の理想に叶うと

は見えなかつたが、とにかく当人は大へんな
意気込みだつた。

何のことはない。映画を見て支那ソバを食
べ、遠く多摩川べりまで長駈したのだつた。
オトガイ君、ふるえながら彼女のオトガイば
かりホメ、さておもむろに、そのオトガイを
撫でた。二ど三ど。何度も撫でたそうだった。
だそれだけ、馬鹿の一つ覚えというやつ。ど
んな女だつて、しまいにはカラカワれている
と思つて怒るのは当り前である。

「キッスをしながら撫でるべきだつた」

彼は、つく／＼と後悔の溜息を發した。

その後、私は、たつた独りで横光さんのと
ころへ行つたことがあつた。何かの話のついでに、いつかオトガイ君に持たせた本は読ん
だかい? と訊かれた。

「あれは売つちやいましたよ」

と簡単に私は答えた。すると、さつと横光
さんの顔色が変わり、あの本はやつたのではな
く、君たちに読ませようために貸したのだ、と
不愉快そうに言われた。私は、じつはこれこ
れしか／＼と、私が売つたのではなくて、と
説明しようとしたが、あまり空気が険悪だつ
たので、つい言いそびれ、すみませんと頭を
下げて逃げ歸つた。横光さんは、死ぬまで、

私とオトガイ君が共謀して売り飛ばしたと思
つていられたハズだ。

そんなことやなんかで、だん／＼私は横光
さんとも疎遠になり、日本精神とか言つて水
ゴリをしたとか聞き、なんだ横光が、という
ような、若気の反抗心なども湧いたりして、
とう／＼私は、永いこと外国へ行くようにな
つた。終戦後、引揚げて、あるときの年の暮
東京駅八重洲口で殺人的混雑列車の長い行列
にいたとき、横光さんが歿くなつたことをラ
ジオで聞いた。少したつてから、心ばかりの
香典を奥さま宛に送つたが、べつに何の言葉
もなかつた。

フェチズムのことが、以外に、妙な話に
それで弱つたが、その後、オトガイ君とは、
どういう行きがかりか、二人で瀬戸内海沿岸
を歩きまわつたことがあつた。異様な体臭の
する男で、小説家になる野望は棄てなかつた
が、おそらく空襲にでもやられたか、今日ま
で私のところに現われないところから見ると
今頃は、地獄の女亡者のオトガイを撫でてニ
ヤ／＼しているのだろう。

彼は遊廓などへ行くと、まずオトガイの美
しい女を選び、さてそれをじつと眺めゆつく
り撫でていると欲情してくると言つてゐた。

覗きたい男・覗かれたい女

「いやッ！ いや、よ。まだ、大丈夫よ」「でも……」「あんた、こわがりな女」「……」「そこが……あんたの可愛いところだけど。ねえ……ね？」それつきり二人の話はポツリと切れて……

武野藤介
古庄英生 畫

「女が、本なんぞ読むもんじやない」と、それが私の父の口癖でした——と秋子夫人が僕に聞かせてくれたある打明け話。
——当時、私はまだ女学生。親しいクラスメートに本屋の娘さんがありました。本屋といつても、人口五万ばかりの田舎町のことですから、文房具店を兼ねて、新刊雑誌が見本程度に並べられ、片一方の棚の古本その古本の「貸出し」ということをやつていましたので、つぎからつぎと、手当たり次第に借りだして読むのです。小説雑誌。面白くて仕方がない。自然、十七歳になつて



いた私は、今から考えてみても随分、おませな娘でした。父がそれを口喧ましく叱ります。

男のアブエ口 チズム心理

家は商家。洋品店。私は、まだ小学生の頃母親の亡くなつた一人娘で、父がよそに妾宅を持つてゐることも、もう、その頃はうすうす、誰から聞かされたともなく感ずいていました。

が、窮すれば通ずということを申しますが、父に隠れて、本を読むのに、私は、くつきような場所を見つけました。倉座敷の二階。その戸棚の中。お客布団が仕舞つてありました。その布団の上に腹這いになつて、その戸棚の襖を、二寸か三寸、鐵格子の窓から、文字の読める程度の光線をいれて、これも一種のスリルでした。

この倉座敷の二階には、めつたに、誰もあがりませんでしたが仕入品の箱が壁ぎわに重ねてありましたからときたま、梯子段の足音を聞くこともありましたので、その足音がすると、私は急いで、二寸や三寸、あけていた戸棚の襖をそうつと閉めて、真つ暗になつた中で息を殺していま

した。

或日のことでした……。

その日も、私は、父が外出しなとみるや、こつそりと、誰にも気づかれないようにしてその倉座敷の二階へあがつて行きました。が夢の中で、遠くには、女と男の、話を聞いたように思つたのは、そのわけも自分ではすぐにはわかつたのです。腹這いになつていた私が、いつのまにやら、読みかけの本に顔をうつ伏して、うとうとと、眠つていたからでした。

「……」

「こんなこと。お嬢さんにでも知られましたら。たいへんなことになりますから」

と、喘ぐような男の小声。

「わかる事ないわ。まだ、子供よ」

これはまさしく叔母の声。三十二歳は女盛りで、未亡人の、出戻り女。私の父の末の妹子供が無かつたので、その歳ならまだ、結婚の口もあろうからと、二三年前、こちらに引取られてきていたのですが、ひとつには、番頭やら小僧などもいたことだし、主婦のいい一家の、女中などを指図して、専ら台所とお勝手向きのことをしていたのがこの叔母。「旦那に知られましても……」

「大丈夫よ。万一にも、兄に知られるようなことがあつたときは、私が、ひと芝居打つて生きるの死ぬのと騒いだら、あの兄のことだから、何よりもさきに、店舗の暖簾に傷がつき、世間を人一倍にも気にする人だからさ、あんたをお店から追ッたすようなことはこの私がさせないわ。安心していて、よ」

と、いかにも歳上の女らしい台詞。

「でもやつぱり、あの、湯川のほうが安心です」

湯川というのは郊外にある鉱泉宿で、この話の様子からも、昨今の、二人の仲でないことが察しられるのでした。

「だつて、あんたの公休日といえは、せいぜい、月に一回で……」

今は、私の眼もすっかりさめてしまつて、おませな娘は、それをひと言も聞き洩らすまいと、戸棚の中に腹這つたまま、襖に耳を押しつけていました。その襖が二寸か三寸。私が、眠つていて、閉め忘れたままになつていきます。覗いてみたいのは人情。

それが私に、覗いてみられなかつたのは、どちらに顔を向けている二人ともわからず、その四ツの眼と、私の眼が、ぴつたり、出喰わしたら、こわい！ いいえ。こわいことも

随分、こわかつた証拠には、私の胸に痛いような動悸が衝つていましたが、それよりか、こんな場面で、三人が顔を合わせたときの、とりかえしのつかかないバツの悪さを考えたからかも知れせんわ。

「もうあちらへ参りましょう」と、男の、促すような声。

誰だろう？ 月一回の公休日というからにはお店の番頭か小僧の、誰かには違いないのだが、おずおずと、震えているような自分で殺したような小声で……、誰とも、私には見当が付きませんでした。

「いやッ！ いや、よ。まだ大丈夫よ」

「でも……」

「あんた、こわがりねえ」

「……」

「そこが……あんたの可愛いとこだけど。

ねえ……ねまだ大丈夫ッてば、さ、……」

私が、今になつて思ひますには、これが女の「あとねだり」とかいふものだったのでしょう。がそれッきり、二人の話はポツリと切れて、暫く、シーンとしていましたが、やがてただならぬ気配。いよいよ、激しい私の動悸。見苦しいばかりの呼吸。我知らず私は、その襖の隙間から、二人の様

子を覗いていたとみえて、

「あッ！ 真どん！」

とひと言。危く口から出かかつた声を私は着ていたセイターの袖に噛み殺したのです。

番頭の真どんの、眼をとして、上気したうわむきの顔が、ちらりと、私の眼に映りますと、そのまま、私は顔をうツ伏して、自分の両手で耳を蔽いましたが、おませな娘のようにも、勿論、私はまだ生娘の十七歳でしたからね。

……2……

あのとき、真どんの口から、「お嬢さん」と私の名が出て、誰よりも私に、それが知られたら、たいへんだなどと云つたのも道理で私はまだ、父の口からはッきりとそれを聞かされてはいませんでした。誰彼の、それとない口裏でも、一人娘の私が女学校を卒業したら、さつそく、亡くなつた母親の遠縁にあたるこの番頭と、結婚させられるらしいことは察していましたし、この結婚を世間並に、当節の流行語で、人権無視とか、自由の束縛一家の犠牲、そんなふうに思われるとしたら……私の本意とは遠い。

真どんは、まだ物心のつかぬ頃に相繼いで

両親と死別れて、私の一家に引取られてきてからは、今日まで、二人は兄妹のように育てられてまいりました。事実、私には、「いいなづけ」というよりも、俗言どおりに、「三ッ違いのアニさん」のこの真どんが、血を分けた兄も同然に思われ、子供の頃は、随分、兄弟喧嘩のような喧嘩をしたものでした。その真どんが、誰かに注意でもされたのか、私のことを「お嬢さん」と、外の番頭お小僧並に呼ぶようになったのは、私が女学校へ通学するようになってからですわ。

私は、真どんの気質も好き。

映画俳優のあの上原謙に似ているなどと、お店に買物に来る婦人客から、面白半分に、からかわれたりしていたようでした。

私は自問自答して見るのです。

「あの倉座敷の二階で、あのような現場を見せつけられていながら、なぜ、私には嫉妬がおきないのだろうか。腹が立たないのだろうか」

また、私はこんなふうにも思つた。

「私が真どんをほんとの兄さんのように思っているからか知ら」

いいえ……そうだからとばかりは云えない。覗きたい男。それを異常心理などという

けれど、百人が百人、男は誰でも、覗きたい気持ちをもっているとしたら、これは最早異常でもなければ、アブノーマルとも断定いたし兼ねるぐらいなもの。では、女のほうではどうでしょうか。女も同様、覗きたい気持はもつていても、そこを女性の羞恥心で、自制しているから、女の「出歯亀」などというのはまだ聞いたことがありません。だが、私のように、いちど、この「覗き」の興味を覚えると、或は、好奇心というものだったのか戸棚の中にいるこちらが誰から見られていないという安堵は、その羞恥心を麻痺させて、それからというものの、「隠れて本を読む」ということは第二となり、その模を二寸か三寸、鉄格子の窓から射してくる光線に、ただ、活字の上にぼんやりと眼をおいているだけで、私は梯子段の足音に、今か今かと、叔母と真どんのその四ツの忍びやかな足音ばかりを、胸をわくわくさせな



がら期待している私。そんな私になつてしまいました。

勿論、この二

からも、百発百中のに、

「今日、あたりはまたきつと……」

と、不思議なカンのようなもので、私は予言者のように敏感になつていました。随分、おませな娘だったのですね。

そして、この「覗き」で、ほんとうに私は女と男の、おとな達のいろんなことを知りました……。

或日、こんなことがありました。それは夏でした。学校が夏中休暇だったことを思い出します。その日は、お店の公休日で、真どんも自転車を駆つてどこかへ遊びに行きました。多分、また湯川の鉢泉宿だろう。晝飯をすませると、果せるかな、叔母が急に、外出の用事があるようなことを云つて、そわそわと落着かない素振りを見せます。やがて、外出着に着換えて、これも出かけて行きました。湯川へはバスの便があつて、叔母を乗せたそのバスが、ちょうど今頃、あの鉢泉宿に着いたかと思われる時間でした。思いがけなく、真どんが、百姓のリヤカーに乘せられて帰つて来ました。「どうしたの？」と、吃驚りして駆け寄つた私。

「自転車、もろとも、畑へ落ッちたんです。アスファルトの国道で、さ。ペダルを踏みながら、つい、居眠りをして……」

その自転車もリヤカーに積んでありました。

真どんは、痛そうに眉をしかめて、手で腰のあたりを押えていました。立ちあがる事が出来ないのです。女中の手を借りて洋服を脱がせると、すぐ、奥の居間に寝かせてやりましたが、私も心配だったので、「お医者さんをよんであげるわ」

「いいんです。お嬢さん。お医者なら、帰りに、寄つて来ましたが、骨折はないようだと云つていましたから、打撲傷です。一週間も寝ていたら癒るそうです」

案外、元気な声。女中も、それでちよつと、からかつてみる気になつたのか、

「それにしては。よくよく、うまく転んだものね。自転車がちツともいたんでいなかつたわ。自転車はお店のもの。こわしちやすまないと、自分の体で庇つたのと違う？ えらい！ えらい！ さすがだわ。旦那のお眼鏡に叶つた三国一の花婿さまだけのことはあるよ……」

と、おかしな褒めかたをして、最後の台

詞は、半分逃げ腰。

このくらしいの「ひやかされ」なら、もう、私の耳にもタコが出来ているほどだったからいつものように私は聞えないような平気な顔をしていたが、ひと言、真どんに云つてやりたかつた。

罰があつたのよ！ と。

不審といえば、自転車もこわれていなかったが、全治一週間の打撲傷にしては、着ていた洋服にも、畑の土、ひとつくツついていなかった。それもその筈。自転車で転んだなどというのは真ッ赤な嘘。それも、真どんの足腰が、もとどおりに癒つて、また、あの倉庫敷の二階で、叔母と内緒事が始まつてからのことでしたが、私がそれを戸棚の中で盗みぎきした話。

「あんた。馬鹿よ……」

「馬鹿といわれても一言ありません」

「随分、醜態ね」

「醜態です……」

「呟鳴られたでしよ？ あやまつたの？」

「ひらあやまりです。屋根から、あの中二階の廊下へ転び落ちたんだから、足腰の立たないほど、ひどい打撲傷になる筈はないのです。いきなり、風呂の中から、私の、覗いて

いた天窓に呟鳴りつけられたので、吃驚りした上に、すつかり、あわててしまつて、さ。

でも、あとから考えれば、御先方さまだつて、随分、滑稽ですよ。いきなり、小娘のような若い女を、タイルの上に、おッぽりだして、素ッ裸で、あの家族風呂をとび出して来たんですからね、前に、手拭を当てていない。こちらは、足腰が立たないのだから、そこへうずくまつたままで、ひらあやまりしている、私の、その鼻先に、この素ッ裸の老人が呟鳴りつけるたびに、ぶるンぶるン……と、そいつが震えているみたいで……」

馬鹿！ 馬鹿！ 真どんの馬鹿！

……3……

それからあとの話は、女学校を卒業した年の秋に、私が真どんと結婚してからのことになりますけれど……

私の、今の御亭主がこの真どん。

私も今日、二人の子供の母親で幸福だと思つていますわ。

それというのも、あの叔母が、童貞だった真どんに、すつかり、手ほどきをしてくれたからでしょうね。別に、感謝もしておりませんけれど。この叔母は、私が女学校を卒業す

る前年、九州の鹿児島に再婚してまいりました。鹿児島といえは、今では、日本の端れみたいない処。この結婚は、うすうす、それを感じていた私の父の、賢明なとりはからいではなかつたかと思われる節々もあります。昨年、あちらで亡くなりましたわ。子宮癌で。

夫婦の寝物語で、私が、あの倉座敷の二階のことを夫に打明けたのは、この叔母が鹿児島で亡くなつたあとでしたが、

「ほう！ そいつは知らなかつたあ……」

流石に、夫の照れくさい表情。

「しかし……法律的にいえば、もう、そいつは時効みたいなものだな」

と、笑つていた。

「いいえ。私、時効なんかにしないわ」

「じゃ、そんな出し遅れた証文みたなものどうするつもりだい？」

「私の、切札よ。私だつて、これからさき一遍ぐらゐは不貞をはたらくようなことがあるかも知れないわ。魔がさすなんていうこともあるわ。何だか、女の道に、一遍ぐらゐは誰でも、そんなことがありそうに思われるわ。そのときの私の、とつておきの切札よ」

「切札を、そんなふうに、俺に見せてしまつちや、切札でも何ンでもないじゃないか」

「いいのよ。それが、私の切札であることは間違いないんだから」

そのとき、ふと、夫が思い出したように、「これは、あの、鹿児島叔母さんから聞いた話だが、あの叔母さんにはおかしな癖がつたんだよ。お前、知るまい？」

「どんな癖？」

「僕だけに打明けたらしいんだが……」

「おのろけを云うと抓るわよ」

「おのろけじゃないの、さ」

この叔母が死別した夫。これも、商家だつた。小僧の二三人もつかつた食料品屋。いわば、その夫婦の閨房秘事のようなものだつたが、この夫が、生前、口癖のように、お前は不感症だ、不感症だと云つていた。事実、叔母も自分でそう思つた。ときどき、夫から、あやしげな懸写刷の春本を読まされたりしたが、却つて、それが逆効果のようなもので、叔母はいよいよ自分の不感症を信ずるようになった。

ところが或朝、朝の寢床で夫から挑まれたのである。

それも、もう、小僧たちが起きて、台所

や、お店の、朝ごしらえをしている時刻だつたのだ。夫婦の寝ている部屋。その部屋の隣が台所の板間。境の障紙も、ところどころ破れて、通りがかりにも覗かれるような障紙の穴。その穴が気になつて、夫の手を、拒もうとすればする程、夫の興奮に、いよいよ、油に火をつけるらしく、結婚して六年、叔母に初めてアクメのよろこびを感じたと云つていた。

「いわば、それが叔母さんの病みつき。女がほんとの味を覚えたわけだからね。それからというものの、誰かから、覗かれているというような懸念があると、きつと、アクメを感じるのだそう。もちろん、これも異常心理には違いないが……。覗かれない女とでもいうのかな」

「それ、ほんと？」

「ほんとだろうぜ。こんなこと、嘘で云えることじゃないからね」

「それなら。倉座敷の二階の私のことあの叔母は知つていたのか知ら？」

「何ンとも云えないぜ」

ああ、それをいちど、私はあの叔母に訊いてみたかつた。

亡くなつた今。それが私の心残りになつていますわ。

(終)



夜ごとの悪魔

「そんなに軀をかたくしちや、ダメ。みんなお姉さんに下さるんてしよう？」命令されることは、なんて快いんだらう。私は意志を失った人形のように眼をとじた。

奥山みどり



本当に男は皆んな狼だと思った。

一人は、はじめから、おわりまで、私の手をおもちやにして、脂肪でベタベタにしてしまった。

一人は、座るといきなり私のスカートの下へ手を入れた。

一人は、虫歯の匂いのする口で、私の唇をしつつこく追いかけた。

チップは千円近くになつたけど、私は、こらえ性がなくなつて、トイレへ入ると、鏡へ向つて、お白粉の頬にすじをつけていた。

「あんた、はじめてなのね。可哀そうに」それだけ云つて、肩にかけられた手に、はじめて人間らしい温みを感じた。

黒いシャンタンのワンピースが、エレガン

トで、唇の描きかたがいかに銀座のバアの女らしく上手だった。

「じき、馴れるわ。でも、男は動物だから好きになつちやダメよ」

そして、トイレの扉のなかに消えた。

その時の言葉、何気なくきいたのだけど：席へかえつたら、いきなり、ミラアポールの光が、眼へとび込んできて、痛かった。

トランペットのすすり泣きに、故知らず甘い胸のときめきを感じた。――

次の日の出勤時。

隅のウソ寒いボックスで、一生懸命お化粧をしていたら、

「あんたは、こういうリボンが似合うと思う

わ」

昨日と同じようにいきなり、現れて、私の髪をきゅつと、引きつめみたいに、うしろで束ね、手早く口にくわえた黒いリボンで結えた。

そして、私のあごをもつと、自分の方へ顔を仰向けたが、すぐ、

「ダメ、ダメ。こんな眉の描きかた。あなたは、自分の美しさ、知らないのネ」

自分のハンドバックから、ペンシルをとり出すと、眼が引きつるほど、乱暴に、濃く眉をなすりつけ、

「私の紅筆だけど、ごめんなさい」

朱い唇で、筆をなめながら、鮮やかに紅を書いてくれた。

鏡をのぞくと、人が違つたように自分の顔がうつつた。専太郎が描く女みたいだった。

「いくつ？」

「十九」

「可愛い。あとで、夜食のかわりにケーキ喰べに行きましょうネ」

そして、私の二の腕の所をきゅつと握つて、はじめて笑い顔を見せた。美しい歯、イヤリングの青い玉が、キラリと光つた。

それから、三日目の夜。私達はもう、お客のいないレジのそばのソファで、抱き合つて接吻していた。

口紅の型をくずさないで、キスするのはむずかしい。

唇を半ばあけて、その間からうす桃色の舌をのぞかせて、そのまま静かに合わせるのだ

と云つて、からかつたけど、その意味を知らない私は、平氣だった。

おねえさんのツバは、ビールの匂いがしてホロ苦かつた。

私の初恋の味は、ビールの味だ。

バンドは「クライ イン チャペル」を演奏していた。

「踊ろう！」

男のようにお姉さんは云つて、椅子のすき間で、私のほそ腰をきゅつと引きよせた。

乱暴にあつかわれるのが嬉しかつた。

お股の間にお姉さんの優しい足をはさまれながら、何度もスピントアで廻された。

ハイヒールのかかとが、きゅつきゅつと音を立てて、目がまわつた。

髪が、勢いづいて、おどる。

お姉さんも荒い息をしながら、口を近づけ、舌で、私の唇を、横にこすつた。

軀が淡雪のようにとけてしまいうで、切なかつた。下着のなかで、軀がずるずるにと



「貝合せ」
そんな私たちの接吻を、お客が見て、

けてしまいそうな感覚があつた。曲がおわると、

「今夜、一緒にかえりましょうネ」

「ええ？」

「私のところへくる？」

「……」

私は、だまつて、コックリした。口で承諾するのは、女として恥かしかった。

それなのに、おそくなつて、二世みたいなひとが現れ、気がついたら、いつの間にか、お姉さんも消えていた。

「昨夜、どうなさつたの？」

「ごめんなさい。……約束やぶつて」

「ひどいわ。……あのかた、どなた？」

「私のパト」

「男は、動物だなんておつしやつたくせに」

「別れるわ。別れようと思つてるの」

「別れたら、私をお嫁さんにして！」

お姉さんは、微笑んで、あやすように接吻してくれた。

お姉さんの香水は、「夜間飛行」と云うのだそう。

——でも、あの二世の男の、どこに口をつ

けたか分らない唇だと思つたら、汚ならしい感じがした。

お姉さんのアパートは、大森の山王にあつた。

窓をあけると、お合場の灯が見え、かすかに海のかおりを含んだ風が吹いてくる。

オルゴールは、間延びた調子で、「ロンドンデリーの歌」を奏でた。

二人でお風呂へ行つてかえつてきてから、お姉さんは、全身に、ホルモンクリームをつけた。

ホルモンクリームのホルモンは、やわらかい粘膜から、軀のなかへ吸収されるそうだがお姉さんの軀は、全身が粘膜のようだった。

もものつけ根の所に、可愛い黒子があつた。

「これ、私のだけど、着て頂戴」

タオルのパジャマは、甘ずっぱい、くちなしの花のような、お姉さんの、肌の匂いがした。

お姉さんの着たパジャマは、男ものようだった。私は、その秘密にふれるのが、こわくて、だまつていた。

「男に成らして！……私は男よ、ネ？」

ベッドの上で、私の顔をのぞき込みながら

お姉さんは、押しつけるように云つた。

ベッドに寝つけぬ私は、軀が、浮いて、不安定な感じがとれなかつた。

「爪がいたいわ……」

お姉さんの、しめつた髪が、私の顔に垂れ、それが、私のまつげや、頬をくすぐつた。

お姉さんは男になりたかつたのだ。

女を可愛いがりたかつたのだ。

「眼をとじなさい」

私は眼をとじた。

「そんな軀をかたくしちや、ダメよ。みんなお姉さんに下さるンでしょ？」

命令されることは、何て快いんだろう。自分が意志を失つた人形のように、あつかわれ

ることはなんて、うれしい事だろう。予想していたような、目くるめく感覚の陶酔はなかつた。

私の感覚は、さめていた。

だが、静かな、甘いよろこびがあつた。ソーダ水のなかで浮び上る泡のように、軽い、さわやかで、透明な感覚が、次々と湧いた。

「はじめて？」

「ええ……」

「おねえさんに下さつたのネ」

私はおねえさんの胸の下に顔をうずめた。

お姉さんのわきの下は、じや香のような、

匂いをもつていた。

一番はずかしい所を知られてしまうから、

甘え、よりかかる気になるのかしら。

じんと涙が湧いて、お姉さんの温い軀で、

びつしり包まれたいような感じだつた。

別れると云つた二世と、お姉さんは別れな

かつた。

「お金のためよ」

と云つたけど、そうじゃないのだ。

お姉さんは、時々、男のパジャマをきて

男になりたいのだけど、——女になりたい時

もあるのだ。

そんな時は、私が、男になるんじや、もの

足りないのです。

「お姉さまは、『アンナ』ネ」

一緒に見たマンガノの映画を見て、私は

云つてあげた。夜になると、悪魔になるアン

ナの心をお姉さんももっているのだ。

だからいつもみたされぬ思いを胸に秘めて

ミラアポールの下で、夜毎、汚い男に抱かれ

る私なのです。

十三人目の処女

女のわたしが、男のようなはげしさで求めた十二人の
處女！ けれど、その誰一人も、永つづきはしなかつ
た。そして、現われた十三人目の乙女は……

松崎 房江



朝——朝といつても、わたしの出勤するの

は、アパートの若いサラリーマンが、ほとん

ど出拂つてしまつた九時半頃だが、玄関で黒

いバックスキンの靴をつつかけながら、ふい

と愛撫するような眼でマキ子を見かえし、

「じやあ、出かけるよ」

夫が妻にいうような、ぞんざいな口をひら

く。と、マキ子は、赤皮のカバンをわたしに

手渡しながら、

「いつてらつしやいませ」

まるで、夫をおくり出す若妻のようにバラ

色の頬に、はにかんだ微笑をもらす。わたし

は、かつと胸の鳴る思いだが、強いて心をお

さえて乱暴にカバンを小わきにかかえながら

アパートを後にする。空は、明るく澄んで、

どこからか甘い花の匂いがただよつてくる季
節だ。そんな朝の、わたしの心は、たのしく
はずんでいる。——

わたしは、もう更年期を間近かに控えた、

いわゆるオールドミス。かつて結婚の真似事

をやつてみたこともあるけれど、正式ではな

い。男の我儘とだらしなさにたえられなくな

つて、三四カ月で追い出し、それ以来、ずつ

と独身を通してゐる。勤務先は、有楽町の曉

生命保険会社だが、つとめ出してから、もう

三十年近くになる。一応、役付になつてゐる

が、仕事は主に外交。多年の経験がものをい

つて、まだ腕には自信がある。そんじよそこ

らの男にはひけをとらない。小ものは、テキ

パキと電話一本で片づけるし、自動車をとば

して出かければ、大ものをつかんでくる。社内では、わたしのことを仕事の虫だといっているそうだけれど、わたしは女の意地でがむしやりに生きぬいているにすぎない。

午後二時。——仕事にひと区切りつくと、わたしは、銀座あたりのレストランで、おそい晝食をとる。血のしたたるようなサロステーキなんか、わたしの好物だが、食事前に香りの高い、ボルドオの白ブドウ酒を一杯のんで、フォークとナイフを、手にするのが常だ。

やや疲れた身体に、ほどよくアルコールが血管にしみとおつて脂の乗ったステーキの一切が、胃袋のなかで、血と肉となつてとけてゆくような気持、そんなとき、わたしの身体に、燃え上るような生気がみなぎってくる。マキの、こり／＼とした弾力のある白い肢体が、ふいと眼がしらをかすめる。

ひとりほくそえんで、立去ろうとすると、ちやうど出会いがしらに、
「あら、松崎さんじゃないの、早や御帰館とはズルイわよ、ホホホホ……」

金属製の派手な笑い声を立てて呼びかけたのは、田上女史、ホテルのマダムで古いお友達だが、未亡人の気楽さで、若い男出入の噂

が高い。現に今もそんな男をつれていた。

「あーら、しばらく、これは、これは……」

「どう、この頃？……それはそうと、あなた、最近、また新しい奥さんができたつていうじやないの、マキさんとかいう……」

「ウフフ……不相変、地獄耳ね」

言いかけて、ちよつとテレたが、わたしも負けてはいられなかつた。皮肉に笑つて、

「お連れの若い方……あまりお見かけしない人だけど……」

「ああ、この子？」

「この子は、ひどいですね。奥さん」

若い男は、むつとしたようにたしなめた。

「御免なさい。この方、東洋映画のニューフェイスで、三橋時夫さん、……こちらは、かの有名な曉生命の……」

「いいわよ。あたくし御紹介は……」

と、わたしはびしやりと出鼻をくじいた。

何だか田上女史の、若い男にいなされているらしい様子が、かんと胸に來たからだつた。ちよつと、場が白んだ。すると、田上女史が意地悪く口もとに笑いを含めて、

「三橋さんはマキさんのこと、よく御存じだつて話しよ……前の奥さんみたいに殺さないで頂戴よ」

「まさか……何、いつてんのよ」

軽くうけながしたつもりだつたが、一瞬、わたしの顔は歪んだらしい。いたたまらくなつて、早々に、田上女史と別れてしまつたが会社にかえつても、仕事は手につかず、わたしの心は、もやもやと落着かなかつた。マキ子の豊かな乳房が、白桃のような甘美な唇が頭の中に去來し、それに三橋時夫の顔が重なり合つて、わたしは嫉妬のはおに胸を焼かれた。あたかも年輩の夫が若い妻の恋の秘密を知つたときのような、不安と焦燥にかられて定刻をも待たず、わたしは中野のアパートにいそいだのだつた。……

わたしが、同性の若い女をひきいれて妻のようにあつかひ、夜毎、倒錯した夢にふけるようになったのは、いつ頃のことだろうか。もう、定かな記憶はないけれど、三四カ月の男との生活の反動が、わたしをこんな風にしたのかも知れない。わたしは、その男との生活で、一度も女によるこびを感じなかつたのだが、ふとしたことから会社の若い美貌のタ



イビストと一夜を共にしてから、それまで味つたことの無い、しびれるような、神秘的な快感をおぼえるようになった。それ以来、夜のひとり寝に耐えきれず、わたしのレスポス遍歴がはじまつたのだつた。現在、わたしのオルゴールの手篋の底には十二枚の若く美しい女の写真がひめられている。いわば、わたしが妻と名づけた女たち（夜になると、わたし自身、夫のような気持になつて、男の言葉をつかい、男のような、はげしい執拗さで、彼女たちを求めたものだけれど）しかし、こうした女たちも、わたしとの生活で、一年以上、永つづきしたものは、一人もいなかった。はじめのうちは、それこそ妻のように、じゅう順で初々しく、わたしにかしづいてくれたが、いつのまにかひそかに男をつつたり、別れも告げずにふいとズラかつてしまつたり、また十二人のうちには田上女史がひぼうしたように、わたしの腕のなかであえなくなつたものもいるけれど、決して、わたしが殺したのではない。（私と生活しなくと



も、所詮はそういう運命にあつた女たちなのだ。）しかし、わたしは、こうして妻を失うと、すぐまた新しい妻を求めた。顔の広いわたしには、さして困難なことでは

なかつたが、マキ子も、いわば、そのようにして求めた十三人目の妻であつた。あるバレエ団の研究生で、身寄りの少ない娘だということだつたが、均整のとれた小麦色の肢体には、けがれを知らない、清純な処女の香りが花のように匂つて、いまままで恋人があつたなどとは、うたがつてみたこともなかつた。それが、——しかし、マキ子の口からききたすまでは、信じたくなかつた。マキ子は、わたしのいつもより早い帰宅に、ちよつとけげんな表情をうかべたが、わたしは心の動揺をおさえて、常のようにふるまつた。お風呂がわくと、わたしに少しおくれて、マキ子が、湯殿のガラス戸をあけた。わたしの全身をくまなくマッサージしてくれるためだが、腰に湯あがりタオルをまきつけただけのマキ子の輝くような裸身に、わたしは、何故か、かつと血がうずいた。はげしい嫉妬に似た、一種残虐

な気持だった。

「マキちゃん、今日、あなたの恋人に会ったわ」

「え？」

マキ子は、ふと、マッサージの手を休めて聞いかえした。わたしは、意地悪く、一語一語、区切るような調子で、

「東、洋、映、画、の、三、橋、時、夫……」

「まあ、三橋さん！」

思わず、マキ子の指先が、かすかにふるえたのを、わたしは背に感じた。

マキ子は、やや神経質な声で、

「恋人じゃありません！」

「そうかい、なら、いいけどさ」

その夜、わたしは、もの狂るおしいまでにマキ子をいためつけた。ナイロンの鞭や私が工夫した奇妙な器具で。

かつてわたしにそむこうとした女たちにしたように、わたしは、あらゆる責め道具で、マキ子をさいなみ、わたし自身も狂つて、のたうち廻つた。

「いや、いや、あたし、殺される……ああ、殺される」

半ばうわ言のように、身をもだえてさげんでいたマキ子の声を、今でも、わたしは、お

ぼえているが、あけ方になつて、わたしが、

つかれ果てて眠つたすきに、マキ子は、アパートをにげ出したものらしい。

眼をさましたときには、既にマキ子の姿はなく、開け放しになつたオルゴールの小筐から、トロイメライの曲が悠長に流れてい

た。

わたしは、何気なく、手鏡をひきよせ、己が顔を見た。蒼くひたるんで、みにくく荒んだ四十女の顔！ わたしの全身に、ぞつと悪感が走つた。わたしは、この世もあらず、その場に泣きくずれた。

汚されたブラジャー

「お前の悪趣味にもあきれたね。ブラジャーばかり集めて、どうするんだい？」あの人の部屋の中からきこえる男の聲をきいたとき、思わず私の胸は高鳴つた。

花田 ミヨコ



あたしのこと、タンポポつていうんだそうだけど、そんな顔してるかしら？ いやんなつちやう。でも、あのひとから、

な気持……だつて、あのひとつたら、そんな言葉をかけるとき、キレイな指先で、あたしの肩をこつくようにさわられるんですもの。あたし、肩先に電気でもかけられたように、身体中が、かつとしてくることがあるのよ。

「ね、タンポポちゃん、おつとめ、つかれるでしょう」

なんて、言われると、ちつとも、いやな気がしない。自分でも、よく分らないんだけど、何だか、こう胸がワクワクしてゆくよう

あ、あのひとつて誰のことかつて？

そつと、胸のなかにひめて、誰にも言いたくないような、でも、誰にでも言いふらした

いような、いいわ、白状しちやおう！

あのひとというのは、あたしが、アルバイトにはいつている、ほら、あのDデパートのマネキンガール。

名前は、桂木さん、毎日、いらつしやるわけじやないけど、いらつしやると、四五日、つづけて、とても、お上手な口調で、新しい化粧品の宣伝をやつていらつしやるの。

そりや、お美しいお姉さま。お声を聞いているだけでも、ぼーとしちやうことがあるわ。

でも、あのひと、あたしのニックネームをいつの間に知つちやつたのかしら。

あッ、分つた！ あのヒキガエルの仕業じやないかな。そうよ、きつと。あのイカレポンチも、やつぱしDデパートでアルバイトをしているんだけど、いつだつたか、あたしにへんな手紙をくれたことがあるのよ。

あたし、ケガラわしいから、あの男の眼の前でズタズタに破いてやつたわ、そしたら、あのイカレポンチ、ほんとにヒキガエルみたいな顔をして、ショゲてたわ……きつと、それをうらんであのイカレポンチ、誰とでも話をしたがるオッチョコチョイだから、あたしのかげ口をあのひとに、告げたにちがいない

わ。

でもあたし、いいの。あのひとから、タンポちやんつて、いわれると、かえつてうれしくなるんだもの。

「どう、タンポちやん、お茶をのみにゆかない？」

ある日、アルバイトのお仕事が終わつて、Dデパートを出ると、とつぜんこんな風にあのひとから声をかけられて、びつくりしちやつた！

あたし、どうお答えしたらいいか、分んなくて、顔をあからめながら、もじもじしていると、

「ね、いいでしょう。お茶くらい……すぐ無罪放免するわよ」

「まあ、無罪放免だなんて……ウフフ」

あたし、あのひとの茶目つけな言い方がおかしくつて思わず笑い出したら、あのひと、あたしを抱きかかえるように、いきなり、あたしの腕をとつて、

「じやあ、OKね」

あたし、もうイエスもノーもなかったわ。ほんとに、強引なお姉さま！

お茶とお菓子を御馳走になつて、それはそれは美しい七宝のブローチをいただいたの。

別れぎわに、あのひと、

「じや、握手して、お別れしましょうね」

そうおつしやつて白魚のような手をお出しになるんだもの、あたし、何だか氣まりが悪かつたけど、思いきつて手を出したわ。

あのひと、情熱的にあたしの手をにぎりしめて、そのときの、あのひとの燃えるようなひとみ、あたし、今でも思い出すと、身体がすくんでゆくみたい。

お別れしてから、あのひとの手のかおり、きつと、あのひとのお好きな香水のかおりと思うんだけど、あのヴァイオレットの移香がしみついて、あたしは、その晩、ねむれなかつたわ。

それから、度々、あのひとにさそわれて、お食事を共にしたり、映画を見たり、それにあのひと、色んなものを、あたしに下さつたわ。

そうして、ある日、あたし、あのひとと、楽しい一泊旅行に出かけたの。

ハコネの温泉旅館。——一緒にお風呂にはいつたとき、あのひとの眼がうるんだように燃えて、あたしを抱きかかえて、熱いくちづけ。——接吻つて生れてはじめてなんだもの

顔をそむけようとしたんだけど、駄目だったわ。

もうあたしは、気が遠くなつて、あのひとのなすがまま、唇を、ひたいを、ほつぺたをそして、ああ、あたしの乳房を……あのひとのはげしいくちづけが全身をかけ廻る。

「ね、タンポちゃん、間崎つて男の子、あなたのボーイ・フレンド？」

「まあ、いやよ、お姉さま、あの子なんか」
だつて、間崎つて、あのヒキガエルのことじゃないの、あたし、くやしくて、くやしくて……

「でも、あの子、そう言つてたわよ」



「ちがう、ちがう、ちがうわ。あの子、あたし、大きらい！」

あたし、あのひとの言葉をさえぎるように、夢中でさげんで、はげしく身体をぶつけて、思わず、あのひとの……そうよ、あたしの唇で、あのひとの唇をふさいだの。

すると、あのひと、また、ひととあたしを抱きしめて、嵐のような接吻の雨。熱っぽくとけ合つて、とろけてゆくようなひととき……

お風呂からあがると、あのひと、乱れかごのなかから、あたしのブラジャーをおとりになつて、

「これ、あたしのと交換して下さる？」

そうおつしやると

あたしが、何もいわないうちに、接吻して抱きしめるようになってお肌におつけになつたわ。

そして、あのひとは、御自分のブラジャーをあたしの胸にあてがいながら、

「いいこと。誰にも言つちや駄目よ」

それから、お部屋にかえつて、少しおビールをのんで（もちろん、あたし、あのひとにすすめられてはじめて口にしたんだけど、ふわ／＼と身体が浮いてゆくような、トテモいい気持！）お食事をして、ねむつたんだけど、ほんとに心もしびれてゆくような、一夜だつたわ。

こんなことがあつてから、あたしの胸はあのひとのことで一杯……

夜なんか、あのひとのピンクのブラジャーを胸にだいて、あのひとの肌の匂い、あのヴァオレットのかおりにむせびながら、ハコネの夜をなやましく、思い出すんだけど、晝間だつて、あのひとのブラジャーをはずしたことはなかつたわ。

きつと、あのひと、あたしのブラジャーをして下さつてと思うと、たまになく、いいしい気持。——デパートにあのひとがいらつしやらない日は、とてもユーウツでいら／＼することが多かつたわ。でも、あのひとは、あたしと合うといつだつてやさしくつき合つて下さつたわ。

ところが、ある日デパートの帰りがけに、（その日、あのひとはお見えにならない日だ



たけど) ヒキガエルが、あたしを待ちぶせしていたのよ。

「昔、桂木っていうマネキンと仲がいいらしいけど、あいつ気をつけた方がいいよ」

また中傷するんだと思つたけど、どうしてつて聞いかえすと、

「あいつ、吸血鬼だつて評判だよ」

「それ、何のこと」

「ヘンタイらしいんだ。深入りすると、骨までしやぶられるつてさ……それに、君、あい

つには、ちやんとした夫がいるんだよ」
そう聞かされて、
あたし、眼の前が真暗くなつたけど、すぐには信じられなかつたわ。
あんなに度々会つていても、旦那さまがあるなんておつしやつたことないし……でも、もし、そうだったら、あたしは、迷いに迷つたけれど、思いきつて、あのひ

とのお住居を訪ねようと決心したのよ。

一度もたずねたことはなかつたけど、お手紙があつたので、地図をしらべるとすぐ分つたわ。ちやうど、日曜日の午後。

アサガヤの奥のひつそりとした一隅、あの家のなかから洩れてきた男の笑い声に、あたしは、ぎくつとして足をとめたわ。傍の電柱に身をかくすようにして、

「アハハハ……お前の悪趣味にもあきれた

ね。

そうブラジャーばかり蒐集してどうするんだ。……ところで、昨夜のお相手は？」

「マコちゃんつていうの、クリ／＼として、とても可愛い子！」

あつ、たしかに、あのひとの声！ あたしは、胸が鳴つた。耳をそば立てた。

「じゃあ、何か、この間のタンポちゃんは」

「もう、あまり興味はないわ」

「お拂い箱か、可哀そうに……俺も、そのうち、その口かな」

「馬鹿ね。あなたは別よ、あたしの夫なんですもの。けがれない女のブラジャーを集めて来いっつておつしやつたのは、あなたじゃないの」

あたしは、もう、それ以上、聞いていられなかつたわ。くやしさに胸は、はりさけるよう……

そして、家にかえると、あのひとのブラジャーをズタズタにして、その上に顔をふせてあたしは泣けて泣けて仕方がなかつたわ。

でも、あのひとのことが、今だに忘れられず、ズタズタのブラジャーは、そのまま大切に残してあるの。

(おわり)

空・想・的・サ・ヂ・ス・ト・の・記・録

哀れな私の彼女たち

……尙この小梅と似た話としては、「日本西教史」の中に、九州のある大名が、密通を働いた腰元を、釘の先が一ばい出た箱の中に入れて殺したという話が出ている……

逢 山 皓



私は一種の幻想的サディストである。だから、サド侯爵の如く、実際に女を縛つたり、或は鞭で打つたりして楽しみはしないけれども、サディステイックな小説を読んだり、本誌のはじめに出ているような惨虐味を帯びた絵を見たり、毎晩の寝台の上で、美しい女の苦しみもだえる様を空想したりするだけで、実に楽しいのである。

私は国文学を専攻した関係上、読む物の範囲も実に広いし、中学の一年の頃盲腸炎で寝ている時に、百科事典のよみあさりをやつた事から、昔の死刑等についても研究をはじめ、それ以来十五年も経つほどに、殆ど最近では刑罰に関する新しい物語に接することが出来なくなつてしまつた。

そうしているうちに、その死刑になつた人々との間に、次第に親しみが出来て、遂には夢にまで見るようになって来た。

殊にそれが女性である場合には、無惨なその最期に対する同情が、恋の心とも變つて行つて、實在の恋人がその責め苦に合うような感をいだいた事も一度ではない。

しかも浮気な私は、その女を次ぎ次ぎに変えて行つた。そうして今までに恋心を感じ

じた女の数に十余人にも及んだ。そこで、これ等私の恋人達の不幸な死に様をみなさまと共に反芻してみたいと思つてペンをにぎつた次第である。

1 小梅

最初に小梅の話を書こう。

小梅といつても有名な仮名屋小梅のことではない。

西鶴の「武道伝来記」の第二巻の第一話「毒薬は箱入りの命」の中に出て来る女性で、私の五年前の恋人である。

彼女は、奥州福島の高山刑部の腰元で、殿の寵愛を奪つた明輩へのジェラシーから、萩餅へ斑猫の毒を入れて送り、その爲遂に八人の腰元共を毒害してしまい、自分一人が生き残つたので、忽ち悪事が露見して捕えられ、牛裂きにしても飽き足らぬ奴どいので、箱入の刑に処せられる女である。

まことに恐いのは女心ではあるが、これも恋故と思えば、八百屋お七のそれにも似て、そぞろあわれをもようさせる。

さて、その箱入の刑というのは、西鶴の

原文に依ると、杉の大きな箱の中に女を入れて、目と口の部分だけ出させ、箱の上から体に届く程の長い釘を、殺された腰元の家族の者共に打たせるので、女は体中、すき間もないまでに釘をうちこまれながらも、数日生きていて、遂に息が絶えた。遺骸はそのまま埋められたが、悪名は後の世までも残つた、というのである。所が、挿画を見ると、箱の中に裸にされた小梅が、腰巻を臍の下まで押し下げられて、大の字なりに寝かされ、手足や肩に釘を打ち込まれて血を噴いているという、箱礫の絵になつてゐる。つまり、文と絵と違つてゐるのであるが、私にとつてはどちらでもかまわない。この小梅にぞつこんほれこんだ時代もあつたのである。

この物語の後日譚には、小梅の弟が仇討に來て返り討ちになつたり、若殿とそれを助けた鉄砲の名人が男色におち入つたりする話があるが、それはこの際省く。

尙この小梅と似た話としては、「日本西教史」の中に、九州のある大名が、密通を働いた腰元を、釘の先が一ぱい出た箱の中に入れて殺したという話が出てゐる。しかもこの時は、その身の廻りの世話をしていた女の子二

人も裸にしてその箱の中に入れ、三人一所に殺したというのであるから徹底している。その殺された女達の名前でも分れば、やはり私の恋人の一人になつたかも知れない。

2 お夏

次にはお夏の話。

お夏といつても、これ又有名な、例の「お夏狂乱」のお夏ではない。

岡本綺堂の戯曲「階級」に出て来るお夏である。

庄屋の家へ行儀見習いに奉公に出たお夏は、やがて腹ボテにされて歸されて来る。相手は庄屋のドラ息子である。しかも相手は、知らぬ存ぜぬの一点張り、世間が少し矢筈しくなつて来ると、「人の噂も七十五日」その噂の静まるまで、江戸へ出そうとする。

折から村の秋祭り、お夏は祭り見物にも行かずにふさぎ込んでいたが、庄屋のドラ息子が間もなく江戸へ行く事、今秋祭りの見物に來ている事を聞き、鎌をつかんで出かけて行く。そして村社の境内で、そのド

ラ息子を捕えてなじるが、つれなく突き放されるので怒り心頭を発して、手に持つ鎌で切りつける。然し、丁度太鼓をたたいていたお夏の許婚の茂作が飛んで来て、堤川与惣兵衛をつとめる。

半狂乱で家に帰つて来たお夏をみなが取り鎮めて、「まあ、相手を殺さなくてよかった」等と言つていると、お夏の母がそれに反対して、「何故殺させなかつたか」と茂作にせまる。

というのは、その当時の法律に従えば、主人を殺しても磔、一寸傷を負わせても磔である。つまり、どつちみちお夏は磔になるのであるから、どうせ殺されるなら、相手を殺してしまつてから磔になる方が、ずっと寝ざめがよいのである。

散々娘をもて遊んだドラ息子は、ミミズ張れ程度で、腹ボテにされた揚句お夏は、ハリツケになる。これこそ「階級制度の悲劇」なのである。

母は娘に、むごたらしくハリツケにされるよりも一層、川へでも身を投げろと奨める。しかしお夏は、誰の子でもよい、自分の身を貸した赤ん坊を生まずに殺すのは可

哀そうだ、はらみ女には、お上もお慈悲があつて、身二つになるまでは刑をのばしてくれそうだから、自首して出て子を生んでから死にたいという。その母性愛たるや、まことにけなげである。

天保年間、江戸に近い村での出来事としてある。

所が、この実話は、寛保年間、駿河国竹原村の出来事なのである。

天保年間ならば、はらみ女は、子を生んでから死刑にするという規則があつたが、寛保年間にはまだきまつていなかった。その爲、竹原村の代官所は、江戸へ指図を仰いでいる。そしてその結果、主を傷つけた重罪人であるというので、結局ハチ切れそうな腹のま三尺高い木の空に一命を終えている。一説には、ハリツケを免ぜられて斬首になつたともいう。お上のお慈悲はなかつたわけである。

どちらの説が正しいか分らないが、最後までお上のお慈悲を願いながら、満々と張り切つた腹を血に染めて、刑架上に呻吟する姿を私は屢々幻想したのであつた。

3 花園洋子

今度は馬鹿に現代的な名前である。

彼女は、江戸川乱歩の小説「魔術師」に出て来る女性であるが、決して稀代の悪人でもなければ女探偵でもなく、勿論主役ではない。ワキ役もワキ役、僅か五ページ程しか出て来ない女性であるが、まことに気の毒を絵に描いてながめているような、あわれな人物である。

大魔術師、奥村剛造は、玉村家の人々に對して深いうらみをいだいて、一家みなごろしを計る。その玉村家の次男玉村二郎の許婚者が、花園洋子である。

彼女は二郎の恋人である爲に、いつわりの手紙にさそわれて、遂に誘拐されてしまふ。そして二郎を苦しめるために殺されるのである。

大魔術一座。

美人解体の術。

二郎の偶然すぎる程偶然に入つた魔術の一座の舞台で、道化師の扮装をした団長即ち奥村剛造の演ずる大魔術。

団長の娘文代（後の、名探偵明智小五郎

夫人が一礼して椅子に腰を下すと、団長と助手がその前を取り囲んで、文代を赤裸にしてしまう。

眼かくしをされた真裸の若い娘——

それが実は花園洋子なので。彼女は二郎の恋人であるために、生きながら裸体を公衆の面前に曝らさなければならぬ——ストリップガールもなかった時代に——

さて団長奥村剛造は、大ダンビラをふりかぶつて洋子の足を斬り落す。

「ウーム」といううめき声。

又片方の足、それから手、一本ずつなぶり斬りにして行く。

中国の八所斬りの形は、先ず乳房を斬り落して、検使の実見に供え、それから足の肉、手の肉、臀の肉を斬り、足を斬り落して刑を終るが、大てい尻を斬る位までは生きているようだ。だから手足を斬り取られて洋子は生きていたに違いないのである。

最後に大ダンビラを横へ一振りして首をはね落すまで——

こうして玉村二郎の許婚者であり、私の恋人である花園洋子は死んだのである。そして袋につめられて埋められ、又掘り出さ



れ——死んでからも落ちつけないのである。

乱歩の小説には随分バラバラ事件は出て来

るが、「蜘蛛男」のそれにしても、「盲獣」

のそれにしても大抵は殺されてからである。

彼女のように公衆の面前で、見るもはずかしい赤裸にされて、乳房をむくむくさせな

がらなぶり殺しになるのは全くめずらしい。

しかも、「妖虫」の初ッ鼻で谷中の一軒屋でなぶり殺しにされる女優の春川月子のように、本人が賊の目的物なら兎も角 二郎青年の許婚者であるという理由で、二郎青

年を苦しめる爲の道具として殺されたとおつては、これ以上のみじめな話はないわけである。

前のお夏と、いずれが不憫であろうか。

彼女は私の中学五年の時の恋人——初恋の人であり、今でもほれている。

4 アグネス

日本の切支丹の殉教史、西洋の切支丹の殉教史はやはり私のよく研究した所である。彼等のうけた惨酷な拷問や刑罰は私の心に強い刺戟を与えた。

中でも一月二十一日に死んだ十三歳の聖女アグネスは特に私の心を引きつける。

世界美術全集第二十巻に出ていた彼女の像は幾度見ても飽きなかった。

房々した金髪に裸の肌をつつみ、その髪はひざまでも達している。布のはじでわずかに左の胸のあたりをおおっているが、その布の一端は異端のひげもじやな男ににぎられている。そんな構図であつたと覺えている。

彼女の死んだのは紀元三〇五年、世に殉教の世紀と言われ、聖セドステイアンもこ

の頃に殺されている。

彼女の生涯については、ワイズマンの小説「ファビオラ」の中に語られているが、彼女は信心深く誠心の厚い少女で、奴隷に対しても市民と同じいつくしみを以て待遇をする。それが傲慢ないとこの「ファビオラ」を次第々々に心のやさしい少女とかえて行くのである。又その中には滑車で体を引きのばされて果なく死んで行く盲の少女セシリヤもいる。彼女は自分の裸体が多勢の人々に見物されている事も知らない。そして僅か滑車の一卷きで果なく死んで行く。

アグネスは太守から自分の息子フルヴィウスの嫁になれと強制され、貞操をけがされるが、神の御力に依り救われる。「ファビオラの原文には「アグネスが受けた最初の刑罰は此処に記述するのを省くが、天使はいつも彼女を守り、その純潔を少しも汚さなかった。」と書いてある。そして火炙りの刑に逢う爲刑架に縛りつけられるが、どうしても薪に火がつかぬので、兵士は劍で彼女の首を斬り落すのである。

現在でも彼女は少女の守り神とあがめられ一月二十一日は少女の日として守られている。

そうである。

「ファビオラ」の中の彼女は、端然と坐つて首をさしのべると、開き切らぬ花が風に散らされる様に散つて行くのである。「電光一閃！ 花は莖から落ちて事果てた。若し、白衣が紅に染まらなかつたら、平伏して祈っているとしたか思われなかつたであろう」とワイズマンは語っている。

まだその他にも沢山いる。

例えば車責めにあつて殺されたカタリナ史上有名な女丈夫ジャンヌ・ダルク。甲陽軍艦の奥平九八郎の妻、柴田軍記で逆八付になる山路正国の妻や娘……

それ等は、何れも私の恋人であり、又かつて恋人であつた人々である。

しかし最後に、私の男色的な傾向の強かつた時代の記念として小浜三之助と、波多瀬三郎の最期を物語ろう。

5 小浜三之助

小浜三之助（一説には七之助）は、小浜民部少輔忠隆の次男で、十三歳、派遣されて、駿河大納言忠長公の家臣として仕えていた。

徳川忠長は、幼名国千代（一説に国松という）三代將軍家光の弟で、父秀忠の寵愛をうけ、三代將軍にもなれそうな所、春日局や大久保彦左衛門の働きで、東照公家康の出産となつて、鶴の一声で排斥されるという講談種の主で、現在ラジオで活躍をしている筑波太郎松平長七郎はその息子だといわれるが、これはどうやら架空の事実らしい。



彼は幼い頃からの境遇の関係から、粗暴な振舞が多く、屢々家光の機嫌を損い、遂には紀州を通ひて叛逆の企があるとの疑いをうけて高崎へ押し込められ、遂に自殺をしている。彼の家来の多くは將軍直参の子弟が多く、見付役を兼ねていたといわれる。三之助もそういった直参の子息の一人であつた。或る時忠長は、浅間神社境内に牧狩を行つて物議をかもし出したが、その歸りに雨にあ

つて、とある庵室へ雨やどりをした。庵守の持ち来たつた薪を、いろいろにくべて火をおこそうとしたのであるが、薪がしめつていて、よくもえつかず、煙が出るばかりであつた。

この煙が忠長の勘にさわつたのであろうか、彼のひたいに青すじがピリと立つ。

一方火をおこそうとしている三之助は一生涯、目をショボショボさせながら「フー」と吹いている。

その時忠長の佩刀は一瞬血を吸つた。

三之助の胴体はいろいろの中へころげ込み、首は何事もなかつたように、いろいろたへすわつた。本当の一瞬である。恐らく恐された三之助自身、全然殺されたのを知らなかつたのではなからうかと思われる。

前の花園洋子とは全く別のケースであるが全く別の種類の涙を禁じ得ない。

同じく男色の恋人として、勢州軍記の波多瀬三郎があるが今は省略する。

世間には私と好を共にする志も少くないと思う。その方々の好みにかなえば本望であるし、その方々が告白を聞かせて下されば、これにすぎる喜びはないのである。

淫魔の

狂宴

……そして、その城内は、散亂堆積する屍體で一杯になり、骸骨が放つ妖光と、腐臭で、地獄繪さながらの陰惨なものだつたという。そのおそるべき淫虐の饗宴が……

「余は、他のいかなる快樂にもまして、苦痛と涙と恐怖と血とを享樂することをよろこぶ」

ジル・ド・レエ

最高の善の極致は、ある人たちにとつては接近しうるであらう。しかし、惡のどん底は、とうてい、きわめつくせるものではない、とJ・K・ユイズマンが悵嘆する。それだけ、^{ブルジョア}淫虐の世界も茫洋たる地平線のむかうにひろがり、無限の神秘をたゞえてその沼には底がない。

およそ考えうべき、あらゆる淫虐の限りをつくして、「この世界で、こんなことを

やつてのけたのはわしの外に一人もあるまい」と豪語したという十五世紀稀代の淫虐魔ジル・ド・レエさえもが、さらにさらに手のこんだ、比類のない姦淫や苛責の仕方にしきりに努力したが、遂にその極地をきわめることはできなかつた。罪業の地獄にむかつて、彼は人間の想像の行きつくところまで行つてしまひ、惡魔自身のように、その限域にさえふみこんだかに見えたが、しかし、彼はその深淵を前にして、なおもあくことをしらぬ情炎の息吹に、喘ぎ、呻くのであつた。

しかし、このようにして、このサタニズム

の燃え立つ噴炎は、第十五世紀の、このジル・ド・レエの時代、彼にきわまつたということができるかもしれない。

◇

由來、ヨーロッパの中世は、惡魔を中心としての教會と異教徒との拮抗の世紀であつた。中世的な葛藤は、ヘレニズムとヘブライズムの極端な抗争であつた。そして、その拮抗する勢が、特にさかんになつて、惡魔が跳梁したのは第十三世紀ごろからであるが、一四八四年十二月、法王インノセント八世が、「魔術を行う女は生かしておくべからず」と



夫言上ノ坂

陳野重晴画



する有名な弾壓の法令につづいて、アレキサンデル六世、レオ十世、アンドリアン六世等々と、みな峻厳な制裁を斷行して、遂には逆上の結果の、史上に有名な虐殺と共に、ナンセンスの史實も残している。しかし、「醜惡なる争ひの王、罪惡といふ恩惠

魔王の禮讃によつて對抗したのである。そして、「なんぢキリストよ、ペテンの職人、讃嘆の盗人、愛情の盜賊よ……汝は人類の罪をつぐなうべくして何物をもつぐなわざりき。偽君子よ、怪物よ、汝の殘虐さは、生命を創造して、これを正しきものにあたえつつ、しか

の與え主、また豪奢な罪業と大いなる惡徳の監督者である魔王サタンよ、われらの崇拜おくあたわざるはおん身なり。眞の理にかなう正しき神よ、よこしまな怖れの絶讃すべき總督よ」とこれらのサタニストは

もその輩を原罪といふ不可解な罪におとし入れ、なほ理解しがたき定法に従つて罰したり。ともあれ、われわれは、なんじのその破廉恥な虚偽と、つぐなわぬ罪科を告發せんとす。あゝ廣大な惡業の冒瀆者よ、愚かなる純潔の夢想家よ、のろわれたるナザレ人よ、卑劣なる無能の神よ」

とやり返す。

つまり、人間の性に最も自然にして正しきもの、純情にして尊きものを、人間から掠奪したヘブライのモラルへの斷乎たる鬭争であり、人間證券をとり戻そうための告發としての惡の讚美であつた。自ら敢て惡(魔)といひ、罪惡と稱するも、それはヘブライをからかうためのいたづらな反抗の皮肉でしかなくかつた。彼ら自身、決してそれを惡とも罪とも考えていたのではない。そして、そのクリストとクリスチャンが考える惡の中にこそ、「正しき人間の理と姿」があるとした。教會の、掠奪が峻刻であればあるほど、惡への讚美の聲も行動も深くなつて行くであらう。かくして人間に、ノウマルなものを惡とし、魔にでつちあげたものは、じつは外ならぬクリストとその教會だつたのである。

ユイズマンは、その一の作品で、ジェルタ

ルという男にいわせている——「淫亂というものは、魔王禮讃の生みの母だ」と。しかしこの母子関係は、存外に、その反対かもしれない。そして、それは、いずれにしても不當に人間性を抑壓否定したヘブライズムのモラルが生んだのである。で、また彼がいうように、「魔王を信仰するのが神を信仰することよりもアブだというわけではない。變態的といえ、なんらかの神性を祈るものはみんな精神の錯亂者ではないか。魔王の信者は、淫亂の徒ではあつても、ともかくも神秘家だ。奴らの惡の窮極への情熱が官能の狂的なたえを引きおこすことも、だからうなずける」のである。

かくして、いわゆるサタニズムと淫蕩の關係は現實に不可分である。



で、サタニズムにおいての魔法の體系を語るのがここでの問題ではない。すなわち主題に従つて「惡の究極への情熱が、官能の上に狂うもたえ」の、その體樣を瞥見するのが目的なのだが、それにしても、しかし近代の淫虐文士サド侯爵描くところのブランジ公爵が示すような、その「罪惡の哲學」と「淫蕩の理論」を語ろうとするので

もない。しからば、中世以來のサタニストは、果していかなる淫蕩においてあつたか。

一五七二年、トウマス・エラスムスが書いた本によると、「魔女とは、神にそむいて惡魔に身をよせ、あらゆる害惡の方法を惡魔から教わる女である」と定義されているが、十三世紀から十七世紀へかけての何百年間、さかんにこの魔女が跋扈した。このヘクセたちは、或は箒にまたがり、或は紡錘に乗つて、自在に空中を飛翔すると信ぜられた。ところで、五旬節の夜、この日は魔王が魔女たちとハルツのブロッケン山で酒宴を開く日であり、魔法使いの安息日といわれているのだが、ひとり魔女のみでなく、魔術師すなわち男の魔法使も例の箒をまたいで飛んできて、みんながここに集まる。いうまでもなく、それは惡魔の饗宴として、淫蕩をきわめる會合だつた。いわゆる魔宴 *Sabbath* として知られているものである。が、古代的な性の祭典、ファウナリア、サツルナリア、リペラリアなどにおそらく系統を辿りうるだろうところのこのサバトでは、いかに淫亂に狂つたとしても、それら以上のものではなかつたであろう。しかし、その魔女たちが、よく使つた媚藥に、「魔女の膏藥」というものがあつた。

このヘクセン・ザルベは、腕や直腸、おそらくまた××××出來るだけ奥深くぬりこまれた。ついで兩脚の間へ箒の柄をはさんで、さて、どうなつてくるかと暫らく待つて、と、そのうちに藥效があらわれて、いろいろ混亂した幻覺に襲われ、だんだんに無感覺に眠りこんでしまふ、というすばらしい麻酔の膏藥だつた。もちろん、或る種の毒草を含んでいることは明らかだが、有名なガッセンヂイは、或る羊飼から、そのザルベをもらつてそれを體內に入れると、楽しい「魔女の遊樂」を呼ぶことができるときかされ、それを管でアナスの中へ挿入するとたちまち長い快眠に陥つて、いろいろの幻夢があらわれた。十六世紀のイタリイで使用されたその成分は、毒草とりかぶとに牛脂、白楊の葉、蝙蝠の血、煤、さわぜりなどを混合してつくられたといひ、マクベスの魔女は、蝦蟇と蝙蝠と蛇といふの目と、犬の舌と、とかげの足と、梟の羽と、龍のうろこと狼の齒と、鱧の胃と、魔法つかいのミイラと、眞闇の夜に掘り出した毒人參の根と、牝山羊の膽汁と、ユダヤ人の肝臓と墓場に生える一位樹の片と、死んだ赤子の指などという、およそ怪奇なものをよせ集め、混合して釜で煮て、更に狍々の血で冷

し、自分で生んだ仔豚を食つてしまった豚の血をまぜて、その魔薬をつくつたとある。これらはみな、如何にして、官能の限界をつくそうかという狂熱の思案の中に工夫されたものであり、生のよろこびで、性のいやはてをマキシムに極めようとした結果の外のものではない。當然そうした官能の悶え、狂う情炎は、その遂情の方法が單なる淫蕩をこえて淫虐へと突きつらぬいて行つた。ここにすなわち、惡魔的なサヂズムがあらわれる。それは、麻酔の毒をもつて、單に官能の上に幻覺をよびおこすのと、決して揆を異にするものではない。その深化であり昂上であり、徹底だつた。苦悶の様相と、眞赤に匂う血は、彼らにヒョスやマンダラゲのような麻酔と、快適な痙攣と、魂の顫動をよびおこしたのである。

◇

わたくしは、この短篇の冒頭において、サタニズムは、十五世紀におけるそのスツルム・ウント・ドラングの中で、奔放自在の花をさかせ、而してそれはジル・ド・レエにきわまつたことをいつた。しからば、最も典型的に、その淫蕩のはての嗜虐は、果していかなる形で彼にあらわれたのである

ろうか。

彼は十五世紀中頃のフランスの元帥である。南フランスに領封をもつていた。百年戦争の當時、ジアンヌ・ダルクにお伴して、軍功を立てたが、のちにブルタアニユに近いチフォウジュの居城に引きこもり、魔法の道士たちを集めて、惡魔禮拜に専念し、従つて、史上未曾有のサヂに潜没したのであつたが：若いころの彼は、そういう徴候は全然見えなかつた。しかしやがて「密室の中でうつとり神に酔う僧侶のように」或は「善のために善をなす人間と同じ」ような氣持で、惡魔に酔いしれるようになった。そしておそるべき淫虐の森を彷徨するに至つたのである。ヴァンデ郡の人影もまばらな片田舎の古い天守閣の下に、つましく散らばつてゐるこの村では、「青ひげ」のあだ名でよばれたジルの傳説が、今なお生々に残つて、臆病な老婆たちは今でも夜は城壁の下を通るときには、胸に十字を切るといふほど嗜虐の犠牲は多かつた。とにかく、この城では、来る夜も、あける日も、おそろしい限りのことが行われたらしい。「ジルの魂が十二分に化膿して、その黄色のうみに彩られた燦然たる赤い腐肉の幕舎の中に、いつとはなく魔王が棲むようにな

つてしまふ」。で、彼はまず手初めに男の子をおかす。鋭利な刃物でその男の子の首をザクリ切り取り、手首をグイともぎとると、その切り開いた胸から、まだ生あたたかい心臓を引出し、更に眼をえぐり、それらの肉塊を盆にのせて、魔王にささげ、熱烈な祈りをするのであつた。その子供の流血は瓶に入れて惡魔的な書類や魔法の本を書くためのインキに使つた。この血こそ、以後に何升何石と流した古今未曾有の極惡な罪科の血汐の、ほんとに最初のしたたりだつた。一四二二年に始まつて一四四〇年遂にその死に至るまでの八年間、アンジュウやブルタアニユなどの領内におけるあらゆる住民は、晝となく夜となく、泣きわめきつつ彷徨した。土地の子供といふ子供が一人残らず行方不明になつたからである。當時の記録は、ジルの手に殺された犠牲の數を七八百人と記しているが、全くはもつともつと多數に上つたらしい。そして、その城内の地害は、散亂堆積する屍體で一杯になり、骸骨が放つ妖光と、腐臭で、地獄繪さながらの陰慘なものだつたという。そのおそるべき淫虐の饗宴が、次のようにも報告されている。

「夕方、彼らの官能が燐光を放つときめ

き、獣肉の濃厚な汁と香料をまぜた強烈な酒にあおられてもえ立つとき、ジルとその一黨は城内の奥まった部屋で、そこに押しこめておいた小さな子供たちを引出して、まず着物をぬがせ、猿ぐつわをはめる。ジルはそのからだに醫者が觸診するようにさわりながら、短剣で傷をつけ、快感にゾクゾクして次から次へと手足を切斷する。あるときは、その胸をきり開いて血だらけの肺臓にくらいつき、血汁をすすつてから、腹部を切り割いて両手で傷口を押しひらき、その流血り、りたる肉蕩國の中にすわりこむ。そして生ぬるい臓物に埋つた汚物の中に、自分の裸身をひたして、まだピクピク動く肉體の、斷末魔の苦悶とケイレンを、うつとりたのしむのだつた……」

また、或るときは、村々に誘拐した處女の女體を食卓の上に並べたり、フォークで乳房をえぐりとつて、マヨネーズにまぶしてかじつたり、腕を逆につるして、わざとよくは切れないナイフで白魚のような十本の指を切りはなし、フライパンで油いためにして舌鼓をうつた。美しい男女の子供を

ずらり仰向けに並べ寝させて、その柔かい肉蕩國のベッドに身を横え、暖をとつたともいわれているが、ジルの淫虐饗宴はなかなかこの短篇では語りきれない。彼はやがて單に苦

悶する人肉では憐たらず、更に屍體を愛するようにもなつたが、妊婦の腹をさいて、とり出した胎児をおもちゃのように弄ぶようなことさえやつてのけた。こうした淫虐の後、



さすがに彼もぐったりして、睡魔にとらわれ、重くろしい昏睡状態をつづけたという。「余は他のいかなる快樂にも増して、苦痛と涙と恐怖と血とを享樂することをよるこぶ」というのが彼の心からなる述懐だったのである。

◇

十五世紀の終り、つまりジル・ド・レエの時代から進んで十六世紀になるとサタニズムは恐らく一般にさらに深化する状態に進んでいったらしい。魔術師と魔女への迫害がさらに辛酷になったことでも想像できるのである。特にこの時代のサチスチックなサタニストにベネヂックスという僧侶の話が伝えられている。彼は、魔法使いのアルメリイナという女と同棲したが、彼はその女を手ごめにしたり、手足をしぼつて逆さにつるしながら、祭壇の前で、祈りつつ虐げることによつて女という柔軟な仔羊を魔神にささげた。十七世紀の各地で行われた、いわゆる黒ミサにおける「女の腹上のミサ」については、前号に一寸話したからここではふれない。ただこの黒ミサの定法に次の如きものがあつた。

一般に子供を育てて少し成長したら、野

原へつれていく。野原にはあらかじめ、カンカン火のおこつたかまどが用意されて、その子供はその中へほうりこまれる。そして燃焼しきつた屍灰をとつておき、別に刺し殺した子供の生血にまぜて煉物をつくる。それが聖なる禮式の材料となるのだつた。

◇

十八世紀になつても、サタニズムは衰えなかつた。多くの司祭が、いかがわしい悪魔禮讃の秘法を行い、淫蕩をきわめたが、中にベカレルリという僧侶は、全裸にした五十人の魔女を床にねかせ、中二階からとび下りて肉の波間を泳ぎまわり、無盡の淫蕩を敢て行うという一の奇習を案出した巫山戯た淫僧だつた。

十八世紀の、淫樂たぐい稀なる侯爵サドにおける罪惡の哲學、淫蕩の理論、嗜虐の行作は、かくして、いうまでもなく、この傳統のサタニズムの上に咲いた近代の妖花である。十五世紀の昔、ジル・ド・レエに花咲いたアルゴラグニアは、彼によつて近代に再び光耀し、人性自然の神秘が、いかに錯雜多彩をきわめて執拗に深奥な淵源を有するかを、身を以て示したのであつた。

一八五五年、パリでは殆んど女だけの一の

ソサエチイがあらわれた。彼女たちは、聖體のパンをしぼらく口に含んで、やがてそれを吐き出して、切れ切れにちぎつたものを淫らな接觸で汚したりして祈つた。

これは必ずしも汚物狂崇ではなく淫神の作法として、クリストの、いわゆる無能な神への反抗だつたが……

◇

引きつづき、十九世紀も、邪淫なサタニズムの秘儀傳統はすたならなかつた。カンチアニムというわかく美しい女を張本としてオウクセルの町を中心に、方々を風靡して騒がせた淫虐の徒の結社もこの一八五五年に創立されたものである。この時代、この種の魔王禮讃の結社としては最も大きなもので、この女がいたモンサンシュルピスの修道院では、色情的な狂亂と淫神の亂行において、まさに淫魔の狂宴とでもいふべき淫蕩が行われたという。わたくしはここでお、ユイズマン描くところの、現代の息吹において行われているらしい、いわゆる「ドオクルの魔宴」淫神の秘儀における途轍もない淫蕩のシーンについて語るべきであるが、おしむらくは、すでに紙數が盡きた。

わたしの男装徘徊記

佐伯京子

—でも、わたしはやはり女だった—

月田 浩画

A

へんなことで、男のからだと女のからだとうんとちがうってことを、わたしは小さい時に知った。ふと何かの気配に目が

さめて、わたしはその時、もうすこしで声をあげそうになった。お母さま

が、お父さまにひどくいじめられているのだと思つた。けれどもお母さまの、うわごとのようなささやきは

とくべつのやさしさにみちていた。そしてこのとき以来、わたしは、女がともきらいになった。きらいというより、女つてものがかわいそうでならない気がした。

女の弱さとか、それにまつわる劣等意識、果ては女というものに對する反抗感ばかりだった。と、いまになつてこう思う。



つまりこうした反抗心にはじまつて、わたしは、わたしの男性化に憧れるようになったのと思う。

「この子は勝気だ」

とか、

「男まさりだ」

とかいわれるのさえイヤだった。とにかくそんなふうに男と比較してみられるのがイヤ

なのだった。わたしは男でもなければ、女でもないといふんできめていた。そしてだんだんわたしのからだについて、わたしは女だといふしるしを知らされれば知らされるほど、ムキになつてわたしは、わたしの、女に反撥した。

わたしはどんなに立つたままでおしつこがしたいと思つただろう！ 男の子の痛快な生理をうらやましがつただろう！

「あたし、兵隊さんになりたいわ。お馬に乗るの」

とわたしは本気で云つた。大人たちは笑つた。けれども遊び友達の子たちは、ちよつと妙な顔をするけど、

「うん、京ちゃんならなれるさ」

とみとめてくれた。わたしは男の子とばかり遊び、いつもズボンをはいていた。同じ年頃の女の子たちは、わたしをあくまで女の子あつかいするが、こわがるので、ケイベツしてやつた。わたしはそんな女の子のママゴト道具をこわしたり、お人形の首や手を引つこ抜いたり、もぎとつたりしてやつた。

それでも、どんなに努力しても、私のからだの特徴は、暗くじめじめした、複雑な女の生理からのがれることは出来なかつた。それ

に人一倍わたしは、背丈が伸び、乳房だつて見事に熟した。男とならんでも、けつしてかぼそく弱々しくは見えなかつたけれども、からだからは女臭さが発散するようになった。

わたしはつとめて、おしやれから遠ざかつた。つとめて男らしく振舞つた。中学をすぎ高等学校に進むと、男の学生はわたしに女を感じるようだった。わたしに恋文をくれるしその文章の中には、わたしがどんなに男の魅力があるかなどと書かれていた。わたしは鏡にじぶんの顔をうつしてみて、短かく男刈にした頭髪をかきむしりながら、

「おい君！」

などと呼びかけてみた。ただどうやら満足できることは、こんどは女の友達か、わたしを大へん頼母しがるようになったことだった。あきらかに、わたしの中に男性的なものをみとめて、手紙をくれるにも、

「懐しの君へ」

などと書くのだった。わたしは思い切つて女友達を保護するようふりをした。すると面白いように女たちは、わたしの思うままになつた。まるで女たちは、ほんものの恋人に抱かれているように、わたしの熱烈な抱擁の中によろこんで身をまかせた。わたしは女に

對するとき、もう疑いもなく男性的で、女たちはわたしに對して全く受身になつた。そしてわたしは、学校を卒業するまで、秘密なたのしみにずいぶん耽つた。男になんて興味はもう、ほとんど失つてしまつた。

わたしは男のように振舞えたと自信をつけ男のように振舞うことに云いしれぬ快感を見出した。そして卒業式の学芸会で、わたしが男の芝居をしたとき、みんなが

「川路龍子より、ターキーより、素適よ！」と感激したことが、わたしに或る決定的な示唆を与えた。

B

学校を卒業して、お家の手伝いなどしながら、ふつうの女なみにお嫁に行く修業みたいなことを両親から口うるさくいわれたけど、わたしには、お茶とかお花活けとか、てんで興味がなかつた。わたしは本ばかり読んだ。なるべく男の読むような本をえらんだ。ほんとうにわたしは、男と同じような気持になつていて、

「娘はどんな男性に魅かれるか」

というような雑誌の記事をむさぼり読み、娘たちに好かれるようなことを一生懸命研究

した。何とかいう本に、

「人は女に生れない。女になるのだ」

と書いてあったことが、ひどくわたしの心をとらえた。わたしは、

「わたしは女に生れない。男になるのだ」

と考えた。この考えは、もうどうにもしようのないほど強いものになってしまった。男になりきつて、女たちと恋愛することを思うと、わたしは全身がふるえ出すのだった。

「そうだ、一度男装して町を歩いてみよう」

と思いついたとき、わたしはすでに、スリと刺戟を感じて、すっかり興奮した。女学校時代に、下級生や同級生の女の子たちと恋愛したのは、あれはほんの同性愛の真似ごとみたいなものにすぎない。相手の女は、どんなにうつとりしても、どこかでわたしが女だという気持を持っていた。その証拠に、わたしが女だからこそ、わりあい羞恥心をみせなかった。もし本当の男に接した場合、女がどんなふうな心や態度を示すものか、それがわたしは知りたかった。

わたしの言葉一つにも、指一本の動きにも女は、もつと女らしい反応を示すにちがいない。わたしを本物の男だと思いこんだ女の声や動作は、どんなに熱っぽく献身的なものだ

ろう。女が女どうしにはみせない秘密を、わたしは男になることによつてあばき出すことが出来る。それからわたしは、女をじらし、いじめ、なぶり、その上、なぐつたりひどい目に合せたりしたい。男の位置は、いつも女をひきずり廻すところにある。わたしはそうした男になるのだ。

わたしは第一準備として、あの少女歌劇の男役スターを見るため、浅草の国際劇場に出かけた。しかしわたしは、男役スターから、あまり男らしさを受けとれなかった。ついで見物している女たちを観察したけれど、彼女たちにしたつて、スターから真の男性を感じとつていふふうには思えなかった。わたしが学んだものは、男装の着こなしくらいのものだった。

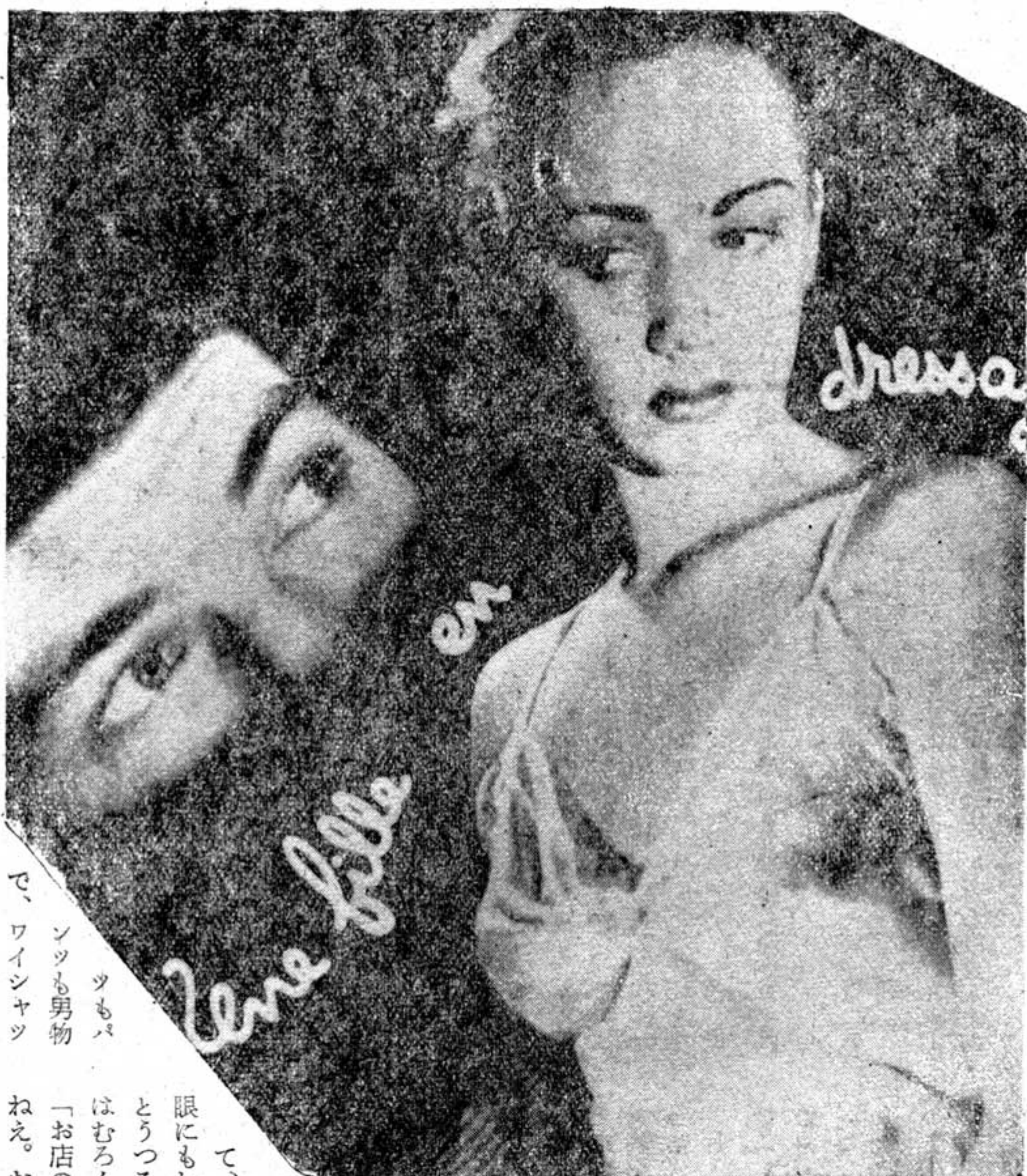
次にわたしがしなければならぬことは、男の服装を手に入れることと、男に化ける場所をさがすことだった。うちでそんなことは出来ない。でもわたしはいいことに気がついた。それは学校時代のお友達で龍子さんという人が、銀座のキャバレーにつとめながら、アパートに一人暮らししていて、そこへ行けばなんともなるという思いつきだった。龍子さんはズベ公で、家に反抗して飛出して女給になったよ

うな人だし、じつはわたしの熱烈なS相手だった。わたしは早速、早朝から龍子さんの寝込みを襲つて、わたしの男装計画を相談した。わたしが行つたとき、ちょうど龍子さんは男の人と寝ていた。そんなことはとつくに承知していたし、問題じゃなかった。龍子さんのアルバイトに、わたしは関心もないし、関係もない。

ともかく相談はうまく行つた。男の洋服は龍子さんが勤め先に出入りする洋服屋から、出物でも買つてきてくれることになった。むしろ龍子さんが、わたしの男装に夢中になっていた。着替えるのもこの部屋で、と云つてくれた。そのかわり久しぶりに、龍子さんに特別サービスさせられた。その揚句龍子さんたら、

「京ちゃん男になつたら、あたしをお嫁にしてくれない？」

なんて真剣に熱い息を吐く始末だった。こうしてわたしの夢は、実現第一歩を踏み出すことが出来た。龍子さんに手伝わせて、素裸をサラシできつく巻いた。コルセットではつつみきれないわたしのボリュームも、サラシで息がつまるほどしめつけると、固くしきつて男の身体のような固さになった。シャ



ツもパ
ンツも男物
で、ワイシャツ

を着たり、ズボンをはいたりするうち、わたしの気持は何だか龍子さんの旦那さまみたいに変化して行つた。前の割れた男ズボンのチャックをシュツと引くとき、便所の出入りに気をつけなくちやと思つた。これでもう男になりきるための忘れ物はない。

事実、ためしにその夜、龍子さんのキャバレの客になりすまして、化けの皮がはげなかつたことが、わたしにすつかり自信をつけた。

C

わたしはたえず煙草を吸つた。吸い方は外国映画から学んだ。なによりも煙草の匂いが洋服にしみつくことで、女臭さが消えた。そうしてしばらくは龍子さんを連れて、喫茶店や映画館に出入りした。誰の眼にもわたしたちが立派に男女のアベックだとうつることをわたしはたしかめた。わたしはむろんのこと龍子さんは得意だつた。

「お店の子に云われたわ。あんたの彼氏素適ねえ。おごんなさいよつて」

しかしわたしは、そろそろ龍子さんと歩くのがつまらなくなってきた。五尺三寸五分、十四貫五百というわたしの身体は、そうふつうの男にくらべて見おとりしないし、春向きの明るいクリーム色のギャバジンの背広は、わたしをホヤホヤの会社員か何かのようにみせていた。通りすがりの女たちが、わたしに投げつける視線の性質を、わたしは十分理解出来たし、一そう得意になつた。女の眼の色を讀むことが出来るのはわたしが女だからだけだ、これはもし新しい未知の女を手に入れた場合に、口説くにしても冒瀆するにしても、又とない利点になる。わたしは男より早く女の心を読みとり、ムダな手数なく女を手に入れることが出来るだろう。

早く女にぶつかつてみたかつた。眼をつけている女はいた。龍子さんのアパートの近くにあるパチンコ屋に働いている娘で、わたしの好きなタイプだった。小柄でピチピチした身体つきと、何かの期待にたえず胸をおどらせている素振り、うっとり濡れたがつていゝる眼の光をもつていた。

わたしはパチンコ屋に通い始めた。三日目にすばやくその子の好きそうなブローチをプレゼントした。すると、玉が入らなくても、

ジャラ／＼と玉が出てくることがあつた。五日目にわたしは、その子を帰り道で待ち伏せして、偶然出合つたふうに、さりげなく誘いシュークリームをごちそうした。美千子という可愛い名前も聞いた。美千子はすつかりわたしを男と思ひこんでいた。これをきつかけに、それからほとんど一日おきくらいにわたしは、美千子を誘つて、おそばを食べたりおしるこを食べたりした。四度目くらいから、別れるときに、握手と接吻をかわした。美千子の様子には、はつきりと恋する女のしめりが感じられるようになったのを見て、わたしは一種の勝利感に酔つた。たつた一つ困つたことは、美千子がわたしの会社に電話をかけたといふと云い張ることだつた。もう一つ、これは困つたことというより、考え直してみれば大へん嬉しいことなのだが、同じパチンコ屋の若い男から、

「君、美つちゃんをあまり誘惑しないでくれないか」

と、嫉妬の苦情をいわれたことだつた。わたしは美千子にこの話をした。

「あたし、あの人は何でもないわ。あたしは杉男さん（わたしの仮名）のこと好き……あら……」

と美千子は赤くなつた。どんなにハッキリした娘でも、ほんとに恋をしたときには、その恋心を打ち明けるのをハジラう。これですつかり大丈夫だつた。わたしはもうパチンコ屋にはあまり行かなかつた。そしていきなり美千子と一日ランデヴーする約束をした。

美千子はわたしに引きずられた。ランデヴーの日がやつてきて、わたしは美千子を江の島に連れて行つた。ごはんを食べるのに宿屋に入るのがちつとも不自然でないための下心があつた。女の子は、宿屋に入ることをふつうなら怖がるし、怖がらないような女ならわたしは初めから美千子などに目をつけはしなかつた。美千子が処女かどうか、そこまでは知らないけど、わたしはウブな娘を誘惑する男の興奮と勝利と誇りが味いたかつた。

予定通りに江の島のあちこちを廻つて、最後に、稚児ヶ淵の洞窟に入つたとき、真暗闇の中で、いままでにない抱擁と接吻をかわし、「ここでこんなことをすると辨天様がヤキモチやいて、僕たちきつと不幸になるんだよ」と美千子をおどかした。こわがる美千子に結婚を申込んだ。結婚という言葉は娘を甘くしびれさせるものはない。だからそのあと

遅い晝食を、島のはずれのあいまいな宿屋の一室で一緒にたべたあとは、すべての結婚の約束だからといって、美千子の女の秘密を一つ一つはぎとつていくのに、そうめんどろなことはなかった。

帰りがけの電車の中では、ガラリと態度を変えてわたしにピッタリ寄り添いながら、

「ここまだ痛いわ!」

と、色つぼく身をくねらせる美千子だった。そこはわたしが、「愛情のしるしだよ」と強く噛んだ胸のあたりなだった。美千子はすつかりみんな、わたしの女になりきっていた。

D

わたしは念入りの方法で、美千子を捨てた。結婚する気で、積極的になった美千子に龍子さんを会わせ、「これがぼくの妻だ。ぼくには妻があつたんだ」と云つてやつた。美千子は半狂乱になった。どうしても嘘だといつてアパートまでやつて来たのだつた。こんなとき、若い娘らしい、無鉄砲さを美千子もまた、誰にも劣らずみせた。

わたしはアパートで泣きわめく美千子を、

もう
接吻や
抱擁なん
かでなだめは
しなかった。美千子の口の中にハンケチをつめこみ、手足をしぼり、

物差
しで声
が出なくな
るほど叩いた。
美千子はどんなこと
でもするからあたしを捨て
ないでくれと哀願した。
まったく美千子は、わたしの快楽
のために神様が作ってくれたような女
だった。わたしは限らない陶醉にひたるこ



とが出来た。

それからわたしは、このときのふしぎな歡喜の味がわすれなくなつて、それを求めるために、毎日のように町をさまよい、女をさがした。

けれども、或程度までは進んでも、わたしが身体を賣めることに興味を示すと、大抵の女が逃げ出した。

わたしは美千子と龍子さんによつて、体内のしこりを吐き出さなければならなかつた。それでも未知の女体に觸れたいのぞみは捨てられない。

そうして或る夜、女性を求めて町をさまようわたしは、まったく思いがけない別種の経験によつて、あの日あゝのときに知つた歡樂以上に甘い陶醉を、わたしじしんの身体に思いしらされたのだつた。

それは奇妙な出来事だつた。わたしは或る夜、場末の映画館から出、人通りのない暗がり歩いてゐる時、うしろから和服の着流しの、骨つばい肩をいからした男に呼びとめられた。

「おい姉さん」

と男が云つたので、わたしはしばらく、わたしじやないと思つていた。

すると男は、わたしの前にくるりとまわつて、こんどは、

「男装のお姉さん」

と低い声で云い、褒味をきかした顔でニヤリと笑いかけた。

わたしは魂が凍えたように立ちすくんだ。そして馳け出そうとしたときには、男の強い手で腕をつかまれていた。

「あんたが幾ら隠しても駄目だよ。俺ぐらいの男になれば、肩や腰の恰好でスグ判るんだハ、ハ、ハ、」

男は低い声で嫌らしく笑つた。

この男もまた、強い刺激を求めて歩き廻つてゐる趣味の男なのだとかかつてわたしは、同時にさつきわたしがどんなにこの男の心をそそり立てたかを悟つた。逃れられないという本能的な直観で、わたしはじつとうなだれた。

わたしは負けていた。

どうこうするわけじやない、ただ話が合ひそうだからつきあつてくれという男にいわれて、すくんだようにわたしは従つた。わたしだけの秘密を知られてしまつたことが、こんなにもわたしを弱くしたのだつた。わたしはそこらの小料理に連れこまれた。

お酒をのみ、男装の女に異常な興奮をおぼえている男の熱心さから、わたしがどうして逃れうるだろう。男のキラキラした眼に射すくめられたというより、その強い視線には、何かわたしの中心を刺し、堅い心をとく力があつた。

いつまでも／＼わたしの背広姿をためつすかしつ觀賞してたのしみたがる男に、それだけでクタクタになつたわたしは、眼だけの責めのあることも知つた。

やつぱりわたしは女だつた。

巧妙な男だつたし、女よろこびの正体は、やつぱり男がつかみ出すものなのだと知つた。

女では引き出せない。男でなければ絶対に届くことの出来ぬ頂上があつた。

わたしはこの夜限り男装をよした。いいえ男になれなくなつた。身体の奥のほうから、一度思い知らされた女の呼び声が、わたしを戦慄させるからだ。

ふしぎな出来事、たのしい思い出だけが、いまはほおえましい紀念になつた。

明けてまして、お目でとう
ございます。——

なアんで云うと、出版
社のかたに、しかられる
かしら、もう四月号です
よつて。……でも仕かた
がありませんわ。

だつて、恵子が、この
お便りを書いていろいろ
が、今日は一月の十日。

……ようやく七草もあけ
て、お正月の、あの、の
んびりした、そして、少
しものういような、気分
がさめかかつて、これか
ら、また、いつもの毎日
がはじまろうとする。そ
んな日なのですもの。

レスポスのみなさま。

お正月をどういう風にし
てお過ごしになりました？

おこたに入つて、すごろくをしたり、カル
タをとつたり、——いいえ、そんな月並なこ

やけちやうわ。いいことよ。たんと、見せつ
けて頂戴。

でも良かったのね。だから、あんなつらい事
もしのべたのね。……きつとそうよ。

★女性だけの秘密な愛のサロン★

レスポス

通信



秋子ちゃんは、はじめびつくりし
ていましたが、永い接吻をすると
まるで電気がかかったように……

園村恵子

とじやなかつたのでしようね。分つてますわ
よ。……日本髪にゆつたあの子と、——恵子

恵子も、今年のお正月は、ちよつと、日本
髪風にゆつてみました。——ええ、勿論
本当のももわれ、とか、島田とか云う
んじやないんです。新日本髪というあ
れネ。

髪ゆいさんが混んで、いやなりま
したけれど、でも、結つてしまうと、
そんな髪でも、何だか、自分が、しと
やかな、昔の女になつたような気がし
て、まるで、小説か、お芝居のなかの、
男にいじめられて、袖で涙をふきなが
ら、それをじつと、こらえている女の
ような気持になつて、面白かつたわ。

こんな時、男に、いじめられて、無
理強いに何かされたら、きつと、負け
て、許してしまうだらうつて、自分で
そんないけない事考えてしまつたの。
あんな重い、立ち居に不便な髪をゆつ
ていた昔の女のひとの気持が分るよう
な気がしました。

自分が、男のおもちやにされ、ドレ
イにされているという気持が、何か、と

本当に、日本髪つて、男の爲に、それを、こわす男の爲につくられたような髪ですものね。あんなきれいに、飾った髪を、自分の手で、メチャめチャにこわし、自分の力で、それを乱させる男の気持つて、どんな得意だった事でしょう！

お便りが、とんだ所へそれてしまいましたけど、本当を云うと、お正月早々、恵子、少し、悲しみを味わっています。ゆううつですの。……そのことをお話ししましょうか。きいて下さる？

恵子のももの悲しい想いの原因は、ある方から、お返事を頂けなかったからですの。

その方からのお手紙は少なくとも、旧臘の二十日頃には、頂けるはずなのに、一月の十日すぎた今にいたるまで御返事いただけません。——だって、それは、それは、熱心に御返事書いたのよ、恵子。それだけに、辛く裏切られた想いは、胸につきささります。

こんな気持、皆さまのなかに分つていただける方があるかしら。そして、少しでも同情して下さるかたが。……

その方のあやしいお手紙は、便箋六枚に、



米つぶのような細字で、ぎつしりと、書いてありました。……その字の、やさしい、美しさ、まず私の心をとらえました。普通の便箋にしたなら、そうですね、三十枚以上にも上るでしょうか。それをよんで行く恵子の胸はあやしく波立ちはじめました。

そのかたは、絶体にお手紙は公表しないようにとおつしやっています。恵子を信じてお便り下さった以上、勿論ですけど、でも、

あまり、そのお手紙が、私たちレスポスの友の心をかき乱す美しさにあふれているので、私一人じめにするのは勿体ないと思いますから、おところや、お名前や、御職業が分るところは、一切、伏せて、ホンの一部だけ、皆様に、この、なやましい告白を、愛のお便りを、お裾分け致しますわ。（礼子さま。あなたが、御返事下さらないから、そのバツよ。恵子もいじわるして、あなたの恥かしい秘密

をあげて上げるのよ！ いいこと？)

二

礼子様(仮名)のお便りのはじめの部分は私の通信をおよみになつて、とてもびつくりしたこと、それから、多くのかたが、お便りをお寄せになつてゐることを知つて、決心して、私にお便りを下さる氣になつたことなどが書いてあります。それから御自分の性癖を告白なさつていらつしやいます。

「中年の、ひげの生えた、脂ぎつた、お酒くさいような男をみると、とても不潔に感じます。若い美しい青年を見ても、男つてみんなひげがこわくつて、煙草やお酒の匂いがするやうでイヤなのです」

こういう礼子さまのお性癖は、お兄さまに処女をといひまわしい過去からきていらつしやるのでした。

「十六七の頃に、面白半分に無理やり、そんなことがあつて、それから、……それが、私を男ぎらいにしてみましたのです」

愛するお兄様に、——なんて、いたましい礼子さまなのでしよう。でも、そういう事實は、ほんとうは、随分あるのではないでしようか。人には云いませんが、恵子にも、そんな経験があるのです。妹として、純粋な氣持で、甘えたり、優しくされたり、心をあつため合つたり……。

そうして、それが、感傷的で、感じやすい若い二人の間に、どんな影響をあたえるか、想像出来なくはありません。

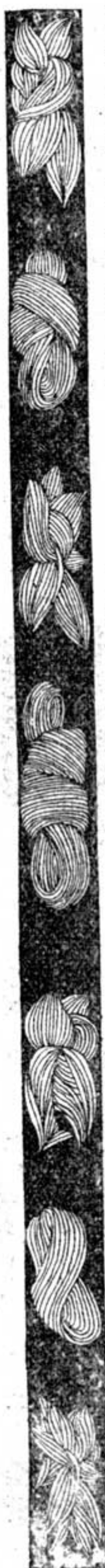
兄妹の愛は美しく清純ですけど、でも、そのなかに、異性に対する感情が少しもこもつていないと云い切れるかたがあるでしようか。

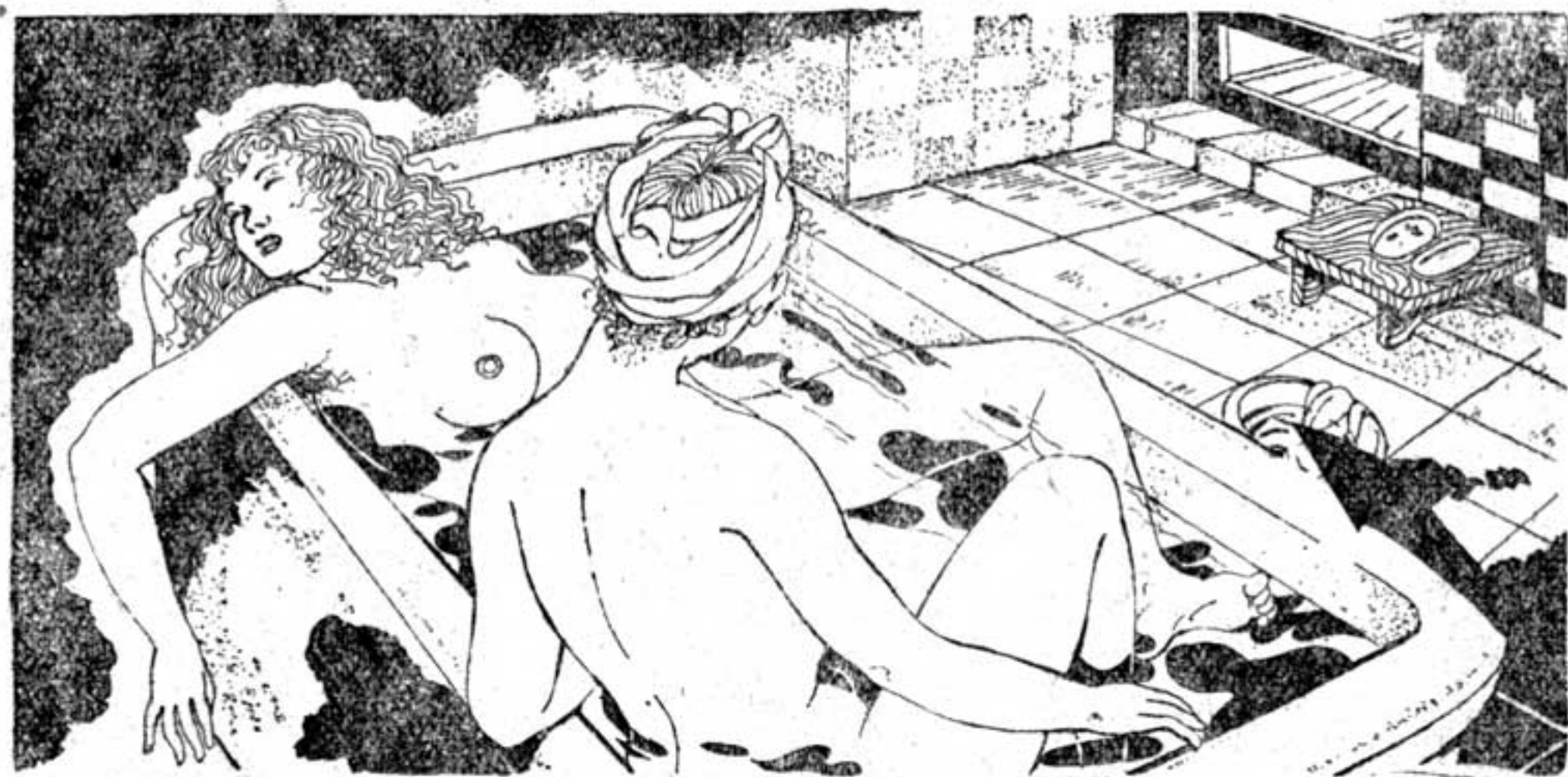
ただ、礼子さまのお家の御信仰がカトリックなので、それを深く罪とお感じになつた礼子さまは、結婚しないで、技術家として独立して行こうと決心され、あるお店におつとめになつたのでした。(御職業は伏せますが)

ところで、そこで、ある「宮城千賀子さんのように」お美しい、お姉さまのような方から可愛がられ、はじめて、異性愛に似た感情

を教えられました。……でも、お姉さまは、ほんの氣まぐれなイタズラだつたらしく、すぐ好きな男のかたが出来、夜、となり合つてねるおふとんのなかで、恋人のお話をなさるお姉さまの仕打ちに、「そつと、布団をかぶつて声も出さずに」泣く礼子様だつたのです。でも、そのおねえさまと別れたあと、寂しい毎日を、お仕事のいそがしさにまぎらわしていた礼子さまは、やがて一人の可愛い子を恵まれたのです。

「私は、そのひとを見て目をみはりました。十九というのに五尺二寸以上あり、すつきりと延びた肢体は、日本人ばなれがして、色が浅黒いのもかえつて魅力的で、男裝させればどんなに素敵だろうと思いました。折角、忘れかけた私の心は、再び、もえ上りました。次のお休みのとき、私は、秋子さんをつれて町を歩き、秋子さんに一番似合う黒のセーターと鼠色のフラノのストラックスをプレゼントしました。その子は、びつくりして、いぶかしがりましたが、私は『妹みたいに可愛いくなつたのよ』と云つて安心させ、その晩髪を





ブードルにして、うしろをカリ上げセツトしました」

自分のお好みに、仕立てあげてしまつたのね。そうした姿の十九の秋子さんは、どんなに、清々しく美しかった事でしようね。きつと「レモンの輪切り」のように見えた事でしよう。

礼子さまのレスポスは、こうして燃え上りました。

「こちらでは、映画館で、ナイトショウと云つて、十時半から昔の名画をやります。

あるとき、それを二人で見に行きました。

おわつたのが、十二時半、……その映画館からお店まで四十分もありますので、夜ふけの道をかえることは、こわくなり、おそろおそろ旅館の門をくぐりました。そして、その夜はじめて、二人でお風呂に入りました。秋子ちゃんは恥かしがつておりましたけど、その素晴らしかったこと、恵子さまに見せたいようでしたわ。私は、シャボンをつけて、どこからどこまで、キレイに洗つてあげました。喰べてしまいたい位に感じました。秋ちゃんも、私の軀洗つてくれたのよ。——その楽しさが、忘れられず、それから、ナイトショウにかこつけて二度、旅館にとまりました。そ

して、最後のとまりの時、二人の寢床を一緒にして、抱き合つてね、はじめて接吻を交しました。私は、前にお兄様にうけた接吻のことを思出し、急に秋ちゃんの唇に、私の唇を重ねました。秋子ちゃんは、はじめびつくりしていましたが、そのうちに永い接吻を何度もしっていると私は、まるで電気にかかったようにしびれ、気が遠くなりました。

「私とても変な気持、秋ちゃんは？」「お姉様、私も——」軀のどこかが、とけて流れて行くように感じました。「秋ちゃん、女のよろこびつて知らないでしょ？」「知らないわ、お姉様は？」「お姉様も知らないのよ。でも、私がおしえて上げたら、どんな恥かしい事でもする？」「恥かしい事つて、どんなこと？」「私も知らないのよ。でも分つたときのことよ」「ええ。……お姉さまなら」

私たちは、こんなことを話しあいました。恵子さま。

私が、秋ちゃんに、こんな事を云つたのも恵子さまのレスポス通信をよんだからなのです。

レスポスには、私の知らないはげしいよろこびがあるつて知つたからなのです。十月号のレスポス通信に、雪子さんの口には云えな

い遊びかた、とか、弓子さんのようなはずかしいイタズラとか、……そういう言葉がいつぱい出てきます。私、興奮して、自分のお乳をぎゅつと抱きしめてしまいます。でも、どんな遊びかたなのか、本当にはよく分らないのです。

「いいの、汚して、汚れたいの、思い切り汚して」

と書いてありますの、汚れるつてどういう意味ですか？ Mの意味でしょうか。……それとも……アレ？

レスポスの、はげしい女のよろこびに至る道をお教え下さいませ、恵子様、真剣なお願いです。（メイクウォーターなんて分らない私です。私たちにも分るお言葉でお教え下さいませ。）

礼子さまのお手紙はこんな熱心なおのぞみを書いてあつたのです。

メイクウォーターというのは、お小水のこよ。あそこに、当てはめておよみ下さい。それから、ついでに申しますが、

「おしつこに行きたい」

つて云うのは、英語で、

「ネイチャア コール ミイ」

つて云うんですつて、……自然が私をよんでいる！ つて云うのよ。ずいぶん、うまい云いかたじゃありませんこと？

礼子さんのお手紙は、こんなこともおわりの方に書いてありました。

「私、独立したお店をもつ資本に思つて少しお金をためていのですが、もし機会があれば、それで、上京して、お会いしたい。一目だけでもお会いしたい気持です。勿論。秋ちやんと一緒です。二人で、一晩でも、恵子様の愛撫をうけられたら、どんなに素晴らしいでしょう？ 想像しただけで、ポーツとしてしまいます。私達に、レスポスの道をお教え下さつた恵子さまになら、秋ちやん共々、すべてを捧げて悔いませぬ。恵子様にだけよ！でも恵子様は、私のお姉様か妹か分らないのに。……春頃になつたら上京致します」

こんな情熱的な美しいお手紙を下さつた礼子さんは、どんな方かしらと、恵子は想像し

ました。

上京していらつしやつて、東京の、どこか美しい、夢のようなホテルの一室で、三人でそれこそ、まんじどもえのようになつて、レスポスのお遊びにふけつたら、どんなにいいことでしょう！

そして、お風呂に入つて、ニンプのたわむれをしあつたり……。

アイドル・キャット（愛の小猫）というあのスゴく刺激的な、遊びをお教えして、三人でキャッキヤツと、それこそ、小猫のようにくすぐり合つたり、軀をこすりつけて甘えあつたりしたら！ どんなにステキでしょう！

長い礼子さんのお手紙を前にして、恵子は、そんなとりとめないことを、ボンヤリ考えてポツとしてしまいました。そして、どうかしなければ、胸の火が消えないほど、のぼせてしまいましたの。それほど、礼子さまの美しい筆跡のお便りは、恵子をまどわしました。年末のいそがしいときでしたけど、恵子は早速御返事を書きました。



手をとつて、お教えするのが一番いいので手紙でなんかお教えして、礼子さまが、恵子の見てないところで、それを覚えるなんて詰らない！ と思いましたが、でも仕方がありませんので、くわしく、レスポスのたわむれをお教えして上げたのです。本当に、とても恥かしいことまで、すっかり書いたのよ！ だつて、それでは、分らないでしょ？ ……だつて、「汚す」つてことだつてお分りにならない、うぶな方にお教えするんですものネ。

でも、お手紙つてとても便利ネ。どんな、いけない事だつて、私信なら、かまわないんでしょ？

女つて、ふだんは、つましくしているから、許されたところでは、それだけ、スゴくなるのかしら……

恵子も恥かしい事一杯書いてしまいました。絵まで、書いたのよ。だから、書いていて、興奮して困つてしまいました。

その晩の恵子が、どんなに情熱的だつたか遊びにきてくれた子だけ知つてますわ。

——所が、その御返事が、今までないのよ。どうしたのでしょうか？ ……あんな情熱的なお便りを下さつたかたのこの突然の変心は？

恵子、見捨てられたのでしょうか。

それだつたら、あまりに悲しい。……

精一杯にお見せした誠意が、うけとられなかつた事を恵子は、知らなくてはならないのでしょうか。

それとも、何か事故でもあつて、お手紙がお手に入らなかつたのでしょうか。

それも考えられます。

周囲の眼がうるさいので、局止めにしてくれとおつしやつたので局止めにしたので、或は、お受けとりにならないのでしょうか。この通信が、お目にとまつたら、ぜひぜひお便り下さいませ。

三

お年玉のかわりに、新しいお遊びを一つ。

私ね。……きつねのエリ巻もつております。

あの感触がとてもいいので、愛用しておりますが、このごろ流行りませんので、しまつておりました。でも、この間、ちよつと、いたずら気おこして、レスポスに、使つてみ



ましたの？

お分りになる。

毛皮の感触つて一種独特な官能的なものであるでしょう。

くすぐつたくて、チクチクして、それで、温かくて……そして、ベッタリと、まつわりつくように……。

可愛がつてる子に、してもらつたんだけど胸のところを、はらわれたときは思わず、「ムウ！」つて、恵子軀をくねらしてしまつたわ。まるで、その毛皮があやしいケモノのような、不思議な感動をおぼえて。……

これは、また、いままでの遊びと、全然ちがつた、感覚のお遊びです。その子にもしてあげましたら、「くすぐりたい」つて悲鳴をあげて、止めさせたわ。でも、ちゃんと、よろこんでいた証拠は見せたのよ。

熊の皮なんかだつたら、どうでしょう？ もつとすごいんじゃないかしら。モウパッサ

ンの短篇に、口ひげの男に愛撫されると女は忘れられなくなるつて云うのがあるけど、……それに似ているんじゃないでしょうか。

でも、恵子 口ひげの男なんて知らないから、生意気なことは申しません。それでも、毛皮がステキな事は事実よ。

そんなものもつている方は、お試しになつたら？

……でも病みつきになつても、恵子は知りません。

それから、名古屋のかたで、レスポスのお友達をほしがっているかたがいらつしやいます。二十七歳のかた。既婚者なのよ。でも、同性のひとと欲しいんですつて。よくばりネ。名古屋市にすむレスポスのかた、いらつしやいましたら私のもとまで、お便り下さいませ。K様とおきましよう。K様は、豊かな未亡人にあこがれていらつしやるのよ。

それからもう一人。東京の世田ヶ谷にすむ三十二歳の、これも既婚者の、Y子様。

Y子さまは、二人のお子様のお母さまなのですけど、やつぱりレスポスにあこがれて、

異性との交際よりも行きずりの女の子が示す愛撫の瞬間の姿態などを想像する方が満足なされると、切ないお手紙を下さつております。

なぐさめて上げられる都内在住のかたはいらつしやらないでしょうか。

若いひとなんか、きつと、お母さまみたいな気がして、いいことよ。

五尺一寸。十二貫ある方だそうで、お若いのかたをのぞんでいらつしやるわ。

最後に大阪のM様。文化的なお仕事をなさつていらっしゃる二十六歳の未婚のお方なの。いまおひとりアパートに住んでらつしやるの。有馬稻子さんのような、可愛い十八歳位のお友達を欲しがつていらつしやるけど。どなたか、いかにかしら。

では、今月はこれで。はじめのお便りは編集部気付で下さいませ。さようなら

愛 読 者 通 信

恵子さま 突然の御呼びかけ、御許し下さいませね。毎号毎号、誌上で御目にかかれるのを唯一のたのしみに行っている淋しい娘です。毎月、十日近くなると、どうしても落付きませんの。今月はどんな御方の御手紙を公開頂けるのか、どんな御遊びがおおしえ頂けるのか……と。

でも、ちよつと振返つて私に誰も御友達のいない事を知ると、悲しみの雲が、私の心をおおつてしまいます。一人ぼっち！ 恵子様にはそんな氣持おわかり頂けないと思いますわ、きつと。お怒りにならないで、いつもお友達や、可愛い妹が、花のようにあなたのまわりに咲いていられるんですもの。

恵子様。どうぞ私の爲に御友達をさがして下さいませ。だつて、どんな素晴らしいお遊びおしえて頂いても一人では駄目でしょう？ バレー、歌劇が大好きなんですの。可愛らしいチューリップの様なフレンドを、愛して見たいの。

(T子)



記 浪 放 繪 責 續

猿 轡 と
荒 縄 と ……

グルグル巻きにされた娘の軀は、悪人の主領の「それツ水責めにかけい」と命じる声とともに、早くも地上を離れて吊し上げられる……

長岡 變一郎
 大橋 彌生 画



(一)

大変クダクダしい語になつてしまつたが、では是から、昭和の初期頃から同十年迄位の（映画は全部無声である）間に、私のアブノーマルな嗜好が歓迎して読んだ、大衆文学読物やその挿画について——同じく映画に現れた「縛られた美女」について、些か述べてみよう。

何と言つても、先ず、私が一番好んで読んだのは、さきにもチョツピリ述べた「前田曙山」氏の作であつた。

実際——氏の作品中には、物語り主役の美女が、よく縛られる。

私の好むのは、そうした場面を現わす場合の、

氏の文章描寫にもあつた。

一寸紹介してみる。——「風にも堪えぬ処女の白絹の柔肌は、情けを知らぬ荒くれ男の爲に、韓々と、見るさえ虐らしく縛られた」——てな事になると、私は嬉しくて、胸がゾクゾクしたものだ。

それに、そこへ又、文章にマッチした、私の欲求に叶う挿画が現われたら、それこそ私は、もう堪らぬ——。

序でだから、同じく曙山氏の作「歡樂の聲」に於ける一文を紹介してみる。

「やい美代次、どうだ。手前のその綺麗な軀が、この吹つ晒しに全裸。おまけに細引が骨迄喰い込み相になつてゐるのは、いい態だ……」とまアザットこんな風であつたと、記憶している。

氏の作品で、私の読んだものは、次の通りであつた。(年代不順)

「孔雀の光」。「落花の舞」。「燃ゆる渦巻」。「巫女の法術」。「お高祖頭巾の女」。「歡樂の聲」。「春のあえぎ」等々(以上まだあつたが、貴重な資料を全部戦災で失

つた)で、これらの中には、例の私の氣に入つた挿画のあるものも、無いものもあつた。

大正年間発行の、講談倶楽部の連載物で、筑波四郎の「正伝国定忠治」中——山王民五郎の女房お波が、玉村の京蔵に誘拐され、同家の裏庭で、京蔵の弟主馬というサチストに素つ裸にされて縛り上げられ、折檻される場面は、井川洗崖画伯の筆になる、挿画があつたので、無論一も二もなく切取つて、スクラップした。——そう云えば、同じ頃の講談雑誌にも、時々本格的なサチストの登場する読物があつたと記憶している。

小島政二郎氏の「咽喉に十の字」の一場面も、然りであつた。

又、當時の面白倶楽部連載……渡辺默禪氏であつたか本田美禪氏であつたか作者については瞭然とした記憶を失つたが、(二人の中何れかには違いない)「地を飛ぶ明星」と題した読物があつて、その一場面で、お愛という女が、恋仇らしい「お比丘」という女と、その情夫の浪人で、本格的なサチストの二人の爲に、土蔵の中で、吊し責めに遭うその場面

の挿画(筆者忘却)も、私の爲には、貴重な蒐集品の一つであつた。

(二)

女が裸体で後手に縛られている場面の挿画は、現今と違つて其の時代、そう容易くは見付からなかつたし、殊に、私の好む纏の掛け方やポーズ、おまけに容貌迄氣に入つたのは一寸やそつとでは、手に入らなかつたものであつた。

紙数が無いので、アトは省略させて貰つて——映画の方に移る。

さきに述べた、前田曙山氏の作品中、燃ゆる渦巻、落花の舞、孔雀の光、等々は、何れも映画化されたので、私に取つては、こよなき幸いであつた。——美しい女優の縛られ責められる場面が、スクリーンで堪能出来る事も屢々であつて、この時代の私は、夢中になつた。そうした場面の映画が観度い爲に、時には仮病を使つたり、又、自ら発信した偽手紙に依つて、主家から暇を貰い、その映画を追っかけ廻した。——二度も三度も、同じも



のを観に行つた。——二年以前。三年以前の
ものであらうとも、事、女の責め場に関する
限り、何処迄も足を延して、探しまくつた。

後年——私は、これが崇つて、視力減退や
胃腸病に見舞われたが、何という宿命か、晩
年の現在に至つても、尙この悪趣味が止まら
ない。が、それは後の話——もう少し当時の
事を述べよう。

当時の日活映画に、沢田清が入社して、そ
の第一回の作品「お小姓組」が、千日前の常
盤座で封切られた。

この、お小姓組の、ラストシーンに近く、
櫻井京子扮する可憐娘が、辻駕籠の中に太縄
でグル／＼巻きに縛られ、猿轡を嵌められて
いたのは、大いに気に入つた。

宣伝用特写スチールと知らずに、スチール
や看板を信用して、お正月の高い入場料を拂
つて、その癖失望した事の思い出は、同じ日
活映画で、昭和五年正月封切の、大河内伝次
郎主演「旅姿上州訛」であつた。

これは、即ちかの国定忠治が、赤城山を降
りて落ち延びる途すがら、信州権堂の山形屋
藤蔵方に乗り込む、例の「山形屋の場」の映
画化であつて、スチールには、荒縄にグルグ
ル縛られた「お初」（扮するは櫻井京子）が

伏見直江扮する藤蔵女房「おちか」に、責め
られてゐる場面があり（当時の映画誌「日
活」にも出ていた）、他にもう一つ、おそら
く天井の梁から吊されてゐるのであらう：

……その梁の上に上つて、縄の結びを解いてい
る、大河内扮する忠治を、縛られたままで、
じつと下から見上げてゐる、櫻井扮するお初
の場面。及びその梁から解き離して、未だ身
は縛られたままの、お初の縄尻を取つて大河
内が敵をヘイゲイしている場面のそれと、こ
の三つの場面のスチールを見て、私はもう胸
もワクワク小躍りして、飛び込んだ。——南
森町、天満八千代座であつた。

ところが、是れがインチキの宣伝用スチー
ルであつたとみえ、実際映画に現われた、お
初の縛られ場面はホンのチョツピリ。遣り手
のお角に依つて土蔵の二階で、縛り縄を、梁に
結びつけられる、その、ものの五秒程の場面
と、後にこれを解きに來た時の両方を合せて
も、十秒とはかからぬ。それも、只縛つてあ
るという丈で、何ら責めの場面のない、全く
私にとつて此の時程、落膽した事は無かつた。
尤も、それは、正月であつた爲、大分写真
を飛ばしたのかも知れぬとも思ひ、後日他の
館で又観直したが、矢張り前と同じであつた。

(三)

俗にいう「縛り絵」も、私は随分沢山蒐め
た。

美しい女の縛られてゐる場面を、現わした
ものなら、文章、絵画、写真（映画演劇プロ
マイド）何ンでも片つ端から落丁して、スク
ラップしていつた。

文と絵をマッチさせる爲には、みすみす同
じ本を二冊も三冊も買つた。

つまり、挿画と文とが一枚の紙に背中合せ
の場合、——そうするより仕方がなかつた。

こうして、コレクションしたものの傑作を
眺めては、又しても妄想にふけていた私は
度々、視力が減退したり、胃腸障害を引き起
した事もあつたが、依然として、この奇妙な
悪癖は止まなかつた。

私は、緊縛された女の絵や写真を、縦から
横から、斜から眺めては独り悦に入るのだつ
た。

吊り下げられてゐる場面のもは頭上に高
く揚げて下から仰ぎ見るのが、好ましかつた。
映画や演劇雑誌に出てゐるものは、大抵小
さなもので……ソんなのは、拡大鏡を用いて
覗き見した。

私の慾望は、次第に度を高めていった。縛り方にも、疑念を抱き始めた。

——柔かい人間の肉体を、縄や紐で縛り上げた場合——もつと縄が皮膚に喰い込む筈だ——。もつと／＼実感のある構図が欲しい……と希つた。

現今ならば、私のこの欲求は、或は訳もなく満たされたかも知れない。が、その当時の小説読物等に挿入された絵は、大概縄目が肉体の外廻りあるいは、肉体の線すれ／＼に描かれていたもので……それにまた「被縛者の表情」にも私は度々不満を覚えた。

(四)

伊藤晴雨氏の名を、私が始めて眼に止めたのは、それは昭和五年十月号の「講談雑誌」の誌上に於てであつた。

「残虐号」——と銘打つて発行されたその誌上数頁に、氏は「責められる女——苛まれる女——」と題して、文と絵を同時に担当しておられたので、私の記憶に残っている。

然し、その時の氏の絵は、至極簡単なデッ

サン画であつたので、私の好みには、さしてマッチしなかつた。私の職業は、本誌前号に述べたそれと変る事なく——即ちこの時代には、もう徒弟奉公の年期を満了して、主家を出で、いまは一人前の洋裁師となつた身を、大阪市内の同業者の家に寄宿していた。

× × ×

大衆文学の雄「野村胡堂」氏の「銭形平次捕物帳」が、当時の文芸春秋オール読物号に連載されていた。——その初期の作品中には克く女を縛つて責める場面が現われた。

「殺された半蔵」「幽霊にされた女」「復讐鬼の妾」「大村兵庫の眼玉」「名馬罪あり」等々——これらの中では、何れも主役の美女が縛り上げられて、あるいは吊され、あるいは水責め等の折檻場面であつて、その挿画を当代挿絵画壇の「神保明世」「小田富彌」氏等が担当されていた。

この中——映画化された「復讐鬼」(の姿を省いてあつた)は、新興キネマで、嵐寛寿郎の銭形平次——縛られて吊され役を、淡路千夜子が見せて呉れた。

当時の月刊雑誌「キング」に連載された、小島政二郎氏の作「乳房祭」では「雪江」と呼ぶ純情可憐な娘が、又しても好色嗜虐な悪人に囚われて縛られ、責め苛まれる場面があり「主婦の友」でも、同氏の作「人肌観音」に於て「小雪」と呼ぶ娘を「蜘蛛六」という悪漢が責め苛んでいた。

前者の挿画を「中一彌」氏が、後者の挿画を「志村立美」氏が担当しておられたが、両者のもの共、私は大いに気に入つたので、この場合——私は文と絵をマッチさせてスクラップした。其の他にも、小島氏の作品中には本格的サチストをテーマとしたものが尠くない。——義士外伝「木村岡衛門」と題したそれは「富士」の増刊号に「読切」として掲載され、挿画を「岩田専太郎」氏が担当されていた事を憶えている。

何せ私と言うアブチストの好みが、——日本製の美女が後手に縛られている場面——というのだから、自然……目標は時代物に向けられるのである。

「角田喜久雄」氏の時代小説は題名からし



て怪奇を想わせるものが多く、読んで行くと、果せる哉——私の欣ぶ「美女緊縛の責め場面」が、随所に現われるので、いつも缺かさず読む事にしていた。——無論——物語りのある処——必ず挿画のある事を期待してである事は云う迄もない。ではその角田氏の作品の中で当時私が読破した時代小説を二、三紹介させて貰つて、話を先に進めたい。

(五)

短期間で廃刊になつたと思うが、当時の月刊雑誌で「青年」というのがあつた。——その雑誌に連載されていた「剣俠一代男」——。同じく短期で廃刊された少年雑誌「新少年連載」——「新編赤穂義士」——其の他「講談雑誌連載」——「神変八咫鳥」等々。これらの中では何れも美女が責め苛まれる（無論縛られて……）場面が、氏一流の描写に依つて現わされており、挿絵も無論入つていた。兎に角大衆小説の——それも主として時代物の中で、ホンのチョッピリでも、美女緊縛の描写を表現したものなら、絶対逃しつこは無かつた。

挿絵画壇各位の名前も、ズラリと憶えて了つて、絵を見た丈で、これは何画伯の筆か！



……という事をピタリと当てる事が出来た。画家にはそれぞれ、独得の画風のある事は当然としても、人間の縛り方や猿轡の嵌せ方迄各々違うものだナ……と、私というアブチストが、妙なところで感心したものだつた。

チョッピリ例を挙げてみる——。小田富彌氏のそれは、決して二の腕と胴（胸）を別々に、——つまり腕は腕で一応縄を巻いた後、しかる上、胸に縄を廻して縛っている。そして猿轡の嵌せ方は布切れを頸、鼻、唇と一諸に広く覆つてあるのが特色だ。

岩田専太郎氏は、あまり縄の縋目を描かないで、紐（に見える）又は扱帯で縛るのがお得意らしい。縛り方には、時々変化があるようで、前者の如く、断言的な説明は出来ない。が稀には一寸シュミーズの吊り紐を思わせる、つまり胸から肩を越して背後に縄を廻してある場合がある。（現物をすべて焼失したので、本誌に示されないのが残念）

猿轡は決して頸にかけずに、細く唇と鼻の柱がやつと隠れる程度に嵌

し、緊縛感が強い。井川洗涯、近藤紫雲、佐川珍香、鴨下晃湖、神保明世、志村立美、中一彌、小林秀恒等々其の他。当時の挿絵を担当された諸画伯の、皆それぞれに個性が「縛り」の上で見られたが、一々述べても際限がないので中略させて頂く。

諸、読者諸君は是迄をお読み下さつて――

なあんだ……別に面白くもないじゃないか。

……と欠伸をされる人もあるであろう。然し

私としてはその頃つまり現今の様に、アブだ

の、ノーマルだと、ハイカラな表現？ を

用いてアブ同好の士に呼びかけるはおろか、

何かというとすぐに「変態性」呼ばわりされ

て白眼視された戦前の話である。――そして

私はその頃から、隠れたる……この種、責め

絵の愛好家が世間には案外多いであろう事を

知っていた。果せる哉戦後のこん日言論の自

由を得て、われもわれもとアブマニアの名乗

りを上げられる人々の中に、なんと女体責め

崇拜者の多い事か。

そして私自身の心理から推し量つて、この

種アブ党は、事、女体緊縛に関する話なら、

いくらでも聴き度い……のではあるまいかと
惟う。――諸兄各位も各々体験の思い出があ
ろうではないか……。

現にかく言う私など、伊藤晴雨翁の語られ

る明治時代から大正年間の旧い話でも、いく

らでも聴きかつ読み度いのであるから……。

(翁の著名と私の無名では比較されぬが)と

は云え私は、もう少し事実を面白く描写せず

ばなるまい。

(六)

美しい女の肢体が縄や紐で緊縛されている

その姿に異常な性的魅力を多少なりとも感じ

ぬ男性は、先ずあるまい。

世には、その魅力なるものに特に激しく憧

れる者、すなわち「責め絵マニア」が可成り

多く存在する。(現実を求める者は、サヂスト

だ)――勿論私がその一人である。

ところで、この種マニアの中でも、又各自

それ／＼の好みが違つて
いる。――

或る者は、純日本風俗

でのそれを好み、或る者は洋装を好む。

縛り方、猿轡の嵌せ方にも嗜好を、各々持

っている。

私は断然「純日本風俗」が好きだ。そして、

読物に挿入された絵画の上には、どの様な縛

りの構図を欲求したか……に就ては、前号に

述べたので省略して、これから映画の上に求

め得た、私の好む「女優緊縛場面」について

述べてみよう。

時代映画の中に女優緊縛場面の現われるも

のを探求するのも、当時の私には大きな愉し

みだつた。(これも前号に述べたが)

然し、――大衆小説の映画化であり、原作

では、女が裸体にされて縛り上げられる場面

があつても、遽にこの場面の演出を、映画で

見せて呉れたものは、「皆無」であつた。

その昔――マキノ映画「浪人街」(第一話――

「美しき獲物」)のラストシーンで、当時のザ

ンプスター大林梅子が「お新」という女賊



に扮して——悪旗本連の爲に「牛裂きの私刑」に遭う場面は、前後の事情から推して、裸体にされ縛り上げられる筈を、——その時……胸から腰下迄白布でグルグル巻きに肉体を包んであり、しかも、何等自由を奪わず——つまり縛つてないのも、私には合点がゆかなかつたのを、今だに憶えている。——要するに、裸体縛りが上映出来なかつた所以であらう。

股旅物で有名な「子母沢寛氏」の原作「天狗の安」では「お八重」という女が土蔵の二階で、全裸体にされて縛り上げられ、亭主に弓の折れで、責め折檻される場面があり、当時の新興キネマで映画化されたので、この時とばかり——道頓堀弁天座に馳せつけて、私はそれを観たが——この時も、裸体縛りの場面は、スクリーンに現われなかつた。(旧いサントリー毎日に掲載された原作の挿画に「堂本

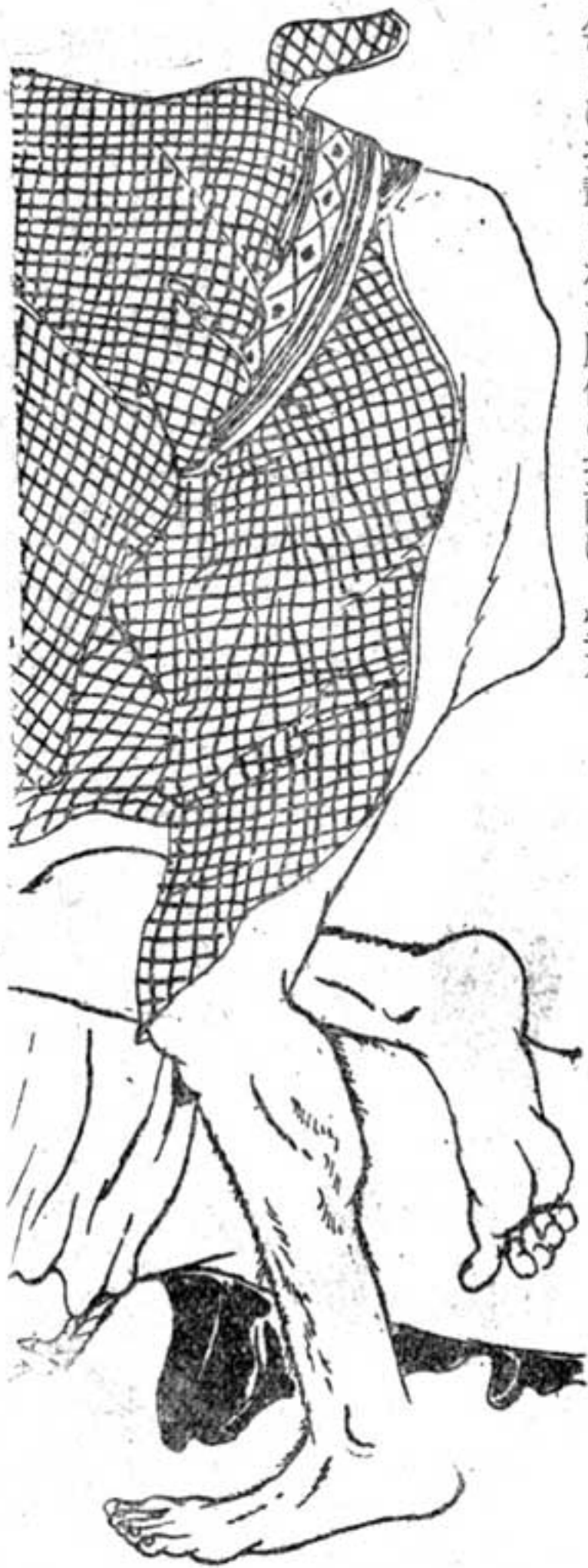
印象画」のその場面があつた)

この時、お八重を演じたのが、櫻木梅子で天狗の安には、阪妻がなつていた。

即ち土蔵の二階で、お八重が折檻されている影絵だけが映り……のち——お八重に横恋慕している——当の彼女を讒言して被虐に陥し入れた子分の一人が土蔵の二階に昇つて来るのへ、櫻木扮するお八重が、「見ちやいけない! 見ちやいけない!」と叫ぶところがあつただけ。(無声だから、弁士が喋つた)

以上、くどく説明しては、是又際限がないのでこの位にするが、読者の中で、万——映画で、女優を裸体にして縛つた場面のあるものを、御覧になつた方があれば、御教示頂き度い。(但し本邦映画に限る)

(七)



映画で、女の縛られる場合。——縛りの「道程?」というものを、余り見せないようだ。——つまりこうだ。——

今まさに縛るゾ——と見せた瞬間、画面は一度カットする。——再び現われた画面ではもう完全に縛り上げて了つてゐる。

私が最も好むのは、——つまりこのカットなしで、縛りの道程が観たいのだつた。

では、その様な場面が、果してどの映画にあつたかを述べよう。——

私がこれから述べる、過去に観た三つの時代映画は即ちこの縛りの道程の見られたものであり——同時に、女優の容貌及び縄のかけ具合共総て最も当時の私の慾望を満たしてくれたものなので、それを無声、トーキー、サウンド、の順に紹介してみることにした、昭和三年の夏——新世界、日本倶楽部でみた松竹映画「凡生奈落」——がその最初の無声に該当する。

この映画の、ラストに近いシーンで、当時のピカ一女優「森静子」扮する可憐娘は、悪人輩の秘密を嗅ぎ知つたとて、彼等の爲に井戸に吊される。

この映画は、私が未だ、責め絵を愛好し出して間のない頃の、傑作であつたが、最も素



晴しいと思つたものであつたので、一寸その場面を紹介してみる事にしよう……。

既に猿轡を嵌された娘は、支那人を混えた荒くれ男達の爲に、両腕を背後に捻じ上げられつつ、庭の車井戸の傍まで引き立てられて

来る。——一人の男が素早く井戸綱の先に付いた釣瓶を外すと、忽ち寄つて集つてその太綱で娘の軀を雁字搦目に縛り上げる。——グルグル巻きにされた娘の軀は、悪人の主領の「それツ水責めにかけい」と命じる声とともに

に、早くも地上を離れて吊し上げられる。……そして今、正に娘の軀が井戸に下らんとする間一髪——市川侍之助扮する夜鳥仙太が、娘を救いに現われて、小気味よい啖呵を切り、画面はそれから一大乱闘のシーンを展開した。

(八)

第二は、トーキー物のお約束であつた。トーキー映画では、ずっと後年に飛んで昭和十年の(頃と記憶)これも松竹作品「次郎吉格子」を挙げよう。

この映画は、大衆文壇「吉川英治」氏の原作で、鼠小僧を、高田浩吉——お仙を、飯塚敏子が演じていたが、お仙即ち飯塚の縛られる場面には、次郎吉は関係なく、当時の悪役、志賀靖郎扮する児雷也床の仁吉とお仙とが、その場面を展開して見せた。

これも、どの様なところが気に入ったか……一寸述べてみる。

仁吉との悪縁を切るべく、次郎吉に貰った金を持つて、お仙は兎也床を訪れる。

二階で仁吉にそれを渡して縁切りを宣言しお仙は帰ろうとする。

仁吉はその金の封印を見て、猛然お仙に飛びかかる。

儲——ここからが問題の「縛り」である。

仁吉は用簞笥の上の縄を手にとり取つて、

「やいッお仙——待てッ」と叫ぶ。そして——

「何さ？……金さえ渡したら、もう用事はない筈じゃないか……」と言いつつサッサと引

揚げようとするお仙の袴頭を、力任せに引き

戻すように、その場へ取つて押えつける。

「何をすんのサ——」と叫んで身悶えるお仙

の両手は、早くも背後に捻じ上げられて、そ

の手首には縄が掛つたようだ。——

「何をすんのサ！ 解いとくれよ、解いとく

れよ！」と更に絶叫するのを「嘘しいッ……

この阿女ッ」とばかり、仁吉はお仙の胸をグ

ルグル蹴縄で巻き絞めて、見る／＼緊縛して

了う。更に古手拭を取り出して、絶叫するお

仙の口に手荒く猿轡を嵌せ、グッと力を入れ

て手拭を結ぶその時の所作のよさ。——お仙

に紛した「飯塚敏子」の表情も又、私の最も好むところであつた。最後に紹介するサウンドものとしては、極東キネマの「怪人金仮面」である。

この映画での縛られ役は、当時極東でのピカ一女優——「小浜美代子」であつた。私は先に——女優が裸体で縛られた場面の映画は「皆無」だと言つたが、この「怪人金仮面」には、始めてそれが見られたようである。（とは又頼りない話だが——あるいは真の裸体でなく肉襦袢を着ていたのかも知れないので）

(九)

平家の落武者父娘が、隠トク埋蔵金の在処を知っている。

然しその埋蔵場所は、娘の背中に白粉彫の地図となつて隠されてある。悪人の一味が、

父娘を捕えて、埋蔵金の在処を白状せよと拷問する。——中略——

それは少し上目から見下した角度の、上半

身裸体だつた。

パツと眼に映じた、クローズアップの画面

は……ホンの数秒の間にカットされたが、こ

の時程私は昂奮したことはなかつた。

つまり悪人が、娘の背中に埋蔵金の在処が、

愛読者通信

私は十四五歳の頃、フットした事よりマゾの傾向に落入り、一人で色々工夫して満足して来ましたが、異性を対象として見る頃になると、次第に物たりなさや美しい女性により責めてもらいたいと云ふ気持と共に、サデの心も増して来ました。

しかし相手を求められぬ苦しさは如何ともしがたく、内気な性質のためか日夜悩んで居ります。

私はキャバレーのボーイをした経験と、現在外人クラブで働いている関係上、異性との接触が激しく、女給さんから可愛がられ、女性に対しては御期待に沿えるものと自負致して居る二十歳の青年です。（東京・TU生）

何等かの印によつて隠されているとは感付いているのだが、真逆白粉彫にしてあると迄は知らぬので、——それで上半身裸体にして娘を拷問しているところである。

市川左正扮する癡狂な顔をした悪人の首領が、太い丸太棒で、半裸体にして縛り上げた小浜美代子扮する娘を折檻する。叩かれる——

娘の軀は、前後左右に身をくねらして……その苦痛の表現たるや、全く私には堪えられぬ魅力だった。(中略)

父娘がどうしても白粉彫の事を白状せぬので、最後に裏山の断崖から、吊し切りにする事になる。

縛った儘の父娘を裸馬に乗せて、目的地に到着すると、断崖の上で娘の軀(のみ映る)を更に太縄でグルグル縛り上げるところを見せてくれたので、私のアブ的欲望は、この映画にも又、前記の二映画に劣らぬ満足を感じた。従つてここに紹介してみた。

以上、三つの時代映画は、何れ劣らず私の欲望を満たして呉れた、傑作中の傑作で、私は現在四十余歳の今日までも、なろう事なら今一度観られぬものと願つて止まぬのである。

私は、永々と読者諸兄を退屈させた様だ。

然し、これも私の過去に於ける、アブ行状告白の一端にしか他ならない。

私という人間の、真に諸兄に告白したいアブの行状記は、寧ろこれからが、その本体と

も云う可きであり、——(といつて無論今迄述べたのも、私にとつては、貴重な体験談には違いないが)兎もあれ、効能書はアトにして、稿を進める事こそ肝腎だ——。

(十)

私は不図した動機から「責め絵」に魅せられて、爾来——久しい間、それに凝つていた。

同時にその不可解な自己の欲望に対する「疑念」を、性医学の上に求めて「了解」したいと願つていた。——即ち、アブとノーマルとは如何なる観点に依つて、岐れるかを……

かくして知らず知らずの裡に(責めの文章も期待して)読破したのが、田中春涯著「愛と残酷」沢田順次郎著「変態性医学講話」——

高田義一郎著「変態性心理」ハヴェロックエリス著「性の心理」クラフトエービンク著——「変態性慾の研究」フロイド著「精神分析学」等々の書物であつた。

伊藤晴雨氏に対する認識は、案外遅れて、昭和十年に、洋綴り本——「好色風俗史講座」——(第三巻)を、道頓堀「天中本店」で入

手して、その中での「変態蒐癖、人倫の部」に於て、氏の研究される「女を縛る」即ち「責め」という言葉の意味を悟つた。

私は——正直に言つて図太くなつたのである。——つまり、物識りになつたという己惚れが、却つて自己を益々アブの泥沼に沈溺せしめたのであろう。

既にして、私は、責め絵を蒐める丈ではなくなつていた。

是迄に、一度も述べなかつたが——私は、もう大分以前から、軀に白粉を塗る事に、性的快感を覚えて、それを実行していた。

同時に又——砂、泥、糊の中に深く埋もれて見度い欲求にも馳られるのだつた。

読物、絵画、映画の上に現われる「責めの構図」に「疑念」を抱く当然の結果? とし

て遂に私は、「女体緊縛の実現」を思い立ち、それを——最も手近かな方法として、飛田遊廓の娼妓をモデルとして実行してみた。

その体験記も、追々読者の前に発表する積りであり、次回よりは愈々、アブ党諸兄をアツと驚かす奇怪な体験告白を御約束しよう。



風俗草紙最近號主要目次

★七月號

責められる女三態	喜多玲子
男色喫茶店	かびやかずひこ
私が拷問した女	根津明治
新しい責め古い責め	上田青柿郎
鞭の家	須川夏枝
うゝるにんぐの嘆き	眞下光二
嗜虐放浪記	天野鐵治
恍惚の白鳥	鳥羽瑛子
秘色大坂城繪卷	岩堀光
悦虐の部屋	喜多玲子
レスボス通信	園村恵子
そとみあ通信	藤井晃
★八月號	
妖蟲圖	喜多玲子
いけにえ二題	北原環
ぐろてすく藝談	正岡容
少年監獄	安野洋治
男色管倉	松尾亮
責められる女の表情	伊藤晴雨
やわ肌を責めて	喜多玲子
木馬責め滑車責め	上田青柿郎

女切支丹拷問秘史

私が責めた六人の女

共同便所の秘密

そとみあ通信

レスボス通信

まにや地獄

★九月號

ジャック・ナイフ

縛り繪・六景

縛り眞・兇行現場寫眞

女體の縛り方十五種

ぐろてすく藝談

歪んだ閨房

凌辱開花

隠花植物

男色アパート

悦虐の泥沼

刑事部屋の拷問

搾り責め臀部打ち

俺が縛った女

汚辱の令嬢

★十月號

深田徹

林譲介

宗方綾子

藤井晃

園村恵子

日夏由紀夫

★北原環

喜多玲子

伊藤晴雨

正岡容

武野藤介

日夏由紀夫

相磯武雄

志摩雪夫

喜多玲子

三谷祥介

大槻久良二

増富次平

金澤樹美子

★

あなぐら

悶える女三態

責められる肌

ぐろてすく藝談

奴隷祭

女はこう縛られたら抵抗力を失う

新しいスタイルの責め

責めにおける各種の小道具細谷満佐子

馬をみる夫人

歪んだ女

そとみあ放浪記

臀部狂崇症

甘美なる糞尿

★十一月號

美しくい獲物

翻ぶられるやわ肌

縄と刺青

女装男

夢

奴隷祭

秘密な淫蕩

喜多玲子

中川彩子

特寫々眞

正岡容

三宅一郎

伊藤晴雨

喜多玲子

日夏由紀夫

鳥羽瑛子

澁川徹夫

油井啓二

菅芳一郎

北原環

本誌特寫々眞

喜多玲子

日夏由紀夫

松井籟子

三宅一郎

赤澤澄子

執念日記	草葉容子
畜類人間	宮内二三夫
裸になりたがる淑女	武野藤介
浪花節と血	正岡容
レスボス通信	園村恵子
そとみあ通信	藤井晃
★十二月號★	
力盡きた女	中川彩子畫
犠牲六態	喜多玲子畫
凌辱の構圖	本誌特寫々眞
縛る快感・縛られる快感	高橋鐵
汚物狂癡症の性慾	坂ノ上言夫
男色は治癒出来るか	鹿火屋一彦
どんな男がマゾヒストか	西島實
臀部マニヤ	鞭岡麻冬
そとみあ大座談會	司會 鹿火屋一彦
木馬責め研究記	島崎哲
落語糞尿譚	正岡容
群狼	佐々木恭
催情指療師	日夏由紀夫
★一月號★	

雪責め(五色刷)	喜多玲子畫
屈伏の涙	中川彩子畫
蛇	北原環畫
變態臀打ち大畫集	編集部編
華麗な無慘繪	本誌特寫々眞
まにや地獄・視姦の部屋	日夏由紀夫
臀部マニヤ「白い祭壇」	鞭岡麻冬
便所マニヤ	島田政一
浣腸器に憑かれた男	久利須照雄
マゾ使徒行傳	坂ノ上言夫
奇態同性愛譚	高橋鐵
吊り責めさまたま	伊藤晴雨
淫・男色喫茶店	鹿火屋一彦
淫雨熄まず(アブ官能小説)	松井籟子
不具の妖精	香山滋
敗走會津城	岩堀光
血みどろの薔薇	松戸淳譯
そとみあ通信	藤井晃
尾行日記	相良三郎
強姦願望	瀬木慧子
處女をいたぶる	鬼頭浩一郎

醒まされたマゾ	鬼山絢策
姦樂病院	佐々木恭
☆新年號に限り特別價格 百二十圓	
★二月號★(品切)	
美しき犬(五色刷)	中川彩子畫
姫君受縛	本誌特寫々眞
悦虐操り責め	喜多玲子畫
新連載アブ・官能小説	
蠱妖の虹	龍膽寺雄
アマゾンの牝豹	鬼山絢策
淫雨熄まず	松井籟子
同性愛變癡癡物症	高橋鐵
續・処女をいたぶる	鬼頭浩一郎
翻譯變態小説	デヴィラ作
奇妙な情熱	三宅一郎譯
汚された白鳥	日夏由紀夫
乳房マニヤ	霜川穂一
腹なぶり	竹内圭一郎
臀部聖夜	鞭岡麻冬
サデツク時代小説	
鏡妖傳	島本春雄

東京都千代田區神田遠樂町一ノ三 振替東京二四二五一番 電話(25)五九八二
 ★その他華麗悦虐讀物満載! 御入手洩れの方は直接本社へ!

株式會社

日本特集出版社

各號千共 定價百圓



影のない足音

いつものように、勝也は妻をブラジャーとパンティだけの姿にした。ブラジャーをつけてやすむ習慣は、澤子にはなかったのだが、勝也がそれを強いたのだ。そして、さもいとおしいもののように、妻の全身を凝視しては飽きなかった。これは毎夜のことだった。

そんな夫の癖を、澤子は「おかしい人……」

ア
ストオリー

痴
人
群
像

板のような胸にブラジャーをつけ、毛脛の足にパンティをはいた夫は、女のように膝をくねらせて、ニタニタと笑み崩れている。その時、例の足音がひそかに廊下を踏んでくる。若夫婦の寢室を覗く窺視者が、今夜もまた……

比企 狂一郎

と思いはしたが、別段深くは気にもとめなかった。結婚後、まだ日の浅い新妻は、それを夫の愛情の現われだと受取っていたのだ。

しかし、勝也はそうして、毎夜澤子の下着姿を鑑賞はしたが、一しきり狂ったように接吻したりすると、彼女の胸に手をおいて、そのまゝ疲れきつたように眠りにおちてしまう。それ以上の夫婦らしい営みにうつるのは一月のうち、ホンの数えるほどでしかない。

このことについては、処女で嫁いで来た新妻の澤子にとつても、漠然とながら不満らしい氣持が、ないではなかった。夫の勝也が、世間の新婚の夫に比べて、淡泊すぎるのではないか、と、思うこともあった。と、云つてそんなら、どの程度なら、世間並なのか、彼

女には判る筈もないのだ。

まして、そのような事柄は、他人に向つて質すわけにもいかないのだから、そんな不満めいた氣持がかすめる度に、澤子は自分でも顔が赤らむような、恥かしさを覚えた。正確には、不満と云うよりは、むしろ、淋しさと云つた方が近いのかもしれない。

今夜は、勝也がいつもの下着鑑賞から、珍しく彼女の肩にソツと手を掛けて来た。

澤子は閉じていた瞳をふっと見ひらいた。それから息をつめて、聞き耳を立てる表情になった。ヒタ、ヒタと、かすかながら、右手の廊下に、足音らしいものを聞いたのである。

たしかに、足音に違いない。澤子は改めて

ドキリと胸を衝かれた。勝也は何も気がつかぬらしい。物音は消えたが、なんとも知れぬ黒い影が、ひっそりとこの座敷をうかゞつてゐるような気配が感じられて、澤子はおびえた。わずかに、障子一重の廊下と座敷である。しかも、この部屋のスタンドは、勝也の主張で、毎夜眠りにつくまでは消されずにとぼつてゐる――。

夫に声をかけようか、とも思つたが、さすがにそれは憚られた。實は、こんな時刻にあの足音と、なんともしれぬものの気配を聞くのは、今夜だけのことではないのだ。二、三日前の夜も聞いた。ひよつとしたら、昨夜もそうだったのかもしれない……。

「誰か、この部屋を覗いてゐるのだろうか……」

そう思うと、ゾツとして、澤子は総毛立つてくるのだ。

こんな夜更けに、若夫婦の寢室を覗くと云うのは、たゞごとではなかつた。だから、おびえながらも頬は赤らんで、胸が早鐘をづくように乱れてくる。再び、しつかりと瞳を閉

じたけれど、彼女の脳裡には、今こうしてゐる、夫と自分との姿態が鮮かに浮かんで、恥しさに身震いした。

スタンドを消すと、勝也はすぐ眠りについて様子だつた。だが、澤子にはねむれよう筈がなかつた。寢巻の衿をかき合せながら、彼女はなにかを期待するように、闇の中で耳をすませた。

足音はやはり聞えた。ヒタ、ヒタ、ヒタと、今度はかすかに遠ざかつてゆく。そして、澤子は何処か遠くで、襖が閉るような音を聞いた、思つた。

気のせいではない、やはり「誰か」なのだ。そしてこの家には、彼女たち夫婦の外には、姑のいくと、義姉の貞枝がいるだけだつた。

「そんな馬鹿なことが……」

と、打消しながらも、疑惑で胸が押つぶされるのだ。

一家揃つての朝食の膳に向つても、あの足音の主が、この姑か、或は義姉かもしれないのだ――と、思うと、向い合つてゐるのが、居たゝまれなくなつてくる。

思いあまつて、勝也に訴えても見たが、彼の返事は案外無神経なものだつた。

「澤子の気のせいだろう。そんなことがある筈はないからね」

夫にそう突き離されて見ると、澤子は自分の耳を疑つても見た。しかし、例の忍び足の音は、毎夜必ず彼女たちの寢室を訪れてくるのだ。

いくや貞枝の顔色を、ひそかにうかゞつて見ることもあつたが、晝間は二人とも、少しも変つた様子はない。五十を過ぎたばかりのいくは、品のいゝ姑ぶりだつた。それに三十才でまだ未婚の貞枝は冷めたい性質で、義妹の澤子にもオールドミスらしい意地悪さでことごとくに辛い仕打ちはしたけれど、あんな破廉恥な窃視などを犯す、人柄とも思われなかつた。

もとゝこの石塚家は古い家柄で、いくや貞枝にはそれが何よりの誇りだつた。だから当主の勝也よりも、二人の女たちの方が、毎日の生活態度にも、そんな格式と品位を固執してゐるくらいだつた。



不眠の夜がつゞいて、滯子はひどく寝れて見えた。

コレクション

窓を明けると、手の届く処にビッシリ蕾をつけた緋桃が枝を張っている。夜来の雨があがつて、早春らしい、気持のいい朝だった。滯子は夫の机にゆつくりハタキをかけていた。几帳面な勝也の性格をそのまゝに、書齋はキチンと片づいている。だが、滯子は新妻らしい愛情と細心さで、丁寧に掃除をつづけた。

大きな机の横は一間の出窓になつて、窓の下は全部ガツチリした黒檀の整理戸棚がハメこみになつている。この前に来ると、滯子はこの開き戸にソツと手をかけて見た。

やはりキツチリと鍵がかけられていて、戸はミシリともしない。滯子はなんとなく溜息をつきながら、よく艶の出たこの戸棚を眺めた。今日ばかりではない、この戸棚はまるで彼女を拒むように、何時も嚴重に鍵がかけられてあるのだ。

だから滯子はこの戸棚の奥に、何が藏されているのか知らない。何時だったか、何気な

く勝也に尋ねたことがあつた。「大きなお戸棚ね、なにがしまつてありますの？」

だが、夫は狼狽したようにチラリと滯子を見た。



返事はなかつた。それまで気嫌よく喋っていた勝也が、急に不気嫌に黙りこんでしまったのである。その時の二人の間の空気は、おかしいものだった。滯子是不審でならなかつたが、あま

り取りつく島もない夫の様子に、押して問ひ質すのが、なんとなく憚られるのだ。

それ以来、この戸棚のことは、滯子にとつては一つのタブーとなつていた。そして、何時この書齋に入つて見ても、嚴重に鍵がかけられているのだ。

何時もは忘れていたのだが、見ると、滯子には不思議でならない。夫と妻との間で、そんなに秘密にしなければならぬのは一体何故だろう。夫はどうして、こんな水臭いかくし立てをするのだろうか。

考えれば考えるほど、疑惑がこみあげてくる。それに、水臭いと云えば、もう一つ気になることがあつた。

勝也は就寝前の二時間ばかり、必ず一人で書齋にこもる。

「少し、調べものがあるから……」

と、云うのだが、それが毎夜のことだった。しかもその間、書齋のドアにも鍵がかゝつていて、誰一人よせつけないのだ。

滯子は始め、会社の仕事だろうと、簡単に考えていたが、それにしては、妻もよせつけぬのはおかしい。ドアに耳をつけても、コトリとも物音はしないのだ。

滯子は戸棚の前に立つて、何時かそんな勝

也の不審な行動と、その戸棚とを結びつけて考えていた。この戸棚の中にある物を確かめれば、夫の謎めいた行動も氷解するに違いない——。そう思うと、今日はどうしても、この鍵をあけて見ようと、云う気持になつたのだ。

夫は夕方まで帰らないし、姑は墓参に出かけた。何時も意地悪な眼付で、濤子を監視するような態度に出る義姉の貞枝も、どうやら散歩にでも出たらしく姿が見えない。

そう思いつくと、濤子は躍起になつて、鍵を捜し始めた。夫の身の廻りの世話は朝夕しているから、勝也が鍵束を身につけていないことは判つていた。それなら鍵は、必ずこの部屋の中にある筈だつた。

机の抽出は云うに及ばず、書類籠、硯箱の中、書棚、ケース、煙草の空罐の底まで調べたが、鍵はなかつた。濤子はグッタリと椅子によりかゝつて、考えこんでしまった。浅間しいと思ひながら、椅子のクッションの下から、状態しの中、壁にかゝつた絵の後まで調べても、みつからないのだ。

鍵がないとなると、一そう戸棚の秘密が見たいのだ。濤子はもう一度机の前に立つたが腹立たしくなつて、ハタキで小さな木彫の兎の置物を軽く打つた。卯年生れの勝也がマスコットにしている兎だつた。

だがその時、まるで天の啓示のように、ある考えが濤子の頭をかすめた。かるくねじるとその兎は動き、その腹の下になつていた部分の臺のところが凹んでいる。銀色の鍵が、その凹部にキツチリ納まつていたのだ。

鍵をさしこむ時、濤子の手はガチ／＼と震えた。何とも知れぬ怖れと期待で、息苦しいまでに胸騒ぎがする。カチリと、確かな手應えがして、その戸が明いた。

濤子は思わず眼をみはつた。戸棚は三段になつていて、ギツチリと何か白っぽいものが並べてある。淡い色物もあつた。おそろ／＼手にとつて見て、濤子は自分の眼を疑つた。

「ブラジャー！」

それは確かにブラジャーに違ひなかつた。夏物と見えて、乳房が当る部分には、凝つたチュールが入つていて、如何にも女性が肌に

つけるものらしく、繊細に美しい。濤子は狐につまされたような思いで、次々に手にとつて眺めた。

レースの、サテンの、刺繍入りの、そして白、ピンク、コバルト、さまざまのブラジャーが、さも大切そうにギツチリと並べられている。

だが、戸棚の二段目の品物は尙更意外だつた。其処には幾十とも知れないパンティが、やはりズラリと整理されてあつたのだ。彼女が思わず手にとつた一枚のパンティには、丁度真中にあたる部分に、真赤なバラの花が一輪、縫いとられてあつた。

濤子は呆然とつゝ立つた。その足元にそのなまめかしいパンティが落ちた。三段目にはこれもさまざまのストッキングが、処狭いばかりに並べられている。ブラジャー。パンティ。ストッキング。つまり女性の肌に触れるものは、全部揃つてゐるのだ。

これではまるで、女物洋品店のショウウィンドウではないか……。しかもどんな洋品店でも、これほどの種類と品類を揃えている店は



あるまいと、澤子には思われた。
とにかく、男性の書齋に秘蔵されるべき品物ではない。しかも、これほど嚴重に鍵を下して……。

無意識に戸棚をかき廻しているうちに、彼女は見覚えのあるパンティを見出して、アツと声をあげた。それは両脇にレースが入ったパンティで、たしかに彼女自身のものに違いない。もう大分以前に、何時の間にか彼女の簞笥から失くなって、ずい分搜した記憶があったのだ。

それではこの私のパンティは、夫が持出したのだらうか？　そして、この沢山のいまわしい蒐集品も……。
そう思うと、澤子はゾツと背筋が氷るような、寒気を感じた。

「フ、フ、フ、澤子さん、戸棚の鍵を無断で明けたのね」

ギョツとして振りかえると、地味な大島の袴をキチンと着た貞枝が、何時の間にか後に立っていた。

「どう、驚いた？　勝也はあなたのような美しい人より、そんなブラジャーやパンティの方が好きなのよ」

「お、お姉様……」

澤子は机につかまりながら、それでも必死に貞枝に問いかけた。

「勝也さんは、ど、どうしてこんなものを……」

「フ、フ、フ、まだ判らないの。勝也は肌膚フェティストなのよ。ずっと以前からのね。女

の肉体よりも、女が身に付ける下着類の方がずっと勝也を夢中にさせるんです。だから、結婚したのだから、あなたを愛しているからじゃない、たゞ世間態をつくらう爲なんです。勝也はこの書齋にこもつて、一人でこの蒐集品を眺めてる時が、一番仕合わせなのだから……」

澤子は貞枝の表情と、このおびたゞしいコレクションを見比べた。

なんと云うことだろう、夫はいまわしいアブマニヤだったのだ――。夜の床の中で、勝也の挙動にも、今になつて、思い当ることばかりだった。

打ちひしがれたように、顔を蔽つた若妻をひやゝかに見て、貞枝は又笑つた。

「フフ、フ、澤子さん、びつくりして？　ずい分沢山のコレクションでしょう？　これ、一体誰が集めたと思う？」

「……………」

「勝也じゃないわ。あの人は内気だからブラジャー一枚買えやしないもの。みんな私が集めてやつたのよ。勝也が喜ぶから……。こんな下着類を集めてさえやれば、勝也は決して外の女などに、眼もくれやしなかつたわ」



「……………」

「勝也は、私のたつた一人の弟よ。他人の女なんか、本当の姉弟愛なんて判りやしないわ。今だつて、弟は、決して本当にあなを愛してはいない筈だわ！ 勝也が愛してるのは、このコレクションだけなのよ！」

勝ち誇つたような貞枝の言葉の前に、滯子は声もなく肩を震わせているばかりだつた。

フエティストの妻

その夜書齋から、激しく自分呼び立てる夫の声を聞くと、滯子は追いつめられたように、みじめな表情になつた。

ドアを明けると、部屋の真中に、勝也が仁王立ちになつてゐる。眼を血走らせて、穏やかな何時もの彼とは、別人のように亢奮しているのだ。

「滯子！ 君はこの戸棚の中を見たね？ え、



見たらどう？ 誰か、確かにこの戸棚を開けたに違いないんだ。僕にはちやんと判る。え、君が開けたのだらう！」

それがあまり激しい見幕だつたから、滯子はあつけにとられて、夫を見上げた。

勝也は狂人のように部屋中を歩き廻つた。

そして、恐しい形相で滯子を睨みつけては、口汚い罵詔雑言を浴びせかける。

秘密のコレクションに、自分以外の者が手を触れたことが、いかにも我慢ならぬらしく握りしめた両手が、オコリのように震えてい

る。滯子はそんなに常軌を逸した夫の浅間しさに、胸をふさがれていた。

罵詔雑言のだけ罵詔雑言すると、勝也はグツタリと椅子に腰を下して、頭をかゝえこんだ。

「滯子、驚いたらどう、僕を軽蔑してくれ。笑つてくれ。僕は気狂いなんだ……だけど、自分でもどうにもならないんだ」

髪の毛をかきむしりながら、血を吐くように告白する夫の姿を見てみると、滯子の瞳には涙があふれて来た。

結婚後半年の月日が、滯子に抜きさしならぬ勝也への愛情を植えつけていたのだ。

それからの滯子の生活は、急速に歪められていつた。妻への秘密がなくなつたためか、勝也のフエティズムは、ますます激しさの度を加えてゆくようだつた。

下着姿を鑑賞するあの沢山のコレクションを寝室に持ち込んで、その中の一つ／＼を選んで、滯子にそれをつけることを命じるのだ。



ストッキングとコルセットと、ブラジャー。又はブラジャーとパンティ。贅沢に美しいそれ等の品々を、勝也は無理に濤子の躰につけさせる。その中には新品もあつたし、又明らかに誰かゞ使用したと思われる、古い品もあつた。貞枝がそんな品々を、どんな方法で入手したかは判らなかつたが、濤子はそんな誰とも知れぬ何処かの女性が使用した、パンティやブラジャーをつけることに、身震いするような嫌悪を覚えた。

その上、そんな自分の姿に、恍惚として見惚れる夫の表情を見るのが、たまらなく辛かつた。そんな下着類を借りなければ、夫から愛せられない自分が、情けなかつたのかもしれない。

しかし、濤子がそれを拒むと、晝間はあんなに穩厚な夫が、別人のように猛り狂うのだ。怒つたり哀願したり、常人にはない執拗さで、それを迫つた。

情ないと思ひながら、濤子は夜毎に強請されて他人のパンティをつける。踊子が用いるような、長いストッキングをはく。或夜はそんな恰好のまゝ、床の上に泣きくずれることもあつた。

勝也は容赦なくそんな妻を引立て、部屋

中を歩かせる。足をあげたり、胸をそらさせたり、いろ／＼に彼の好みのポーズを注文するのだ。そんな時、勝也の瞳はキラ／＼と輝いて、一切を忘れてその異常な亢奮に酔ひ痴れるらしかつた。

彼は妻を愛しているのではなく、彼の情熱の対象は、其等の品物がかもし出す、狂つた幻想の中にあつたのだ。

貞枝が断言したことは事實だつた。濤子は泣くにも泣かれぬみじめな氣持で、おかしな自分の位置を嘲笑した。

これではまるで妻とは名のみで、まるでマネキン人形のような、哀れな存在ではないか……。こともあろうに、肌膚フェティストの夫と、そのアブマニヤの弟のために、ブラジャーやパンティを蒐集して与える義姉。

貞枝は今も何処からともなく、豪華な下着類を集めては、勝也に与えているようだつた。そして、いつも、冷笑するような意地悪な視線を、濤子から離さない。濤子はこんな夫と、義姉との間に挟まれて、息づまるような日夜を過しているのだ。

例の、二人の寢室をうかう足音は、毎夜必ず訪れてくる。ヒタ、ヒタと廊下を踏んで近づいては、寢室のスタンドが消えるまで、

障子に張りつくようにひつそりとうずくまっていたらしい。

今は濤子も、その足音の主が、貞枝であることを疑わなかつた。むしろ、そのかすかな足音が訪れない夜は、ものたりないような氣持にさえなつていた。

不可解な心理の推移だつた。

思わぬ人影

「ホラ、どうだ、このブラジャーの美しいこと。全部チュールで出来ている。パリ製だ。フランスの貴婦人が、特別の夜会に出かける時にはめるのだからね。模造ダイヤがちりばめてある。ホラ、キラ／＼光るだろう、え、どうだ？」

寢室の床の横に、濤子の大きな姿見が持ち出されている。

その前で裸体に、そのきらびやかなブラジャーだけを身につけた勝也が立つていた。ブラジャーをつけた男……。それはまったく奇妙な恰好だつた。だが勝也は、姿見に寫る自分の姿に見惚れては、何か憑かれたようにブツ／＼呟いている。

「まったく、素晴らしい……。あちらの貴婦人は、こんな豪華なブラジャーをつけるのだから、

らね。胸にびつたり、吸いつくように仕立ててある。戀人と寝る時には、これにウビガンかシャネルの香水をタッブリふくませるんだ……」

そして、彼はその軀をクネ／＼と、女のようにくねらせるのだ。その上にコルセットをつけ、ストッキングをつけると、彼はまるで自分が女になつたような、錯覚に陥入るらしかった。

「ホ、ホ、どう？ この網目のストッキングは……、ぴつたりでしょう、まるで軀がしめつけられるようだわ、フフ、まったく素晴らしいわねえ……」

髭剃り跡も青々とした三十男の、前後を忘れたそんな狂態を、澤子は冷めたい床の上に坐つて、ジツと眺めていた。

勝也の熱狂ぶりとは反対に、彼女の気持は白々と冷えこんでゆくばかりだった。

この頃では、澤子にそうした肌膚類をつけさせるだけでは刺戟が弱くなつたらしく、勝也は自分自身で、そんな女の下着を身につけるようになったのだ。

板のような胸にブラジャーをつけ、毛脛の足にパンティをはく。そんな滑稽な道化姿が勝也にとつては、無上の快感をそゝるらしいのだ。彼は澤子など眼中にない様子で、鏡の中の浅間しい自分の姿を眺めては、ニタ／＼と笑みくずれた。

今はもう本当に無きに等しい妻なのだ。澤子は夫の陶醉ぶりを眺めながら、大声で叫び出したいような衝動を、イラ／＼と押えていた。その時、澤子の尖つた神経は、例の足音がひそかに廊下を踏んでくるのを聞いた。足音と云うよりは、ほんのかすかな、人の気配なのだ。ヒタ、ヒタと近づいてくる。いつもの卑劣な窃視者が、今夜も又、この寢室を覗こうと云うのだ。

澤子はカツとなつた。勝也を愛するが故に我慢に我慢を重ねては来たけれど、もう耐えられなかつた。自分たち夫婦の生活をこんなに歪めてしまつたのはみんなあの貞枝の仕業なのだ。

それから、晝間あれほど格式ぶつて、上品にとりすましていた義姉が、夜はそんな破廉

恥な窃視者であることを、暴露して、面詰してもやりたかつた。

要するに澤子は、貞枝にあやつられている自分たちの生活に、耐えられなくなつたのだ。瞳をすえて、障子をみつめていた彼女が突然立ち上つた。よろめきながら走つた。義姉に対する憎悪で一杯だった。

障子に手をかけて、サツと開けた。同時に無言で立ち上つた人影がある。

「お、お母様?!……」

貞枝ではなかつた。其処に立っているのは寢巻姿の、姑のいくだった。

夜毎の窃視者は、もう五十を過ぎた姑だったのだ――。果然とつゝ立っている澤子を尻目に、いくは、何事もなかつたような平然とした様子で、ヒタ、ヒタと、自分の寢室に戻つてゆくのだ。

なんと云うことだろう。この一家は……澤子は冷めたい廊下に、フタ／＼と崩折れた。座敷では、この出来ごとにも気付かぬらしく、勝也が鏡に向つて、妖しい陶醉を追いつづけていた。



淫蕩刺青談

ふと着物を脱いでいる女の姿をみた時、思わずアツと聲を上げた。艶やかに光る女の肌に、大きな鯨をふりたてたカニが三匹。その凄麗な刺青は、ふしぎな昂奮をさそうのだった。

筑紫吾朗

☆

刺青と書いて、通常「いれずみ」と読んでいるが、いれずみと言うことは、厳密に言うとは、よく浴場などで見る、背中一面にある上り龍下り龍等のあの彫物のこととは異なるものである。

だが、一般的には背中や腕に彫つてある刺青を「いれずみ」と言っているが、この呼び方には各種のものがあるので、まずそれから説明を試みたい。

「刺青」「文身」「紋々」「彫物」とある呼び方は、ほりもの、の、ことを言うのであつて、これは、所謂「入墨」とは違ふのであ

る。だから刺青をしている、うるさ方などに、もし、

「いいい、ズミ、ですね」

などとお世辞のつもりで言おうものなら、とんでもないことになるかも知れない。現代のようにいろ／＼と言葉がかわつて、いれずみもほりものもないような時代になつては、とんでもないことになる率も少ないだろうが、この二つの区分は知っておく方がいい。

「刺青」「文身」「紋々」などは、背中や腕に彫つてあるあの絢爛なものを言うのであるが「入墨」とは罪人につけた印のことを言うのである。



だから、入墨者と言えば前科者のことを指し、刺青をする職入のことは「いれずみ師」とは言わないで「彫物師」或いは「文身師」と言っている。

刺青の本場は、太平洋を中心に接した国に昔から多いものとされている。起源は明らかではないが古いことではないらしい。その顕著なものは、アメリカのインディア、南洋のニュージーランド人などで、極彩色の刺青を顔に施している。

日本で顔に刺青をしていた種族は、昔は台湾の生蕃や、アイヌ族などであつたが、この顔に刺青をした娘達に逢つて話をしていると、何か生々して野蠻的な性慾（勿論



怖しさ半分)を感じたそうである。

刺青の目的については、いろいろの説があるが一般的に見て、装飾と見るのが適当であるようだ。それは寒国のように一年通

じて衣類で皮膚を覆っているところよりも大体裸に近い暖国に発達しているようであるからだ。だから、南洋・南北両米・印度ビルマ地方には、この風習が甚だ多い。ピ

ルマ人に至つては、まるで、猿又をはいたように、膝から腰にかけて、立派に彫られているものもあるようだ。

この身体に彫つてある刺青でもつとも優秀なのは日本人である。そして日本人の刺青はいろいろ研究されつくした末、芸術品の域に達したものが少くない。江戸の爛熟期に於て浮世絵

師との合作になるものや、浮世絵師くずれが針を持つようになったもの、或いは刺青師が浮世絵を習つて、それによつて彫つたもの等、この成長過程にはいろいろと話がある。何れにしても、今に名の残っている彫吉・彫宇之・彫国などは一家を爲した人達である。

刺青と言つても、下は近頃のアプレ女学生などが万年筆の先を尖らせて、恋人のイニシャルを手首などに彫るものから、上は、ぼかいなどに至る迄、種々の種類がある。

手首の文字や、腕の「清さま命」「御意見無用」などの簡単なものは、少し針のさばきを知つたものなら、出来もしようが、両腕・両腿にかけて背中一面に彫るものとなると、そう簡単なワケにはいかない。五本から十五本位迄に至る針の束を幾つも準備して、それ等によつて、筋彫・ボカシ・白粉彫等の技術をつくすわけである。

だから本当に洒落たものになると、背中一面に彫つた滝夜叉の頬が白粉彫になつていて、風呂に入つたり、全身運動をして身体に熱を持つたりすると、そのところが、ボウツと薄赤く浮き出すようになってい

のもあると言うことだ。

刺青をする場合には、通常下絵と言うものを使う。これは背中は何を彫るかと言う絵の見本である。これが決定すると、刺青師は当人の身体を清浄にさせ、針の先で、皮膚を絵どおりにはねていくわけだ。要するに皮膚の上に豫め絵を描き、その線に従つて、針の先で皮膚を突き破り、そのあとへ上質の墨（筋彫）や特殊の絵具（ボカシ等）をすりこむわけである。

この状況を谷崎潤一郎氏の「刺青」の一文を借りてみる。

——やがて、彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。若い刺青師の墨は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球珠の一滴々は、彼の命のしたたりであつた。彼は其処に我が魂の色を見た。——

彫る者も必死、彫られる若い娘も必死になつてゐる。彫られる者は、この時が一番苦痛なのである。自分から望んで彫つてもらう以上、かりにも音をあげるようなことをしては、ひとに笑われる。それ故に、こ

れを一名「我慢」とも言つたのだ。これを見ても、その痛さ加減は判らうと言うものだ。そしてこれが済むと、色あげになる。墨や朱を刺すと、その色をよく上げる爲に風呂に入るのだが、これは死にも勝るといわれている。

又谷崎氏の一文を借りてみる。

——「ああ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨て、二階へ行つて待つていてお呉れ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」娘は湯上りの体を拭いもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまま、魔されるが如くに呻いた。氣狂じみた髪が惱ましげに其の頬へ乱れた。女の背後には鏡台が立てかけてあつた。真つ白な足の裏が二つ、その面へ映つてゐる。——

全身の白い絞のような肌に波打たせ、背に刺られた蜘蛛の刺青を背負つたまま、流し板の上で苦し気に悶える娘の姿は、そのまま被虐マニヤそのものであるようだ。こうして、背の刺し跡にしみる苦痛をこらえる爲に、肩を張り、乳房をふるわせ、

腰をもだえて、背の刺青の色あげが出来ていくのである。

彫る者も、彫られる者も、こう言う環境にあるだけに、兎角すると、被虐者と加虐者の立場になることが多く、両者が自然にその立場にあつて親しみ合うことも少くない。

刺青師は針によつて、相手の皮膚を刺し破りながら恍惚となり、彫られる方は、皮膚を刺し破られ、墨や朱を入れられながら苦痛と共に歡喜の叫びをあげる。この場合男よりも、女の方にそう言う者が多いと言ふ。

★

白山に、幸龍と言う芸者が居た。幸龍は別にこれと言つてとりたてる程の美人でもなく、芸も達者な方ではない。だから俗に言うダルマ稼ぎ（かげ）専門なのである。ダルマ芸者を叩いてみたら、ころぶ／＼と音がする、と悪口を言われながらも、稼がなければならぬ身のつらさで、一生懸命に寝てころぶばかりに熱中していた。ところが、二年ばかりすると、さつぱり客が

つかなくなつた。別にこれといつていい女でもなく、床あしらいが上手というのでもない。これでは客の方があきらめるのも無理はない。

そのときに、幸龍が何かの本で読んだのが刺青のことであつた。

どうせ持ち崩した身体であつてみれば、堅気の女房になる気はない。末は野末の枯れすすきなら、今の中に勝手なことをしておきたいものだ。と少々、ヤケ気味にもなつていたとこなので、そう決心した。

そこで、つい最近腕のいい刺青師だと紹介された、彫文と言うのを思い出すと、この人に何か自分も彫つてもらおうかと考えた。

どうせ一流の芸者ではない。変つたものでも彫つて「刺青芸者」とでも名がつけば或いは、いかもの食いの客がつくかも知れない。そう思うと矢も楯もたまらずに、彫文をたずねて行つた。

昔も今も同じことで、刺青師と言う商売は絵描きや字書きのような正業ではない。だから何のだれそれ、などと表立つては名

乗れない。名人芸でも

好家が応援して家を持たしているのもあ

るが、大がいは、本職（らしいの）は他に持つていて、刺青は内密になつてい

る。彫文も御同様で、本職

は別にある。その

彫文の家を訪

れると、幸

龍は早速

自分の

身体

に刺

青をし

てくれと

頼みこんだ。

こうして半年ばか

りかかつて、腹の方へ何

か刺青をした。すっかり終る

と約束通り刺青完成記念の身体を彫文



にまかせて、置家に帰った。

その夜の客だと言う人から、筆者は話を聞いたわけだが……

いざ寝ようと言うことになつて、その客は先に床に入り、ふと着物を脱いでいる幸龍の方に眼をやると、思わずアッと声をあ



げた。驚いたことに彼女は真つ白な裸を枕電気の淡い光の中にスラリと浮かばせて、客の方に艶然たる笑いを投げているではないか。

「おい、どうしたんだい」客はケゲンな面持でそう幸龍に声を掛けが、彼女の脂肪にツヤツヤ光る腹部一面の異様な彫に、再び「アッ」と声をあげた。大きな鉄を振り立

てたカニが三四、彼女の腹にうごめていた。一匹は太腿に、一匹は腹に、一匹は乳房のあたりに。刺青のことには素人のその客にもそれはまことに見事な出来ばえであり凄艶そのものだつた。

見ている中に、彼の心の中の好奇心がム

ラ／＼とわき上つてきた。

「一寸ぐろてすくたつたね。そのカニがゴソゴソ動き出して来そうな気がして、なかなか落つけなかつた。とにかく、不思議な感じだつたよ」

彼はそう言つて笑つていた。

それから、この不思議な刺青が評判になつて、客が非常に多勢ついたと言う。聞い

た話だから、そのまま受けとつていいかどうか判らないが、兎も角芸者にカニの刺青とは、一寸奇抜な思いつきである。

そして客の方はサダイズム（お定）のスリルを心配なしに味わえると言うものなのだから、一応人気は呼んだらう。その後の

様子は不明である。

だがこう言う奇抜な刺青は、昔からも随分話に伝わっている。陰毛を剃つて、そこえ盃を彫つたとか、小坊主が背中を抱きつき、両手を腰からまわして、指先で狙っていると言うようなものもあつたと言う。

又中には、女の身体を山姥に見立てて、金時が肩から腹にぶら下つて、手をのばし

ている（水にうつる月をとる金時）などと言ふ洒落たのもあつたようだ。

男では、フランスの先に刺青をしたものもあつたと聞くが（見たことはない）これなどは、ちぢんでいるときでは駄目だろうから、さぞや苦心慘たんしたことだろう。もし現在している人が居たら一度拜見したいものである。

★

刺青も凝ると、いろ／＼のことを考えたらしく、江戸時代の芸者には、手古舞の姿そのままを彫つた人もあつたようだ。だから上半身をハリと脱ぐと、肌はそのまま手古舞姿になると言う仕掛けになつてゐる。こうなると芸術的と言うよりも、まさに仕掛けみたいなのである。

この点では外国の水夫などの刺青は、芸術味よりも野蠻的な感じが強い。胸にいろいろのいれずみ彫つて……と歌の文句にあるが、いかりなんて言う生易しいものではなくて、中には、女の性器を彫つたり交情の図を彫つたり、鬨の絵を彫つたりしているのが多いらしい。その他には花鳥風景な

どが主だが、日本人は人物がほとんどだ。そして大がいは勇ましいものが多い。

日本の刺青は庶民（特にがえん——火消人足——）の間に発達したもののよう

に、いざと言うときの目印となる刺青はしなかつた。何故ならば、バクチ打ちは御判形の裏を行く渡世人だから、自分の身体に、いざと言うときの目印となる刺青はしなかつた。だからいかにも威勢はよいが、人に平然と見せびらかす刺青をしているのは、バクチ打などではなく、鷹職やゴロツキ職人に多かつたわけである。大名で刺青を楽しんだのは（自分自身ではなく）出雲松江十八万石、出羽守齋恒と言う人でこの人はアブナ絵遊びが大好きで、硝子張りの湯桶の中へ素肌素腰の女中を入れて泳がせ、それを見ながら酒などを飲んで楽しんでゐたが、次第にそれだけではもの足りなくなり、しまいには、女中達の背中に全部草花の文身をいれさせたと言う。現在のよう

だ。美女中あまたの背中に草花を描き、それを見ながら酒を飲んだなどと言うことは大変に金のかかる変態趣味である。この刺青変態に、一つ変つた話がある。これは横浜にあつた話だが、その主人公は今立派な人の奥さんになつてゐるから、名前は仮名にしておく。玉枝（仮に）は、色白、中背の美しい娘だつたが、至つて気が強かつた。或る夏の夕方、玉枝が庭で行水を使つてゐると、その塀の外を通りかかつたのが刺青師の蝶次郎と言う男であつた。この蝶次郎は父親が刺青師であつたところから、見よう見まねですつかり覚えてしまひ、今では結構達者な腕になつてゐた。その蝶次郎が、ふと水のはねる音で、塀の節穴から庭をのぞくと、ピチツと張つた裸肌の玉枝を見てしまつた。刺青師にとつて、何よりも大切なのはこの肌である。水もしたたる美人だけでは何の価値もない。身体

の皮膚にたるみがなく、しかも指でつまめば、ピチ／＼とするような餅肌の味がなければ駄目だ。そして色は白い程よい。中々むずかしい注文なのだ。

蝶次郎が、ヒョイとのぞくと刺青にはもつとも適した肌が、湯玉をはじいて、穴から見えた。これを見てしまうと、蝶次郎もうじつとしていられない。その日のうちから、この玉枝を追いまわすようになった。そして、いろ／＼の手を使つて、やつと刺青をすることを承知させた。

「女の身体に、刺青をするなんて恥しい」と玉枝は仲々うんと言わなかったが、「誰に見せることも出来ない芸術品を、あなたの肌にうつすんです」と言つて、蝶次郎はうまいこと口説き落してしまつた。

そのとき玉枝は二十一歳、蝶次郎はもう五十に近かつた。玉枝の注文によつて、下絵は牡丹に唐獅子ときめられた。翌日から仕事にかかつた。

一週間ばかりは、玉枝はさかんに苦痛のうめきを上げていたが、やがて、蝶次郎が刺しはじめると、恍惚として身をもんで悶えるようになった。

「お師匠さん一寸待つて下さい」
幾針かすると、便所に立つていく。又幾

針かすると又立つていく。

「一体どうしたんです」

自分の方から頼んでおいて、怒ることも出来ないの、蝶次郎はやつとこのことで聞いた。

「だつて、チク／＼されると、何かとても妙な氣になつて、行きたくなつてしまうのよ。それに身体がうつとりとしてしまつてどうしてよいか判らなくなつてしまうの」うつとりとしたように言う玉枝の言葉を聞いている中に、今度は蝶次郎の方がおかしくなつてしまつた。

半べそをかい玉枝が帰つたので、蝶次郎はもう次の日は来ないだろうとあきらめていた。ところが翌日も何時もの時間になると、玉枝は元気な顔でちゃんと来た。そして手間をかけずに仕事場の真中に腹這いになつた。

照れくさいのだろう、と思つたので、蝶次郎も素知らぬ顔で仕事にかかつた。すると昨日と同じように、幾針かすると席を立つのである。身悶え、身をちぢめ、恍惚としている様子は、一針／＼刺されることを

身体全体で楽しんでいる様子なのだ。

蝶次郎は昨日の失敗を今日は繰り返すまいと、いくら玉枝が悶えても、惱ましい肉付きを見ているだけでその日の予定の仕事を終えた。

「お師匠さん、今日はどうしたの」

仕事終りとなると、今日は玉枝の方から催促した。折角の恍惚感にどうして最後のとどめをさしてくれないか、と言わんばかりである。「据え膳喰わぬは男の恥」とかで、蝶次郎は御意のままに仰せに従つた。こうして半年ばかり、やつと筋彫が済んで、これからボカシと言うところになると蝶次郎はすっかり衰弱して二三日寝たきりで死んでしまつた。

この間の様子を知っている人は、蝶次郎は筋彫りの唐獅子を背負つた、玉枝に精気を吸いとられたと笑つたが、そう言われてみるとその通りだつた。

冷酷に針をかまえて、生きた皮膚の上に思いのままに絵を彫つていく刺青師の、魂を吸いとつた娘などと言うのも、一寸珍しい存在だろう。

秘藏版 風俗草紙

★残部僅少！萬雷の絶賛と灼熱の拍手を浴びて、獵奇家に痛烈な刺戟を與えた「秘藏版風俗草紙」は、再版不可能ですから、この際入手漏れの方は至急書店又は本社へお申込を――

★内 容★

豪華口繪

(八色) 灼熱の虐なみ中川彩子畫
現代一線畫家豪華責め繪畫集
悦虐大寫真集・蛇淫百景・娘地獄繪
男性ヌード緊縛寫真集
繪物語 雪肌地獄曼陀羅

變態奇書物語……………齋藤昌三

「裸體」異常愛！……………高橋鐵

レスボス 俗 双刃の劍に血ぬる……………龍膽寺雄
嗜虐 女性傳 千姫行狀記……………藤澤衛彦

變態風俗座談會……………式場隆三郎矢野目
源一原比露志豐吉

國周ゑかく女の責場……………伊藤晴雨

嗜虐淫の手法いろいろ……………坂ノ上言夫

長篇 ダイナマイトと……………J E バタイユ原作
讀切 マドレーヌ……………松戸 淳譯

私刑と拷問と……………正岡 容	鞭打ちの歴史……………平野威馬雄	マゾ女性四つのタイプ……………日夏由起夫	性技巧としてのサジ四法……………武野藤介	レスボス・テクニク……………園村恵子	ソドミア交情の生態……………かひやかすひと	川柳變態性慾志……………原比露志	實らざる逸樂……………柴田 敏	屍姦今昔譚……………廣瀬晃一	監獄の變態性慾……………山本作馬	鞭打ち實驗記……………高野利夫	悦虐の女百態……………喜多玲子	色情犯罪に現れたサジ……………三谷祥介	沙具沙允の血……………吉田參伍	現代春本に登場する變態……………山崎和夫	横行する露出症……………中野榮三	邪淫教秘話……………堀内得郎	映畫に現れたグロテスク……………岩堀 光	女子同性愛の斷層……………堀内得郎	大惡殘虐記……………岩堀 光	嗜虐マニヤの手記(二篇)……………秋山悠介	窃視症の心理……………松井籟子	戀に灼かれて……………松井籟子	★その他、サジ・マゾ・アフの讀物記録……………記事、寫眞の多數收録……………
-----------------	------------------	----------------------	----------------------	--------------------	-----------------------	------------------	-----------------	----------------	------------------	-----------------	-----------------	---------------------	-----------------	----------------------	------------------	----------------	----------------------	-------------------	----------------	-----------------------	-----------------	-----------------	--

{ B 5 判 360頁 定價500圓 東京都千代田區神田猿樂町1の3
アート口繪 100頁 〒 50圓 株式會社 日本特集出版社
TEL (25) 5982 振替 東京 24251

読者交歓室

そとみあ通信



藤井 晃

★ 私には当年二十五才、日本舞踊の名取りで、只今その師匠をしております。幼時の環境は、祖母がやはり踊りの師匠でしたので、女ばかりの中で成長しま

した。子供の時分から、女の児のような振袖を着せられ、赤いコッポリをはいて遊びも女の児の遊びだけでした。十二才の時、家へ稽古に来る俳優（歌舞伎の）の一人がなんとなく好きでしたが、それが初恋だったようです。

中学時代は、男ばかりの中で途惑つて悲しくなつたことがたびたびありました。二年生の時、上級生の人に、やさしくしてくれる人があつて、その人を兄のように慕い、親交を結びました。小さいときから同性愛の素質にあつたのでしようが、実際にはその時初めてでした。こうして半年ほど交際していた或るとき初めてホモということを経験しましたがその気持より相手の人に強く抱きしめられた時の方が快感を感じていました。只今でもやはりそうです。

この人が海兵へ入学するまで、約二年ほど交際をつづけました。その後今日までに、二人の同性と交際しましたが、だんだん嫌いになつて、今では遠のいております。というのは、最初の人がつた恋愛技術のくせがつき、他のことはいやで堪らなくなつてしまつたのです。

完全な受身の型で愛されたいのです。ところが、相手の人が時に受身になりたい様子なので、とても私には能動的に相手することができないのです。結局ごまかしてしまいますけれど、心からはとても愛することができません。

私はどちらかというと、プラトニックなものに憧れる性質らしいです。別に深い交渉はなくとも、接吻や強く抱きしめられる方が、どれほど快感を覚えるか知れません。

ですから、好きな同性に接吻されているイメージを頭に描きながら、孤独な夜の床で転々とすることもあります。

好きなタイプは、野性的な人よりも、二十六、七才から四十才位までの、美しい容貌、男らしい瘦身の人です。そして教養のある人でないと魅力を感じません。アンチヤン型は、大嫌いです。又傾向が受動的ですから、自分より年少者には魅力も覚えません。

女性と交際したことは一度もありません。そんなことは想像をしたこともありません。女の子を教える職業であります。が、なんだかきたならしい様な気がして、手も触れません。教える都合で、よんどころなく手を握つたりすると、後ですぐ手を洗います。職業柄、女の誘惑は多いのですけれども、そういう女性は、見るのも嫌です。又、同職の同性も嫌いです。

(岡山、SR生)

答 最初にホモ交渉をもつた同性とつた恋愛法でなければ、快感を覚えぬのみか、むしろ厭らしいという点は、興味——という用語弊がありますが——ある研究題目だと思います。

最初の経験だけに、それへの愛着も深く、習慣的にもそれへの快感がスムーズに慣らされていくため、もし後の人のリードでも思わしくなかつた際は、その人の愛撫法が厭わしくなるということは、頷けるような気がします。

ともあれあなたは、自分でもいわれいてるように、肉体的な愛情よりも、精神的なそれに強く惹かれる型の人なのでしょう。

★

私は年令二十四才、身長一五二釐、体重四八瓩、背は低いですが、バランスはとれています。性格は明朗、ユーモアを好み、茶目ツ気があります。気が短かく、少々神経が細いので



すが、人には好かれるようで、まあ社交性に富んでいるとでも申しましょうか。現在勿論独身、女性に対して恋愛も性欲も感ぜず、したがって異性とは一度も交渉をもつたことはありません。理想の男性は私より年少者か同年輩位又、私と同じ位の体格の人。しかし美少年なればこのかぎりには非ずというところ

又、風呂屋で私より年下か同年輩位の人で、軀の立派な人を見るとその人が美少年でなくとも普通の容貌でさえあれば、激しい恋情に燃えます。

さて、私は、現在までに四十六人のホモの相手と恋愛交渉をもち、すべて私の

方が能動的でした。大半が相互 Orellio で、ほかは七人と Fellatio。私が相手に対して——、二人と相互 Fellatio をしました。又、五人とは接吻をしました。

ただ一回の交渉で終った人が二十九人十回位会ったのが二人います。五回以上の相手とは Fellatio。或は接吻を行つております。Fellatio および接吻は、二十才以後に知りました。

相手は八五%が私より年少者で、又、三分の二以上が、いわゆる美青年の数に入るべき人でした。これは恋の盲目からではなく、冷静に考えての上の判断です。

現在では、交際しているホモの友人は一人もありません。去る七月の或夜、上野で男娼と遊びましたが、一回の交渉だけで嫌悪を感じてしまいました。女装した男はとてもグロテスクで、美というのが感じられません。又、会社（職業、会社事務員）の仕事として、よく銀座の某キャバレーへ行きますが、そこには私の好みのナイスボーイが一人おり、彼を見るのが唯一の楽しみにしてゆくわけです。しかし、こういうときにかぎつて、平素明朗なくせに俄然内気という名の病

気におそわれ、一度も彼と語る機会なくいつもスゴスゴと帰つて来ては、悩んでいる状態です。

東京都内又は近郊の方で、私にふさわしい方と交際したいと思っています。

（東京 M・K 生）

答 ソドミアは一般に多情だといわれておりますが、その中でもあなたは、多情性の極端を現している方ではないでしょうか。

ソドミアの多情性の由因も、その人その人によつて異い、それも幾つかに大別されますが、あなたの場合は、あなたが常に美——「美青年美」ともいうべき、同性の美を求めていくことが、その大きな由因だと思います。

今、A 青年の美に陶醉し、彼とのホモの恋愛に耽溺していても、他に B 青年の美を発見すると、あなたは A を忘れて B の方にひきずられてしまう——そうした多情性なのではないでしょうか。

ソドミアの多情性については私には言うべき多くの事があり、茲には改めて一篇の稿を草したいと思ひますので、一言にしようならば、あなたはペデラストの多情性です。

あなたが、通信のおわりに示されている、

あなたと交渉をもつた相手との区々の「表」は面白く——といつては失礼かも知れませんが——拝見しました。

★

小生は本年数え年三十九才の独身の会社員にて、ウールニグ型の同性愛者です。それ故、いままで結婚したことはありません。といつて、同性との性の経験はありません。

いままで、自分のごとき性向の者は、世の中に余りいないことと思ひ、自分は不幸なる者として諦めていたものの、それだけに、反面、人知れず非常に悩んで来た者です。

「そとみあ通信欄」は思ひかけず私に勇気を與えてくれました。あなたの御高説は、毎号毎号どんなに小生を力付けて下さつて来たことでしょうか。

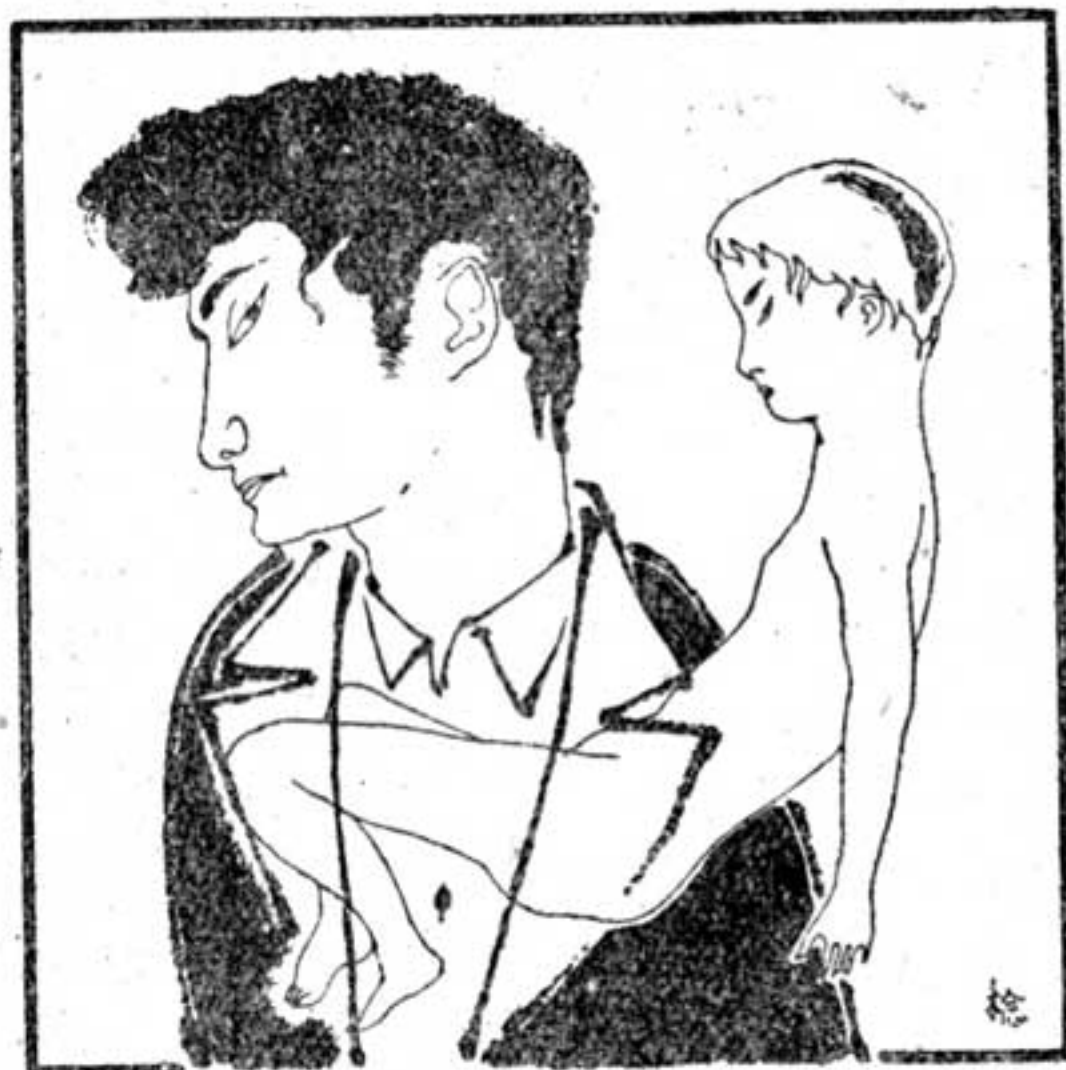
いままで自分は、この性癖のため、いかに恥しい思いに遇つて来たことでしょうか。そのために次第次第に友人を避け、世間を避け、親類を避け、兄弟姉妹を避け、親の顔を見るのすらも、心苦しく思つて来たものでした。そのような小生が

こんな告白をしているということは、とりもなおさず、あなたの御高説に深く啓蒙せられ、又あなたを深く信頼している証拠であるということを、認めていただけると思います。

回顧しますと、小生は生れつきウールニングでした。中学時代に非常にひねくれた性格となり、自暴自棄になり、中学三年ころより過度の妄想癖におちいるようになりました。勿論その際夢想の対象は男性でした。

長じて自らの倒錯性を征服しようと努力しましたが、結局征服できませんでした。やがて小生は諦めました。他の事件などもあり、人生に希望を失いました。以来虚無的で、刹那的で、張合のない生活をつづけて来ました。勿論自殺のことも考えました。

ところが、貴誌の「そとみあ通信」を読み小生の考えが変つて来ました。いままで自分が抱いていた劣等感や雲散霧消し、そのかわりに勇気が出て来ました。この通信欄に投稿しているホモの人たちは、それぞれ楽しい(ホモとしての)生活をしていることを知り、自分もその人た



ちと同化しようと思うにいたりしました。

小生は五尺三寸位、十三貫そこそこという痩せ型のためか、相手としては四十歳——六〇歳位の年配の肥満型の人を望みます。屢々会えるように、東京都内かその近接地に住む人を望んでいます。

余語ですが、現在の日本ではホモは世間的にはアブ視されていますので、われわれホモ党はどうしても潜行的になつており、その欲求、希望も、大多数(自分をも含め)は性的満足を得ようとしているだけのように考えられますが、段々同

志の結合が大きく且つ固くなつてゆけば単にそのようなことだけでなく、大きな社会的事業もなしとげるように発展するのではないかと思われ、又そう発展させたいものと望まずにはいられません。たとえばいつか新聞に現われていた、デンマークの同性愛党の政治団体のごときです。

とにかく、「風俗草紙」を読まなかつた三カ月ばかり以前の小生とくらべれば自分の考えがこんなにまで変つたことに自ら驚くほどです。

(東京 A・L 生)

答 ぞ年配ながら、いままで通信を寄せて来る人々に見られなかつた、ホモについての大乘的な構想を嬉しく拝見しました。

あなたの言われるように、真の同性愛とは単に自身の性的充足のみに終始するようなことであつてはなりません。

勿論、異性愛の場合と同じく、その性的充足は肝要であり、研究され論議されねばならぬことですが、その根本に精神的の結び付きがなく、何で「同性愛」といえましよう。現在の——従来もですが——ホモの人たちに

は、その点が閑却されているように感ぜられるのは、私の僻目でしようか？

同性愛における精神義——それについて、私は近く纏った論議をなすべく準備中であることをおしらせしておきます。

★

私は現在みたされない思慕の情に悩み苦しんでいる者です。私は幼少の頃からソドミアの傾向がありましたが現在のようには狂おしく悩んだことはありません。

それは、この夏、M町のM座で、ナイトシヨウとしてフランスの名画が上映され、それを見に行つたことに始まります。どしやぶりに降つた雨がやんだので、私は、パチンコ屋の前に立つて、人々のパチンコぶりをながめていると、そのとき私の前を通りすぎた青年がありました。年のころ二十一・二歳で、身の丈も私位、ゴム長靴が光っていました。

私は、その青年のあまりにも美しい横顔、特に鼻筋の通つた高い見事な鼻に、ハツと見惚れました。と彼も、私の前で立ちどまり、私と同じようにパチンコを見ていました。

ちよつと若いころの長谷川一夫に似た感じともいえましようか、濃艶でもあり優雅でもあり、又、長谷川一夫に見られない憂愁をおびた蔭があり、その横顔の美しさというものは——このような美しい横顔を私はいままでに見たことがありません。私に凝視められていると意識してかしないでか、彼の顔には、仄かな羞じらいと媚をふくんでいるように、私には感じられました。

その日からその美青年の面影が、私の胸に強く焼き附いて、恋しくてならず、何とかして接触したいという欲望が湧いて来ました。次のナイト・シヨウも歐洲映画でした。私は彼と会えるだろうことを期待して、M町に行き、例によつてM座傍のパチンコ屋で他人のパチンコぶりを見ていますと、昨日の美青年が近付いて来て、私の前に立ちました。本能的に私は、彼がホモであることを感じとりました。

彼が優雅で消極的なのは、思ひきつた媚態的な行動をとれないことにはにかみと嫌悪を感じていることの現れではないかと解りました。今にして思えば、あの

とき私は、なぜもつと彼の傍に近寄つて話しかけるか何らかの和合的同志的な行動に出なかつたかと後悔しています。

私は胸にときめきを感じながらも、なぜか素気ない素振りでは彼の傍を去り、M座に入つてしまつたのです。

それでも私は、自分の煮えきらない行動を悔い、彼への思慕の情すてがたく、売店の辺をうろついていますと、又もや彼が近付いて来て、売店の前に立ちラムネを飲みました。そのとき私は何とかして傍にいればよかったのですが、表面は心とは反対となり、妙な顔付ですぐ彼から離れてしまつたのですが、彼が何か失望したようなさびしげな格好で、椅子に坐りました。私はそれから自分の目的を意識して、彼のあとをおいしましたが、彼の近くに空席はありませんでした。彼はきまつて歐洲映画の番組の時だけ観に来て、アメリカ映画の時は来ません。そして客が皆客席に入つてしまつてから最後に入り、いつも単身らしいのです。ナイトシヨウも終り、彼に接する機会はなくなりましたが、私は彼のことが忘れられず、よもやにひかされて、毎晩M

町をうろつきました。そしてついに或夜私はパチンコ屋でパチンコをしている彼を見付けることができました。だが彼を見ると、妙に身が緊まる思いで、又しても想いとは反対の態度をとつてしまい、あとで後悔するのです。

其後二度ほど彼を見ました。一度はぶつかるといふ狭い通路で、真面^{まへ}にすれちがつたのですが、そのとき彼は私を見て興奮した面持で生唾を吐いたのです。

もう一度は、三十年輩の男と一緒にパチンコをしている彼を見たのですが、彼がその三十男に敬服しているらしい態度を感じとり、私の気持は滅入^{めいりゅう}つてしまいました。それから彼は彼を見かけたことはありません。

思えば、ゆるやかにウェーブした柔かなような長髪、盛上つた肉感的な腰、はじらいを見せ、青春の生気を発散しているかのような美貌と憂愁、彼をおいて、もう彼のような美しいわかもと会うことはないのではないかと思われまふ。

が、もし本誌の読者の中に、私の理想の型の同志があつたとしたら、どんなに私は歓喜することでしょう。年齢は20

25歳位で、知性と野性が交錯し、教養ある、温和で誠実味のある人、私と同趣味美貌で、肉感的な肢体をもち、清潔な、色の白い人、映画俳優を例にとれば、ジヤン・マレエ、ルイ・ジユルダンのようなタイプの同性を理想とします。

私の身長五尺三寸、体重十四貫、容貌容姿は人並で、色白、肉豊かです。趣味は映画・音楽・読書・旅行・蒐集・アイス・スケート等、年齢二十二歳です。

(広島 K・O生)

答 あなたと美青年の「彼」との出合いの一つ一つの情景が、さながら小説の一コマのようであり、しかも二人の心理と行動のうごきの細部^{さいぶ}が、ホモならではのかかなり適確な描写なので、少々長いですが、掲載しました。

男と女との場合は、モーロウも言っているごとく、それぞれの肉体が恋する相手を豫想してその到来を待ちこがれているとき(たとえば青春時代)には、最初に出会った感じのよいものなら、だれでも恋愛の対象にしようとする可能性があります。

ところが、ホモの場合は異なります。出会った瞬間に、まず相手が同志(ホモの)である

可否かを感じとつてしまう、それが絶対的に必要なのです。いや、必要というより、本能的に掴んでしまうのです。だから、相手が「感じ」がよくても何でも、縁なき衆生は永遠に縁なき衆生にしかすぎません。

あなたの文面の様子では、あなたが二度目に「彼」を見たとき、相手の同志であることを感じとつたように記されていますが、私の推理では、そのことはあなたは最初に本能的に感じとつており、二度目には確認的に感じとつたのだと見るのですが、如何?

もし、最初にそれを感じとつていなかったとすれば、あなたのような人——いままで「いかなる美青年にも興奮を感じたことなく」そしてまた、おのが理想の条件に厳しいらしいあなたのような人が、相手の美しい横顔だけに惹かれるというのも、延いては、彼と会いたさにM座に出かけるというのも、私にはピンと来ないのです。

一方、美青年の方は、最初からあなたがホモであることを読みとつており、しかもあなたに関心をもつたらしいことが窺われます。

このように互いに恋着しながら、ついに相接することがなかつたのは、俗な言葉でいえば、所詮は縁がなかつたのでしよう。

女装まにやの手記

安白粉、紅で化粧して、見ている中に
 艶な女になつてゆく。若い私は夢中に興
 奮して、それからの夜毎夜毎を……

西
塔
哲



ふみ子(森 繁)さん

女装趣味、女装マニヤ——。私は自分の性的な好みを秘かに心の中でそう呼んでいるが、別に自分が女装する訳ではない。私は青年時代からガッチリした体付で、顔の恰好も、到底女装なぞには向かないのを知っていたから、最初から自分が女装しようなどという気は少しもなかった。

では、私の女装趣味とはどんなものか、と言うと、女装した男性でなければ、性的な興味が少しも湧かないのである。

「それじゃア、君のは男娼趣味じゃないか」と口の悪い友人に言われたことがあつたが、女装男などに交渉を持たうとすれば、現代では男娼以外にないので、仕方なく私は男娼たちを漁る結果になつているが、美しく女装した男ならば別に男娼でなくともよいのである。

男色ソドミイのようでもあるが、相手の女装に激しく興奮するのだから純粹のソドミイでないこと無論である。この女装趣味に、サチズムが混入のだから、私の性嗜好は一寸厄介なのだ。

○

これから、私の女装者遍歴を戦前と戦後

に分けて、主なものを拾つて被歴する訳だが戦後はとも角、戦前には、私の趣味を満足させようとする、人に知れぬ苦勞が随分とあった。戦後は男娼が氾濫したけれど、戦前は取締りもウルサかつたし、女裝男など現われればすぐに新聞がニギヤかに書き立てたもので、相手を求める苦心は到底幾ら語つても語りつくせない程のものだつた。この点を、よく理解された上で、私の拙ない手記を読んでいただきたいと思う。

一

私がN大在学当時の事だつた。近所の三河屋と云う酒屋（前号に述べたが私は浅草六区生れである。エンコの夜はギヤングの巢の様に云われていたが、浅草は最も江戸気分の残つている下町趣味の牙城見たいで、ざつくばらんの、小意気の処は他に見られない。まして裏町の横丁から小路迄精通している私にとつては樂園だつた）の息子で安ちゃんと呼ぶヨタ者がいた。此の男はヨタ者と云つても硬派で、喧嘩が強いので有名だつたが、素人の者には腰が低く如才ない男で、年下の私の事を「兄さん」と呼んで付会つていた。「兄さん尾久の方に変な野郎を知っているんですが

ね。それが例の兄さん好みのなんで紹介しましょうか」

退屈している或日、彼がニヤニヤし乍らやつて来たので、渡りに舟と彼の案内で春さんと友達になつた。当時、春さんは、尾久でも貧民窟の方だつた荒川遊園地近くのゴミゴミした裏町長屋に住んでいる転居者の一室を借りて生活していた職工だつた。はつきりした年齢は云わなかつたが、二十三、四歳位で、元は旅廻りの女形もした事もあると云つて、いろいろの女裝の写真など見せて呉れた。何でも一座にいられない事情があつたとかで、仕方なく現在の職

お春さん

工生活に飛び込んだのだ。職場では

努めて男らしく振舞つては

いるものの、慣れない労働が骨身に答える

のと、殺風景な周囲

が嫌で、亦元の俳優になりたいらしく夜になつて、一日の仕事を終つて自分の室に歸つて、同趣味の私と二人きりになると昔の生地が出て来る。丁度魚が水に歸つた様に、

急に普段の鈍重な動作から、生々と女のように優しい動作で、恋人でも迎えるような態度になつてくる。

然し、何と云つても生地の男の姿のままでは気分が出ないね、と私が云うと、どんなに困つてもこれ丈は手離さない、行李の底から色の褪めた、安物らしい女の着物や怪しげな髪（カッラ）を取り出して来る。私が買つてやつた安白粉、紅で化粧して、見ている中に女になつてゆく。その姿を見てみると、これが晝間の、あのどんよりとした男かと怪まれる位、豊艶でエロチックな魅力のある

若い娘になつて了う。若

い私は夢中に興奮して、それからの夜毎、夜毎を、恋人同志の様に肩を並べて、時には縁日を歩き廻りあるいは、暗い喫茶店の片隅に、又は映画館の中に、二人丈の秘密の遊戯を楽んだ。彼は過去に女給をした事もあり、人妻としての結婚生活の経験もあると云つてゐるが、旅廻りの芝居者同志の、同棲生活の事であろう。



私の空想意慾を満足させて呉れた上、同性愛の微妙なテクニクの味を教えて呉れたのも彼である。

二

読者の中には、昭和八年の春頃、都下の各新聞紙上を賑わした事件で、「女裝の夜の天使」と云う様な見出しの下に、東京の下真中の銀座に、男娼が出現した事を御記憶の方もあろう。

それは奈良生れの、田中茂と云う倒錯性慾者で、当時十九歳位で大阪市を中心に働いていたのだが、取締りとボスの窄取が嚴重な爲、東京で甘い仕事をしようと、早春の銀座の浮き浮きした夜に、男をくわえ込む仕事の最中捕つたものである。私が彼を否彼女を識つたのは、此の事件からである。

東京はコリゴリとばかり、本拠地の大阪へ彼が引揚げてからの話である。偶然なチャンスを手に入れた私は、夢に迄あこがれた大阪探訪を実現する事が出来た。それは私が就職勿々の事で、当時神戸の方へ時々出張させられた、その余暇を利用して、有名な釜ヶ崎に足を入れる様になった。

最初は東京と全然異つた雰囲気戸惑いし

たが、結局六感を働かせて地廻りの八さんと近付きになり、彼

を通じ
て数人の釜
ヶ崎の代表美人連
と親しくする様になつ
た。前記の田中茂即ち茂
子もその一人だつた。女裝が
法律で禁止されていた当時で
も、釜ヶ崎スクラムを中心に心
齊橋道屯堀辺は笑子姐御を始めとし
て数十名のオカマが夜の闇を我がもの
顔に活躍していた。その頃は、今日の「男娼」
と云う言葉は未だ無く、「ガタ」あるいは「オ



カマ」の名称で呼ばれており、面と向つては、「お姐ちゃん」と云う

呼名が一番適切で、本人達もそれを喜んでいたし、「あんたお姐ちゃんじゃないか」

と呼ぶ事に依つて、自分は男色党だと云う風に相手方に認識させていた。

此の茂子は、彼等の仲間でも年少者の方で、東京で新聞種になつて以来、なかなかの売れっ子になつていて、相当な紳士や文士連の客があり、青二才の私輩が馴染になる迄には相当大阪通いをしたものだつた。髪はヅカガールの男役のような刈り上げ方で、色白の小柄な美少年で、流石に若さが物を云つてか、

抱き締めると柔軟なビチビチした肉体は、まるで若い娘の様な弾力さがある。夜になると一時間もかかつて化粧し、着付けを済ませて、東髪の髪をすつぽりと被ると、もうすつかり若い娘になり切つて仕舞う。



茂子(田中茂)さん

本人の話では、奈良の農家の二男坊に生れたが、子供の時から女の様で、友達と遊ぶのも女の子ばかり、小学校を卒業して百姓を手伝つていたが、女になりたくて堪らず、村の盆

踊りなどで女裝すると、若い衆連は女と間違えて言い寄つてくる仕末。とうとう家をとび出して旅役者の群に入り、女形専門にやつていたが、旅芝居ではロクな収入にもならないのと、思う様な同性も得られずに行く先々で言い寄つて来るのはみな娘や女房連なので、見切りを付け、フリーな立場で男性の愛を得、且つ収入も好い男娼業に転向したのだそうである。ひげの生えていないすべすべした顔立ちと云い、颯々とした肢体と云い、全くの女になり切つてゐる。

此のグループの大姫御の笑子(二十五歳)などは、何時も錦紗づくめに黒紋付、冬場は狐の襟巻などとして堂々たる奥様然としたスタイルで、心齋橋から道頓堀の附近を稼ぎ場とし、相当の紳士風の客でなければ相手にしないと云つた大物である。住いなども他の連中と違つて、一戸を構え、女中迄使つてゐる豪勢さで、家に戻れば女中に奥様と呼

ばせてゐる程総べて女の生活である。此の二人と併んで、も一人百合子と云うのもいた。前身は食堂ボーイとか謂われていたが、器量の点では、あるいは三人の中で一番美人かとも思われた。

三

話は飛躍するが、東北の大都市S市の中央のメイン・ストリートに、此の町唯一のマーケットがあつた。東京の一昔二昔前の観工場式の小さなもので、パチンコ、コリントゲーム、射的等々の雑多な商店がゴチャゴチャと並んでいて、一番奥の中央にバラック造りの舞合があり、毎晩そこで、怪しげな踊りや流行歌、芝居の様なものが行われる。舞合の前には粗末なベンチが並べてあつて銭湯帰りの若者やそぞろ歩きの女達が、毎夜の催し物を只で見られる趣好になつていて、それが又マーケットの呼びものでもあり、各商店の客寄せにもなつていた。此の舞合の踊り子の一人に「仙さん」と呼ばれる男がいた。男と云つてもS市の名

物になつていて、御法度の女装も何のその、頭は何時も女の子の様にお河童にして派出な模様の安物錦紗か銘仙を着込み、赤い大柄な帯を胸高に締め、白足袋に草履と云つた姿で晝間でもしやなりしやなりとしている。

同市に友人のいた私は、友人のところに行く度に必ずマーケットに出かける事にしていった。私の熱心さがそうさせたものか、偶然の機会に彼否彼女に接近する事が出来た。

彼女には土地に相当深間の彼氏もいると云う噂だが、此のお仙さん、外見的には相当妖婦的容貌と態度を取つてはいるが、都会人と云つても東京から見ればやはり田舎者で、案外純情で男に惚れつばい脆い一面を持つていた。

一日市外の温泉場へ遊びに行つた事があるが、何しろ名物男否女なので、顔を知っている者が多く、目引き袖引きして衆目注視的になつてしまつて、その爲思い切つた行動に出られず閉口した記憶がある。一番残念だったのは、彼がマゾでなかつた事で、これが心残りだったが、プロの男娼と違つて東北人特有の粘りつこさと純情さを多分に持合せていたのは私もわざわざ東北辺まで張りに行つた甲斐が

あるものとして今に忘れられない一人である。何しろ当時の私は若輩だったので、何にしても充分な資金を持合せている訳でなし、若さと熱に物を云わせて只押しの一手あるのみで、昔を考えると、良くも無茶な真似をやつたものだと考えさせられる。

四

又新聞記事の紹介で恐縮だが、これも不図した奇縁から知り合つた一人なので備忘ノートのメモの中にあるのだ。昭和十一年も押詰つた師走のある日「どうか私を女として生きる道を探して下さい」と云つて東京の某警察に泣き込んだ女装男の事で翌日の各紙とも「之が課長様の長男」と云う様な見出しでデカデカと賑わつたものだ。

此の女装は森ふみ子事繁さんで、当時自称三十五歳とか云つていた。変態性慾の研究家として有名な中村古峽氏を始め多くの研究家の筆にも度々上り、又地方紙にも大分以前から載つていたので、私も兼々

噂は聞いていたが、東京の膝元を評判にしたのはこれが始めてであつた。九州の産で、父親は某省官吏で課長とか、嚴格な、教養ある家庭に育つた息子が、事もあるうに新聞雑誌を賑わす程の名物男否女に転向するのだから、世間は広いものだ。

話は元へ戻つて、彼は、物好きな人の世話で某カフェーの女給として東京に於ける女性生活の第一步を印したが、店は好奇心の対象となり大分繁昌したがかんじんの御本人はお客に獵奇的な眼で眺められる丈で、いざ傍へ寄つて行くと大抵の客は逃げ腰となり本気で相手する者は案外少く、収入は評判倒れに終つて、本人は大シヨゲ。そこへ偶々ゴシップを利用して興行価値をあふろうと浅草六区の〇〇座へ女優として引張り出されたが、ズブの素人の哀しさ、九州弁のゴツゴツではまともな台詞にもならず舞台は穴が明く仕末、只好奇客の対象的存在で、確か一興行で、舞台から姿を消してしまつた。

これで東京での彼女の消息も渡絶えてたが、偶然と云うものとはんでもない時期にやつて来るものだ。何んでも春先きの薄ら寒い時期の事だ。夜の十一時過ぎ、独自者



の気楽さから友人宅で遊び
過した私は、神田駅の裏
口へ姿を現した。そこ

に、黒っぽい地味な

身なりの年増女が

あてもなさそうに

ぶらぶらしてい

た。見ると、電車

に乗るでもなく

さりとして人を待

っている様にも

見えなかった。

顔を見ると彼女だ

つたので、内心好

いチャンスとばかり

張切っていた。忘れ

つぽい都会人は過去の

新聞種の人生とは知る由

も無く、尤も若い美人なら人

目にも立つが、ありきたりのお内儀

さんの様な年増と考えてか、振り返る者

もなかった。私は煙草を口に、何気なさそう

に人待ち顔に彼女の傍をぶらぶらしていた。

暫くする中に彼女は、傍に寄つて来て、「あの

う、もう何時頃でしょう」と、駅構内の正



面に大

時計がある

のに、故意か気のき

かぬ質問をした。「さあ、もう十一

時を廻つてますよ」と腕時計を示し乍ら私は

答えた。「此の近くに宿屋は無いでしょうか、

御存じありません」と第二問が来た。

「僕は前に貴方に会っていますよ。ふみ子さ

んでしよう」とニヤニヤ微笑し乍ら云うと、

びつくりした様に、「あら、こちら、何処で

御目にかかったかしら。どなたでしたの」

と真剣な顔付きになつてくる。

「今貴方は何処にいるの。〇〇座以来消息

が分らないので随分探したよ」

「私、今入谷の御友達の処におりますわ」

「じゃあ何故旅館などに泊るんですか。彼

氏が心配するでしょう」

「とんでもない。彼氏だなんて。私、今失

業中で、毎日ぶらぶらしてお友達の処で厄

介になつてゐるの。」

云い乍ら手を握り締めてくる。それでは

今晚は君の家で色々相談でもしよう」と云

う事になつて、彼女の所謂お友達の家へ案

内された。

彼女は良家の出身だったが少年時代から

女になりたくて堪らず、上級学校へも上ら

ず、十七、八歳頃家出して旅廻りの芝居小

屋に一座して以来女形ばかりやつた。大衆

の前で好きな女裝が出来るのは何より嬉し

かったが、間もなく厳格な父親に発見され

家に連れ戻されたが、倒錯性は益々つのる

ばかり、又も家を飛び出し、神戸辺のカフ

エーで女給稼業をしている中に、客に来る

男と情意投合して世帯を持つたが、これも長続きせず、男の親類から「男を女房にすると怪しからん」と苦情が出て遂に生木を裂く様に分れさせられた。止むなく彼女は、それから放浪生活の様なものになり、人妻、或は芸妓、女中女給と凡ゆる女の領域を遍歴し続けたのだそうだ。

そして段々年をとるにつれ、昔の美貌も次第に衰え、此のままで行くと倒錯性慾者の老路の果が目に見える様で、本当に愛して呉れる人があつたら、職業、年齢は構わないから結婚して安定した生活に入りたいと歎いた。そして私にも、何か良い口を世話して呉れとくり返し頼まれたが、若輩の私などにはそれは仲々の負担すぎる位のものだつた。然し彼女位徹底して総べてを顧みず、そぞみあの世界に没入する如きは実に珍らしい一人である。

五

生暖い晩春の夜、新宿裏の喫茶店の中は、物憂い様なレコードの楽の音と薄暗い照明の下で、ボウツと霞む程煙草の煙が蒙蒙と渦を巻いている。あちらこちらのテーブルの隅でヒソヒソ話に耽る者、洋酒の盃をチビチビ甜

めている客はあつても、表通りの繁華街とは打つて変つてひっそりとしている。男色党の集まる喫茶店Mだ。

私とおえいは何時もきまつて此処で落合う事になつていた

おえいと云うのは、ある大劇場のほんの大部屋の一隅にいる女形に過ぎない、二十四歳になる男の事である。小柄な五尺ち

よつと位の身丈けと、円まつちい顔、クリクリした瞳、浅黒い皮膚、低い鼻、素顔で見ると彼は男としては一向栄えなかつた。役者らしい服装さえしていなければ酒屋の御用間程度の風採だつたが、一度化粧して髪を冠り、美しい女の衣裳を身につけると忽ち水の垂れる様なポツチャリと肉感的な可愛い娘になつてしまふから不思議だ。「兄さんと二人切りで好きな事出来る家が欲しいね」

と彼が熱心に云うので、彼が今迄世話になつていた人の部屋を引拂つて、中央線の沿線

おえいさん



のあるアパートに移つた。役者稼業で毎日通勤するし、支那事変は始つた事だし、幾ら私の好みでも外では女裝は出来なかつたので、その六疊の部屋の小天地が私達の秘密の世界だつた。漸く様々なテクニクを覚えた私は、そこでしびれる様な遊戯に打込んでいたが、時々「あたし今日はあれなの」と私の申出を拒否する時は、元来胃腸の弱い彼の病気が起きた時で、不快な感じを与えまいとする彼の心根はいじらしかつた。

そのうち我々の間に奇妙な仲間が這入つて来た。おきんと云う仲間の女形で、年はおえいより三つ四つ下だつたが、これが一風変つたマゾ性で、おきんが一人加わる事によつて我々の遊戯は倍増して楽しいものになつた。劇団の道具方から借出して来た衣裳や、髪をつけたおきんが、奇麗な娘になつて私とおえいが夫婦の様な恰好で苛めると云うのが何時もの例だつたおきんを高手小手に縛り上げ猿轡を含まして鴨居に吊したり、大の字にはりつけ姿にしたり、裸にして芋俵の様に転がして私達が替る替る責めたり、或は気分が高潮したりすると抱き合つて接吻したりしておきんに氣をもませたりした。

此の夢のゲームも長くは続かなかつた。戦争の波紋は我々を呑んでしまつた。

六



小夜子(井口勇太郎)さん

六区で未だ私がヨタつていた頃三流小舎に属していた〇〇館のチケットに小夜子と云う丈の高い美しい女がいた。勿論地廻りの狼連やエンコの軟派連も目をつけていたが、五尺三寸位あるしなやかな長身、瓜ざね顔を何時もつんと取澄まして滅多に笑顔も見せない。私は此の娘に妙に氣をひかれるものがあつたので、何とかあの取澄ました面の皮をひんめくつてやり度い、上品振つてゐる正体を暴露してやり度い、とヨタ仲間の安ちゃんや善公に力を貸して貰う様にした。人のあら探し等に妙を得ている男で、どんな事でもする人間だつた。

善公の報告は、彼女は三河島辺の二間切りの小さい長屋に兄と二人住いをしてゐると云う事だつたが、その中、大変な調べをして、私と安ちゃんを驚かせた。「兄さんあの小夜子とはんだ食せ者だぜ、あれあ、女じゃないよ、男だ」と言い出したので、詳しく訳を聞くと、ある晩〇〇座の閉場を待つて善公はそれとなく小夜子を尾行し、先廻りして彼女の家の裏手の垣根の間から台所の外で様子を窺つてゐた。その中、ドブ板を踏む足音がして彼

女は家に入つた。兄と云うのは未だ帰つていないらしく、電灯をひねると支度もそこそこに台所の隣の便所へ這入つた。善公は咄嗟に思いついて、傍のゴミ箱の上に乗つて低い窓からうす明るい中を窺き込んだ。

是は占めたと私は喜んだ。そして彼女否彼を口説き落した事は云う迄もない。彼女否彼は真実疑いもなく男性だつた。井口勇太郎と云うのだ。何んでも田舎は群馬県の方らしく、兄と云うのは世間体で、実は同性愛の結果家出して、同棲生活に入り、男は外交員をし、女裝してしまつた彼は男の仕事が出来ないので、〇〇座で働いて夫婦共稼ぎと云つた訳なのである。今迄誰にも男と見破られた事はないのに、「兄さん」丈に見破られるとは不思議だと理由を知り度がつたが、私は教えなかつた。

半年程して、彼等二人は私の前から姿を消してしまつた。

最も女らしい男、誰が見ても女そのもので、男性特有の喉佛もなく、色の白い、女として勿論十人並以上の器量で、今でも惜しいと思つてゐる。

×

×

×

×



さちすと

★前略小生満三〇歳の独身の男性。昨年九月よりの愛読者です。私は女性の腕に特別な関心をもっている者です。腕と云つても肩の先、つまり上全体ですが特に二の腕から肘関節部のあたりにかけては、私の最大の昂奮地帯と言えましょう。白いハチ切れそうなくともスナリとした曲線美豊かな女の腕こそ、最高の芸術品です。これを想像し

たばかりで興奮します。じいつと女の腕を握っている、無限の恍惚境に入つて行きます。若い女性の腕を思いきりさすつたり、強く握つたり、もみくちやにしてみたい気持で一杯です。ですが独身の悲しさで仲々実物には手をふれ得ません。またどうして雑誌や人の口の端にもものぼらないのでしょうか。同好の方は多い事と思ひますのに。

私は女性の腕こそ最も、かよわさを表現してあますところないと思ひます。ほんの片手で握りしめるにも恰好の太さではありませんか。両手でヘシ折る事さえ出来そうな、この愛らしき腕に、文身、注射、鞭打ち、縄縛り等、あらゆる事をしてみたいと思ひます。

この様な写真や文献を御持ち

の方はないでしょうか同好の方は御座居ませんか、是非御連絡下さい。(京都 TE生)

★新年お目出度く存じます。一月号の「強姦願望」毎号の落城秘史ものに就いては、異常の興味を以つて拜読しております。

強姦もの、輪姦もの等に深い関心を覚えまして、文献、写真、絵画等のコレクションがあります。同好の士の御文通を御待ちしております。(IM生)

★読者交歓室の先輩諸兄姉、御元気で御活躍の事と存じ、大層の至りです。

さて毎日編集の方々のみなみなならぬ御努力により、御立派なものを発行しておられ慶賀にたえません。

最近号では相変らず玲子女史の華麗なる筆致に始まり、モデルを使つての写真、松井女史の淫雨熄まずもよいと思ひますが、迫力に今一步の憾み無しと

せず、磯岡氏の白い祭壇、日夏氏の視姦の部屋等の方が優ると思ひます。

又、増刊号のダイナマイトとマドレーヌ丈は、文句なしに頭を下げました。

では批判はこれ位で次に、読者の皆様に御願ひします。小生編集部を通じて、文通をさせて頂いておりますが、編集部の方でも御協力戴けるとの事です。で、一つ同好のグループを作つてはどうでしょうか。大阪を中心に近畿地方にお住まいの諸兄、御賛同願えませんか。

お互に研究し、楽しもうではありませんか、尙グループ参加の條件としまして、出来ればマゾ及びサド的な性格に一応限定したいと思ひますから、悪しからず御舎の上でどしどし御文通下さい。(佐渡 夢二)

★私は全身に刺青をした女性に

異常に興奮する者であります。老若を問わず、その肉体を熱愛致します。全身に刺青した女性の方々、色々とお話をお訊きしたく、文通を御願致します。

又、女性の全身、刺青した密着写真を所持しておられる方、実費でお別けして下さる方御一報下さい。(滋賀 青青)

★何かと御多忙の事と存じます。実は小生、本回始めて風俗草紙を拜見、その素晴らしさに思わず虜と成つて仕舞いました。加えて読者欄を拜見するに及び、全国に多数の同好者の存在を知り、新入りながら将来の知己を求める次第です。

女性の方で、サデ、マゾ、いずれの方でも結構です。是非御文通下さい。御待ち致します。

猶名古屋見物旁々御越し願える方でしたら、御面接と同時に旅費及び滞在費一切、当方にて御支拂いさせて頂きます。但し

冷やかしを防止する爲左の条件を附加します。

一、年齢三十五歳迄、容姿十人並以上の方でセックスアップ・イルを備え、健康明朗なる女性。

甚だ身勝手な注文ですが、もし、それでもと云う女性がありましたら双手をあげて御迎え申上げます。ちなみに小生の事をちよつと説明申上げます。年齢二十九歳身長一米七十糎体重十八貫五百、多毛性、柔道三段独身、(現在)個人商店の支配人専門学校卒、容観性行共うぬぼれではありませんが近代的教養と知的感覚を相当に備えている心算りです。(多木)

★飛躍の午年を迎えまして益々御隆盛の貴社の爲、深甚なる敬意と御喜びを申上げます。

昨年は秘蔵版を刊行せられ眞価を広く世に問われた事、愛読者の一人として喜びに耐えません。唯惜しむらくは、女体の縛

りと虐みに重点をおかれ過ぎてある事で、そのみでなく、他にも風俗草紙と銘うたれる上から縛り以外の風俗もある事です。秘蔵版中高橋鉄氏の「異常ラブ」中、女性の刺青を見て以来、刺青された女性以外には興奮しないと言う事や、喜多氏の絵等々……。読者の中には案外刺青に対する興味は多いのではないでしようか、私もその一人なのです。私の希望は毎号一枚



H N 氏 近影

か二枚、本当の女性の写真をはさんで欲しい事です。喜多氏や中川氏等に刺青の女性の虐みを画いて頂きたい事です。広い東京です、きつと多くの刺青された御婦人、刺青師もたくさんい

られる由、御足労願つて紙面を飾られん事を祈ります。(神戸 俊)

まぞひすと

★交歓室の目ざましい発展を喜んでいゝ一人です。御誌を手にした時、先ず開くのが交歓室です。

私は子供の頃から女になりた

す。女装して女の方と一緒に分け隔てなく暮せたなら、どんなに楽しいかと考えつづけ、馬齢を重ねてしまつたものです。幸い交歓室で沢山の私達同志を

見致し心強く感じております。
一月号に勇敢に御近影を發表されたY Y様。私の女装写真同封しましたので、御目に止まればと祈っております。またK様、ホルモンを試みる事、私も数年前から色々の方法を試みているので、これだ／＼と思いました。

小生三十三歳になる今日迄性交には余り興味がありません。女性の尿を飲む事により、気分が出るのです。街で女性を見ると、どうかしてこの人の尿を飲みたいと云う異様な気持ちになります。これだけは人に云えず独り悩んでおりましたが、御誌で同好の方を知り安心した次第です。実際に私の胸は未婚の女に負けない乳房を持つ事が出来ております。Y Y様、K様と御交際出来ます事を最後にお願ひ致します。
(H N生)

居りますが、十一月号迄は何んとなくびつたり来ない所がありました。十二月号を見るに及び憑かれた様になりました。
現在では、想像もつかぬ程苦勞して尿を求め、味わっております。しかし月せいぜい三回位より求め得られません。
何卒貴誌を通じて小生に尿を提供して下さい。御知らせ下さい。十五歳から四十二三歳迄迄の健康な女性に限ります。
それから男性の Penis を××××も、是非やつて見たいと考えております。
希望者がありましたら、宜敷く御願ひします。これは中学時代随分やりました。(東京S生)

3集 制服の女學生 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		2集 岩風呂の被虐 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		1集 泣く悦虐秘圖 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		激浪に呻く 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		海濱の女學生 写真 キヤビネ判 五枚一組 五百円		別荘の人妻 写真 キヤビネ判 五枚一組 五百円		ナイロン・パンティ 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		逆吊り責め 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		本特選傑作責寫眞集 写真 キヤビネ判 三枚一組 五百円		凄艶の姿態を描く喜多玲子の傑作責寫眞集 写真 キヤビネ判 八枚一組 三〇〇円		玲子悦虐姿態素描集 写真 キヤビネ判 八枚一組 三〇〇円	
--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	---	--

★HOMOSEXUALTAT★
TECHNIK

鹿火屋一彦著 袖珍判美装本

同性愛技法に就いての一考察

定價 二百円 送料 二十円

ソドミア性愛秘典
ソドミアの性愛技法について未発表のものを堂々発表の秘典！

東京都千代田区
猿樂町1の3
株式会社
日本特集出版社代理部

学校に入つてからも踏台になつたり、馬乗り、肩車、騎馬戦等の遊びには常に馬で、たまに騎馬戦で乗り手になると、何だか胸さわがして困つたものでした。

中学に入つて二年の時、「ホ



S M氏近影

ーデン掘り」なるイタヅラが行したのです。その時、自りてに連想された意識がおこつて、困つたものです。又下半身裸にされた時は恥よりも、嬉しい位でした。騎馬軍隊を見ると興奮して困つたものです。

十月号マゾヒズム画廊中の、「馬よ走れ」と云う図があります

したが、乗り手が女性であるのに汚らはしさを感しました。小生の理想は四ツン這になつて体重十八貫以上もある、デブプリした廿歳前後の青年を背に、思い切り遠乗りをして見たい夢を描いております。

都内在住の方なら交際もしたいと望んでおります。廿歳前後のガッチリした活潑な男性で体重十六貫以上の方なら容貌は問題外です。(東京 M T生)

★女装したい、いいえそれ以上に女になりたいという切ない気持で、毎日を送っております。

私にとつては同じ気持でいらつしやる多くの方々が、その方達のお気の知れる御誌があります事を、本当に心からうれしく思っております。私は一人住いのです、少女歌劇の男役が男装する時につけます毛を、自分の頭につけて、ほとんど自然に見える髪をしております。

集	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
集	危機一髪處女責	エプロン責め姿	ガンヂガラメ	淫風淫ら責	やわ肌責五態	マニヤ地獄の女	白衣の看護婦	セーラー女學生	晴雨好み凄艶責	責られる高島田	力つきた處女	ソドミアの愛撫	男性ヌードの緊縛美	サービス責寫真	縛られたお姫様	股間縛りの魅惑	連縛の非處女
写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真
枚	三枚	三枚	三枚	五枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	五枚	五枚	三枚	五枚
判	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組	一組
印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印	印
紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙	紙
焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼	焼
付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付	付
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四

東京千代田区
神田區
振替東京二四二五二番

株式會社

日本特集出版社代理部

勿論、四六時中という訳にはいきませんが、ただ化粧と女の着物をつける事で自らを、なくさめております。

同好の方々と御連絡している
〈お話し、研究したいと思つております。庭先での近影をお送りします。〉(S M生)

★私は三十五歳の妻子を有する者ですが、少年期より女性の腰巻や、花やかな着物を、身にまとつたりしておりましたが、この頃になり、一人の女性のなさみ者となり、奴隷教育を受けたいと思うようになりました。二十歳より四十五歳位までの女性に征服されて見たいと思ひます。馬乗り、叩き、懾り、何でも致します。赤い長襦袢を着た彼女の重い牀を乗せて、馬になった私が、ヨチ／＼と這い廻る時の喜び。彼女の脚や太腿を、ペロ／＼舐め、その真赤な下着を顔に押当てたり、身にまとい

たりして散々いじめられて見たいと思ひます。又女性の排泄物を飲食してもかまいません。出来れば千葉県の方のぞましいのですが、誌上御連絡願ひます。(千葉 B K生)

そとみあ

★僕は二十三歳のM大生です。親兄弟なく、遺産を学資に自由な豊かなアパート生活をしていきます。二十歳位の美しい女性的な少年と同棲したいのです。出来ればボーイ・パレリーナ、学生を希望します。そして刺青に興味があり、将来刺青をする事を慾する人を望みます。僕は背高く体重一六貫、容貌似は三島由紀夫に非常によく似ていると云われます。

刺青する前は、大学でレスリングをしておりましたから、筋骨隆々とし、自分からすすんで男子ヌードのモデル(責め)を

した事もある位です。殊にペニスは立派です。

ふとした事から刺青に興味を覚え、一流の彫師に頼んで肩胸と、下腹部から腿にかけて、蛇の刺青をしました。将来、全身ペニスにもするのが念願です。

針でさいなまれる快感が、どうしても忘れられない刺青マニヤです。そんな僕と同棲して下さる方がありましたら、本欄に御返事下されば参考に僕の全裸写真を御送り致します。尙大学を出たら遺産でソドミア喫茶店を経営して行きますので、一生責任をもつて面倒を見ます。パレリーナを練習させる事と全身にトラップを散らした刺青をする事、フェラチオ等條件にして下さい。(X・Y・Z生)

★交歓室の皆様お元気ですか。私は筑豊地区に住む者ですが同志の方とクラブを作りたいと思ひます。

本誌一括購入、その他本誌で発行する書物等を、一緒に取扱えば色々他人の目を忍ぶ必要がなく、便利だと思います。筑豊地区の皆様奮つて、御参加下さい。時は三月七日(日)十一時を中心に、直方の多賀神社境内と、公園を中心にし、雨の時は、直方駅、国鉄、西テッパスの駅として、右手に本誌を丸めて持ち、「俳句会ですか」と問い、「いいえ、句会です」と答える様にしてはどうでしょうか。たのしみにその日を御待ちしております。(福岡直方T生)

★御誌を初めて手にしましたのは去年の十二月号でした。うれしさはそとみあの皆さんと同じです。

十一月二十二日日曜日、松山城天守閣へ出向きました。馬鹿正直と云うのでしょうか、少数の中で、雑誌を持っていたのは、私がつた一人でした。ど

んなに情なく思つたか分りません。然し一番目につきやすく、色々な事がありました。

あのととき小林健治さんにもお逢いしました。

これは別な話ですが、何時迄も住所氏名をかくす相手の方は私には絶対信用出来ないのです。どうぞよろしければ御便り下さい御待ちしております。

(今治 T生)

★凍てつく星が煌めく静かな夜空の下、心に秘めて果せぬ願望に、心安らかざる思いに悩む一サラリーマン……それが私です。

私は先生という名の職業に、

四年程前から就いていますが、私に取つて最も親しい同胞は、一六―一八歳の若さと力と精力の象徴たる同性の高校生です。

幾百人の彼等が教室で、校庭で醸し出す雰囲気は、すばらしい迫力で私の心底に眠つていた同性への愛情を呼び起こさずに

はいませんでした。

その最初の機会は、忘れもしない三年前の夏、奥高尾のキャンプでした。寝むられぬまま時を過している内に、山の夜気は一枚の毛布で凌ぐには充分でなく、フト隣りを見ると日頃から憎からず思つて居たSが転つていたので、寒いから二人で抱き合つて寝ようと誘い、ためらう彼をひきよせ、曉方まで抱擁しました。

その後教師と生徒との正常な関係の他に、同性思慕の感情を、そして行爲が加えられたのは自然の成行でした。

Sは今春学校を去りました。そして遠い北海道へ。彼を失なつた私は失神状態でしたが、新しく担任となつたクラスに、Kと言うハンサムで上品な生徒を発見して、空虚な心は彼への関心で満されるようになりました。其の後彼を獲得すべく、私

の全能力を充てましたが、Kは嫌悪の情を見せ、私からも離れるようにしてばかりいるのです。私はKに対し、思慕はつるばかり、私の脳裡は彼の事で一杯です。このまま日夜Kを思い続けることは、私の精神的崩壊だと思ひます。

世のそとみあ諸兄この憐れな私に強力、確実な助言を賜わらんことを！

(東京 泉)

★私は十八歳ですが、中学二年の夏休みの時、級友と関係しました。抱擁や、キスでするようになり、毎夜木蔭で戯れていゝうちに夏休みも終り、別れると共に忘れるともなく忘れてしまいました。やがて高校に入り、色々な少年に心うばわれながらも、又上級生から好意を示めされ、もしやと考えました。が、クラス委員の関係上上品に振舞い、遂に今迄過ぎました。そして私は男色ではないかと思

い始めました。

性慾のはけ口を同性に求め、夜の夢も男性との接触であるのです。女性には嫌悪を感じ、恐怖さえ抱く様になりました。無論結婚したいと考えてはいません。むしろ理想の人と会つて関係を続けたいと思つています。

今迄も公園や映画館を理想の人を求めて探しましたが失敗でした。すべてを諦めて、女性を愛し、苦しく冷たい生活を宿命と思うべきでしょうか。

(福岡 一学生)

★我に紅のハートと、ソロモンの栄華を与え得られる紳士あらば、毎土曜及日曜日のAM十一時―十二時迄の時間に、横浜駅正面口の告知板に御連絡あれ但し、その期間は二月十三日より三月二十八日迄。尚、右手に週刊サン×イ持参の事

(久保朗)

×

×

雄 寺 膽 龍

益 田 修 二 画

(第二回)



日佛混血兒サテツクで好虐的な色情狂の赤星二郎

は、インポテンツの夫をもつて、爛

熟の女體をもてあます美彌子夫人

の寢臺にソツと手探りて忍び

寄つた！

愈々佳境の雄篇！

連載アブノーマル官能小説

こ とう によ じ
蟲 妖 の 虹リトル・エフィセント
小悪魔

ガラス工芸家の千鳥左右吉を、多治見雅彦と美彌子夫人は綽名して、小悪魔と呼んでいた。その奔放多様な才能と奇怪にして美しい、ヘンな愛嬌の底にどこか凄味を秘めている、——しかも、縦横無盡で傍若無人な跳躍ぶりから、まさに、小悪魔の名にふさわしかったからだ。

澁谷南平台の、戦災で焼けたもとの邸跡に、多治見雅彦が建てた新しい住いを、ふざけて巫山房と名付けたのは千鳥左右吉だった。もとの邸にくらべると五分の一にもあたらない新しいこの住いには、実は、もとの邸にもなかったような贅沢な施設がしてあつて、外からの見かけによらない豪華さに、訪ねる者をよく啞然とさせた。

もつともそれは、寢室だとか風呂場だとか、化粧室だとか台所だとか便所

だとかといった風変わりなところばかりで、金に糸目をつけず凝りに凝つたものだが、それらの設計をしたのも、また千鳥左右吉だった。

たとえば、風呂場についていえば、——約五坪の広さの部屋の床もぐるりの壁も、残らず薄桃色のタイル張りで、天井いつぱいを覆うた楕円型の大きな明り窓が、薄桃色と薄緑色と薄い空色と白の絵硝子で四つに仕切られ、その明るい四色の光線が空から降つて錯綜している床の真ん中に、桃色大理石を楕円型に疊んだ浴槽が、やつと二人向き合つてはいれるぐらいの大きさに、低い湯をたたえて

いる。

その浴槽のぐるりは花園だ。薄桃色のタイルで縁を疊んだ花壇に、清らかに礫利と砂が盛られて、そこに水仙やヒヤシンス、チューリップ、百合、櫻草、シクラメン、鈴蘭、勿忘草などといった花々が、四季折々に匂っている。



明るい薄桃色のタイルの壁際には、ゴム海綿のクッションをのせた長椅子が据えられ、人肌のようなあたたかさで柔らかな弾力をもったクッションの上に、湯あがりの裸かを横たえて、しばしの間、恋人の胸に抱かれたように安らかに憩うことが出来る。

湯はこんこんと龍頭から湧き、桃色大理石の浴槽のわきには、かわいた喉をうるおす噴泉を仕掛けた青銅の小便小僧が頭に果物龍をのせて立つていて、そこへたわわに、葡萄やらバナナやら龍眼肉やら、その他四季折々の珍らしい、あるいはありふれた果物のかずかずを盛りあげていた。

この浴室の長椅子の、あたたかい弾力あるゴム海綿のクッションの上に、匂い高いシャボンの泡にまみれた湯上りのあたたかい裸かを並べて横たえながら、多治見雅彦と千鳥左右吉はこんな話をしていた。

「一体、千鳥君」と雅彦がいった。

「最も近代的な解釈によればだネ、われわれは泌尿器と生殖器と性器とを混同して考えてはいかんのだネ。見たまえ、あの青銅の小便小僧がお小便しているあの可愛いおちんちんは、アレは疑いもなく泌尿器だ。……それから、千鳥君、単なる色情行為に使用されるそれは、泌尿器でもなければ生殖器でもない、性器なのだ。生殖行為とは全然関係ない

★前号までのあらすじ★

多治見雅彦は友人の千鳥左右吉が、人形師五太衛門から、彼の製作品の人形を陳列する画廊にとりつけるのだという絵硝子の意匠を頼まれたという話をきいた時、その老人人形師と一度会って、話をかわしてみたいという強い興味を動かした。それは、彼五太衛門の製作になるという人形が、残らず女の屍体をモデルにした石の彫刻だということ、初期の文展時代に日本彫塑界の一方の勇であり、それが邪道を踏んで、徹底したその写真主義が技術の中に巧みに生かされ、名匠の名をほしいままにしていることが、変態好奇家の多治見には心をそそられるのだ。

二人は露合にぎつしり列んだ鳥獸怪像を見たやがて暗がりから現れた五太衛門老人に案内された大広間の一角。濕っぽい敷物がひろがっている暗い床に、石のかげらや、鑿や鉄槌が散らかつて、その床に無雑作にのべた巨大な金毛熊の敷物に、仰向けに寝た全裸の処女。これがけいれんの五太衛門作の人形なのだ。血が通えば生けるごとき女体と、その写実的の粹。しかもそのモデルは「深窓に育つた娘で、純粹に処女にちがいない」と五太衛門老人は言う。唐草のランタンを手にして、その人形を近々と覗き込んだ千鳥左右吉は、フト好奇に満ちた妖しい視線を何かの合図のように雅彦に送った。思わず雅彦も近寄つて千鳥と一諸に覗き込むと、あゝ、プンとそこから立ち昇る異臭があつた。

ことだからネ。……生殖器は、生殖行為の時だけ必要なもので、これは一生のうち、ほんの何遍という数えるほどの回数しか使用しない。……最も厳密なことをいえば、二人子供を持つている夫婦は、本当の生殖行為は二回しかしなかつたワケで、ちゃんと生殖器として使用したのは、お互いに二回だけだということになるネ。一つの器官が色んな目的を兼ねているもんだから、そこで混同するんで、混同するのはいいが、それぞれに随伴している道徳まで混同するから困るんだナ。……」

すると、千鳥左右吉が、華奢な柔軟なからだを女性的にしながらにクネらせて笑つていった。

「けど、多治見さんみたいな陰萎^{インペ}さんは、ちよつと例外でしょうネ
 ことなくあいに、結構小便小僧の可愛いおちんちんのままで、感
 覚は享樂しているんですものネ、狡猾ですヨ」

アハハハハ！

多治見雅彦は隆起した腹のぐるりの筋肉を、シャボンの泡をのせ
 た皮膚の中で、蛇のようにムクムクくねらせて笑つて、

「喰^くわせ者で憎らしいかネ」

「夫人の無念を思いやられますヨ」

「ウム。しかし、これでも礼儀^{エチケット}は忘れないよ、少なくとも左右ちゃん
 に対してはネ。内心、なかなかこれで楽しんでるんで、ちゃんと
 感覚をもつて応えているんだからネ。……」

「しかし、どちらにしても、夫人に恨まれるのは、あたしですよ。
 ……むしろあたしとしては、ウンと激しく夫人に嫉妬^{やまうち}やいていただ
 いた方が、償いになつてさっぱりするんですけどネ」

「イヤ、それよりも左右ちゃん」

と、急になかば身を起こして、多治見雅彦はいった。

「むしろ、こいつは逆手で行くんだナ。ソラ、いつか君が提案した
 アレだ。彼女の方からではなくつて、俺が妬き手に廻るといふヤツ
 だ。あの時の話の赤星君を、君から一つ彼女にとりもつてみないか
 ネ。……」

「赤星二郎ですか」

「赤星二郎だ。あのダンス教師はどうしているネ」

「どうしてるッて、……別にどうもしていませんけれど」

「この頃、君は会うことあるの？」

「ええ、五太衛門老人のところで、時折落合いますから」

赤星二郎というのは、れいの怪人形師五太衛門老人のところへ出
 入りしている彼らの仲間の一人で、元来はダンス教師だというのだ
 が、必ずしもダンス教師を職業としているのでもないらしい。身元
 も正体も実ははつきりしない。ただ、つき合う人間の素情について
 およそやかましい五太衛門が、家族同様に打ち解けて、誰にも覗か
 せない秘密な彼の人形制作室^{フィギュア制作室}にまで、自由に出入りさせているとこ
 ろをみると、素性の曖昧な人間でないことだけは確かだつた。

何でも、噂によると、昔フランスへ美術修業に行つた日本の某とい
 う貴族の息子が、フランス留学中ひそかに同棲していたパリの街娼
 に産ませた娘が、赤星二郎の母親なのだそうで、この日佛混血児の
 母親もパリの裏路地で怪しげな酒場の唄い女^{うたひめ}やら踊り娘^{おどり娘}やらをやつ
 ているところを、これも日本から絵描き修業に来ていた赤星二郎の
 父親に拾われて、日本へつれて来られたのだそうで、この両親は、
 今はもうどちらもこの世にいないが、そんなわけで赤星二郎は、二
 代前に、日本の貴族とパリの賤しい街娼^{ストリート・ガール}の血をひいているのだ
 という。

そういわれれば、彼の容貌や性格には、そういつた妙に調和しな
 いモノがあつて、何か洗練された美しい気品と、どこか、血を好む
 殺伐な獣でも持つていそうな、一種人をゾツとさせる凄みを、肉体
 の匂いのように彼は持つている。

福井の方の豪農の息子だつたという亡^{なくな}つた絵描きの父親から、彼
 は少なからぬ遺産を譲られて、富裕な私立大学の学生生活をしてい
 るうちに、身もち崩して、遺産を蕩盡し、その時習い覚えたダン
 ス教授をして、今は世を過しているのだという。

千鳥左右吉にいわせると、非常な変態^{変態}男で、一時はその治療のた

め、自分から進んで精神病院に入院していたことさえあるくらいだという。いわば一種の色情狂なのだが、ただそれだけではなく、その言動をそばで見ていると、明らかに精神病の範疇にはいる病的な色情昂進以外に好虐的な変態性を持っている。――

一度千鳥左右吉は、多治見雅彦が謝肉祭のダンス会をひらいて、南平台のこの新築の住いへおおぜい客をまねいた時、赤星二郎をつれて来て、雅彦と美彌子夫人夫妻に彼を紹介したことがあった。

その時美彌子夫人は赤星二

なつて、数回、

裳をひる

郎の相手と

がえしていつしよに踊ったが、彼はその時まだ金ボタンの学生服を着ていた。

あとで千鳥左右吉は美彌子夫人に訊いてみた。

「どうです夫人、彼は、……？」

「そうネ」

ちよつと首を傾げて考えてから、美彌子夫人はいつた。

「凄く踊りはウマいわネ。けど、……何かしら、ちよつと怖いワ」

「怖い？……どういう風に？」

「さア、……ウマくいえないワ」

「綺麗だから？」

「綺麗は、むろん凄く綺麗だけど、それだけじゃないわネ」

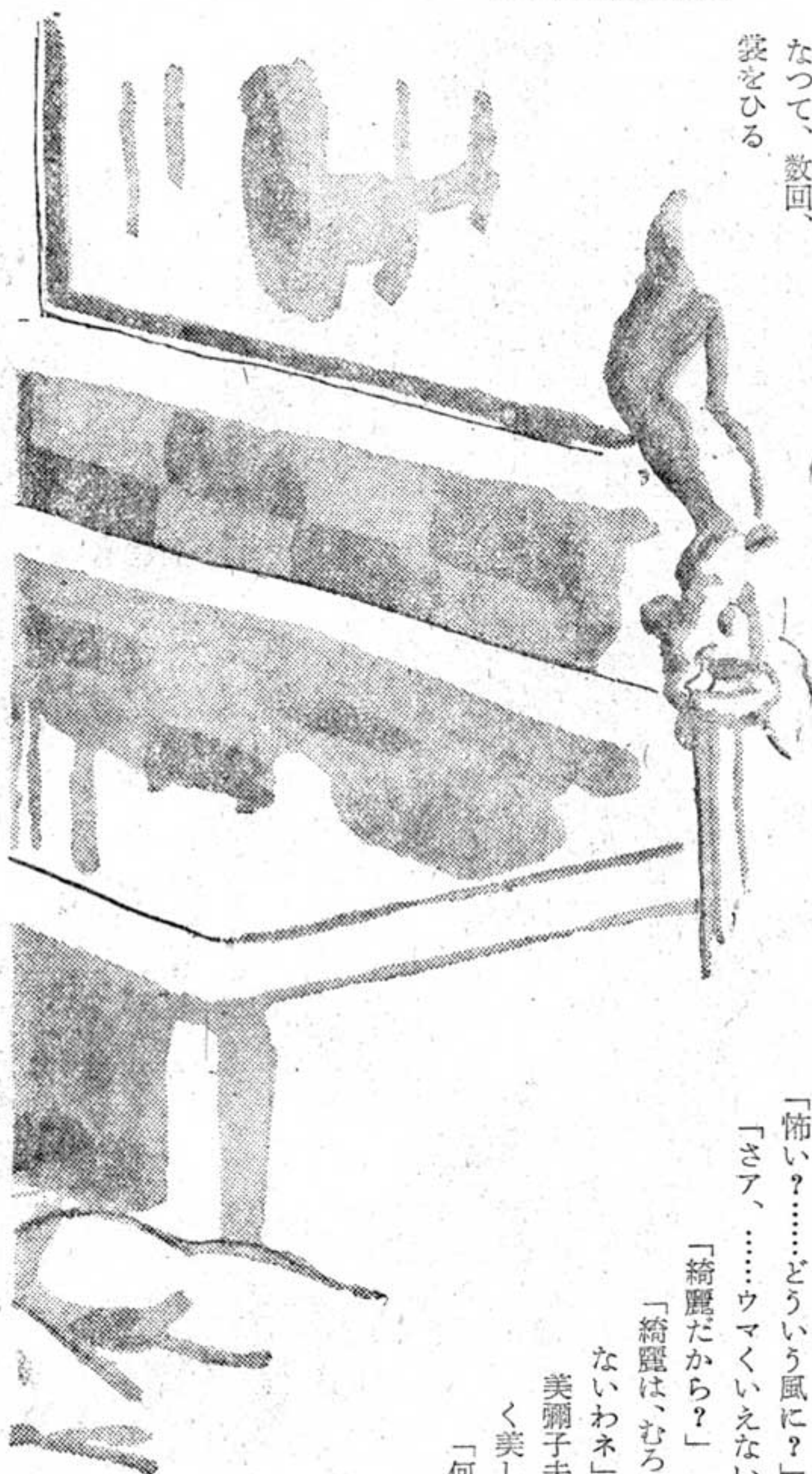
美彌子夫人はどこか嬌羞を帯びて、薄緑く美しく微笑んで、

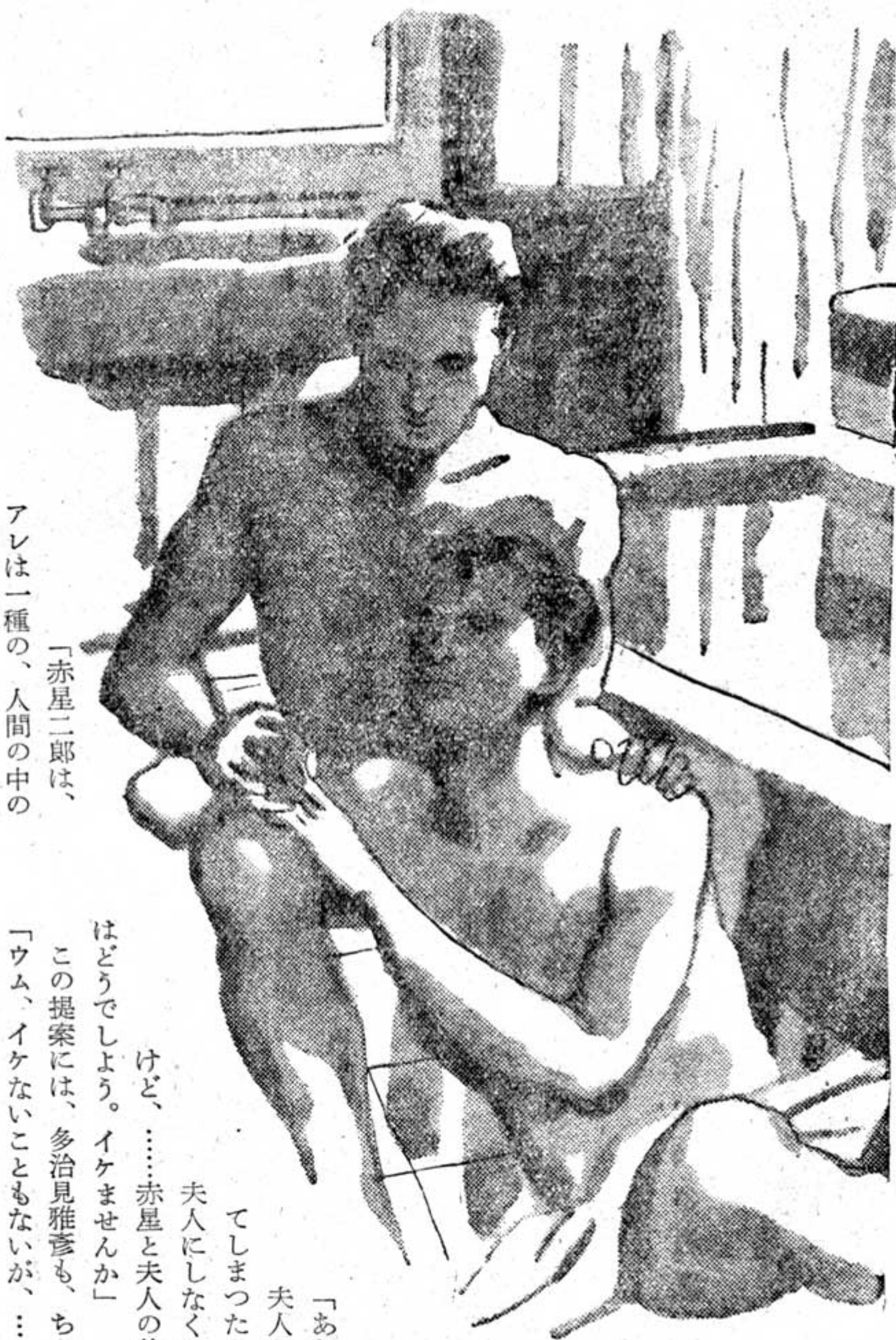
「何といたらいのかしら、……からだから、何かこう妖しい匂うものがあるのネ」

「キライですか」

「キライじゃないけど、……そう、やつぱり何となく怖いネ」

千鳥左右吉は彼のことについて、また多治見雅彦にいつたことがある。





も、そういうイヤらしさは持つていませんけど。ただ、ある種類の人間、特に女性は、アレに魅せられると、すくんでしまつて、もう身動きも出来ず、一切自由にされるほかなくなるんでしようネ、お宅の夫人が、たぶんその型ですヨ、きつと」

「赤星二郎は、

アレは一種の、人間の中の

爬蟲類なんですネ、蛇とか蝮とか、……もつと

けど、……赤星と夫人の仲を、あたし媒介つ、というのはどうでしょう。イケませんか」
この提案には、多治見雅彦も、ちよつとドキツとした。
「ウム、イケないこともないが、……」
雅彦はどこかためらいがちに、
「それにはそれで、赤星という人間について、もう少しわれわれに智識が必要だネ。キモノやハンドバッグや指輪を、女房に買つてやるのとは、ちよつとちがう。……『男』をあてがうんだからナ」
「それもそうですけど、……」

すると、多治見雅彦も思いあたるように、うなずいていつた。
「ウン、そういうえば、そんなことを美彌子もいつていたナ。
ヘンな、こう、怖い魅力、と
いつたようなものを感じると
か何とかネ」
その時、小悪魔の千鳥左右吉
が雅彦の耳に、悪魔らしいさ
さやきをした。

「あたしは、多治見さん、あなたを
夫人から奪つて、あたしの愛人にし
てしまつたんですからネ、その償いを当然
夫人にしなくっちゃ、すまないと思うんです
けど、……赤星と夫人の仲を、あたし媒介つ、というの

千鳥左右吉もそういわれると消極的になつて、半分提案を引つ込めた恰好で、つぶやくのだつた。

「まア、あたしも一つ、彼を研究してみましよう。……赤星二郎の方では、あれ以来、夫人には非常に興味を持つてゐるつて、いつていますけど」

赤星二郎。

学生あがりの眉目秀麗な青年、日佛混血児、ダンス教師、精神病院に入院した閱歴があるという色情狂、好虐的な変態男。

この一連の、妖しい呪文のような言葉が、男色に耽溺している陰萎の多治見雅彦と、空閑の中に虚しく女盛りを萎微させてゆく美彌子夫人の間に時折、刺戟的な話題としてのぼされる機会が、この頃多くなつていた。

その話が、今、あたかも伴奏樂のように浴室の長椅子の上で、シヤボンの泡にまみれた多治見雅彦と千鳥左右吉の間に、語り出されたワケだつた。

「大体、美彌子の方にも」

と、雅彦は眼をツブリ、眉の間に縦皺を刻んで、軽い痙攣性の息ずかいといつしよにいつた。

「精神的な受入れの準備は、出来てゐるはずだがネ。妻の不倫や不貞も、時にとつては夫を鼓舞するヨキ刺戟になることもある。というこの辺の夫婦の倫理の機微も、たいてい彼女は会得してゐると思ふんだが。……たとえそうでなくつても、夫は妻を征服する権利がある以上、ひとに征服させてもいいという理窟がなり立つワケじや

ないか。そして、そういう征服をひそかに願望する内在する心理を世の多くの女たちのように、彼女も持つてゐることを、多少の証拠によつて俺は識つてゐるんだがネ。そういう願望を睡らせて置いて、遂に人生を徒らに平安に過させてしまふことが本当かどうか、大いにこれは疑問でネ」

「それとなく、一度、赤星をつれて来て夫人に会わせてみましようか」

不意に生き生きと乗り氣になつて、千鳥左右吉がいつた。

「そうだネ。実はこないだも、美彌子といつしよに、この頃の新しいダンスを習おうという話をして、その時、赤星を先生に呼ぶ提案をしたんだ。こうなると……彼女に何を教えることになるか、わからんがネ」

こういう話題そのものが、すでに効果的な刺戟らしかつた。

やがて、匂やかなシヤボンの泡に覆われたゴム海綿のクッションの、あたたかい弾力の上で、多治見雅彦が頤を反らし、裸のからだを弓なりにして、臍のぐるりの筋肉をからみ合う蛇のようにもつらせながら、強く強く伸ばした両脚の指先までこまかく痙攣を走らせるのを、千鳥左右吉は、悪魔らしい妖しい快心の瞳で、ジッと眺めるのだつた。

精神病の限界

最初、何とない本能的な不安から、赤星二郎を家庭に接近させるのをイヤがつた美彌子夫人は、一つは多治見雅彦の巧妙な説得と、

一つは彼女自身のうちにある『未知への魅惑』に、しらずしらずそのかされるかのように、彼をダンス教師に迎え、時折は夫婦二人きりの水いらすの家庭に彼を寢泊りさせるのも、イヤがらないようになった。

二十九歳という、女としてはまさに爛熟の頂上に近ずいた年齢の美彌子夫人と、二十二歳ですでに肉体頹廢の泥沼に溺れているような赤星二郎の、清麗というよりは凄愴といたい美貌を見くらべると、姉弟にふさわしい年恰好なのに、妙に病的な一種不自然な雰囲気をも出し出して、まるで、美しい絢爛（きんらん）かな孔雀と、それをしめ殺して毒牙で噛んで血を吸う毒蛇とを、一つ檻の中により添わせて置くというような、奇異な対照を示すのだった。

「彼女をどう思うネ？」

ある時多治見雅彦は、蔭でこつそり赤星二郎にきいたことがある。すると、赤星二郎がいった。

「凄く魅力ありますネ。ただ、夫人だから……」

「君なんかでも、夫人だというような倫理観念に障害されるのかネ。そういう君自身を君が承認出来るとは意外だナ。そんなら、精神病院へ入院する必要なんかなかったワケだ」

「でも、生活上の禁忌（きんぎ）というものもありますから」

臆病そうに濁れてつぶやくのに、押つかぶせて、多治見雅彦はいった。

「ダンス教師がうつかり生徒と浮気したら、お拂い箱になつて、商売あがつたりになるからネ。けれど、精神病者は、彼自身社会秩序の中の禁忌（きんぎ）であり得たとしてもだネ、彼が禁忌（きんぎ）を持つていて、自分

で行動を束縛しているというのは奇怪だナ。猫つ被りのはずはないから、それなら精神病者ではないワケだ」

「そうでしょうか」

「異常を君は自分で感じますか」

赤星二郎の性格異常をものがたる三白眼が、不意に熱を帯びてキラ光りだし、白眼の血管が腫れて、妖しく紅く血の色がさして来るのを見て、多治見雅彦はちよつとドキツとした。

急に不逞な薄笑いを浮べて、赤星二郎がつぶやいた。

「そうだ、僕は僕の異常を承認されて、あなたのお宅に招かれたんでしたネ。バカな努力をして、僕は自分を道德の仮面の中へ押込んでいた」

「もつとも」

と、多治見雅彦は不意に焰をあげて燃えかけた相手の心に、水をさすようにいった。

「ここは君、精神病院じゃないからネ、普通の家庭が持つている社会的体面というものもある。この体面から逸脱しては困るナ。君は夫人を相手にするんではなくて、こうなると、ただ一個の『女』を相手にするんだから、夫である僕のことを意識する必要は、毫末もないが、一步外へ出て、社会的には、ダンス教師だからネ、多治見夫妻とダンス教師の関係を錯覚（さくかく）しては困る」

そして、念を押した。

「それをわきまえて行動する自信あるかネ？」

「……」

赤星二郎はそれには答えず、無意味に横に首を振つただけだった

それは、彼の異常が、すでに彼の禁忌を踏み越えて、自制的の外へハミ出してしまった証拠のようにも受取れた。——
眼の中が、血を流したように紅かった。

黒豹の毛皮

桃の節句が近ずいたある夜のことだった。

子供の多い多治見家では、美彌子夫人が子供の頭飾つた豪華な雛飾りを、結婚の時、お嫁入り道具の中にまぎれて運んで来てあつたのを、年々とり出して飾る習慣で、今年も、十疊の日本座敷の床の前いつぱいをふさいで、豪華に絢爛かに飾つてあつた。

温室咲きの桃の花が、艶めかしい雪洞の灯りを受けて、雛壇の緋毛氈の上に、櫻貝のような花びらを散らし、そこへひとつそりと静かに並んだ雛人形の艶々した胡粉の頬を冷たいままに紅色の反映で染めて、恍惚と白酒の香に酔つている、——といった感じだった。

ダンスの仕事先のこと、数日関西へ旅行して帰つて来たという赤星二郎は、今度は当分東京に落ちつき、ならば多治見の家に足をとめて、美彌子夫人と雅彦夫妻に、身を入れてダンスを教授しようといつて、おみやげに持つて来た近江牛のヒレ肉を、ナマ

のまま白葡萄酒に浸けて、それをサカナに

三人で、互いにウイスキーのグラスを重ねているうちに、

何とない妖し

い一種の雰囲気がかもされて来た。

宴終つて、座敷の灯りを消して雛壇を暗くし、おやすみの挨拶をし合つて、それぞれ寢室へ別れたのは十一時すぎだった。

「ためため、美彌子、そんな恰好でそんなところへ転がつて寝ちゃア。……」

寢室の、寢台と側卓とスタンドと安楽椅子にかこまれた床の空間の支那緞通の上に黒豹の毛皮をひろげたところへ、寢間著に換えようとキモノを脱ぎかけて、——金糸で龍を浮織りした西陣の帯をグルグル解き落とし、鹿の子絞りの水色と紅とだんだらの帯上げをはしを口にくわえて、友禪の長繻絆の前をパツと艶めかしくひろげた恰好で、ウイスキーの酔いからクラクラと眩暈でもしたのか、からだを崩してうずくまつてしまった美彌子夫人が、そのままそこを寢床とでも心得たかのように、なかばうつむきに腰を曲げて寢そべつてしまったので、多治見雅彦はグニャグニャと彼女のからだを揺すつていつた。

「とにかく、まア、寢間著にお換え。……ソラ、これが君の西洋寢間著だ」

寢室は、れいの小悪魔の千鳥左右吉の設計したものだった。

十疊ほどの広さの天井とぐるりの壁を、荒ら荒らしく貝殻模様になじみ出させた漆喰塗り、それを金と黒で大きく市松に染め分け、

ところどころに結晶型のガラス球をちりばめて、天の星座

のようにキラキラ光らせていた。

樫を彫刻した岩壘な寢台が、壁際に大きく据

えられていたが、天井の一角から吊られた真紅の繻子のカーテンが、





極光^{キョウコウ}のように襷打つてサーツ

と裾をひろげて垂れて、寝

台のこちらがわだけ隙を

開けて天幕のように寝

台を包み、白い敷

布や羽根枕や羽二

重の羽根布団など

を、まるで、巨大

な牡丹の花が真紅

の花びらで幾重に

も英を包むように

包んでいた。

「オイオイ、だめだ

ヨ、そのまま寝ちや

ア……」

「……」

美彌子夫人はわずかに

身動きして、辛うじて顔

をあげて、自分が床の黒豹

の毛皮の上に崩折れている

のに気付くと、赤く美しく酔

つて恍惚とした顔に微笑を浮か

べて、多治見雅彦を見て、やつと

身を起こした。友禪の長縞絆と肌膚

とを肩からすべらせ、皮下脂肪を透か

して嬌色にむつちりした肩から胸から乳房へかけての肉付きを、惜しげもなく裸かにムキ出すと、その上に、紅色の艶めかし大柄な格子縞のタウエルの西洋寝間著を、フウワリと羽織った。

黒豹の毛皮の深々した艶のいい黒い毛並みの上に、しどけなく脱ぎ棄てた友禪の長襦袢が、まるで一輪の巨大な花のようにあでやかだった。

美彌子夫人は日本橋の方に、江戸時代から続いて店を持つてゐる古い鰹節問屋の娘で、築地で料亭をいとなんでいた多治見雅彦の母親と、彼女の母親が同じ踊りの師匠について習つて昔親しみ合つたというような関係から、縁が結ばれたのだが、内気でおとなしくしとやかで、——典型的に家庭的な貞淑な妻だった。

今では、荒淫で放埒な夫の感化で、いわば精神的には崩れてしまつていたが。

一度多治見雅彦は千鳥左右吉にいつたことがある。

「面白いんだヨ君、美彌子は……くだらんことで夫婦喧嘩なんかして、つい、はずみで僕が暴力を振るつて殴つたり、髪をツカんで引きずつたりすると、だしぬけに、もの凄く昂奮して、狂気のようになつて僕にムシャ振りついて挑んで迫るんだネ、これは必ずだ！……恐らく彼女は、平素はあんなに内気でおとなしうに見えても、しんに被虐が睡つてゐる変態なんだナ。あれを誰かが眼ざませてみると、面白いんだがネ。僕はどうもその趣味がないのでダメだガ。……」

雅彦が千鳥左右吉との同性愛に打ち込んで、だんだん妻に対する陰萎的傾向を強めて来るにつれて、閨房は冷却し、彼女は彼の性生活の圏外に閉却されて、二十九歳という、女として肉体が焰をあげ

て燃えあがるような爛熟の頂上にいなければならぬ年齢なのに、貞淑な妻という名ばかり美しい足枷に縛かれて、まるで修道尼のように蒼白く萎びた人生に、無自覚に生きなければならぬ。

「女を解放する第一歩は」

と、小悪魔の千鳥左右吉が、その時囁くようにいつた。

「まず、その『貞淑なる妻』に、とどめを刺さなくつちやいけないんですヨ。人生は二度経験出来ないんですし、とりわけ、女の性生活というのは、男にくらべて、期間がはかなく短いんですものネ。やれる間に、やれるだけのことをやつて置くべきで、見得や外聞や遠慮や気兼ねから、折角生れついてからだに持つてゐる快楽をし盡さないで死んでしまふなんていうぐらい愚なことはいけませんものネ、多治見さんも今のうち、徹底的に夫人を教育しなさいヨ。實際、性慾快楽の素晴らしさなんていうものは、それと取つ組んで命を滅ぼしても、後悔することないじゃありませんか」

美彌子夫人がお客さまの相手をして、ハメをはずしてウイスキーを飲んで、身だしなみを忘れるほど酔うなどというものは、今までにもついぞないことだった。おぼつかない手つきで、脱ぎ棄てたキモノの後仕末をして、やつと寢床へはいつて、いつしよにからだを並べて寢ても、彼女のからだはヘンに手応えなくグニャグニャと柔らかい感じで、手触りまで別人のようだった。

ヒヨイと思いついて、多治見雅彦は半身を越すと、並んで横たわつてゐる美彌子夫人をそこへ残して、寢台から降りた。

「そうだ、水をぐんで来ていっぱい彼女に飲まして……ついだに、ウガイして歯を磨いて来よう」

寛衣を羽織つたまま、素足にスリッパをつつかけて、ドアを開け

けて外へ出た。

暗い廊下を抜けて、浴室に隣つた化粧室へはいると、深夜に灯りがついていて、そこに赤星二郎が、これもいささか深酔いして、れいの美貌に薔薇の花びらのように一と刷毛紅をさして、足元もふたしかに白い瀬戸の洗面台にもたれて立つて、葉緑素液でウガイをしていた。

「何だ、まだ寝なかつたの？」

多治見雅彦がきくと、赤星二郎は充血して疲れた——美しい淫蕩な眼で雅彦を見ていった。

「うつかりして僕は、あなたがただけ差上げるはずのあの白葡萄酒漬けの肉を、お招伴して喰つたもんですからネ、アレは性欲昂奮の凄く効きめあるホルモン料理ですから、僕はお招伴するんじゃないのかつたんですヨ」

「へー、そんなに効くかネ」

赤星二郎は赧いこわばつた表情で笑つて、

「僕はアレを喰うと、いつも一と晩じゆう睡れないんです」

「そうすぐに昂奮するものなのかネ」

「ええ、喰べているうちに昂奮するんです、小なくも僕は。……そして、僕は自制出来ない性質なもんですからネ」

グイッと心臓に刃を入れたような、妖しい心の戦きを抑えて

——多治見雅彦はいつた。

「自制？ 自制なんていうくだらんものを棄てて、君は精神病者の持権を行使したらいじやないか。僕の見るところでは、少なくとも僕らにとつて、君は色情狂であることに価値があるんだからネ」

不意に赤星二郎の瞳が空間を見据えたまま、一種病的な、凄愴な

光を帯びて輝いて来るのを見ながら、多治見雅彦は、一線を思い切つて踏み越えた心理でいつた。

「夫人を一個の、ただの『女』と見る自信はないかネ」

「……………」

「とにかく、まア、いつしよに來たまえ。道德のない寢室で、道德を持たない君が、何を一体したがるのか。一度見たいんでネ」

「……………」

赤星二郎は慄える指をのばして、プラスチックのうがいコップに龍頭から水をみたして、一気にグイッとそれを呑むと、彼のついで来るのを待つて立つている多治見雅彦の顔を見て、ニヤリと、明らかに精神病者の笑いを無気味に笑つて、——そして、雅彦のあとについて暗いひつそりした廊下を歩いた。

暗い寢室には、側卓の上に、深い笠をかぶつてスタンドだけがつき、真紅のカーテンに包まれた寢台の中には、美彌子夫人が、巨大な花の蕾に包まれた一個の雌蕊となつて、美しく艶めかしく睡つていた。

呼吸が安らかながらやや荒らしく乱れているのは、まださめきらない酔いのせいしかつた。

寢台から少し離れた壁際の、青い小さな焰が石灰骨をねぶつていゝるガス煖爐の横の長椅子に、クッションに深々とからだを埋めてかけて、多治見雅彦はヘンに麻痺したような心臓の疲労を意識しながら、小声で赤星二郎にいつた。

「寢台を君にゆずつて、僕はこつちへ寝るからネ。……灯りは、消した方がよかつたら消したまえ」

赤星二郎は黒襟のかかつた大島紬の丹前を浴衣に重ね着して、襟

前の合わせを浅く素肌にとまとい、ヘコ帯をタガのように太くゆるくグルグル巻きしていた。どこか自墮落に身持ちを崩した色男役者といつたフテ腐れた恰好で、黒豹の毛皮の上に立ちはだかり、真紅の緞帳の中に美彌子夫人が寢息を立てているのを見たり、ぐるりの部屋の様子を見廻したりしていたが、もはや多治見雅彦の存在などは意識していない、——どこかゾツとするような、不逞な態度だった。

多治見雅彦に声をかけられると、びつくりしたように、——けれど、血走って殺気立つた眼で、遠い長椅子の上の雅彦を見たが、
「ええ、はじめのうちちよつと灯り消させて下さい。あとでまたつけますから」

うわのそらのようにそういうと、彼は手をのばして、安楽椅子の脚元にトグロ巻いて落ちていた鹿の子絞りの紅い艶めかしい帯上げを拾って、グイツと両手で引つ張って強さをためし、それから、腰をネジるようにしてクルクルと茶色の錦紗のヘコ帯を解いた。

二本の長い柔らかい布地をたぐり寄せて引きずりながら、寢台のそばへ近付いてゆく赤星二郎に、また多治見雅彦は小声でいった。

「どうするの？」

「抵抗出来ないように、裸かにして縛るんです」

陰惨な低い声で赤星二郎が答えた。

「どのみち、抵抗なんかしやしないヨ」

「……………」

寢合に乗る前に、側卓^{サイドテーブル}の方へ手をのばして、彼はスタンドのスイッチをカチツとひねった。

そして、部屋には暗黒が落ちた。

遠い壁際のガス燐燐で、石灰骨^{ステートン}をねぶっている小さい青いガスの

焰と、ほんの根元のところだけ赤く焼けた石灰骨の反映が、床の一部に仄明るいくまをつくっているだけだった。

多治見雅彦は身動きもせず、長椅子のクッションに腰を埋めたまま、ジツと耳を澄まして静寂な闇の中に激しく高まつて響いている自分の心臓の鼓動をきいていた。

血脈のムキ出た眼球をギョロリと見張つて、闇の中の一箇所——寢合を包んだ緞帳の前の隙間のところを、ジツと見据えていたが、すべては麻痺した闇の中にあつて、ただ淫蕩な妄想が、彼の真つ黒い脳髓の中でノタ打ち廻っているだけだった。

長椅子から腰をもたげ、打ち慄える爪先き立ちで、椅子や卓子の間をそツと手さぐり手さぐり、豹の毛皮の感触を踏んだところから一步のり出して、緞帳の間へそうつと首を伸ばしてみた。

そこまで来ると、さすがに闇はその中で荒ら荒らしく息ずき、激しくからだか揉み合う衣ずれの音が、——視覚を通さないだけに、凄愴をきめたものだつた。

「灯りをつけようか」

小さくささやくと、苦しく喘ぎながら赤星二郎がすぐにこたえた。

「ええ、つけて下さい」

(以下次号)

巨匠の麗筆いよいよ冴えて、むせ返るような濃艶さと異常な人間関係の齒車がギリギリ回転する！ 新しい性の道德^{モラル}を追究するこの問題作を是非御期待下さい！

◇ 後 記 ◇

長らくお待たせ致しました。不測の事故で
ありましたが、発売の遅れたことは、全国の
愛読者諸兄に誠に申し訳なく、切に御寛恕を乞
う次第であります。止むなく「三、四月合併
号」と致しましたが、これは、今度の事態が
以前から懸案であつた本誌の発売日調整（毎
月下旬発行）の好機でありましたので、単に
技術的にそう呼称しただけであつて、実質的
には一号の缺号もなく一年十二冊（本誌のみ
の場合）発行されます故、何卒御懸念なく愈
々信旧の御愛読をお願い申し上げます。

尙本文中にも記しましたように、米・佛の
サジズム・マゾヒズム・レスボス、その他の
アブ資料が豊富に入手出来ることとなり、従
来のレギュラー執筆陣の活躍と相俟つて、益
々清新豪華な紙面を作製して皆様にお贈り致
します。読者の各年代にふさわしいアブをコ
ツテリと盛り、しかも大人の趣味娯楽雑誌と
しての品位を堅持する、小誌の前進に御期待
下さいませ。

★
一月末のラヂオ（NHK）放送では、小生
の答弁が多少歪められて編集されてをりまし

たので、読者の中には不審に思はれた方もあ
ると思い、簡単に、その重要と思はれる点だ
けを左に訂正してをきます。

「サジズムやマゾヒズムは、セックスとは別
なものだ、とこの編集長は言う」

アナウンサーはそう喋りましたが、これは
小生の説明不足があつたとは言え、大体アナ
ウンサーが「マニヤの心理」というものを全
然理解してをらないので、そこからこんな奇
妙な言葉が飛び出した訳であります。

サジズムでもマゾヒズムでも、その他のア
ブ行為全部が、セックスという巨大な枠の中
のもので、性的嗜好の断片であることは、今
更言う迄ありません。

小生の言ほうとしたことは、マニヤ雑誌は
激しい男女交情の描写を入れなくとも成立つ
読者はサジならサジ、マゾならマゾに焦点を
合せた記事や絵で満足する。

ということでした。つまり、

『マニヤ雑誌は、単に性的描写だけを売り物
にする雑誌とは一寸違う』と言うべきだつた
のです。（これは説明したのですが放送され
ず）妙なことを言われつ放しでは氣持が悪い
のでここに一言弁明してをく次第です。

★

本誌一月号に発表しました「二十万円懸賞

原稿大募集」は、実に驚異的な反響を呼び、
殊に一月中旬から二月十日のメ切間際につ
て、その応募原稿の殺倒ぶりには、たゞたゞ
驚嘆すると共に、その熱烈な本誌に対する御
支援に深く感謝致しました。

総数百五十篇あまりのうちから、予選通過
の分は本号に中間発表致しましたが、最後の
決定は次号五月号誌上に掲載されます。何卒
御期待下さいませ。（編集部 氏家記）

風俗草紙

第二巻 第四号
毎月一回一日発行
定価 百五十円

昭和二十九年三月二十五日 印刷
昭和二十九年四月 一日 発行

編集人 氏家 富 良
発行人 野村 佳 秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地

発行所 株式会社 日本特集出版社

東京都千代田区神田猿樂町一ノ三
電話神田(25)五九八二
振替東京二四二五一番